

## 第4節 遺構外出土遺物

本遺跡では、縄文時代早期後半鶴ヶ島台式から晩期終末にいたる多量の土器と石器類、および土偶・耳飾りなどの土製品、石棒・多孔石などの石製品、玉類などが出土している。また、それらと共に弥生時代初頭の遺物も出土しており、ここでは弥生時代に該当する土器や石器も扱うことにする。

今回報告する遺構外出土遺物は、第46図に示した範囲から出土した縄文時代および弥生時代の遺物を対象とする。しかし、出土した遺物量は膨大で多岐にわたるため、一部は今回の報告から除外せざるを得なかったものもある。

### 1、縄文時代の土器

本遺跡は群馬・長野・新潟の国境にあり、各地域との交流を示す多種多様な土器が出土している。各地域の土器の占める量比は時期によって変化し、周辺地域との交流を度合いをよく示している。

表4は本遺跡の遺構外出土土器を区別に集計したものである。環状集落が営まれた中期後半から後期前半までの土器が圧倒的に多いが、遺構がほとんど確認できない晩期の土器も目立って出土している。いずれも出土量が多く多様なため、掲載遺物の選択にあたっては遺構量の少ない時期や県外に主分布するものを優先し、地区によっては縄文晩期や弥生時代の土器を特化して掲載した。

表5は、本遺跡で出土している土器の型式名と、関連する地域の型式を一覧にしたものである。網掛けした型式が主要な出土土器である。時期毎に各地域の土器の占める量比をおおまかに述べると、以下のようになる。

前期前半期は北関東系の諸型式と信州系の諸型式が出土しているが、黒浜式は見かけない。前期後半では、北関東系の諸型式と共に、東関東系の興津式や信州系の晴ヶ峰式が出土している。

中期前半では、五領ヶ台式に次いで勝坂式が出土するが、古段階では勝坂式の手よりも阿玉台式の

区	10区	18区	19区	20区	28区	29区	30区	合計
早期後半		32	1	1	1			35
前期前半		18	57	44	10	7	1	137
前期後半		20	1		30	1		52
五領ヶ台式		19	1	25	36		1	82
勝坂式		885	198	2442	928	113	272	4838
阿玉台式		90	83	841	25	18	194	1251
螺町式		569	95	945	417	90	46	2162
加E1		1052	106	930	913	88	47	3136
加E2		41	80	1170	54	20	66	1431
加E3		5595	2095	13918	9373	316	833	32130
加E4		1328	330	1808	1367	114	308	5255
曾利古		128	78	685	104	22	11	1028
曾利新						1		1
唐草古		349	31	662	90	40	7	1179
唐草新		857	2285	7996	1509	143	469	13236
中期		1460	78	614	2028	55	76	4311
称1		3373	124	93	3390	66	45	7091
称2		1831	440	1540	4297	218	767	9083
称名寺				44	664			708
堀1		269	712	971	395	316	1001	3684
堀2		59	605	551	367	977	1452	4011
加B		3	352	39	23	468	274	1159
後期安行			5			244	38	287
後期		2699	5458	3947	5113	5704	16639	39560
晩期前半	94	453	2	238	160	162	105	3922
晩期後半		10366	1345	2729	12036	14319	948	41743
不明		80	77	47	193	91	80	568
縄文合計	94	33861	28879	101754	48466	40685	29713	283427
弥生	76	147		315	17	15		495
平安		190	4	24	9	1		228
中世		75	4	9	35	61	58	242
近世以後		448	12	2	185	113	9	769
合計	170	34721	28899	102104	48712	40775	29780	285161

表4 横壁中村遺跡遺構外出土土器総量一覧

表5 横壁中村遺跡出土縄文土器の様相と周辺地域の諸型式（模式図案）

東期後半	東期前半	北関東	ハツ場地域	信州	越後	東北	東海東部・山梨
I群			縄ヶ島台式				
前期前半	花積下層式 二ツ木式 関山式 黒浜式		塚田・中道式 神ノ木式 有尾式		布目・新谷式		中越式
前期後半	浮島式 興津式		諸磯a式 諸磯b式 諸磯c式 十三善提式	下高式 晴ヶ峰式			
中期前半	阿玉台I式 阿玉台II式 阿玉台III・IV式	五領ヶ台式 勝坂1式 勝坂2式 勝坂3式	新巻類型 焼町類型	深沢タイプ・後沖式 狹沢・新道式 藤内式 井戸尻式	(新保・新崎式)	大木7式	
中期後半	加曾利E1式 加曾利E2式 加曾利E3式	加曾利E4式	唐草文系古段階 唐草文系新段階	曾利I式 曾利II式 曾利III式 曾利IV・V式	(火炎)(上山田・天神山) 枋倉式 沖の原式	大木8a式 大木8b式 大木9式	
後期前半	称名寺1式 称名寺2式 堀之内1式	堀之内2式	隆縄文系土器 隆縄文系土器	茂沢類型	三十稲場式		
後期後半	曾谷式 安行1式 安行2式 安行3a式 安行3b式 前浦(古) 前浦(新) 千網式(古) 千網式(中) 千網式(新)	加曾利B1式 加曾利B2式 加曾利B3式 高井東式(古段階) 高井東式(中段階) 高井東式(新段階) 高井東式系 天神原式古 天神原式新 安行3c式 安行3d式	高井東式(古段階) 高井東式(中段階) 高井東式(新段階) 高井東式系 佐野II式 佐野II式 女鳥羽川・難山 氷I式(古) 氷I式(新)	宝ヶ峯1式 宝ヶ峯2式 宝ヶ峯3式 瘤付土器I段階 瘤付土器II段階 瘤付土器III・IV段階 大洞B式 大洞BC式 大洞C1式 大洞C2式 鳥屋1式 鳥屋2a式 鳥屋2b式	三仏生 中ノ沢(古) 中ノ沢(中) 中ノ沢(新)	御経塚式 中屋式 下野式	高井東式系 清水天王山 五貫森式 馬見塚式 櫻王式 水神平式
弥生時代	沖II式	弥生前期 弥生中期前半					

<参考> 小林達雄編 2008 『総覧 縄文土器』 総覧縄文土器刊行委員会  
 梅川勝史、国島 聡、渡邊朋和 2000 『龍峰遺跡発掘調査報告書II 遺物編』 新潟県中郷村教育委員会  
 縄文セミナーの会 2004 『第17回縄文セミナー 晩期中葉の再検討』 資料集・記録集  
 永峯光一編 1998 『氷遺跡発掘調査資料図譜』 氷遺跡発掘調査資料図譜刊行会

表6 横壁中村遺跡 縄文晩期～弥生土器 地区別出土状況（主要時期を示す）

縄文後期	曾谷式	高井東式古段階						瘤付土器Ⅱ段階	
	安行1式	高井東式中段階						瘤付土器Ⅲ段階	
	安行2式	高井東式新段階						瘤付土器Ⅳ段階	
縄文晩期	安行3a式	高井東式系土器	29区					大洞B式	
	安行3b式	佐野Ⅰa式						大洞BC式	
	安行3c式	佐野Ⅰb式						大洞C1式	
	安行3d式	佐野Ⅱ式						大洞C2式	
	千網式古	女鳥羽川・離山						大洞A1式	五貫森式
	千網式中	水Ⅰ式古		28区				大洞A2式	馬見塚式
	千網式新	水Ⅰ式新						大洞A'式	樫王式
弥生	弥生前期	水Ⅱ式			10区	20区	18区		水神平式
	弥生中期前半								

古手が目立っており、新巻類型はあまり見かけない。勝坂式の新段階になると、勝坂3式と焼町類型が数多く出土するようになり、これに越後系の土器が少量加わる。

中期後半では、まず加曾利E1式土器の出土が多く、E2式器になるといわゆる唐草文系土器がE2式を凌駕するようになる。唐草文系土器とは、ここでは浅間山周辺に分布する土器（郷土式を含む）を指す。この時期では、曾利Ⅰ式～Ⅱ式が比較的多く出土しているが、曾利Ⅲ式以降の土器はあまり見かけない。加曾利E3式期では、E3式と唐草文系土器とが拮抗した状態で出土しているが、その終末には唐草文系土器の出土量が急速に減少し、E4式期にはその色彩を失ってしまう。

後期初頭は称名寺式土器が主に分布するが、これに本地域特有の隆線施文の深鉢や、新潟県を中心に分布する三十稲場式系の土器などが加わる。また、称名寺2式から堀之内1式の時期には、信州系の茂沢類型が数多く認められる。三十稲場系の土器は、少ないながらも堀之内1式段階まで必ず出土してお

り、定着している状況が看取される。

後期後半では、堀之内2式、加曾利B式に続いて高井東式が主体を占める。その後も高井東式中段階から新段階の土器がこの地域では主体となり、安行1式・2式土器の出土は少ない。その他では、瘤付土器も少量出土している。

晩期になると、高井東式系統の土器と共に安行1a式が少量認められ、その後は信州系の佐野式が主体を占めるようになり、これに天神原式と大洞式系統の土器が加わっている。その後は浮線網状文系土器に収斂し、弥生式土器へと変化をとげる。

以上が概要である。このうち、晩期から弥生時代初頭の土器は、遺跡内での分布が時期を追って変化している。表6はその状況を区毎に示したものである。後期後半の高井東式土器は29区東側地区からまとまって出土しているが、晩期になると29区西側に主体が移動している。晩期後半は28区西側地区に分布の主体が移り、晩期終末から弥生初頭の土器は10区・20区・18区からの出土が多くなる。この時期の土器がまとまって出土したのは、八ッ場関連地域では

### 第3章 発見された遺構と遺物

初めてのことであり、その資料化を第一の目標として整理作業にあたったが、諸般の事情から意を尽くせていない部分も多く、分類や吟味も不十分である。

なお、出土土器のうち、早期から中期五領ヶ台式までは出土数が少ないため、時期毎に一括したが、それ以降の時期はグリッド別に図版を作成している。そのため、早期から中期五領ヶ台式までは時期毎に一括したかたちで、それ以降はグリッド別に報告する。また、掲載遺物の選択にあたって、各区の状況に応じて特化した選択をしているため、区毎に掲載量が異なることを予め了解いただきたい。

#### 早期の土器（第47図）

早期の土器は合計29点出土しており、時期の判明したものはいずれも早期後半の鶴が島台式に該当する。分布は18区を中心に一部は28区に及んでおり、特に18区1号埋没河道の東側に集中する地点が認められた（第312図）。

第47図に12点を掲載したが、このうち、1・4・6および2・3は同一個体の可能性が高い。いずれも胎土に少量の繊維を含み、表裏に条痕文が施されている。条痕文は、口縁部付近では横位、胴下半部では斜行する傾向が認められる。器形や文様のありかたは、県内平野部の土器と大差ない。

#### 前期前半の土器（第48図～第50図）

本遺跡の中央部を流下する山根沢の東西に分布があり、特に山根沢の西側に集中する地点が認められた（第313図）。この地点には、前期前半期の土器埋設遺構1箇所と土坑1基があり、土器の集中状況と合わせると、住居が存在していた可能性が高いと言えよう。

出土土器は、花積下層式・二ツ木式・関山Ⅱ式と共に、長野県側に分布する神ノ木式・有尾式、および長野県南西部に分布する中越式の文様をもつ丸底の土器（第48図1）などが認められた。いずれも胎土に繊維を含んでいる。埋没していた土壌の影響なのか、この時期の土器はいずれも器面の劣化が著し

く、文様の判読が困難なものが多い。

第48図1は、塚田・中道式の器形に、中越式の斜格子文様を施した土器で、やや厚手で胎土に繊維を含んでいる。丸底の底部には縄文が施文され、内面はナデ仕上げで起伏が認められる。口唇部には押圧が加えられ、口縁部には2個一対の円孔が施されている。4～8は撚糸圧痕文が施された一群で、円形竹管文を伴うものが多い。9・10は円形竹管文とへら状具を押しつけた羽状文様を組み合わせた一群で、9は口縁部に刻目が付く隆線貼付文が伴う。11は刻目が付く隆線貼付文で文様を構成している。以上の土器は花積下層式から二ツ木式に比定される。

第48図12～16・第49図1～9・11は羽状縄文を施文する一群である。薄手のつくりのものも多く、大半が結束の縄を使用している。第49図10・12・13は厚手の土器で、一見すると縄文を施文しているように見えるが、節の大きさと傾きが一定しておらず、オオバコなどの植物の茎を施文したものかもしれない。14・15と第50図6は網目状の付加条縄文を施文したもの、16は環付縄文であろうか。17～19は口縁部に半裁竹管による集合沈線で幾何学的な文様を構成する一群、20～22は環付縄文、23は組紐を施文する一群で、いずれも関山Ⅱ式に比定される。24・25と第50図2・5は正反の合撚りの縄を施文した一群である。

第50図1・4は胴部に束縄文を施文した一群で、口縁部には櫛歯状の刺突と条線で文様帯を構成している。神ノ木式に比定されよう。

#### 前期後半の土器（第51図・第52図）

土器の分布は前期前半とほぼ同様の傾向が伺え、集中地点は19区北西部と29区南東の2箇所認められる。この時期の遺構は、19区北西部で土坑1基が確認されている。

出土土器は、諸磯b式・諸磯c式・十三菩提式と共に、長野県に分布する下島式・晴ヶ峰式、および東関東に主分布する興津式などが認められた。

第51図1～13は諸磯b式で、浮線文を施文する土

器が少なく、大半が集合沈線で文様を構成している。14～24は諸磯c式で、地文の縄文を施文するものが目立つ。

第52図1～6は興津式で、砂質土のような胎土が特徴的である。7は鋸歯文と印刻手法を多様した円筒状の深鉢で、晴ヶ峰式に比定される。8～11は結節浮線文を施文する一群で、地文に結束羽状縄文を多様している。8はボタン状貼付文がつく波状口縁の深鉢で、下島式に比定されよう。12・13は浮線が施文された土器で、12は把手であろう。

#### 中期前半の土器（第53図・第54図）

ここでは五領ヶ台式を報告する。山根沢の東西に土器の分布が認められ、その後大規模集落が形成される範囲に分布がほぼ重なる。集中するほどの出土量はないが、20区北西側と28区東側からの出土量がやや多い。

出土土器は、小破片での出土がほとんどで、全体の構成が判明するものが少ないが、新しい段階のものが多いものと思われる。第53図3は大波状口縁の深鉢で、13がその底部であろう。6・7は石英と金雲母を多量に含む胎土が使用されており、竹管状具を多用した文様構成は、北陸地方との関連を伺わせる。

#### 10区出土土器（第55図～第57図）

今回報告の対象範囲は、10区北東部のわずかな範囲に限られる。この地区は縄文時代の主要な集落域から外れており、出土遺物は少なかったが、縄文時代晩期終末から弥生時代初頭にかけての土器が目立って認められたため、その時期を特化して掲載した。

第55図1は、体部が球形のもので、おそらく注口が付くと思われるが、欠損している。胴部文様部に粒状の貼付文がつく。瘤付土器か。3も沈線文様部に粒状の貼付文があり、瘤付土器であろう。2は口縁部がくの字状に内折する土器で、鋸歯状の文様で構成される。高井東式に比定される。11～13は細密条痕を地文に、胴部に沈線で緩杉状の文様を構成

する。7は胴部文様が浮線文で施され、細密条痕は認められない。14は外面に細密条痕を施す深鉢で、肥厚させた口縁部に3条の太沈線がめぐり、15～23は口縁部に数本単位の沈線を施した深鉢で、15・16は口縁部が肥厚している。7～16・18は晩期後半、17・19～23は晩期末～弥生初頭に比定されよう。

第56図4・5・9は浮線網状文系の一類、6・7・12・15は太沈線で工字文を描く一群である。前者は晩期終末、後者は弥生初頭に比定されようか。14は鋸歯状印刻文を施す土器で、安中市注連引原遺跡に同様の土器がある。弥生時代初頭に比定されよう。26は胴部下半に段をもつ深鉢で、24ではその部位を沈線で表現している。27は細密条痕と縄文が施文されている。

第57図1～7・9・10・12は条痕文を施す一群で、晩期終末に比定されよう。13は胴部に縄文が施される甕で、頸部に蛇行沈線をめぐらせて縄文施文部を画している。弥生中期に比定されようか。

#### 18区出土土器（第58図～第88図）

中期終末から後期初頭期の土器と、晩期終末から弥生時代の土器を中心に掲載した。

第58図1～11は阿玉台式土器である。本遺跡では阿玉台I b式～同II式土器の出土がほとんどで、同III式以後の土器は見かけない。土器は、口縁部が内湾しながら大きく開く深鉢が主体で、口縁に山形あるいは扇状の大きな把手がつくものも多い。胎土に金雲母や片岩を含むものも多く、器面は光沢をもつ。口縁部は、隆帯による楕円区画に沿って1～2条の結節沈線をめぐらし、区画内に同結節沈線で鋸歯状や波状、および斜行線などを組み合わせた文様を施す。胴部には、文様単位に合わせて直線あるいは波状の隆帯を垂下させるものや、楕円区画を施すものがあり、横位に連続する爪形状の刺突列や押圧文、鋸歯状沈線などをめぐらす。

第58図12～19、第59図～第60図は勝坂式土器である。新しい段階の土器が多く、第59図～第60図は勝坂3式土器に該当する。この段階の土器は数多く出

### 第3章 発見された遺構と遺物

土しており、その一部は加曾利E1式古段階の土器と共存する。

第61図と第62図1～8は焼町類型に該当する。比較的多く出土しているが、接合できないものも多く、ここには図化可能なものを掲載した。波状口縁と平縁とがあり、口縁には加飾した把手が付けられる。文様は曲隆線で渦巻文や反転する懸垂文で構成され、縄文を施文するものを含む。

第62図9～16は曾利I式～II式に該当する。半裁竹管による縦位集合沈線を多用している。第62図17～21・第63図～第65図は唐草文系土器に該当する。新しい段階の土器が多く、加曾利E3式と同じ構成を取るものが多い。

第66図～第67図は加曾利E1式に該当する。隆帯に刻目がつくものも多く、勝坂式との共通性が伺える。

第68図1～8は加曾利E2式で、5の胴部隆帯は唐草文土器の文様を借用したものであろう。第68図9～15・第69図・第70図は加曾利E3式に該当する。新しい段階の土器が多く、第70図16と18はE4式に下るかもしれない。

第71図～第74図は加曾利E4式土器である。口縁部が波状となるものが多い。第73図2は口縁部の隆線の端部が渦巻文を描くもので、北信地域に多い土器だとされており、本地域では希な出土例である。

第75図～第77図は称名寺1式に該当する。第75図1・5は中津系タイプであらう。7は文様が片側にずれたように構成される。第76図は把手を集めた。7は注口部がつく。第77図1は胴部上半に刺突を伴う沈線で波状文を描く。加曾利E式系であらうか。

第78図～第79図1～16は称名寺2式である。沈線間に列点を加えるものは比較的少ない。

第79図17～24は三十稲場式系の土器である。一部は堀之内1式期に下るだろう。

第80図～第82図は称名寺式期の隆線文系土器である。浅間山周辺地域に特徴的な一群で、本遺跡でも出土量が多い。胴部の隆線が弧を描くものが古手に該当し、直線的に垂下するタイプは新しいものが多

い。また、古手のタイプでは、隆線の接合部や屈曲部に円形の貼付がつく。第80図1は縄文が施文されるもの、4は条線が施文されるもので、これらも古手に該当する。第80図16は中津系であらうか。

第83図・第84図・第85図1～8は堀之内1式に該当する。古い段階では茂沢類型がかなり入っている。第83図と第84図1～7・10・11の多くは茂沢類型であらう。第84図13は沈線を重ねる文様を施す鉢形の土器で、越後系のものであろう。

第85図9～26は堀之内2式土器である。11・12・16・18は胴部下半がくの字に折れるタイプ、22～25は注口土器であらう。第85図27～29は加曾利B式土器である。

第86図・第87図は晩期後半の土器である。第86図1・5・6・11は浮線網状文タイプの土器、2～4・7～10・12～16は佐野II式に該当する。26・27は口縁部内面に沈線がある土器で、佐野式か。第87図1・3・4・6・7は浮線網状文の時期に、2・5は佐野式II期に比定されよう。

第88図は弥生時代の一群である。多くは中期前半の土器であるが、櫛描文を施す9・10は前期に、櫛描波状文を施す15・16は後期に含まれよう。

#### 19区出土土器（第89図・第90図）

多量の土器が出土しているが、今回は後期後半以後の土器に特化して掲載した。

第89図1～8は加曾利B式土器を一括した。1～4・6～8はB1式に該当するもので、6は内面に魚を描いたような文様を伴う。5はB2式であらう。第89図9は蓋形土製品で、堀之内式段階のものであろう。

第89図10～25・第90図1～4は、高井東式を一括した。11・12は糸巻き状の把手で、関東ではあまり見かけない。1は浅鉢で、口縁部内面にこの時期の特徴を示す文様が付けられている。

第90図5～9は瘤付土器であらう。6・7は刻目がつく微隆線で文様が構成されている。8・9は平行沈線で文様を施すタイプである。

第90図10～16は安行式土器である。10は安行1式に、13～15は安行3a～3b式に、16は安行3c式にそれぞれ該当する。

第90図17～19は佐野式である。17は高台がつく鉢で、内面の底に網代がつく。18は胴部くびれ部に刺突文が施される。19は工字文が施された土器で、佐野Ⅱ式に比定される。

#### 20区出土土器（第91図～第174図）

中期阿玉台式から弥生時代までの大量の土器が出土している。ここでは網羅的に掲載した。

第91図～第94図は阿玉台式土器を一括した。大半が胎土に金雲母を多量に含む。第91図1～11は丁寧な角押文で弧文を描くもので、阿玉台Ⅰa式であろう。この他は大半がⅠb式からⅡ式に比定される土器で、角押文は1条と2条単位のものがあり、口縁部に大きな把手がつくものもある。第92図6は丸い透かし穴が二つ付いた円形状の把手である。

第95図～第101図は勝坂式土器を一括した。土器の出土量は勝坂3式が最も多いが、1式や2式も数多く出土しており、1式段階の住居も存在した可能性が高い。

第95図・第96図に勝坂1式を一括した。第95図1～13は角押文を多用する一群で、三叉状印刻文が伴うものが多い。14～30はペン先状の押引文を多用する一群で、キャタピラー文が伴うものが多い。第96図1・2は亀甲状の文様が構成される。7・14・16では平行沈線を縁取るように刺突列が加えられる。21は新巻類型に該当しようか。22～31は三叉状印刻文が多用される。

第97図～第98図は勝坂2式を一括した。単位文様が大型化し、口頸部に眼鏡状把手や橋状把手がつくようになる。口縁に大きな把手がつくものも多い。また、この時期から焼町類型が伴うようになる。

第99図～第101図は勝坂3式土器を一括した。単位文様はさらに大型化し、各種の把手が多様される。また、口縁部を無文化した土器も多くみられるようになる。第99図15～18は無文化した口縁部に

S字文や弧文を貼り付けている。これらは加曾利E1式古段階の土器としばしば共伴する。第100図14～22は縄文系の一群で、新巻類型であろうか。第101図7は曾利式の祖形であろう。12は高台部である。

第102図～第105図は焼町類型を一括した。胎土に多量の金雲母を含むものと、含まないものがある。第102図4・第105図1～4は、無文化した平縁の口縁部に深い刻目がつくタイプで、加曾利E1式古段階の土器としばしば共伴する。

第106図～第109図は曾利式土器を一括した。曾利Ⅰ式は多く出土しているが、Ⅱ式以降は少なくなる。その量比は、おそらく地元の唐草文系土器と相互補完する関係にあったと考えられる。第106図1は胴部下半が下ぶくれの土器で、大きく開く口縁部に、唐草文系土器古段階のものに多用される剣先状の文様がつけられている。4は円筒状の小型深鉢で、勝坂式であろうか。7は肥厚した口縁部に矢羽根状の短沈線を施すもので、類例を知らない。第107図6は蕨手状の把手がつくもので、出土例は少ない。5・7は斜めに肥厚した頸部に平行沈線で刻目を施す特徴的な文様で、加曾利E式のなかにもこれと同じ施文が認められる。第108図3～5・7～16・21～24は、胴部の平行沈線に爪形文を施文する一群である。第109図1～7は口縁部に斜行沈線を施文する一群、9～13は重弧文を施文する一群である。22～24は曾利V式であろうか。

第110図～第123図は唐草文系土器を一括した。本遺跡では、加曾利E2式期から加曾利E3式期にかけて一方の主力を担う土器群であり、その出現と終焉の様相がまだはっきり把握できない。

古段階では、口縁部を無文化するものが多く、器形は口縁部が開くタイプと内湾する樽形のタイプとがある。いずれも口縁内面に隆線を施して肥厚させる形態を特色としており、この特徴は終焉まで変わらない。また、胎土が砂質のものが多く、古段階の土器ではしばしば石英や金雲母を多量に含むものも多い。また、土器の内面は多くがナデ調整であり、

### 第3章 発見された遺構と遺物

加曾利E式では研磨が多いことと対照的である。これらの特徴は、焼町類型にも共通する部分が多く、両者の関係が示唆される。

第110図1～7は渦巻文が施される把手で、立体的で多様なものが存在する。1・6の裏面に施された隆線は唐草文系土器の特徴の一つであり、いずれも把手の裏で剣先文を描いている。この剣先文は、古段階の土器の口縁部にしばしば登場する特徴的な文様である。5は長野県北部に主分布する大木系の土器である。

第111図1も渦巻文が施された把手で、把手内面には口縁部をめぐる隆線にC字形の文様を加えられている。3では、把手の表裏に同様の文様が見られる。5の胴部は、等間隔に施文された横位平行沈線の間を、縦位の沈線で充填している。この文様も古段階に多用される文様である。7・8・10は無文の波状口縁を呈する一群で、7は波頂部に綾杉状の隆線を貼付している。8は波頂部に透かしを施すタイプで、頸部と波頂部をつなぐ橋状把手がつく。10は波頂部に渦巻文が施される。

第112図は、口縁部が無文の一群で、頸部や胴部の文様の交点には、渦巻文がつけられる。1・7・11は、無文の口縁部に文様の単位を示す剣先文が施文されている。1では、頸部をめぐる隆線と剣先文に伴って、列点を加えられている。この列点文も、古段階の土器ではしばしば多用される。2では頸部から口縁部に向かって2本の隆線がのびているが、これも剣先文と同じ表現なのであろう。3・7は頸部に橋状把手がつくタイプで、胴部に渦巻文を伴う隆線懸垂文と矢羽根状沈線で文様が構成される。越後地域に多い一群である。

第113図16～19は、肥厚する口縁上端に刻目がつく一群で、16では沈線を縁取るように列点文が施文されている。18・19は隆線で文様が施されるタイプで、いずれも地文に縄文が施文されている。21は19の文様を沈線で施される。

第114図は隆線に沿って列点文を加える一群で、1・3・6・9は剣先文が施文されている。2は細

かな綾杉文を横位に施文するタイプで、越後地域に分布する土器であろう。7は頸部に交互刺突文が施文されている。

第115図は、口縁部に交互刺突文や波状文を施文する一群である。胴部文様は、綾杉文のタイプと優位沈線のタイプとがある。第116図は列点文を施文する一群で、13・14・16は細かな綾杉文が横位に構成されており、越後地域のタイプになるであろう。第117図1は加曾利E3式土器との折衷タイプであろう。7・8は胴部に大柄の渦巻文を施文している。

第118図1・4は曾利式に類似する。5は綾杉文が曲線的に描かれており、新段階ではこのような施文をとるものが多くなる。

第119図10は唐草文系土器の特徴的な器形で、把手がつく方向にやや長い楕円形を呈する。口縁部内面にはしっかりと隆線がめぐる。15～24に中期の台付き土器の台部を一括した。唐草文系土器にも、こうした台部がつく土器がある。

第123図14～18は、胴部の懸垂無文帯の間に列点を充填するタイプで、これらは加曾利E3式に含まれる土器であろう。

第124図～第131図は加曾利E1式土器を一括した。第124図・第125図は古段階の一群で、口縁部に立体的な把手がつくものが多い。交互刺突文を施文するものが多い。また、刻目や縄文が施文された隆帯も多用される。地文は縄文・捺糸文を施文するものも多く、条線のものもある。

第124図1は樽形を呈する深鉢で、口縁部には円形の透かし穴がついた大きな把手がつく。その両側につく環状の把手は、9の把手と共通している。9は口縁部に環状の把手を等間隔に配置したもので、三原田タイプを想起させる。

第125図は隆帯を多用するタイプである。2は渦巻文をS字状に連結している。4は胴部下半がくの字状に張る小型の土器である。6～8は隆帯に矢羽根状の刻目がつく。

第126図は2本の隆線で文様を施文する一群を一



括した。1は口縁部にクランク文を施文するタイプ、6・13・14はS字文を施文するタイプである。7は焼町類型の第102図・第105図1～4と同じタイプの土器で、地文に縄文が施文されている。第127図1～8も2本の隆線で文様を施文するタイプで、いずれも口縁部に渦巻文が構成される。

第128図1～6・8・10は沈線で文様を施文する一群で、沈線は2本のものとは3本のものがある。第129図も沈線で文様を施文するタイプで、直線的な構図のものとは曲線的なものがある。1は口縁部に刻目のような文様を施しているが、この文様は曾利I式土器の頸部にみられた文様（第107図5・7）と共通している。

第130図1～5は加曾利E1式の新しい段階の一群である。口縁部のS字文はかなり大型になっている。第130図6は縄文のみが施文された口縁部片、7～15は縄文あるいは捺糸文が施文された胴部片である。10は捺糸文と縄文の両方が施文されている。

第131図は底部を一括した。14は大型の底部で、底面に縄文の施文が認められる。

第132図～第136図は加曾利E2式土器を一括した。本遺跡では、加曾利E1式に較べて出土量が少ないのは、この時期から唐草文系土器が加わるからだと考えている。また、平野部の土器に較べて口縁部の渦巻文が突出する傾向が看取される。例えば、第134図9～16がそれで、おそらく共伴する唐草文系土器からの影響であろう。第133図18は胴部が張って口縁部がすぼまる特異な器形で、文様の特徴から大木8b式土器に比定される。第134図1～6は細かな矢羽根状沈線が横位に構成されるもので、越後地域に分布する土器であろう。第136図16～21は胴部に腕骨文を施す一群で、これも越後地域との関連が強い土器である。

第137図～第140図は加曾利E3式土器を一括した。本遺跡では唐草文系土器と共存関係にあり、古段階は唐草文系土器が主体を占めることから、加曾利E3式古段階の土器は少ない。ここに示した一群は概ね中段階から新段階の土器である。第139図は

台付き土器の台部である。第140図1・4は鳥形の把手である。2・11は口縁部区画内に大きな隆帯渦巻文や小さな突起がつけられている。越後地域の一群であろう。

第141図～第146図は加曾利E4式土器を一括した。波状口縁に波頂部に把手がつくタイプが多い。第141図は把手を一括した。1～4は二穴がつくタイプで、上端につく円形の平坦面が特徴的である。5・6・12は上端にS字の渦巻部分がつく。13・14はヘラ状の把手で、側面には刺突列が施されている。

第146図8・9は瓢形の土器で、頸部に紐掛け用の橋状把手がつく。いずれも赤色塗彩が施されている。

第147図～第154図は中期の浅鉢と特殊土器を一括した。本遺跡では浅鉢が数多く出土しており、赤色塗彩を施したものも多い。

第147図は阿玉台式・勝坂式期の一群である。1～3は口縁部内面に押引文を施文するタイプで、1は文様帯の下方に直径1.5cmほどの円形の透かし孔がつく。4～6は口唇部に平坦面がつくタイプで、5は平坦面に沈線で文様を施文している。7・8・10・11は波状口縁のタイプで、10は波頂部に大きな円形の透かし孔がつく。12は胴部上半に勝坂式の文様が施文されている。

第148図～第152図は加曾利E1式からE2式を一括した。この時期の浅鉢が最も多く、特にE1式期が卓越している。第148図にE1式期の文様が施文されるタイプを一括した。文様は渦巻文やS字文を多用し、隆線で表現したものが多い。

第151図は加曾利E2式の浅鉢である。渦巻文を連結する構成が定着している。12は渦巻文に剣先文が伴う。

第152図1～9は越後地域の浅鉢である。文様の施文に半裁竹管を多用し、精緻な文様を構成している。1・2では三叉状印刻文がみえる。

第153図は加曾利E3式期の両耳壺で、大型のものが多い。第154図1は曾利式の文様が施文される

### 第3章 発見された遺構と遺物

タイプである。2は台付きの小型鉢で、唐草文系土器に含まれようか。3は胴部に帯状の無文帯を施文するもので、長野県南部以東の土器かもしれない。5は胴部に刻目を施した隆線を多段に構成する深鉢で、曾利式であろうか。6～8・10・13・14は有孔鏝付土器とその系譜をもつものである。11は瓢形土器であろう。

第155図～第157図は称名寺式土器を一括した。第155図は把手で、いずれもS字文とそれから変化したJ字文が表現されている。第156図3・5・6は中津系の土器で、3は波頂部から垂下する隆帯が頸部をめぐる隆帯に取りついている。隆帯と縄文帯には円形の列点が伴う。第157図14・15は片面に8字文が施文された帯状の土器で、特殊な土器の把手であろうか。幅は14が4cm、15が3.7cmで、表面に隆帯で8字文が連続して貼付されている。側面形が円弧を描いており、裏面部には整形時のナデ痕が残る。表面や側面は器面が調整されているが、裏面は未調整のようにも見える。何かに貼付されていたものが剥げたようにも思えるが、そうした痕跡は確認できない。また、15は中央部に斜め方向の孔が二つあり、双方は逆方向の傾斜となる。孔は直径8mmで、裏面では孔の痕を調整していない。

第158図～第160図は堀之内1式土器を一括した。第159図7～9は口縁部が大きく開く深鉢で、口縁部内面と胴部に弧線を重ねた文様を施文している。10・11は口縁部が欠落したような形態の鉢で、越後地域に多いタイプである。第160図17～21は堀之内式土器を使用した土製円盤である。

第161図・第162図は堀之内2式土器を一括した。深鉢では、底部から口縁部に向かって直線的に開くタイプと、胴部下半がくの字状に屈曲するタイプとが認められる。第161図1は、堀之内1式段階の文様構成をよく残しており、2式との間をつなぐ土器である。第162図13～22は注口土器である。

第163図～第168図1～6は、加曾利B式土器を一括した。第163図・第164図は加曾利B1式段階の土器で、この段階のものが比較的多く出土している。第

163図2は胴部が方形を呈する特異な土器で、精選された緻密な胎土が使用されており、文様も精緻で、丁寧につくられている。19・20は浅鉢である。第164図は1式段階の大型深鉢である。第165図は加曾利B2式を中心とする。16は器形・文様ともに異質な土器で、類例を知らない。34は加曾利B1式段階の特殊土器を使用した土製円盤で、双口土器かもしれない。第166図・第167図・第168図1～6は加曾利B3式土器に比定される。斜行沈線を施すタイプが大半を占める。第166図10はB2式か。

第168図7～11・14は高井東式土器である。この地区では出土量が少ない。9は安行式に下るかもしれない。

第168図15は瘤付土器に含まれる。12・13・16・17・18は後期末葉から晩期の土器と思われるが、はっきりしない。19～23は後期から晩期の底部を一括した。21～23は木の葉の圧痕がつくもので、晩期終末から弥生時代になる可能性がある。

第169図・第170図は晩期後半の一群を一括した。詳細な検討は経ていないが、概ね佐野Ⅱ式から浮線網状文段階に比定される土器群であろうと判断した。

第169図1は口縁部に二山の突起がつく鉢で、高台が伴うものと思われる。口縁部の沈線間に工字文を示唆する三角形の印刻が施されている。幅広に造られた口唇部にも縄文が施文されている。なお、口縁部外面の文様施文部には、赤色塗彩が施されている。5は浮線網状文が施された鉢で、これも外面文様施文部に赤色塗彩が認められる。7～10は口縁部に太い沈線が1条めぐる鉢で、胴部には縄文が施文される。これらも口縁部に赤色塗彩が施されている。

第170図は深鉢類を一括した。口縁部および胴部上端に肥厚した文様帯を持つものが多い。10・16・23～26は浮線網状文が施される土器である。19・20は佐野Ⅰ式段階の一群か。30は壺形の土器で、条線で木の葉状の文様を施し、円形の貼付文がつく。

第171図～第174図は弥生時代の土器を一括した。

弥生前期から中期前半までの土器が出土しており、この地区では前期の土器がやや多く出土している。

第171図1は、信州以東に分布する沈線渦巻文土器で、器形は球形状を呈し、口縁部外端に刻目が施されている。文様は、沈線で同心円状の渦巻文を横位に並べて配置し、その間を綾杉文で区画している。また、文様の空白部には三角形の印刻文を施文する。内面には横位の擦痕が認められる。2～7は縄文が施文されたもの、8～18は細密条痕が施文されたもの、19～23は条痕文が施文された土器である。

第172図1～9は条痕文が施文されたもの、10・14は縄文が施文された底部である。11は外面に横位の条痕、内面口縁部に弧状の条痕が施されている。12・21は外面に横位と縦位の条痕が構成される。17は壺の口縁部で、輪積み痕に指頭圧痕が施されている。18～20も条痕文が施文された土器で、18・19では横位の波状文が、20では綾杉状の構成が認められる。22～27・33は縄文時代晩期の一群である。

第173図1～16・18は弥生中期前半期の一群である。磨り消し縄文を多用するものが多く、工字文や鋸歯文系統の文様で構成される。18は壺の口頸部で、口縁部に集合沈線で弧を重ねて描く。17は胴部が大きく屈曲する無文の土器で、屈曲部に刻目がつく隆線が施されている。晩期終末あるいは弥生初頭の土器か。19～22は縄文晩期後半の土器か。

第173図も弥生中期前半期のもので、3～6は胴部に斜行する条痕文が施される。7・8は条線で文様が構成される。

#### 28区出土土器（第175図～第243図）

この地区では、中期後半から後期の土器が数多く出土しているが、晩期後半の土器も西半部に集中した状態で出土しており、注目される。

第175図1～3は阿玉台式で、一条単位の角押文で文様が施文される。7は地文に縄文が施文されたもので、新巻類型であろう。4～6・8～13は北信地域に分布する北陸系の一群であろう。8・9・11は把手部で、小さな渦巻文と印刻文が多用される。

10・12は半裁竹管による刺突列で縁取った半隆起平行沈線で文様が構成される土器で、10では玉抱き三叉文が施文される。13は同様の文様が施文された浅鉢である。

第176図1～6は同個体の土器で、接合ができなかったため、各部を掲載した。口縁部に火炎土器を思わせる立体的な把手がつく深鉢で、口縁部上位に流水条の文様を、下位に刻目がつく隆帯で入り組み文と弧文を構成し、口縁部や頸部に眼鏡状に把手が多用される。上山田・天神山式に比定される。

第177図・第178図・第179図1～10は勝坂式を一括した。後半期の土器が大半で、眼鏡状あるいは橋状把手が多用される。

第179図11～14・第180図は焼町類型を一括した。縄文が施文されるタイプは少ない。

第181図1～6は曾利式土器である。沈線には半裁竹管が多用される。

第181図7～21・第182図は唐草文系土器である。口唇部内面に隆帯を貼付するものが多いが、これはこの土器の特徴である。

第183図・第184図は加曾利E1式土器である。地文は縄文と撚糸文とがあり、刻目がつく隆帯が多用される。第183図1は地文が撚糸文で、口縁部に刻目がつく隆帯で菱形条の文様を施す。

第185図1～5・9は加曾利E2式土器で、4の胴部には唐草文系土器の腕骨文がつく。2は浅鉢である。6～8は有孔鏝付土器で、加曾利E1～E2式に伴うものであろう。11～17は台付き土器の台部で、11～16は勝坂式期、17は唐草文系土器に、それぞれ伴うものであろう。10は環状の土製品で、時期ははっきりしない。

第186図～第193図は加曾利E3式土器を一括した。第186図1と第187図1は大型の深鉢で、口縁部の渦巻文に代えてC字状文が施文される。第191図1は胴部に条線で綾杉状の文様を構成する。唐草文系土器の影響であろう。

第194図～第198図に加曾利E4式土器を一括した。文様は沈線あるいは微隆線で描かれ、口縁部に

### 第3章 発見された遺構と遺物

には渦巻文から変化したC字状、あるいは橋状の把手がつくものも多い。第194図9は弧線区画内に刺突文を施すもので、異系統の土器である。第196図1・2はバスケットの持ち手のような把手がつく土器であろう。

第199図・第200図は中期の浅鉢を一括した。赤色塗彩を伴うものが多い。第199図1・2は勝坂式期に、3～14は加曾利E1式期に該当する。8は口縁部の隆帯が腕と手を表現している。第200図3は加曾利E2式期に、2・4～10は加曾利E3式～4式期に該当する。4は微隆線で渦巻文が構成される大型品で、頸部をめぐる隆線に円孔が施されている。

第201図～第203図は称名寺1式土器を一括した。第201図1・2・5・6・8・9は波状口縁が筒状となる一群で、刺突列や隆帯が多用される。第203図5・6は微隆線で大柄の渦巻文を描く一群である。

第204図～第206図は称名寺2式土器を一括した。沈線区画内に列点を施すものと沈線のみで文様を構成するものがある。第204図6と第206図12・14は三十稲場式系の一群である。

第207図・第208図1～6は称名寺式期の注口付浅鉢である概ね第207図が称名寺1式期、第208図が2式期に該当する。第208図7～9・13は堀之内1式土器、10～12は三十稲場式系の土器である。

第209図～第212図は称名寺式期の隆線無文土器を一括した。浅間山周辺地域に分布する一群で、多様な資料が得られた。第209図は隆線に刻目や押圧が伴う一群で、1は隆線の一方が口唇部に上がっている。第210図は隆線の交点に円形貼付が伴う一群で、20は頸部をめぐる沈線文様と組み合わせている。第211図13は東北地方の門前式に類似する。第212図は内折する口縁部に渦巻文がつく一群で、茂沢類型に伴うものか。

第213図～第220図・第221図1～5は堀之内1式土器を一括した。古段階では茂沢類型が多く認められ、越後地域の土器も加わっている。第215図12・15は越後地域に多いタイプである。第220図7・8は浅鉢、9・10・12～14は注口土器、11・15は蓋で

ある。16は体部に大きな透かしがつく土器、17は把手か。第221図2～5は三十稲場式である。

第221図6～25は堀之内2式土器である。24は片口がつく浅鉢か。

第222図は加曾利B式土器である。19は小波状口縁の鉢で、丁寧に作られた優品である。

第223図1～10は高井東式土器で、11～15はその粗製土器であろう。16～18は後期土器を使用した大きな土製円盤である。

第224図は後期終末から晩期前半期に該当すると思われるものを一括した。

第225図～第242図は晩期後半の土器を一括した。佐野Ⅱ式から浮線網状文系の一群で、本地区西側に集中した状態で確認された。口縁部や胴部の文様施文部、および口縁部内面に赤色塗彩が伴うものが多い。

第225図は古段階を主とする鉢で、大洞系のものも見られる。3・5・6は沈線が細く、前段階に含まれるかもしれない。6は口縁部に三叉状の印刻が見られる。第226図は中段階の鉢で、6・21は口縁部に小円孔が施されている。

第227図1～5は古～中段階、6～10は新段階、11～16は古段階に比定される。11は大型の鉢で、口唇部内面に凹線と隆線が伴う。16は工字文の初期のもので、佐野Ⅱ式か。

第228図は古段階の鉢である。11～16は深いタイプで、12は佐野Ⅱ式に比定されようか。11・13は深鉢かもしれない。16は流水工字文系である。

第229図は口縁部に沈線がめぐるタイプで、4は口縁部に小円孔が施されている。口唇部内面に沈線がめぐるものと、ないものがある。

第230図は壺形の土器を中心に掲載した。1は波状口縁のもので、頸部に橋状の把手がつく。9・12は流水工字文系の文様が施されている。

第231図は深鉢で、5・22は口縁部に小円孔が施されている。19・21は縄文が施文されたタイプで、流水工字文系の文様が施される。

第232図～第234図は、胴部上位が張るタイプの深

鉢である。文様部以外は無文とされる。

第235図～第238図は、地文に捺糸文を施文するタイプの深鉢である。第235図4・16・18・には胴部に綾杉文は施される。14・19・21・22には胴部に雷文が施されている。第238図は、折返し口縁タイプの深鉢で、器形は2・6のように内湾しながら開くタイプと、4・5・7のように口縁部が内傾して肩部がくの字に折れるタイプとがある。

第239図・第240図は、地文に条痕文を施文するタイプの深鉢である。細密条痕を施文するものが多いが、12・13・15はやや粗いか。

第241図1～5・7は口縁部に1条の沈線がめぐる無文の深鉢で、3は口縁部に小円孔が施されている。6・8は蓋で、いずれも縁に小円孔が施されている。6は外面に1条、内面に2条の沈線がめぐる。8は外面に浮線網状文が施され、内面に2条の沈線がめぐる。10は木の葉形の舟形土器である。外面に浮線網状文が施されており、内面口唇部分にも浮線網状文が認められる。

第242図は無文の深鉢で、2は口縁部が屈曲し、5・7は口唇部内面に1条の沈線、9は口唇部内外面に1条の沈線が施される。

第243図は弥生時代の土器を一括した。1は外面に斜行する条線が施された深鉢である。5は壺の肩部片で、外面にやや波状を描く条痕文が施されている。7は小波状口縁の甕で、胴部上位に菱形文が施される。

#### 29区出土土器（第244図～第283図）

西側地区から縄文後期終末から晩期前半の土器が集中して出土しており、その時期を特化して掲載した。

第244図・第245図1～16は加曾利B式土器を一括した。18は方形を呈する鉢、19は浅鉢、17・20～22は注口土器である。

第245図17～29・第246図・第247図1～15は高井東式を一括した。本遺跡では後期終末期の主体となる土器群で、これに関東地方の後期安行式と東北系の瘤付土器が加わる構成となる。第246図16～20・

22および第247図1～15は中段階から新段階の一群で、1～4は胴部に平行沈線で稲妻状の文様が施されている。

第247図16～18は後期安行1式土器で、出土量はいたって少ない。19・20は瘤付土器、21～23は高井東式を使用した土製円盤である。第248図1～10は安行2式土器である。3は注口土器で、1式かもしれない。

第248図11～26・第249図は晩期安行3a式土器である。小片がほとんどであるが、三叉文が確認できる。

第250図は時期が不明確なものを一括した。32・33は土製円盤である。

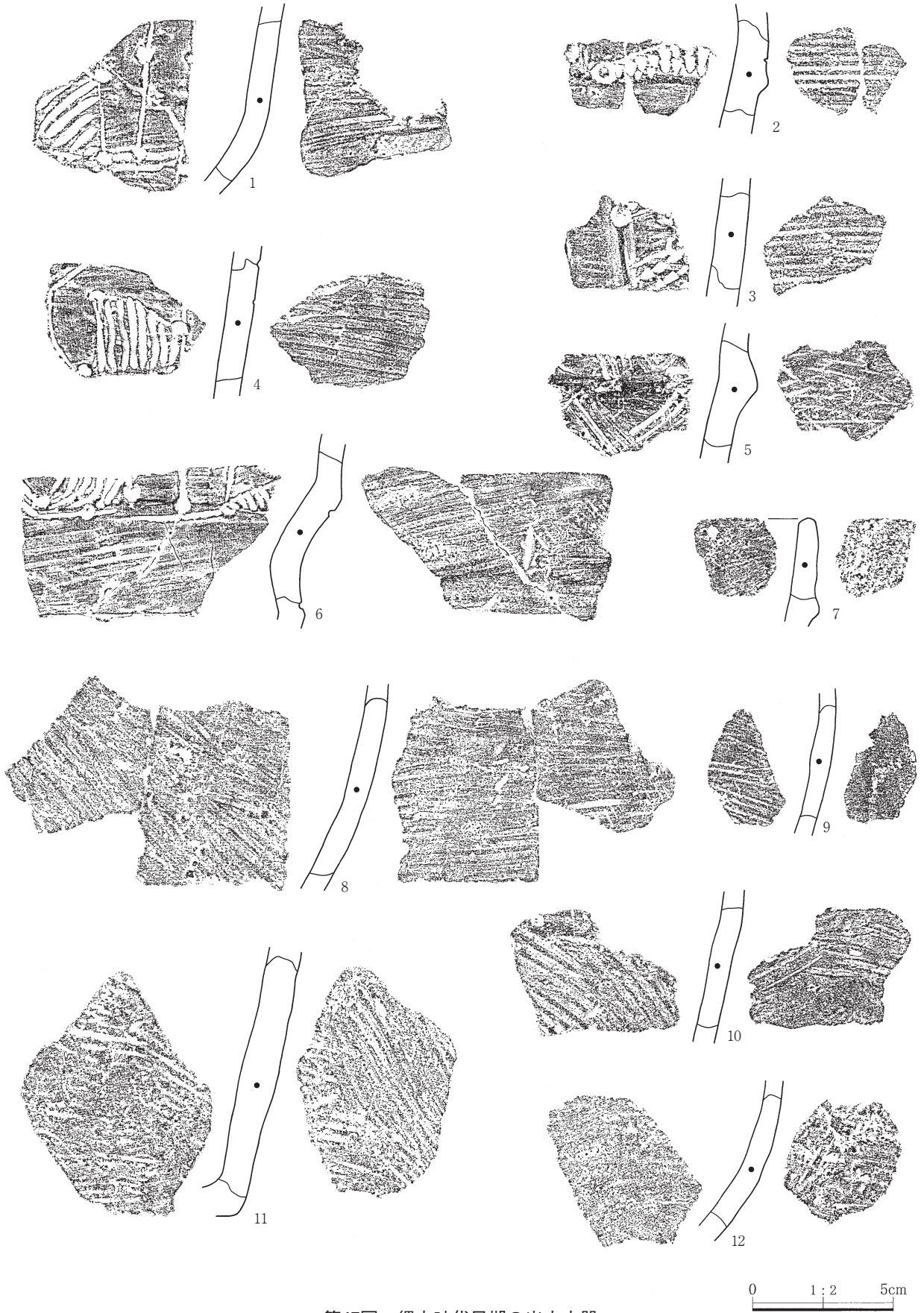
第251図1～13は天神原式古段階と思われるものを一括した。1は三叉文と貼付文を一体化した文様を配置している。14・15は瘤付土器に含まれよう。

第251図16～21および第252図～第283図は、晩期前半期の土器を一括した。主体を占めるのは佐野式土器で、それに天神原式新段階や東北地方の大洞式系の土器などが加わっている。器種は深鉢・鉢・台付き鉢・注口土器・壺などがあり、それに舟形土器や蓋が加わっている。深鉢では、文様が施文される土器の他に、輪積み痕を残す無文土器、捺糸施文土器、縄文施文土器などがあり、そのうち縄文系では結節部を施文するタイプが多く認められる。また、オオバコの茎を回転施文した土器も出土している（第267図11～13）。深鉢以外の器種では、赤色塗彩を伴うものや、口縁部に小円孔がつくものも認められる。後日機会があれば検討したい。

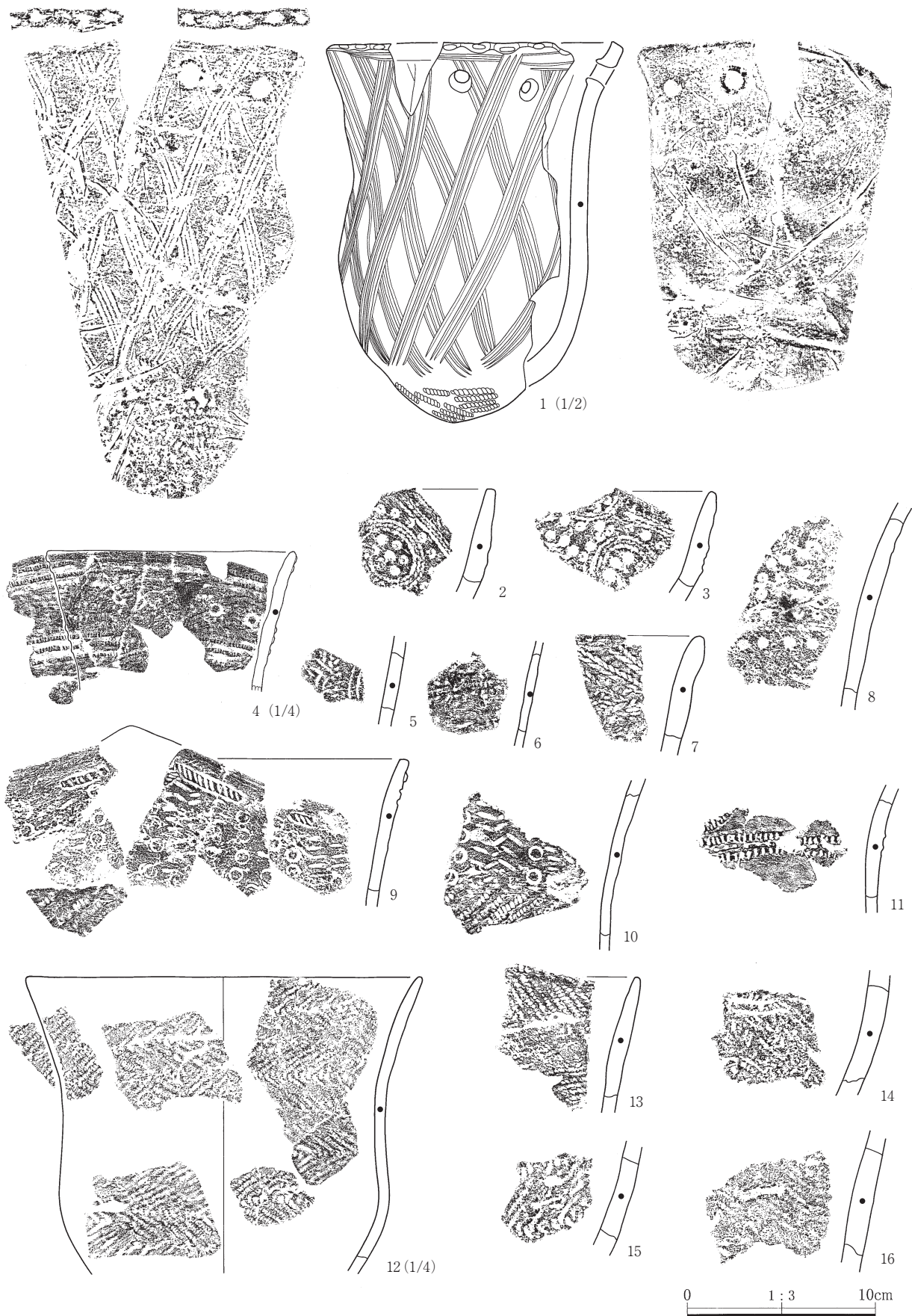
第254図14は弥生土器であろう。第283図4・11・17・33～35は、晩期後半の浮線網状文系土器である。

#### 30区出土土器（第284図～第289図）

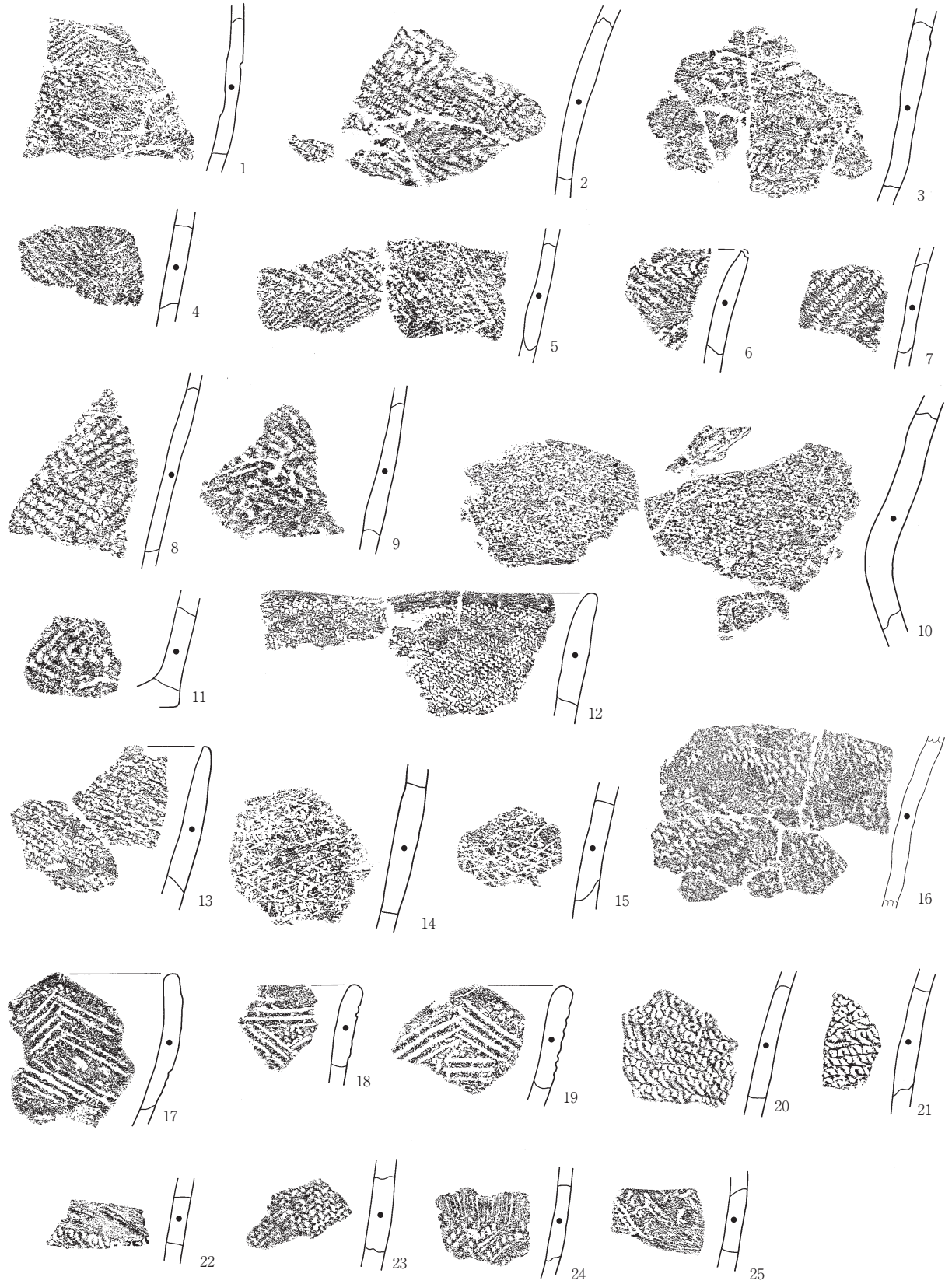
29区との関係から、後期後半から晩期の土器を主体に掲載した。出土量は少ないが加曾利B1式から晩期終末までの土器が出土しており、29区との関連が深い資料が得られている。



第47図 縄文時代早期の出土土器



第48図 縄文時代前期前半の出土土器 (1)



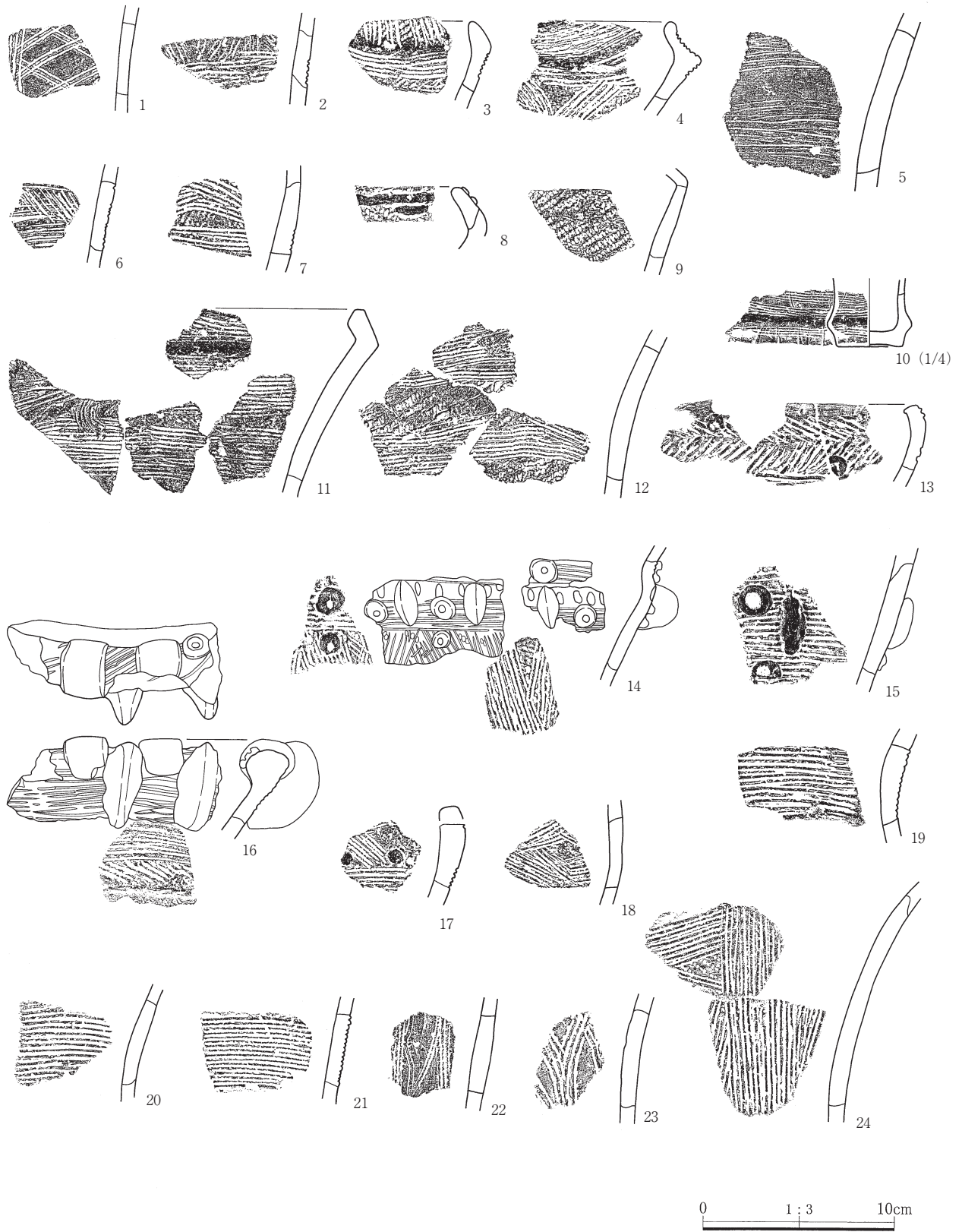
0 1:3 10cm

第49図 縄文時代前期前半の出土土器（2）

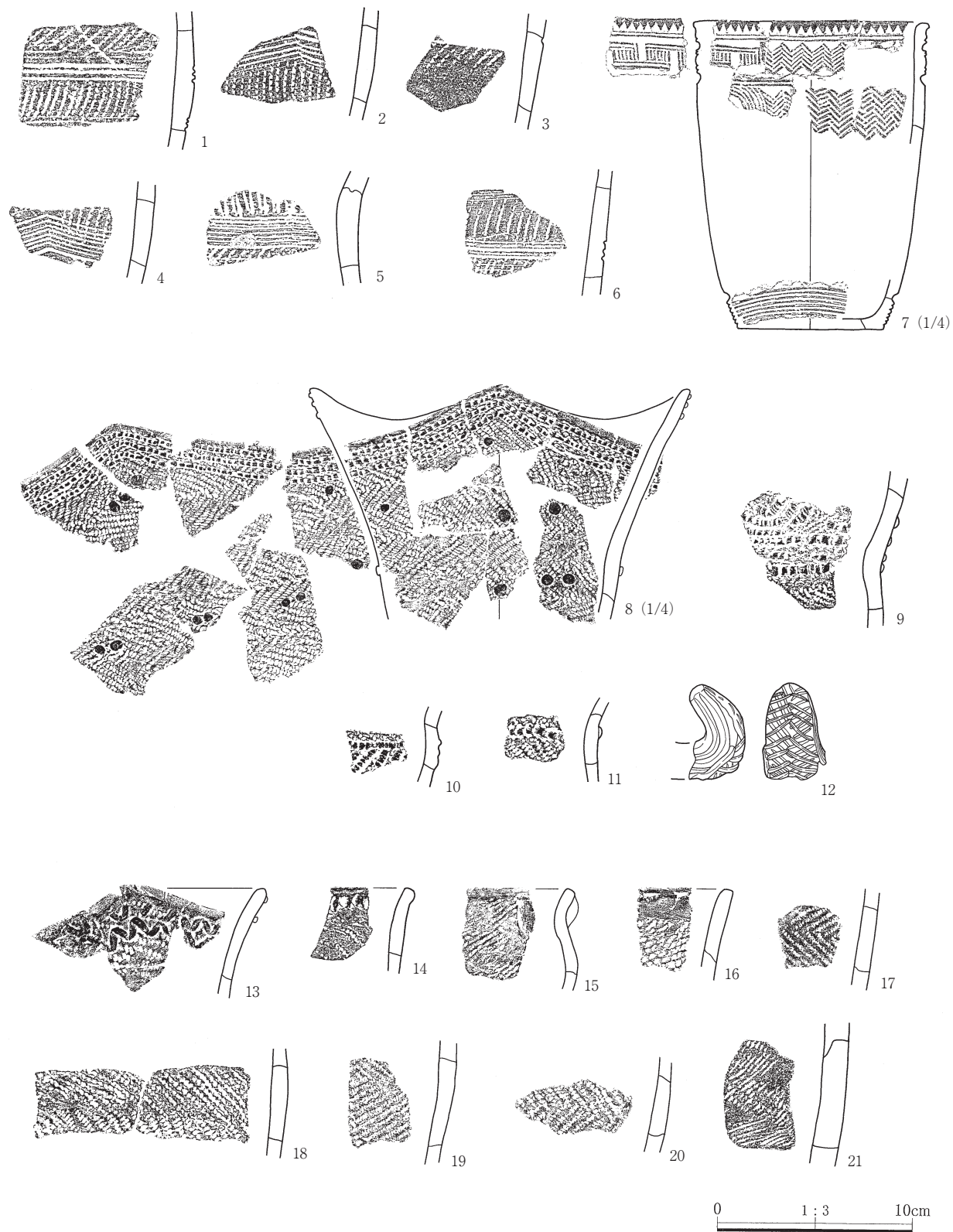




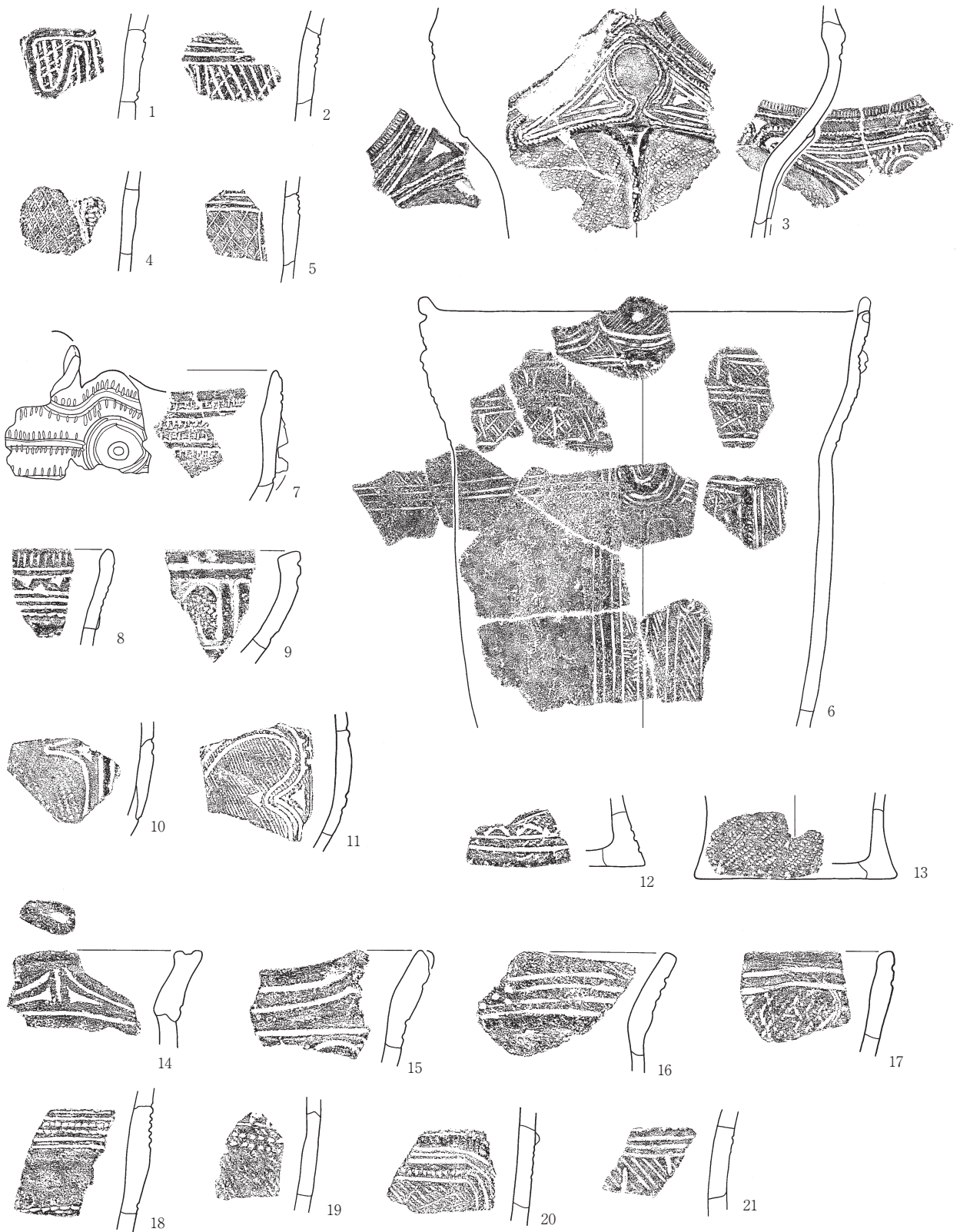
第50図 縄文時代前期前半の出土土器（3）



第51図 縄文時代前期後半の出土土器（1）

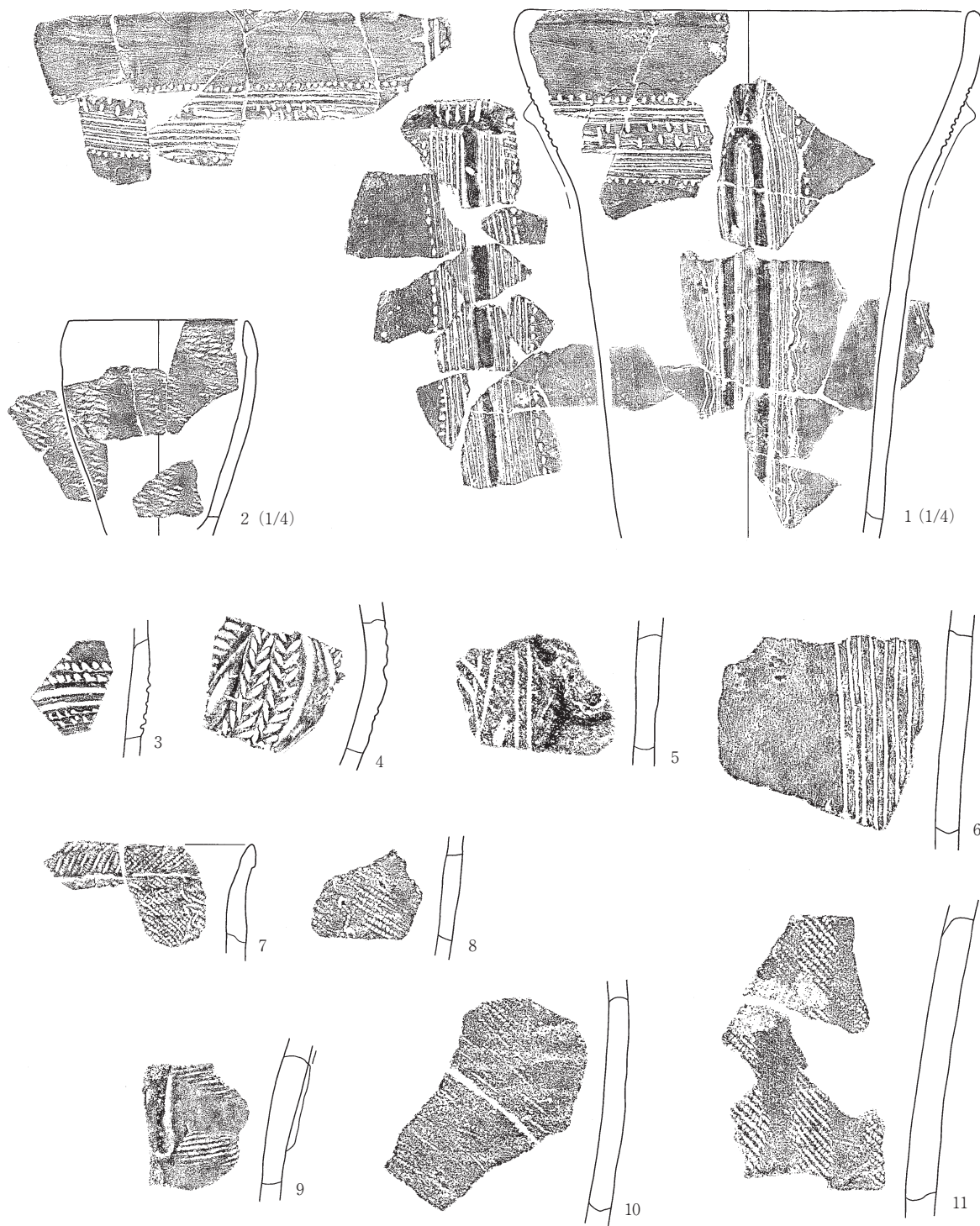


第52図 縄文時代前期後半の出土土器（2）



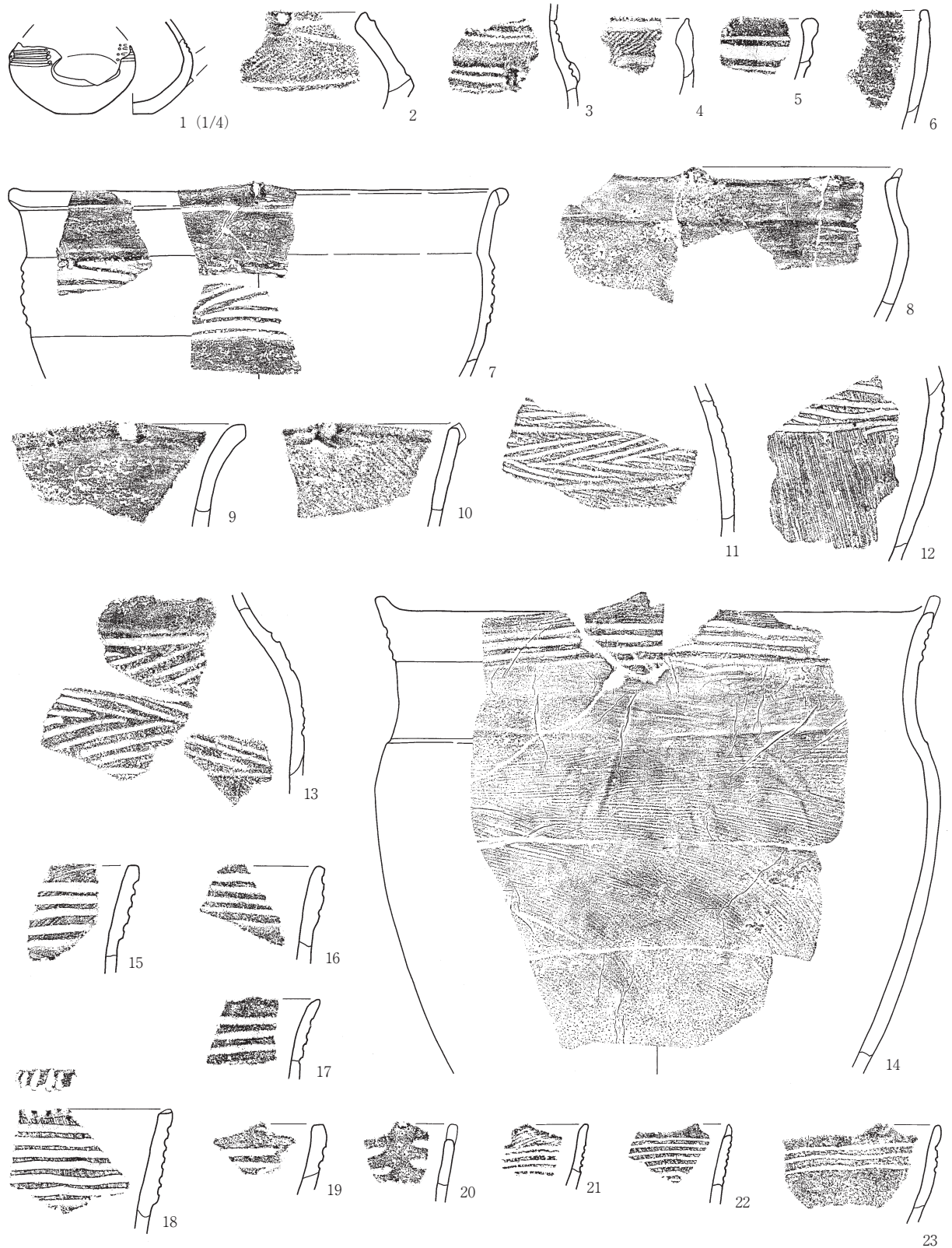
第53図 縄文時代中期初頭の出土土器 (1)

0 1:3 10cm  
3・6・13 (1/4)



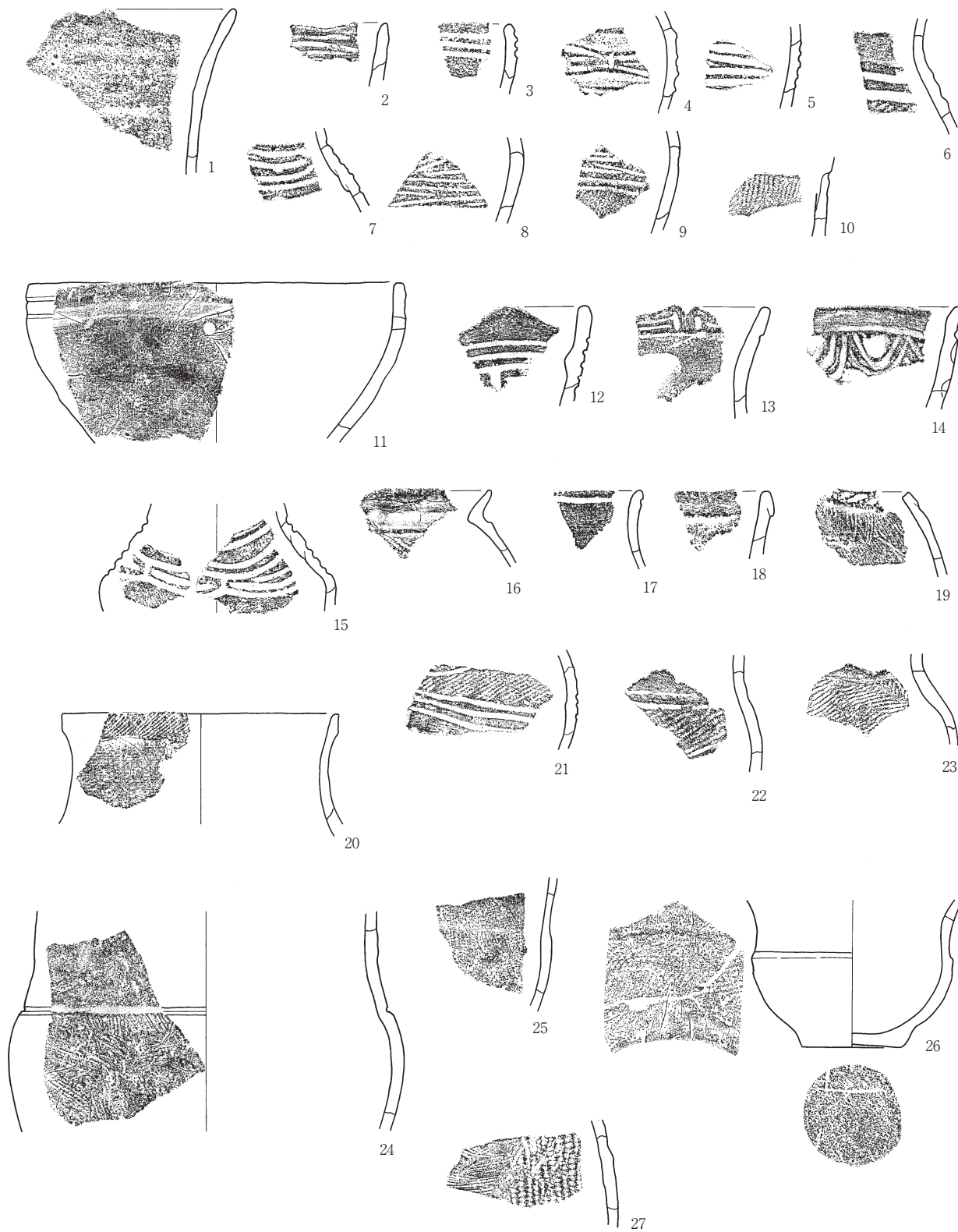
0 1:3 10cm

第54図 縄文時代中期初頭の出土土器 (2)



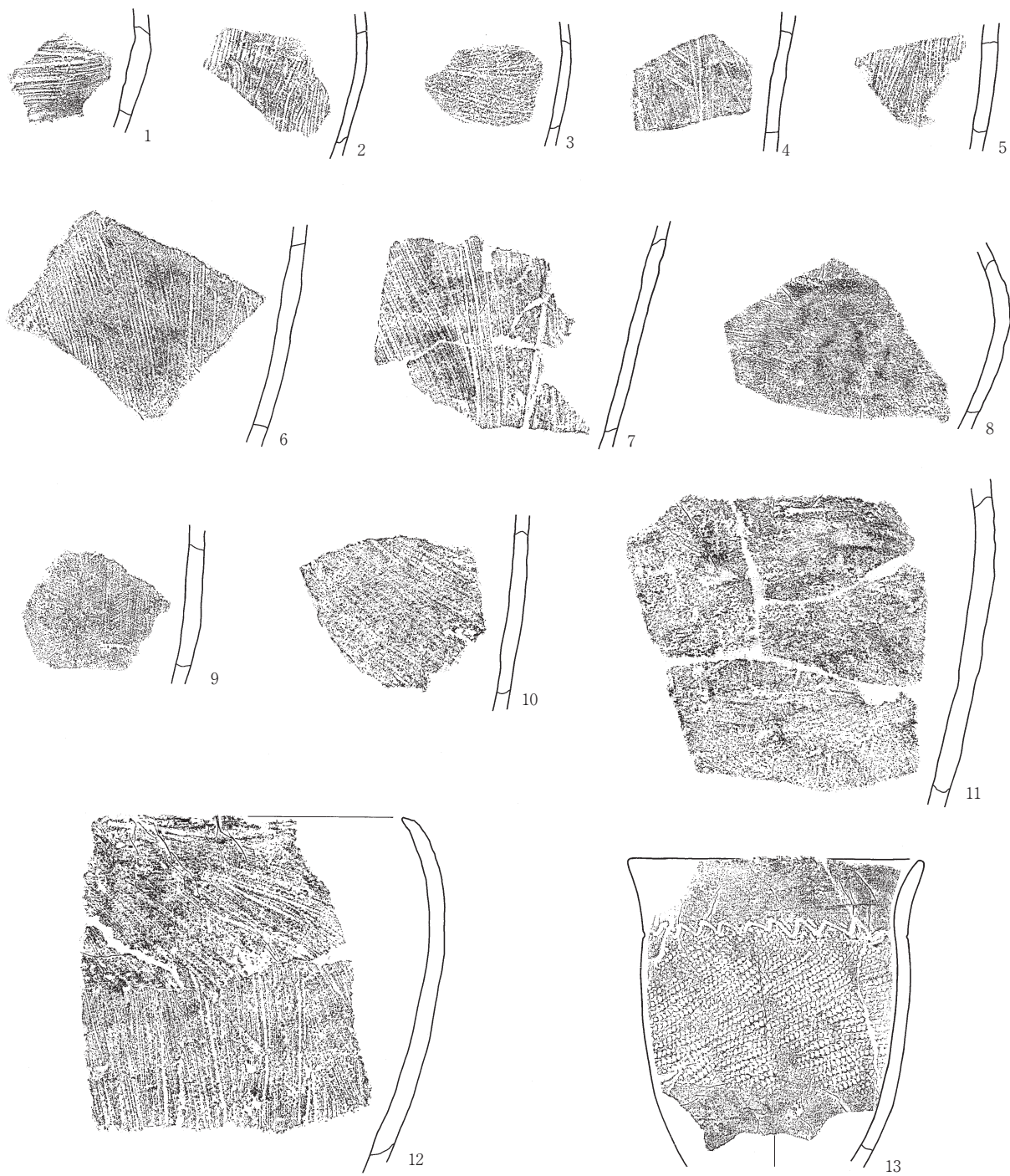
第55図 10区出土土器(1)

0 1:3 10cm



0 1 : 3 10cm

第56图 10区出土土器 (2)



第57図 10区出土土器(3)

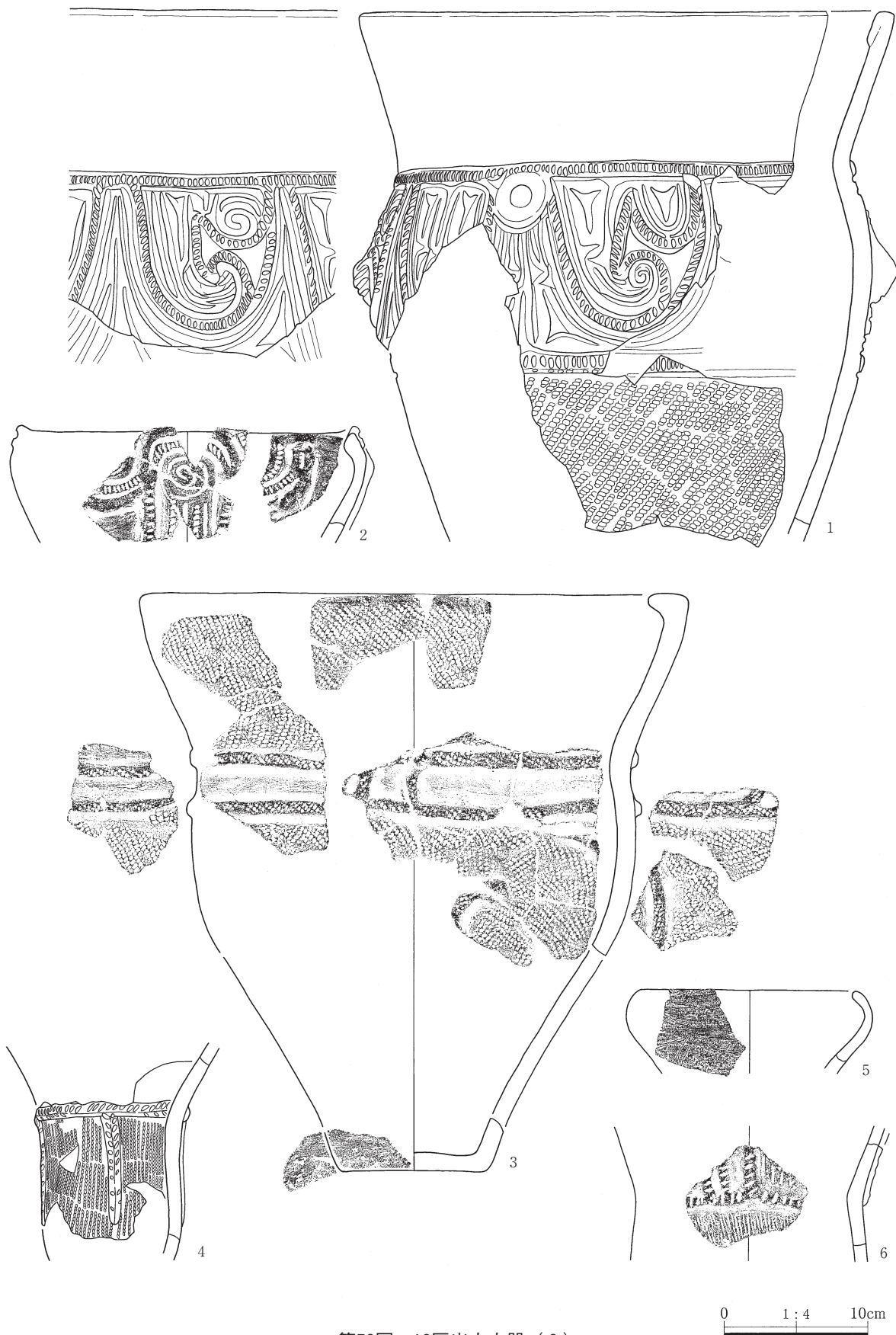
0 1:3 10cm



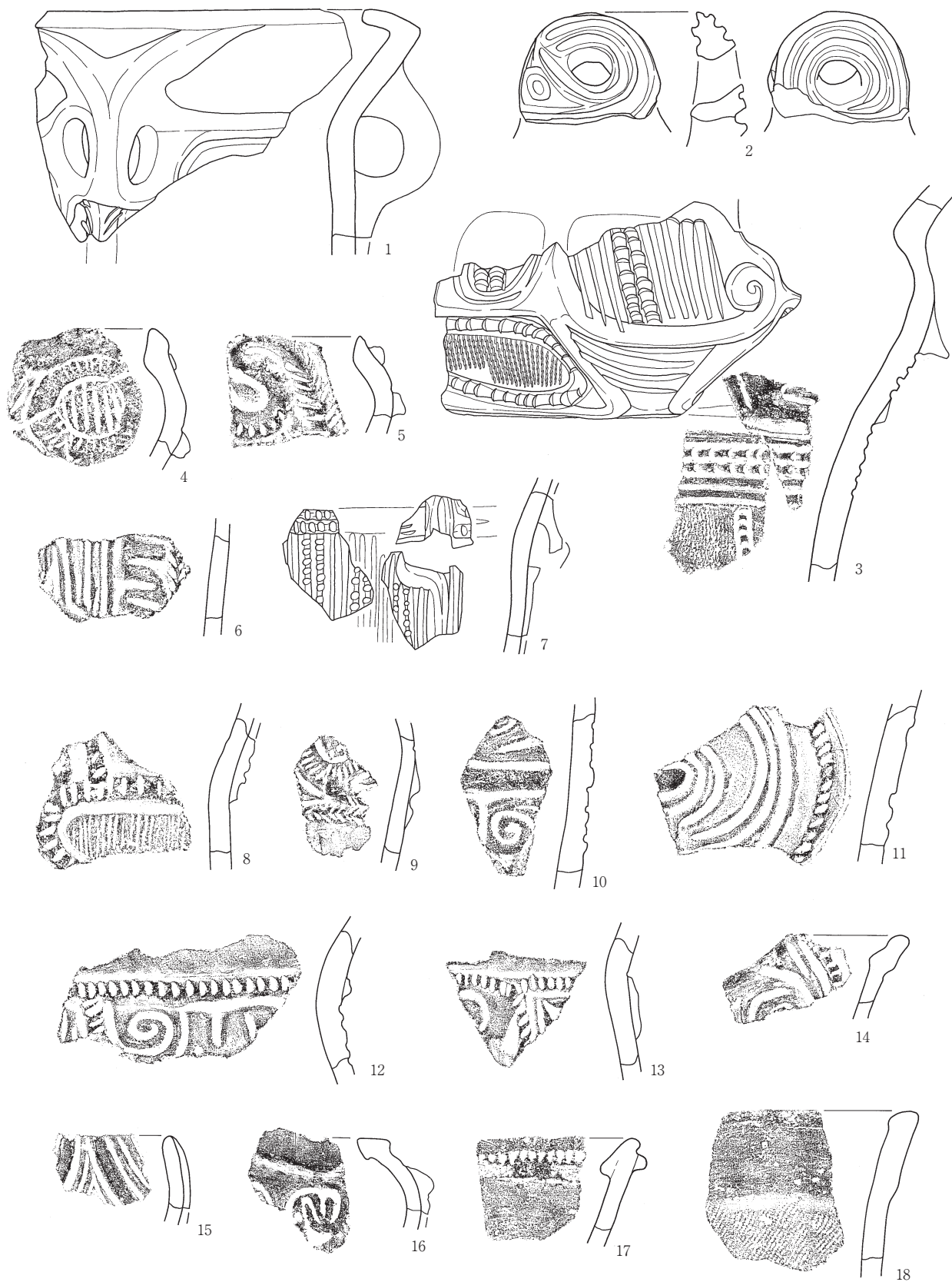


0 1:3 10cm  
12 · 15 · 18 (1/4)

第58図 18区出土土器 (1)

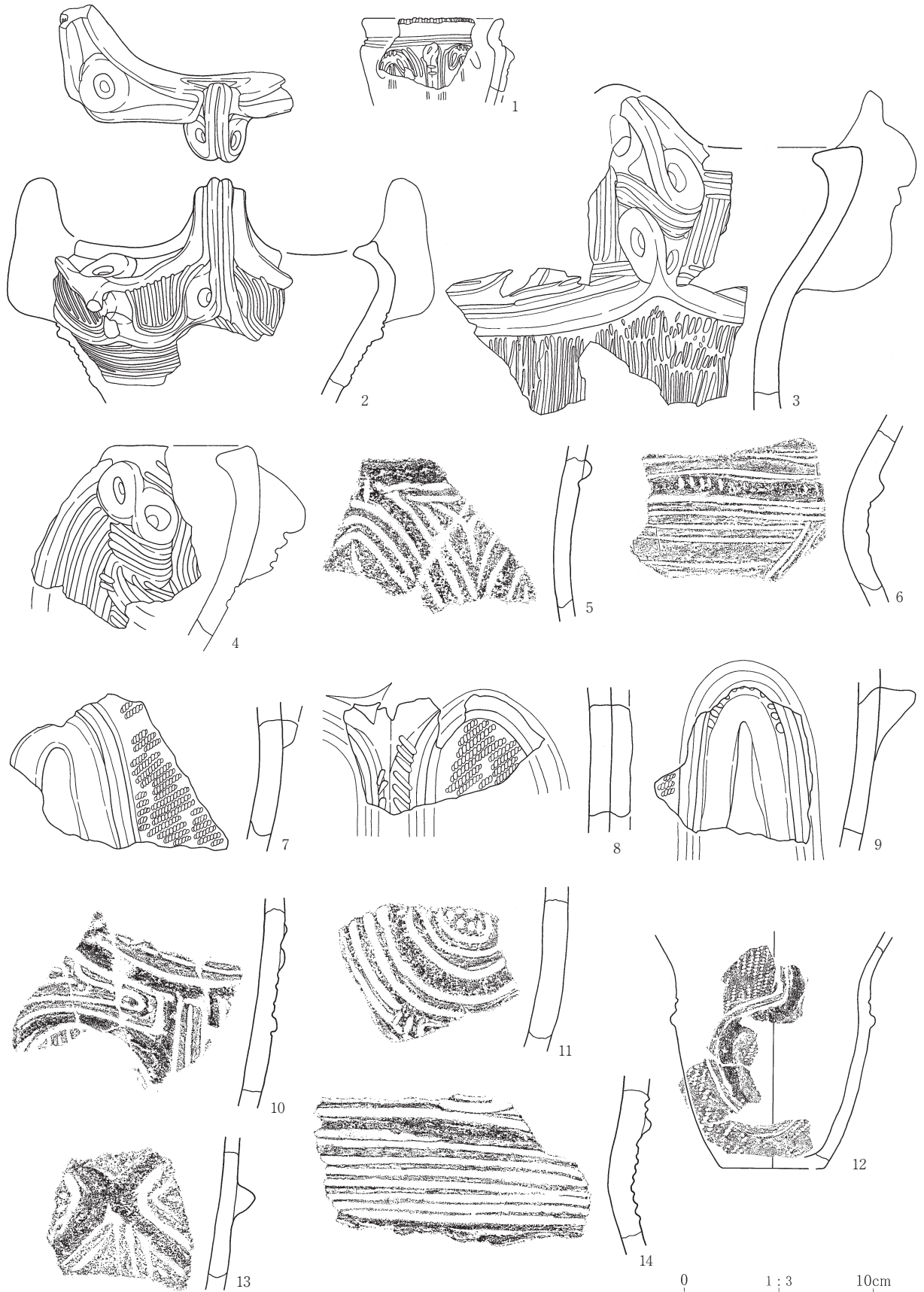


第59図 18区出土土器（2）



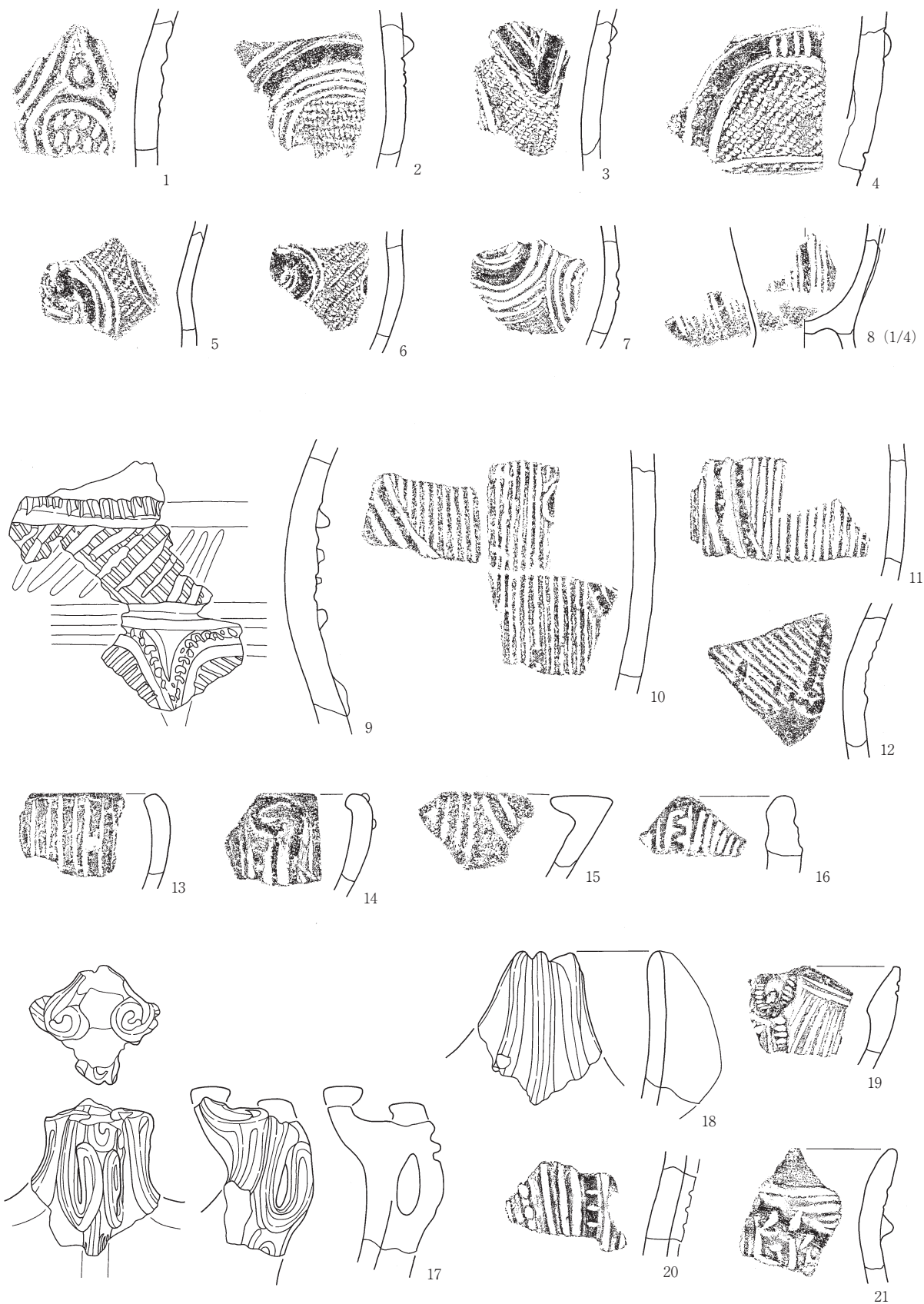
第60图 18区出土土器(3)

0 1:3 10cm

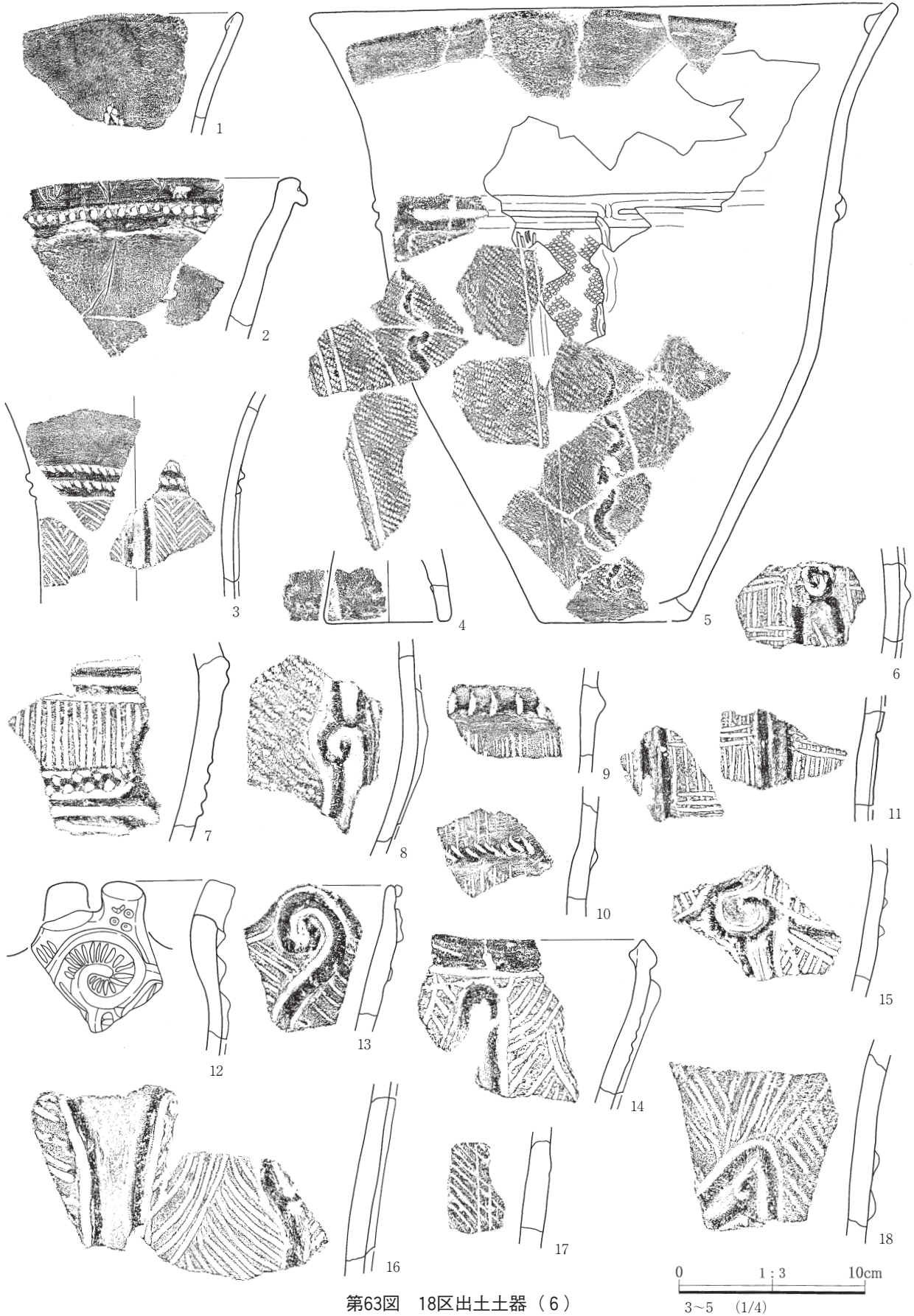


第61図 18区出土土器(4)

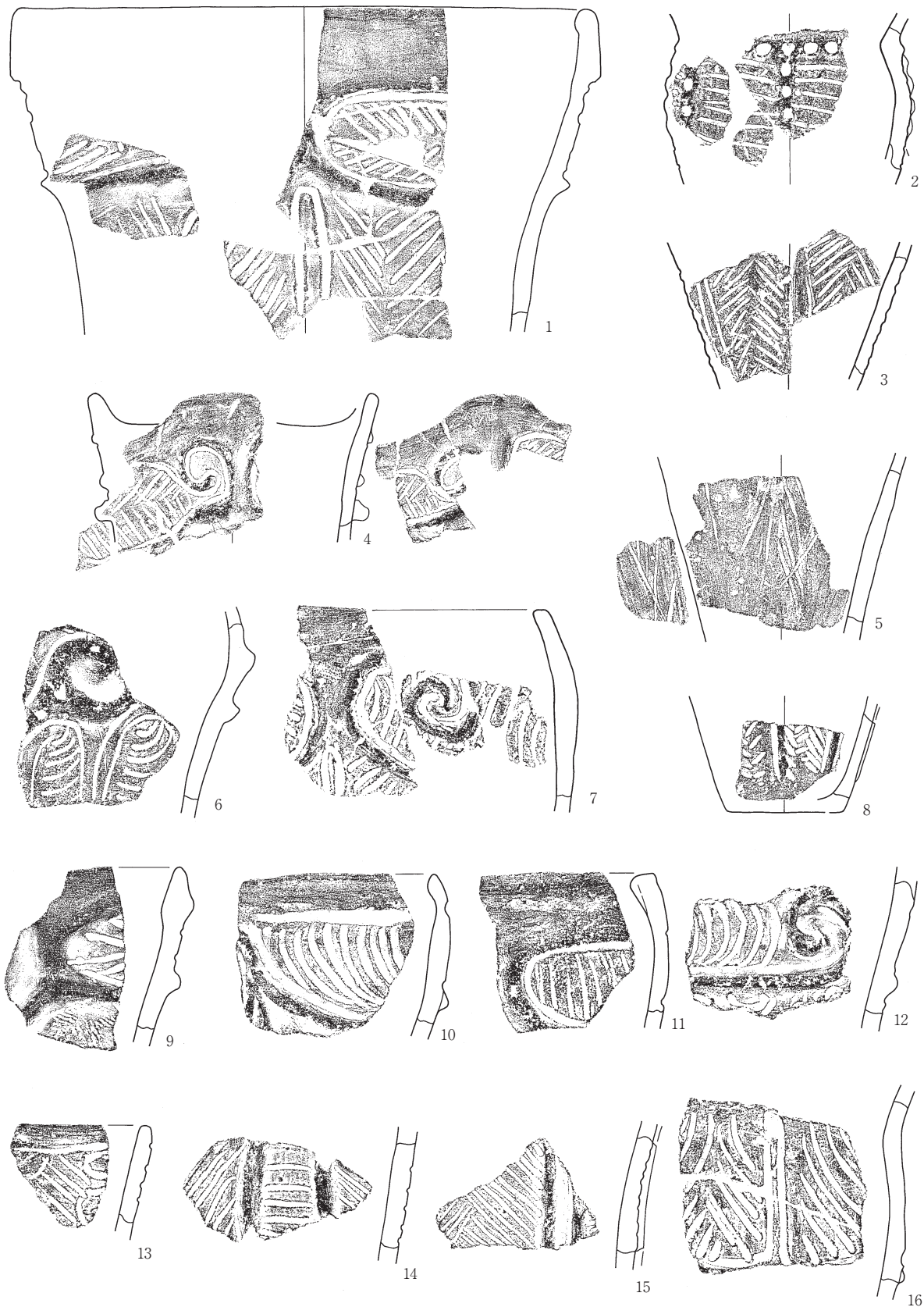
0 1:3 10cm  
1・2・12 (1/4)



第62図 18区出土土器 (5)

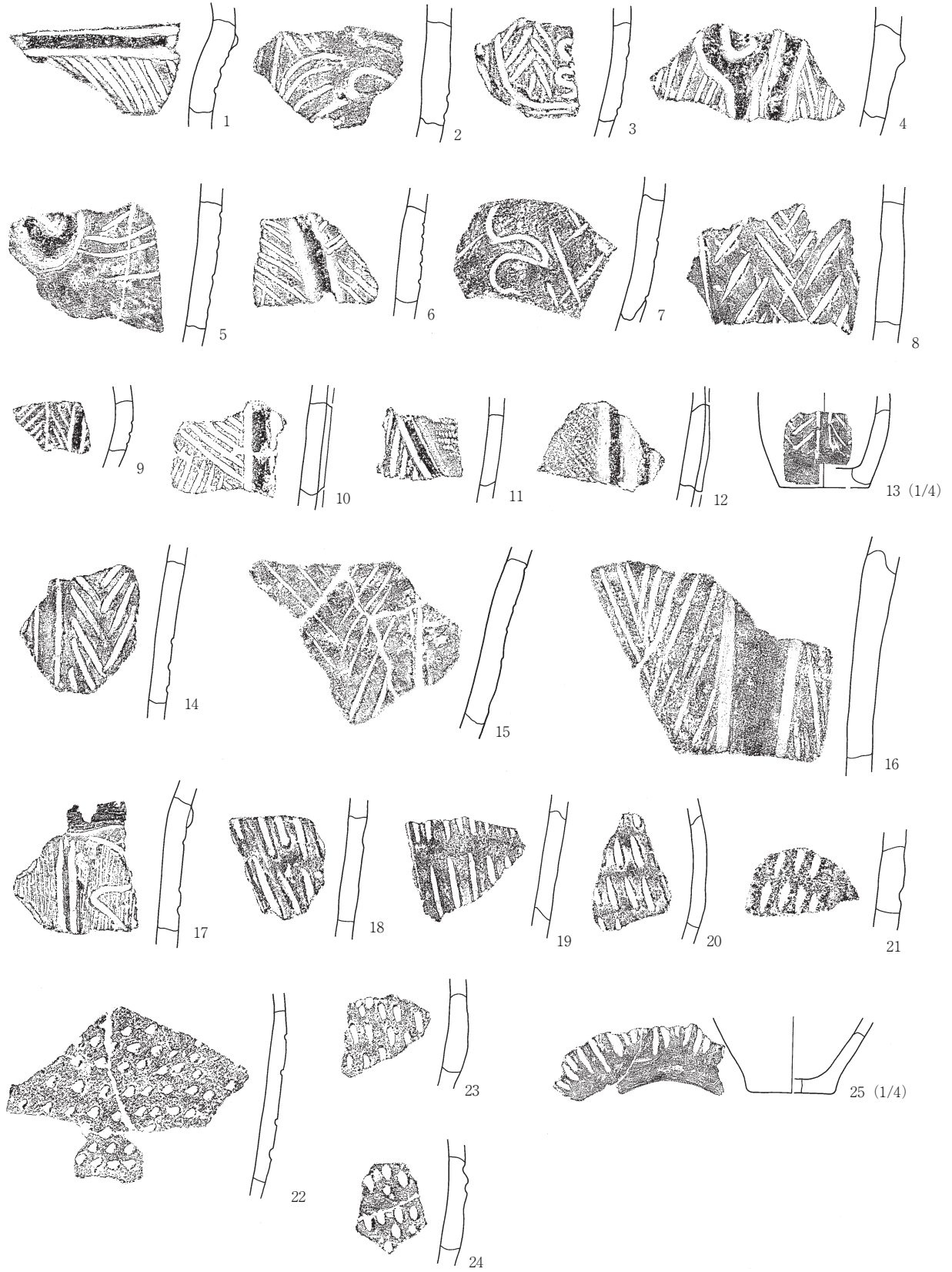


第63図 18区出土土器(6)



第64図 18区出土土器 (7)

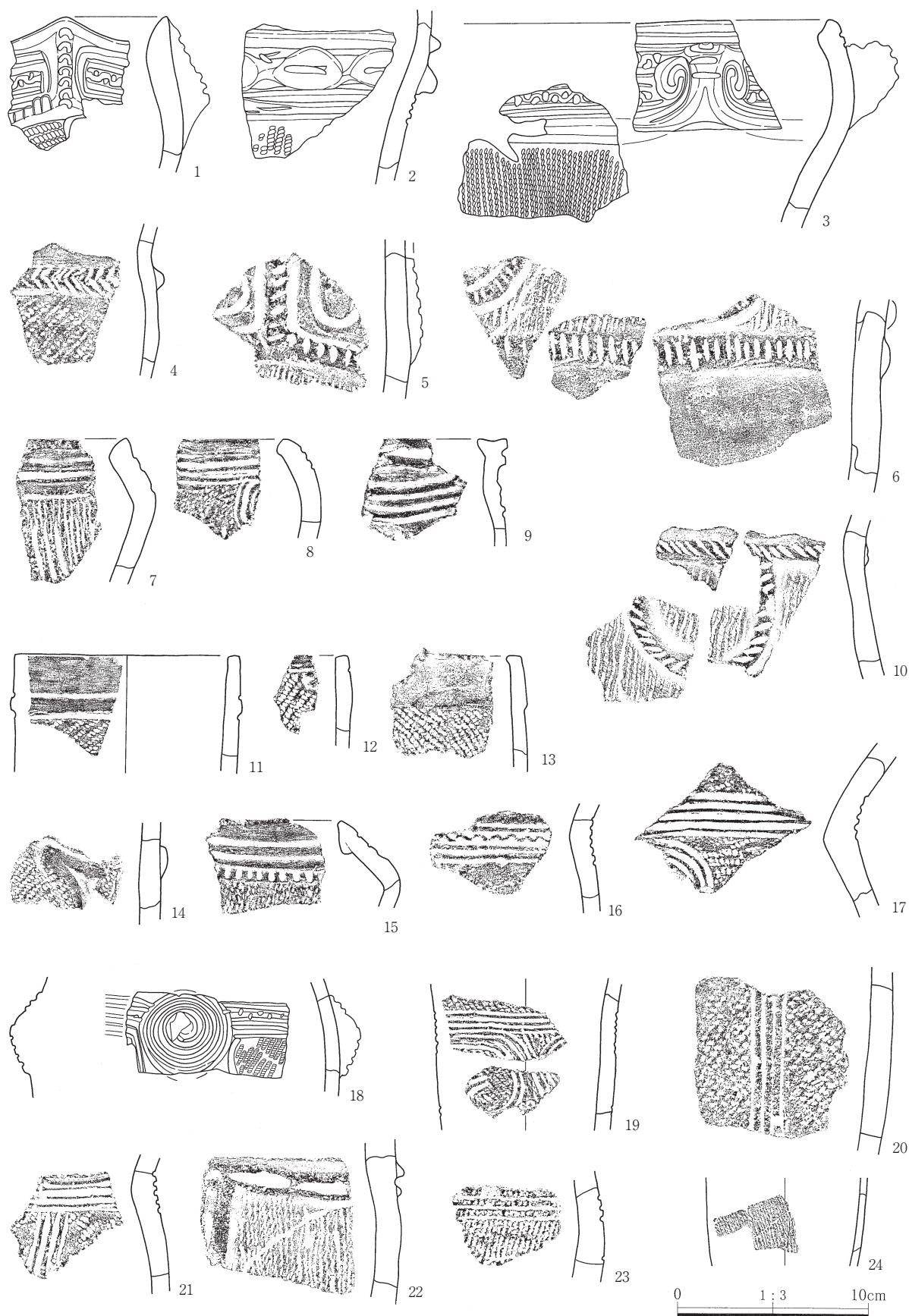
0 1:3 10cm  
1~5・8 (1/4)



0 1:3 10cm

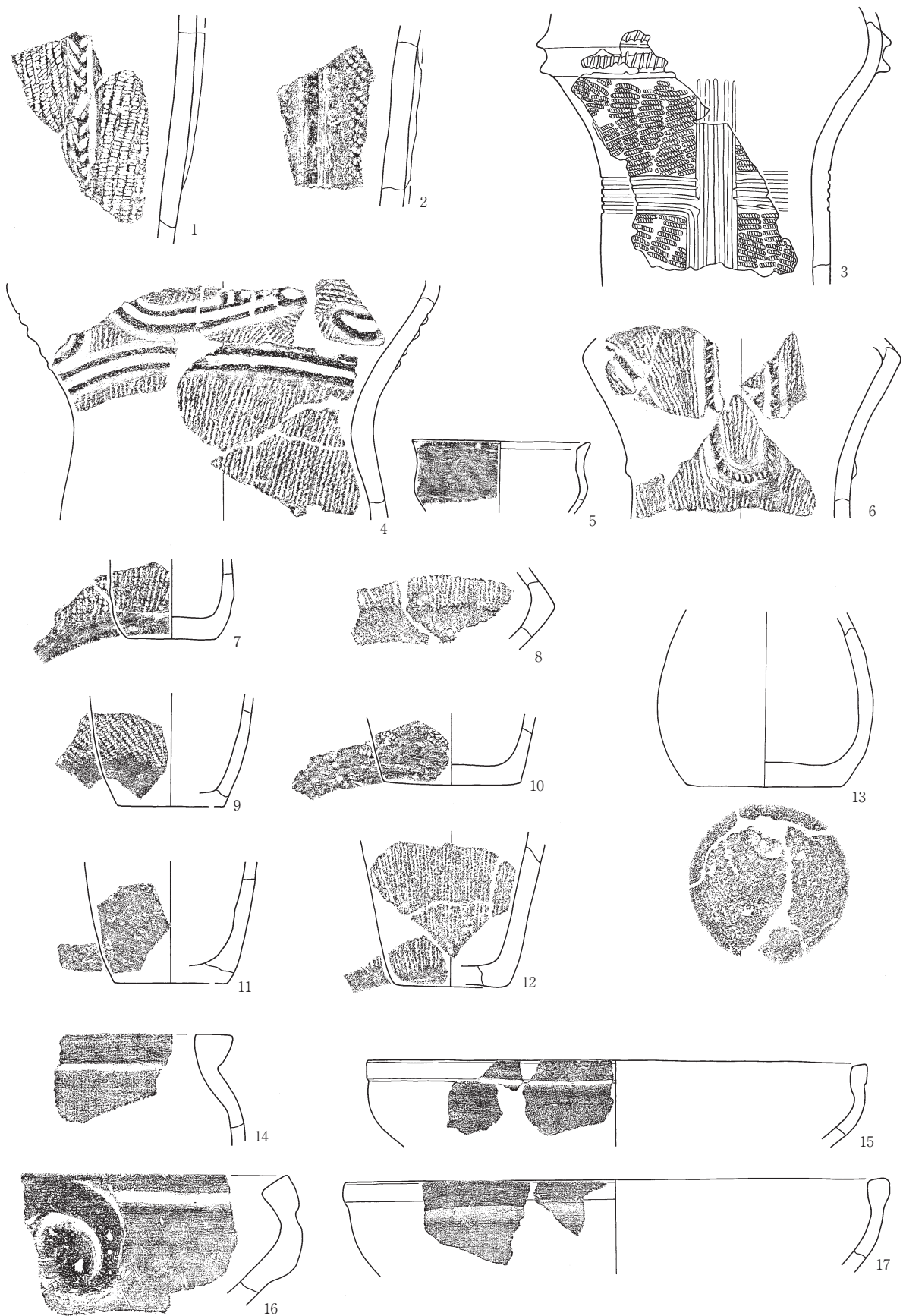
第65図 18区出土土器(8)





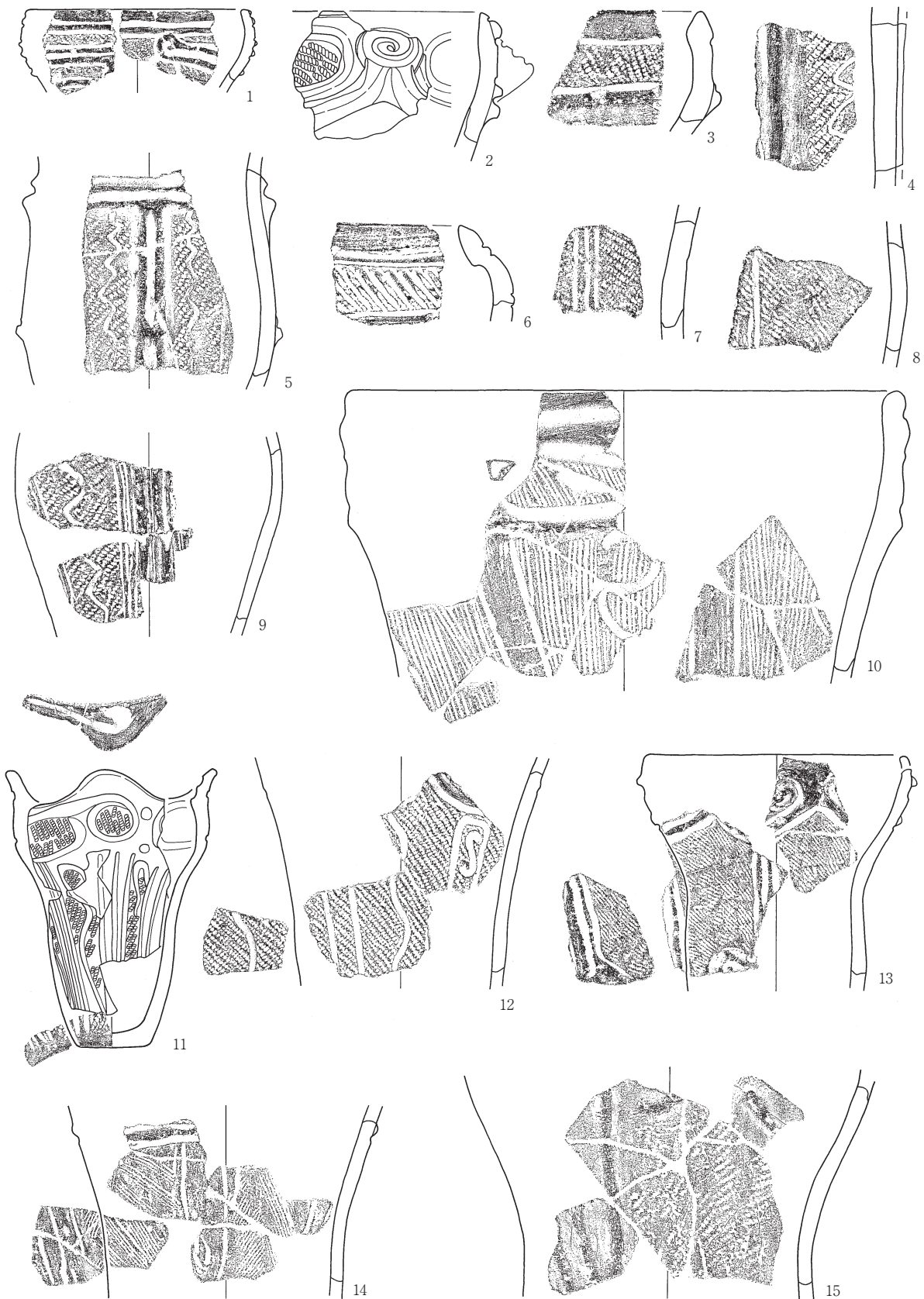
第66图 18区出土土器 (9)

11 · 18 · 24 (1/4)



第67図 18区出土土器 (10)

0 1:4 10cm  
1・2・8・14・16 (1/3)

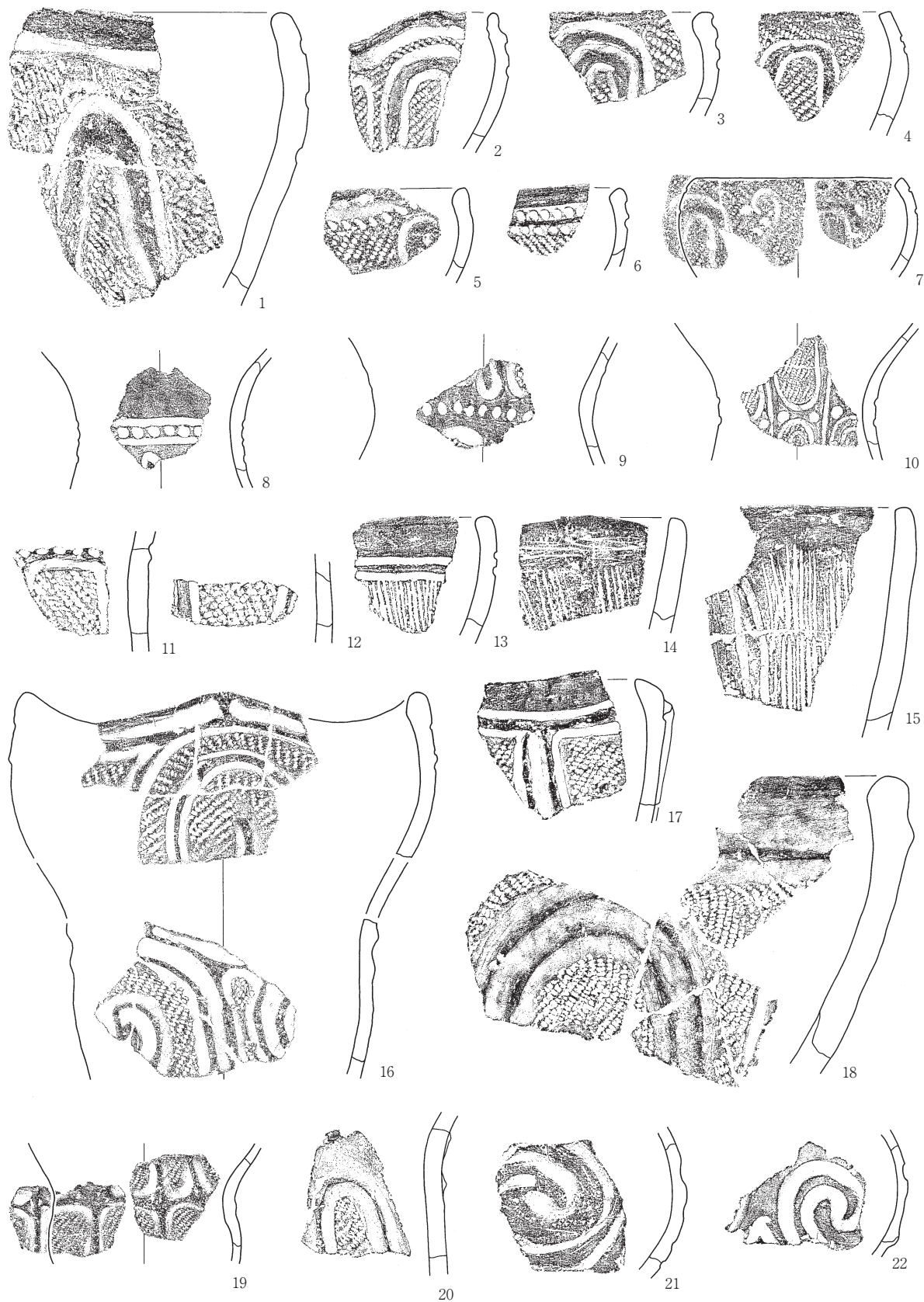


第68図 18区出土土器 (11)

0 1 : 4 10cm  
2~4・6~8 (1/3)

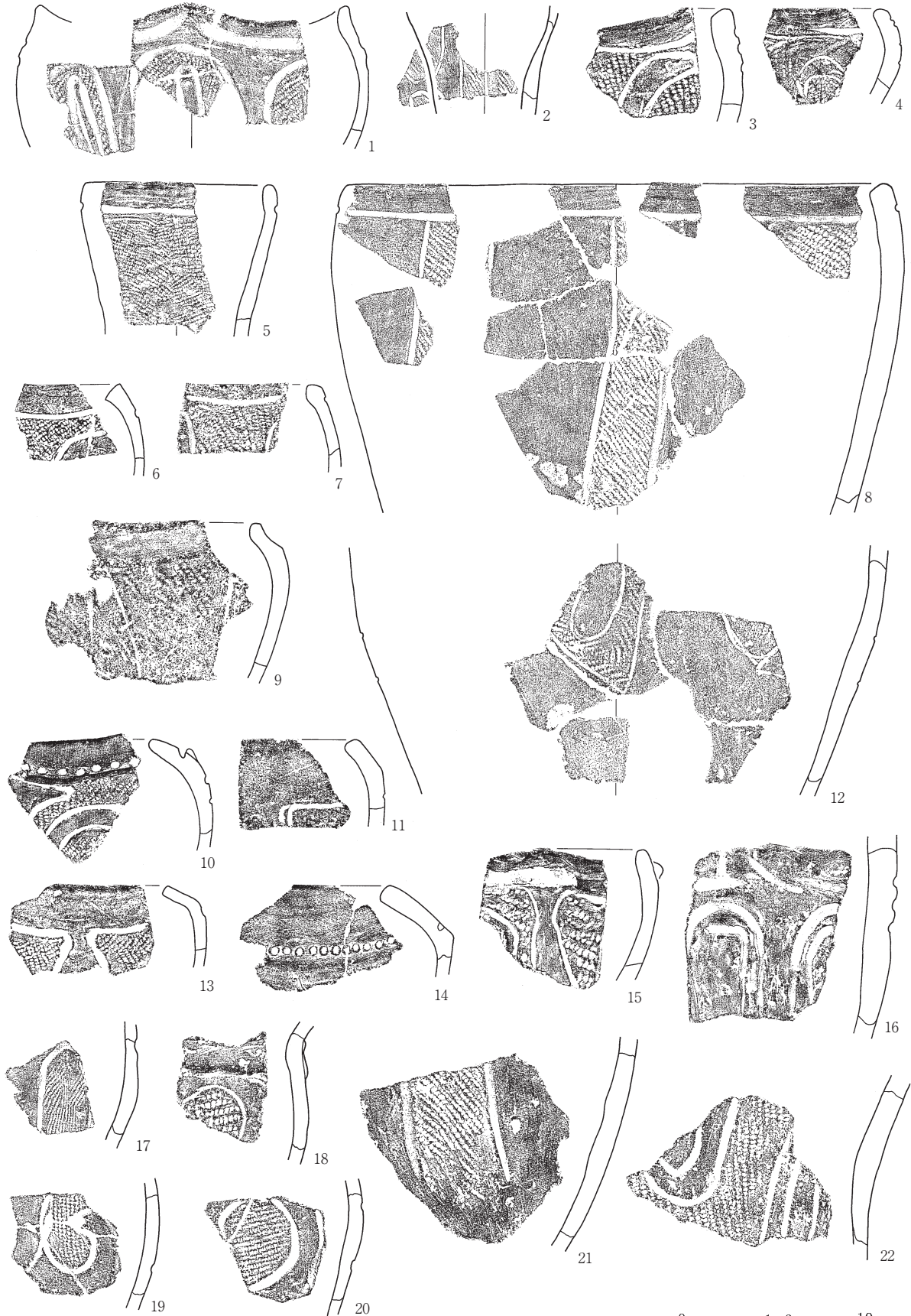


第69図 18区出土土器 (12)

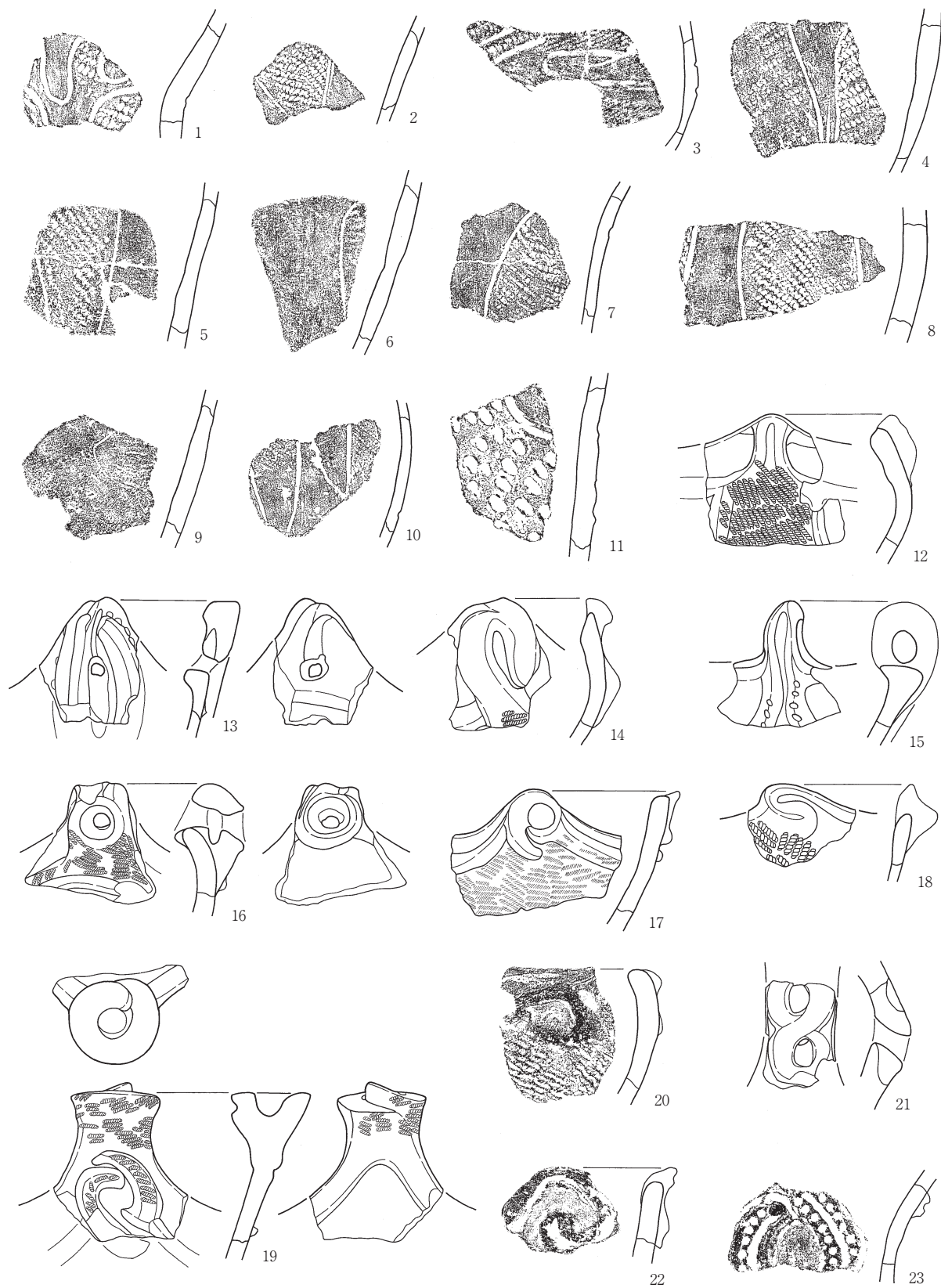


第70図 18区出土土器 (13)

0 1:3 10cm  
7~10・16・19 (1/4)



第71図 18区出土土器 (14)



0 1:3 10cm

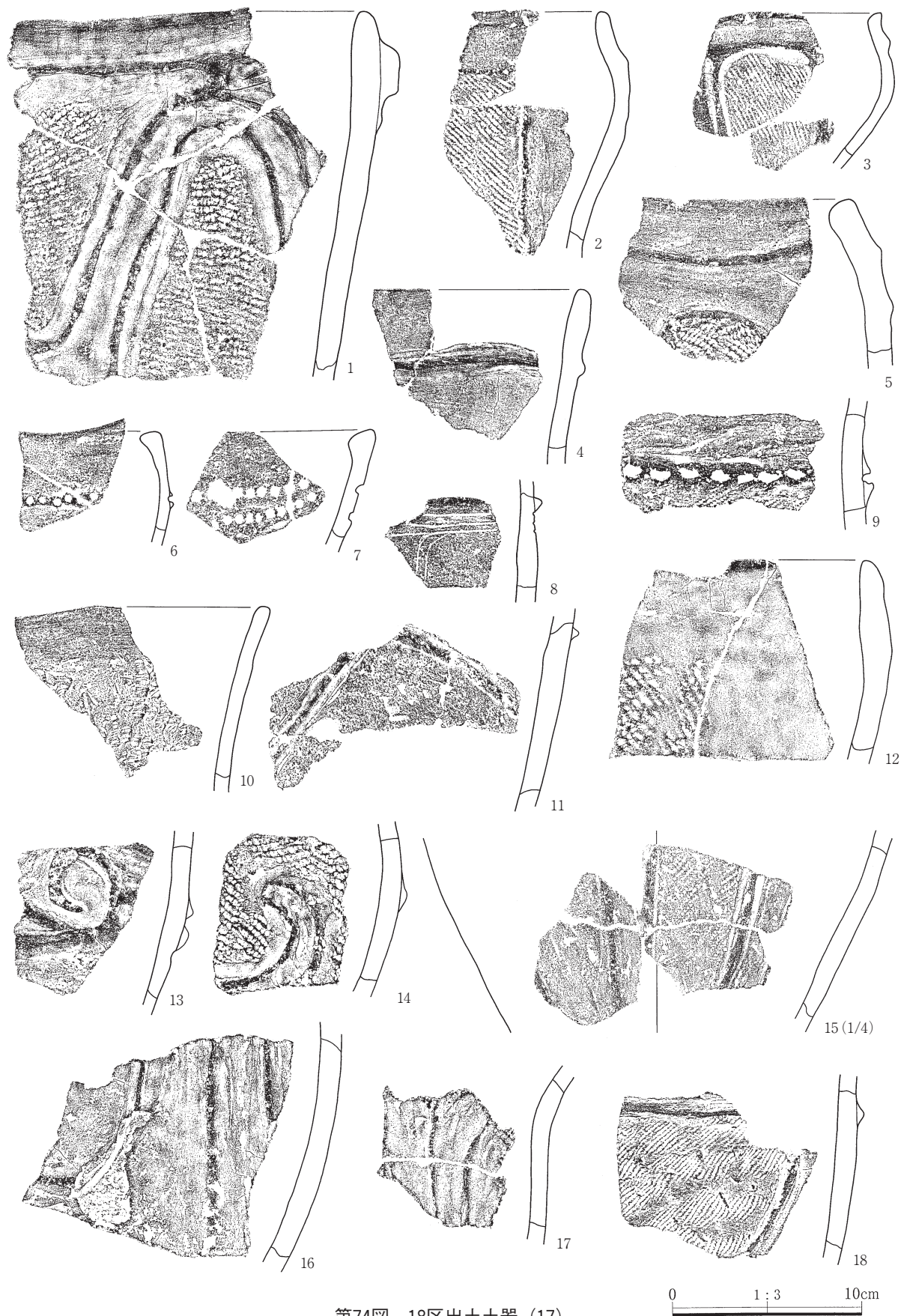
第72図 18区出土土器 (15)



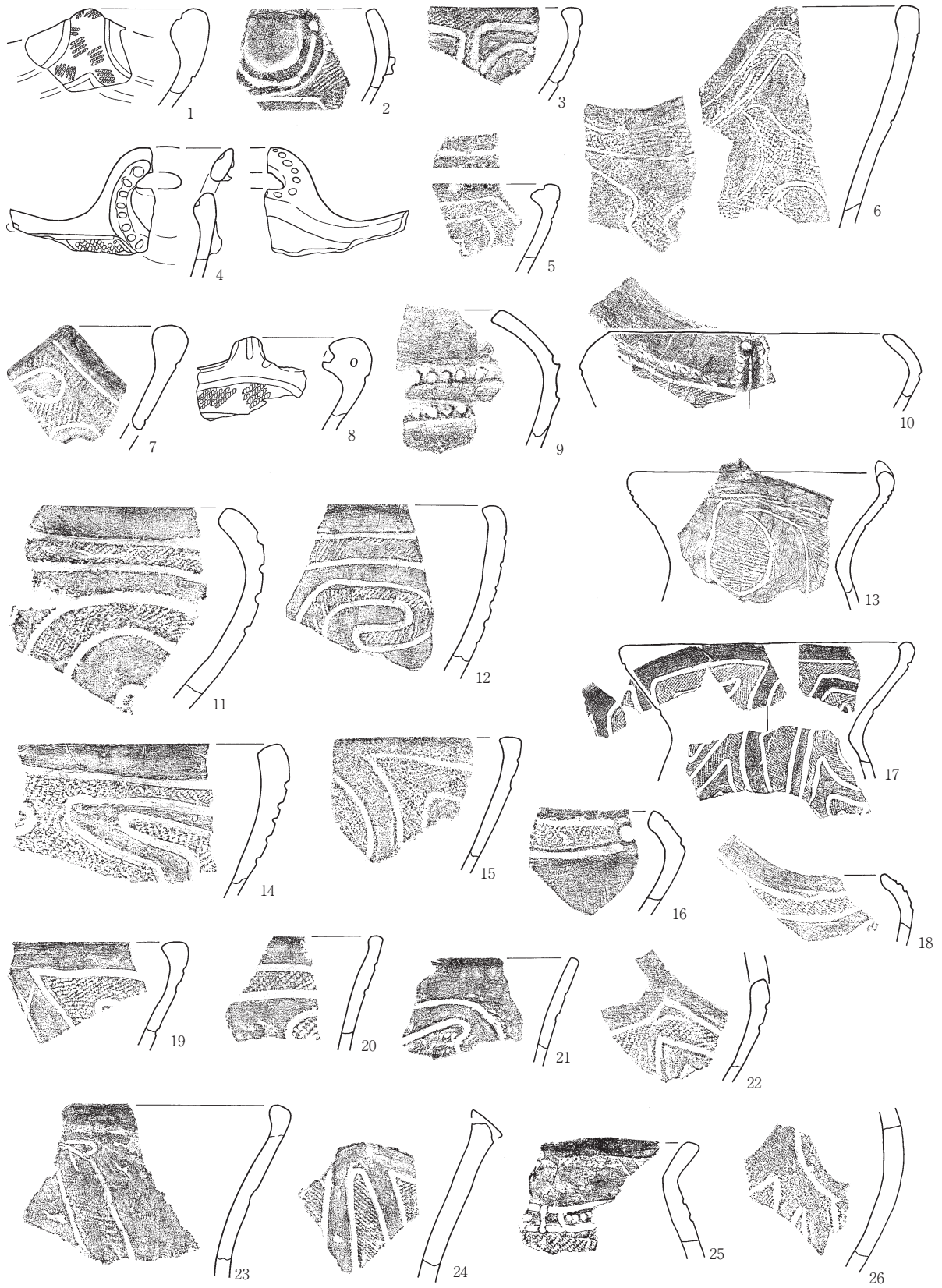
第73図 18区出土土器 (16)

0 1:4 10cm  
5・9・10・12 (1/3)





第74図 18区出土土器 (17)



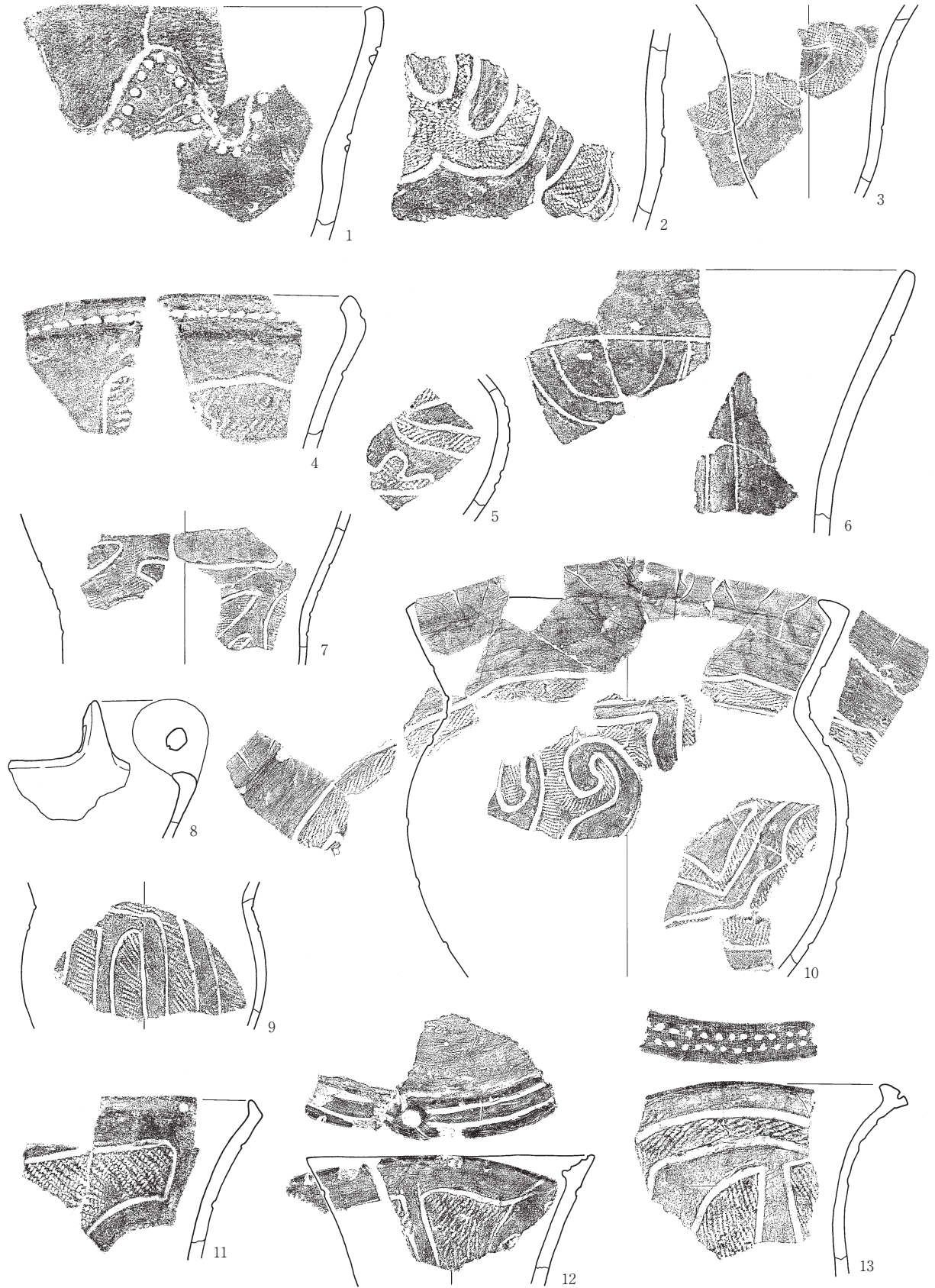
第75図 18区出土土器 (18)

0 1:3 10cm  
10・13・17 (1/4)



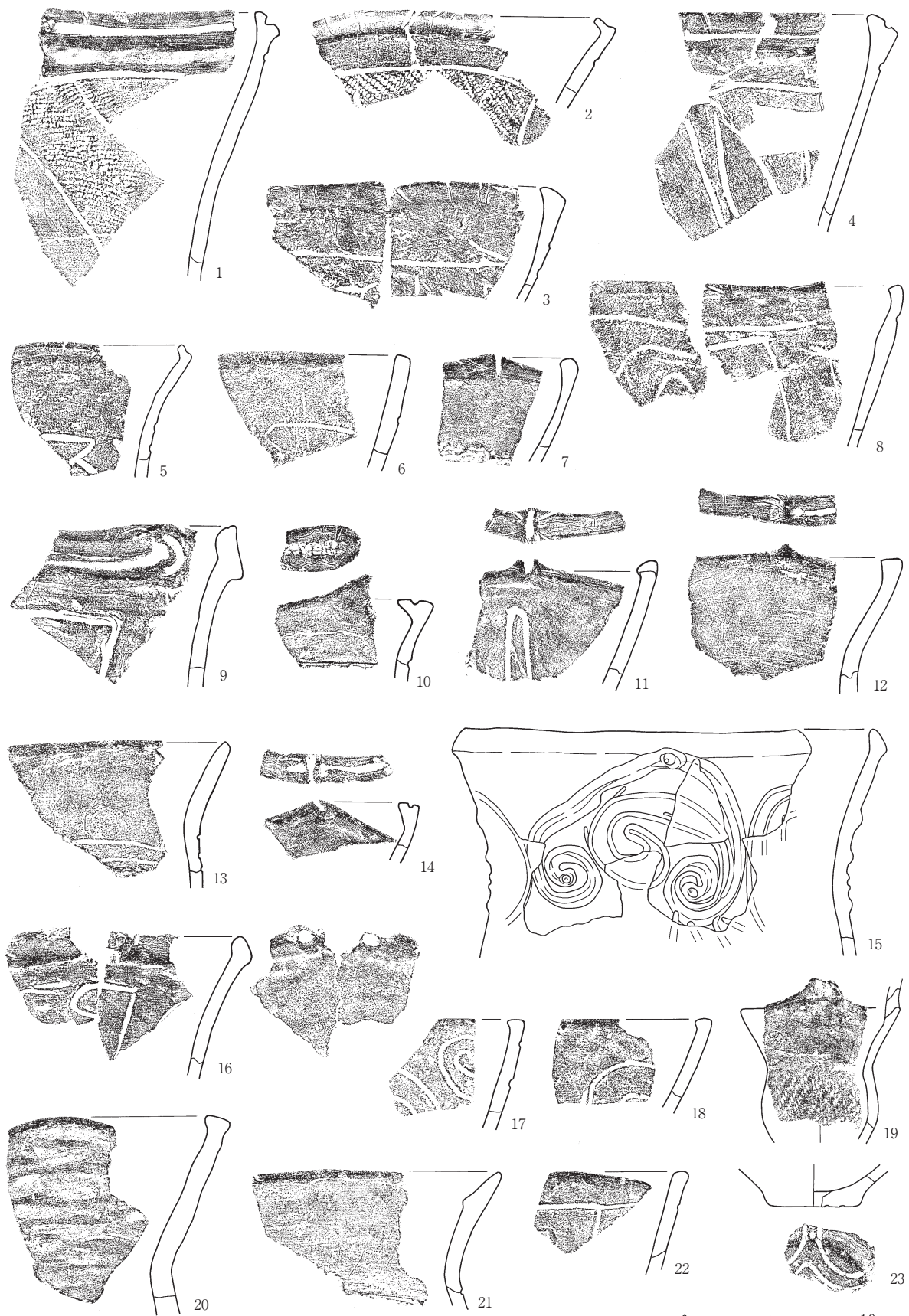
第76図 18区出土土器 (19)

0 1:3 10cm



第77図 18区出土土器 (20)

0 1 3 10cm  
3・7・9・10・12 (1/4)



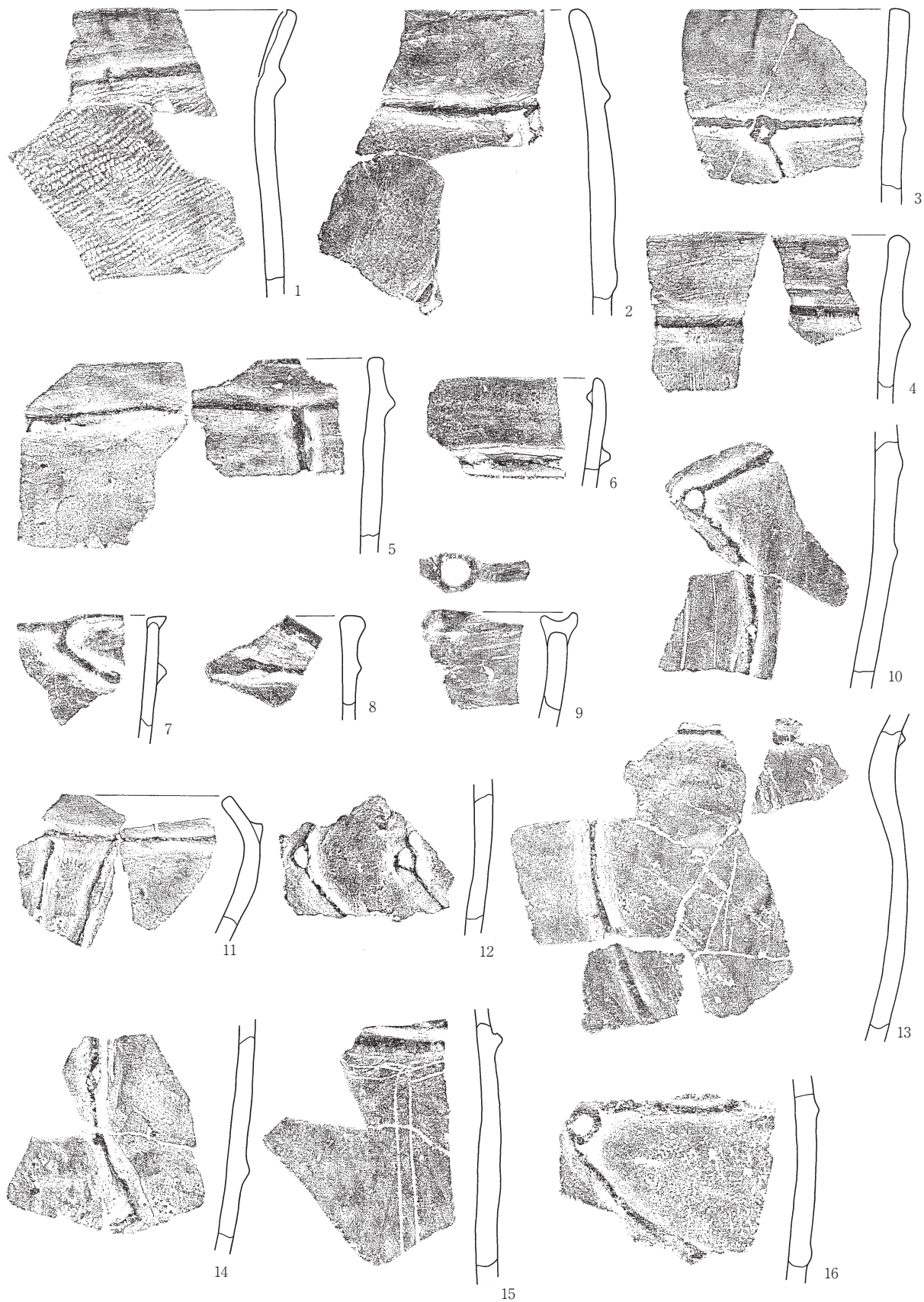
第78図 18区出土土器 (21)

0 1 : 3 10cm  
15 · 19 · 23 (1/4)

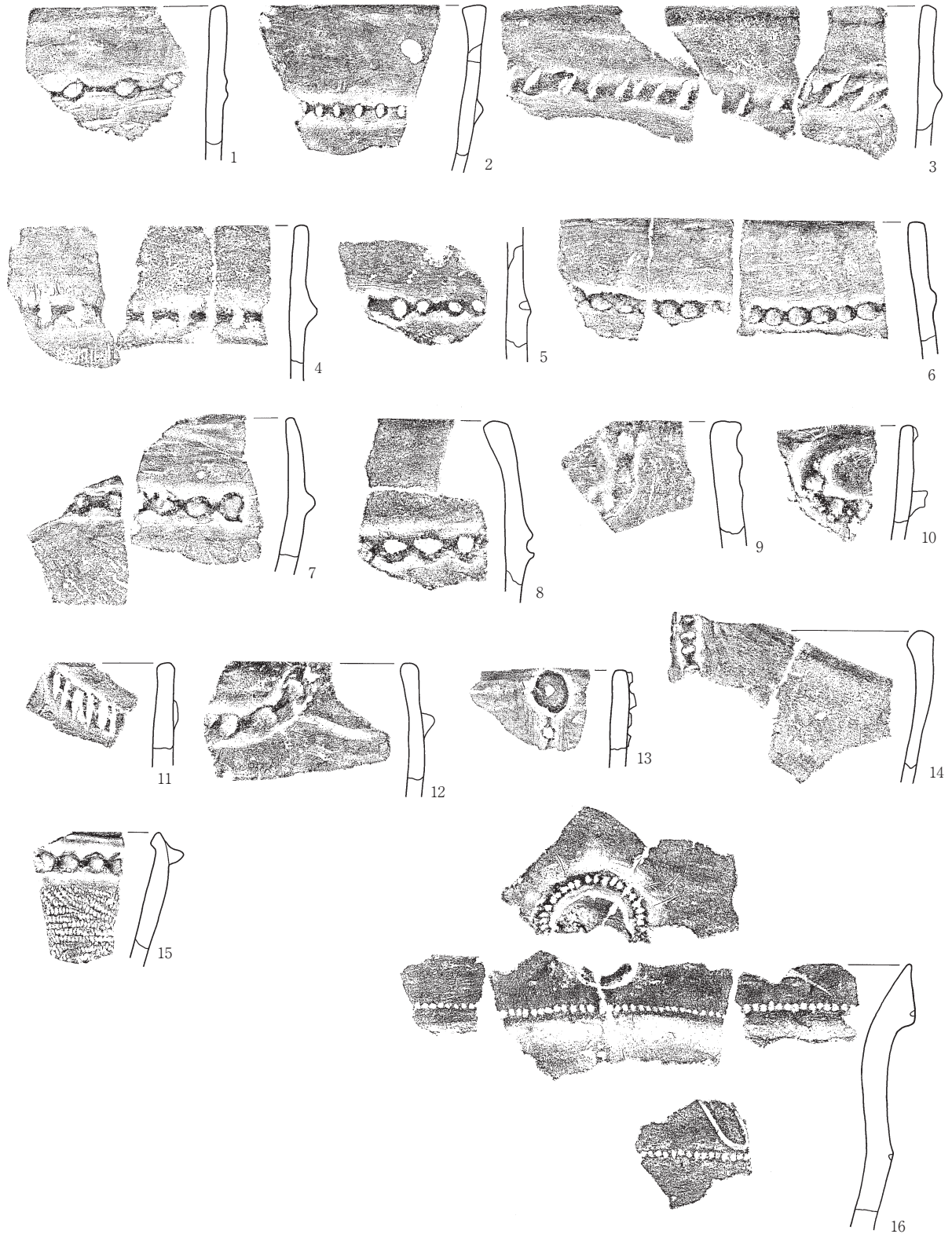


0 1 : 3 10cm  
14 · 17 · 21 (1/4)

第79図 18区出土土器 (22)



第80図 18区出土土器 (23)



第81図 18区出土土器 (24)

0 1:3 10cm





第82図 18区出土土器 (25)

0 1 : 4 10cm



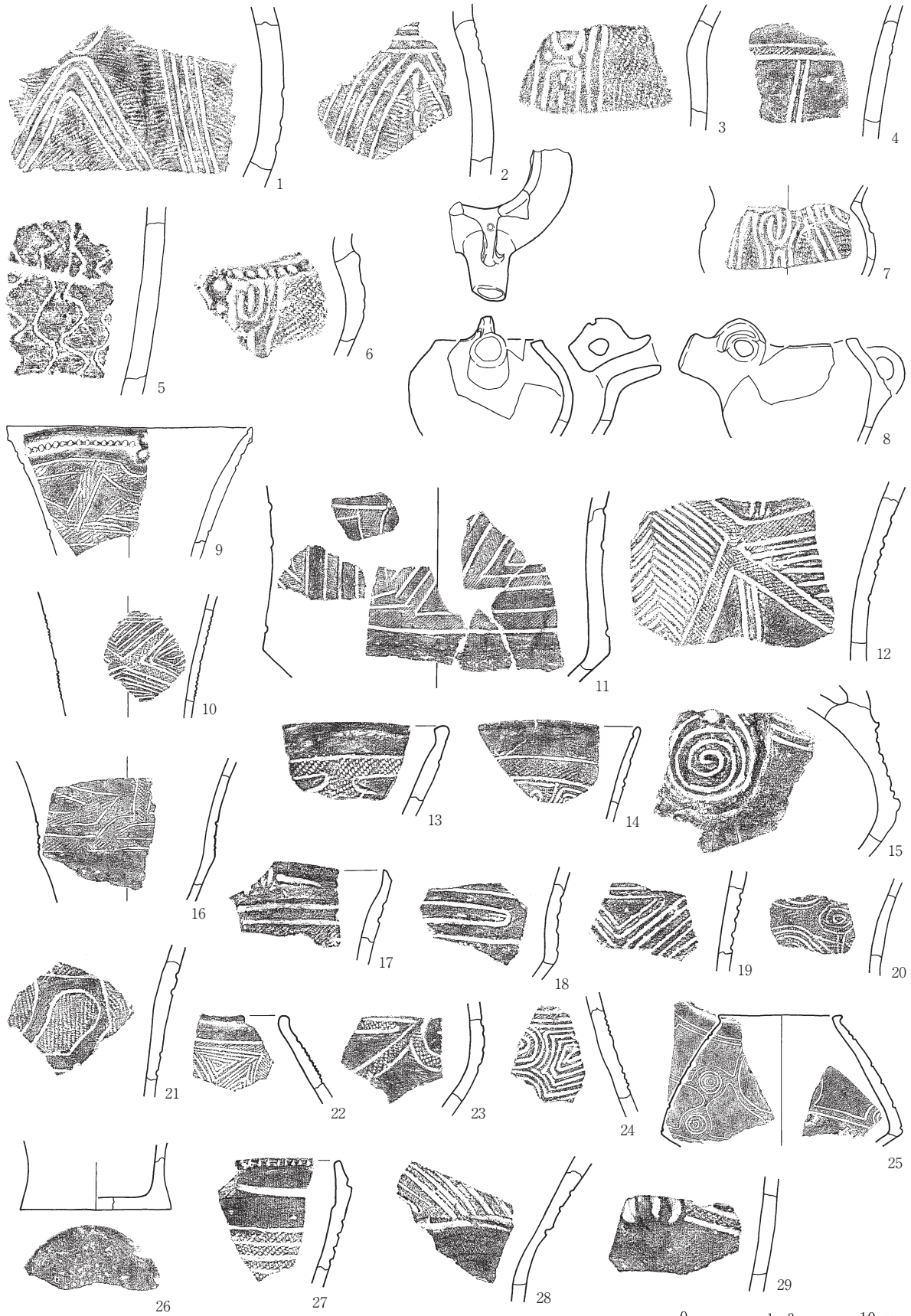
第83図 18区出土土器 (26)

0 1:3 10cm



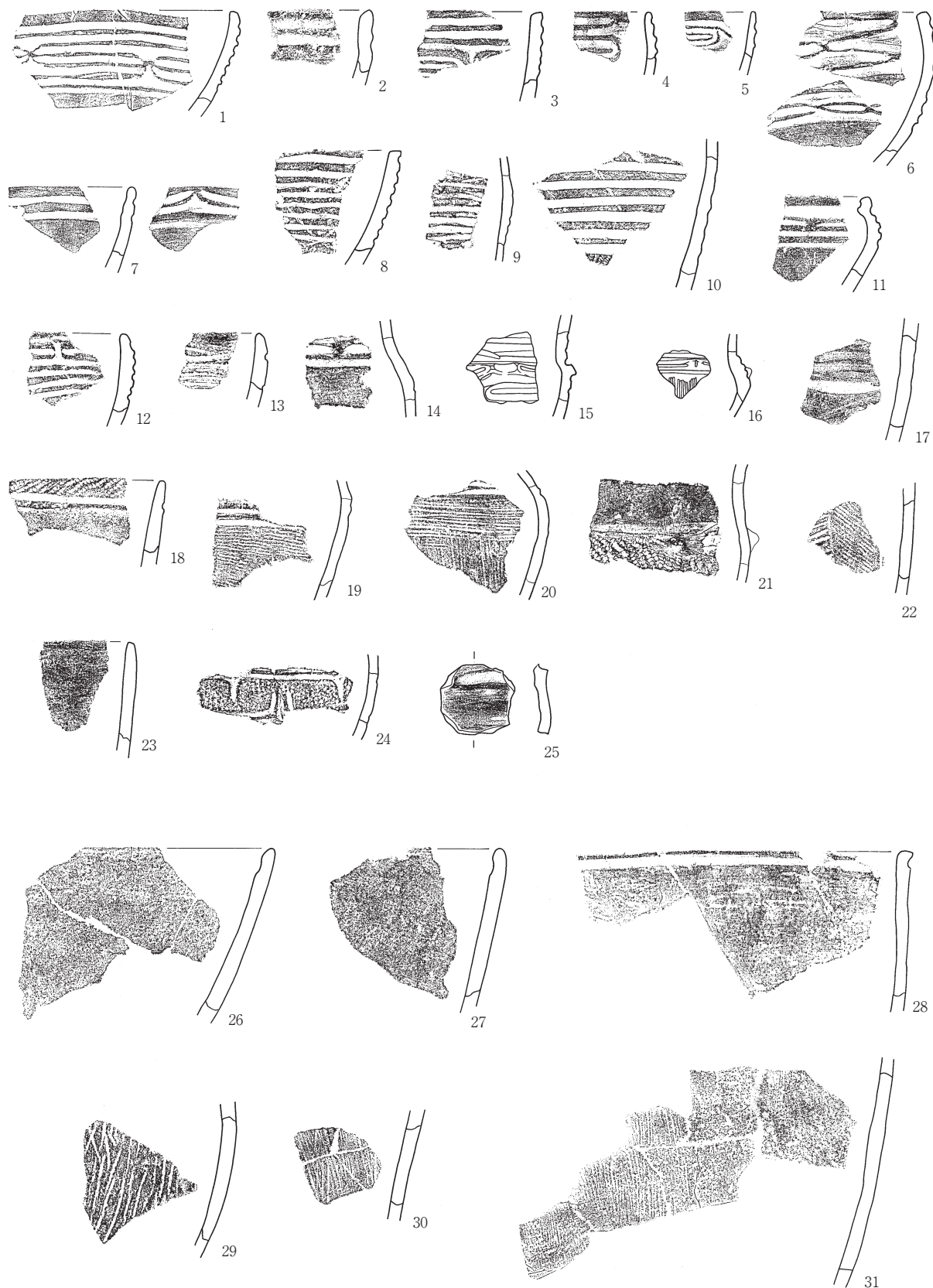
第84図 18区出土土器 (27)

0 1:3 10cm  
14・17・18・21 (1/4)



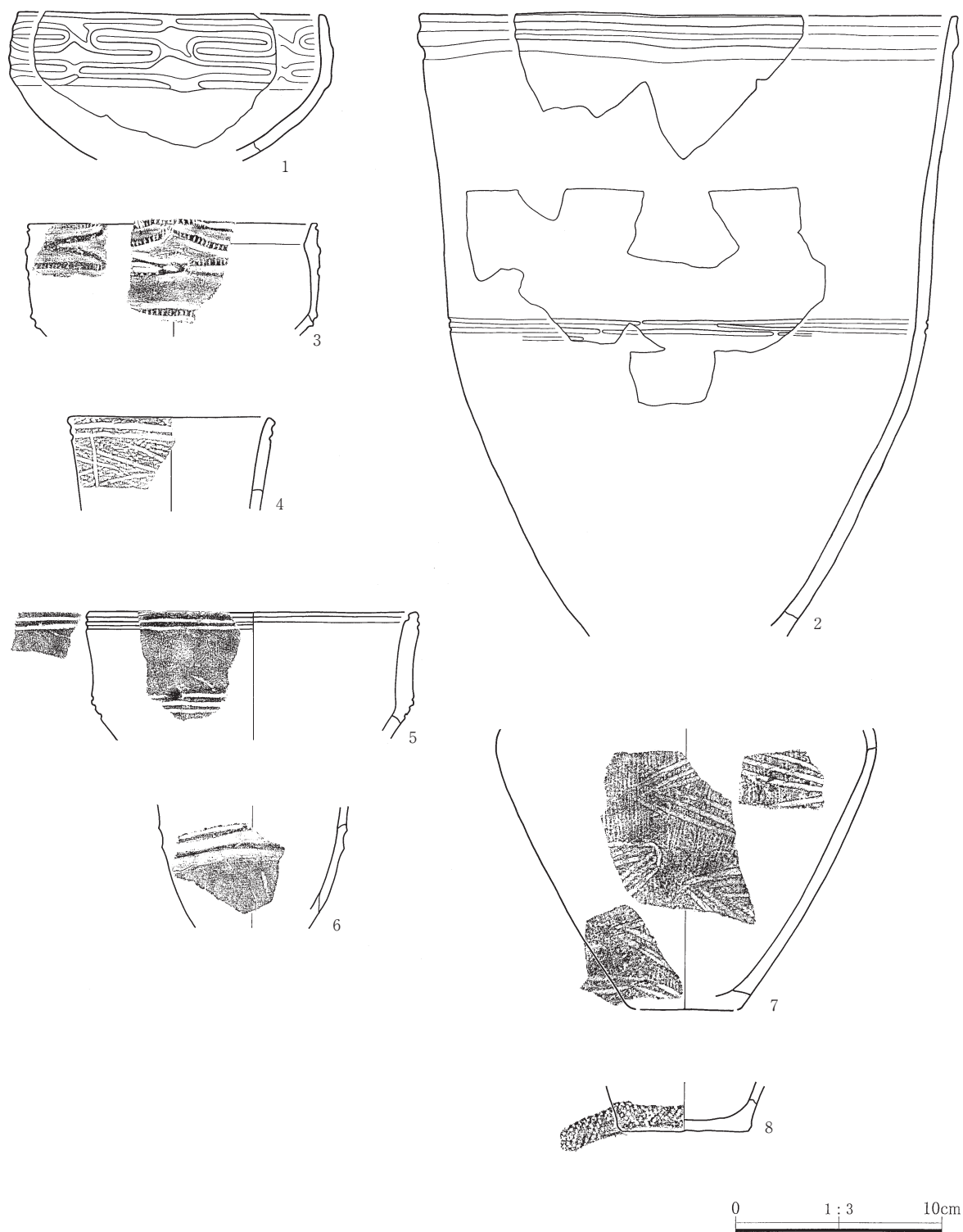
第85図 18区出土土器 (28)

0 1:3 10cm  
7~11・16・25・26 (1/4)

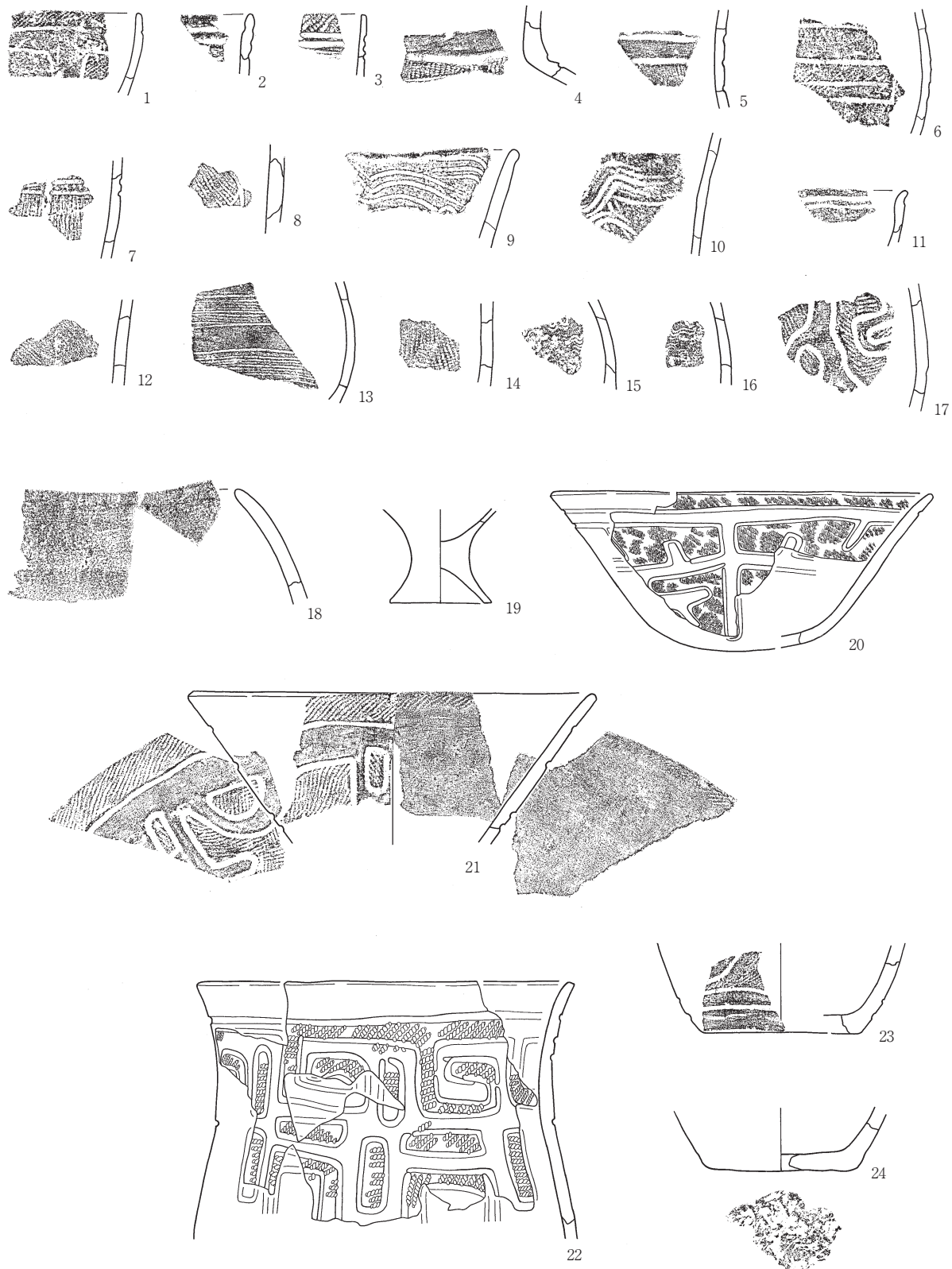


第86図 18区出土土器 (29)

0 1 : 3 10cm

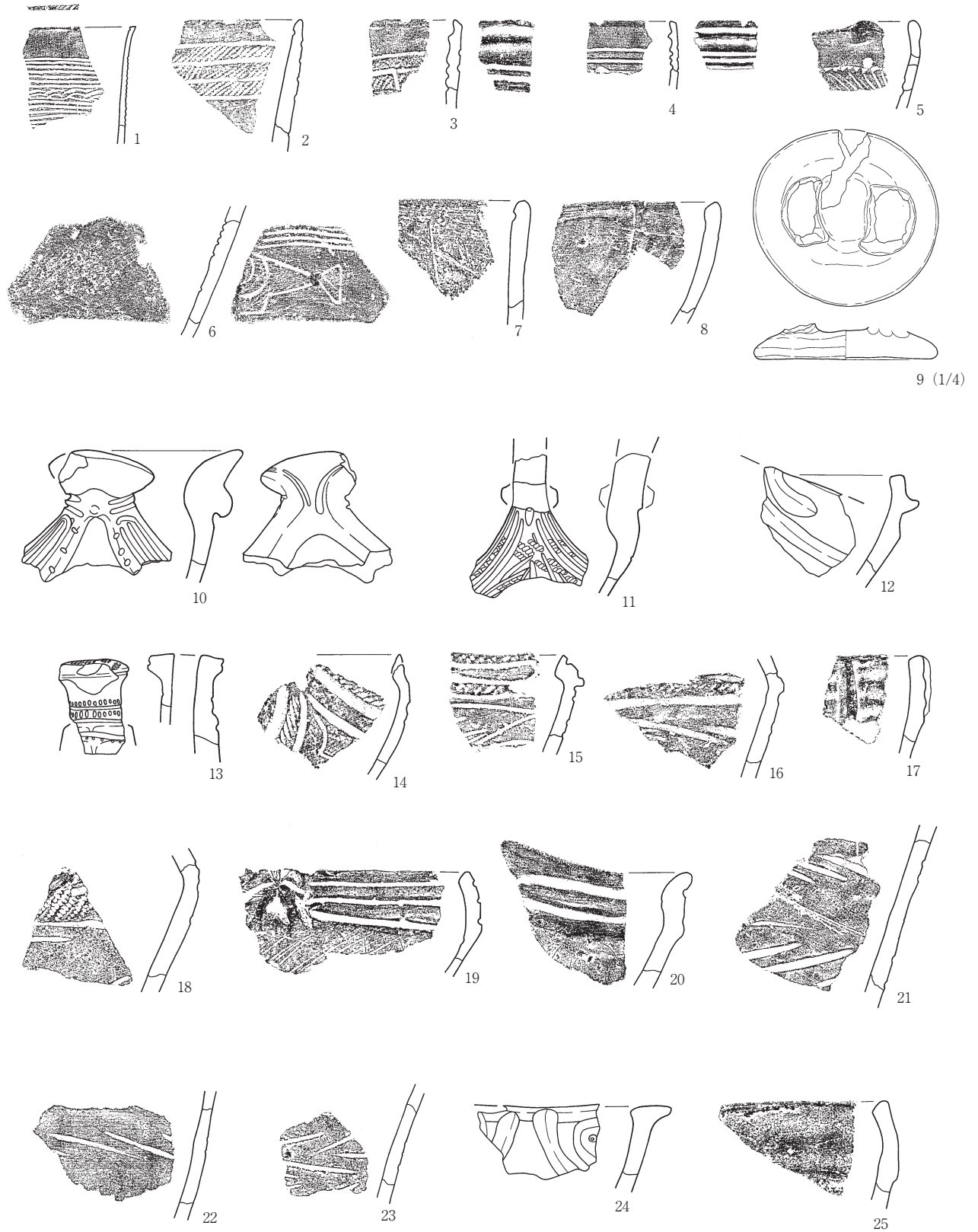


第87図 18区出土土器 (30)



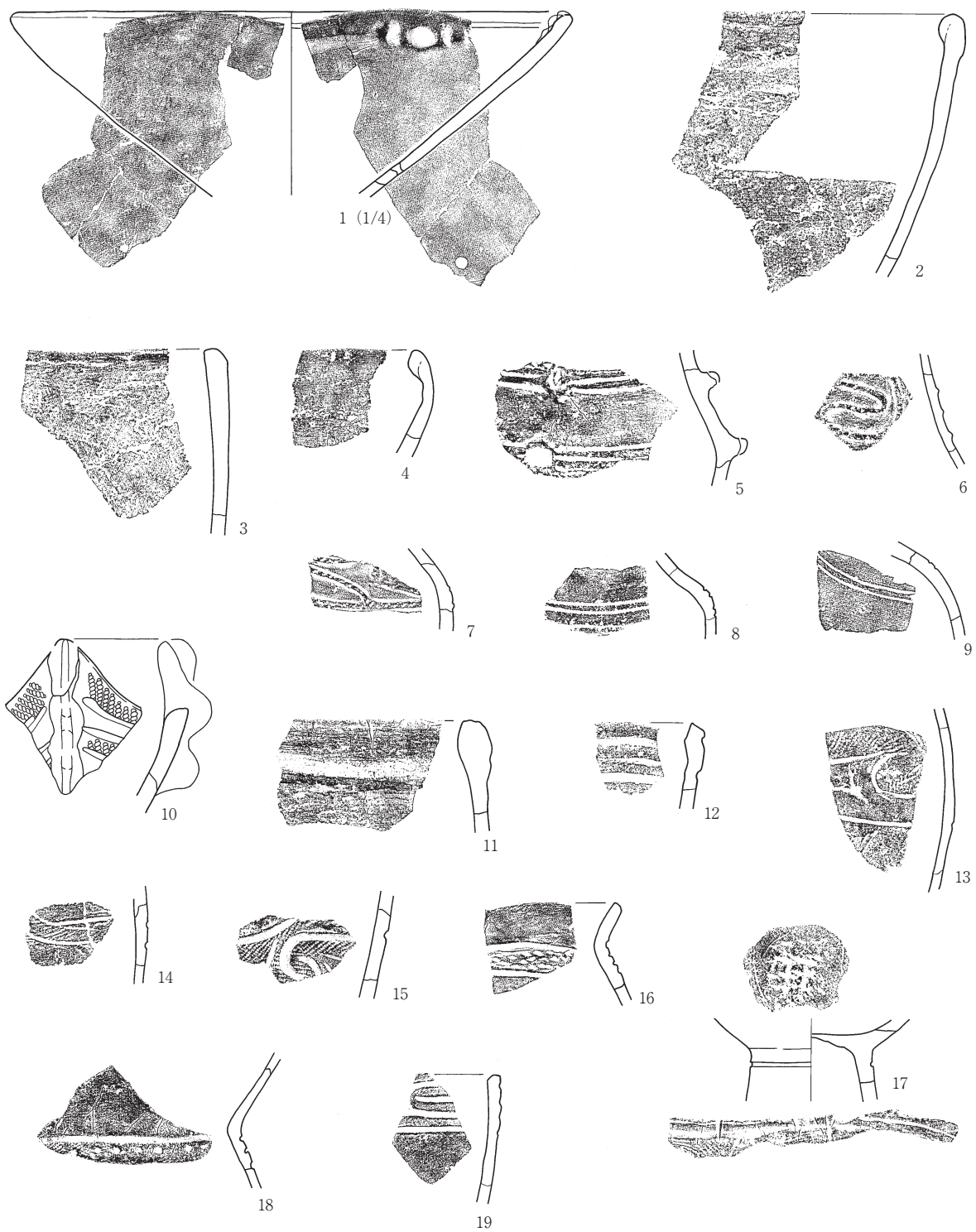
第88図 18区出土土器 (31)

0 1:3 10cm



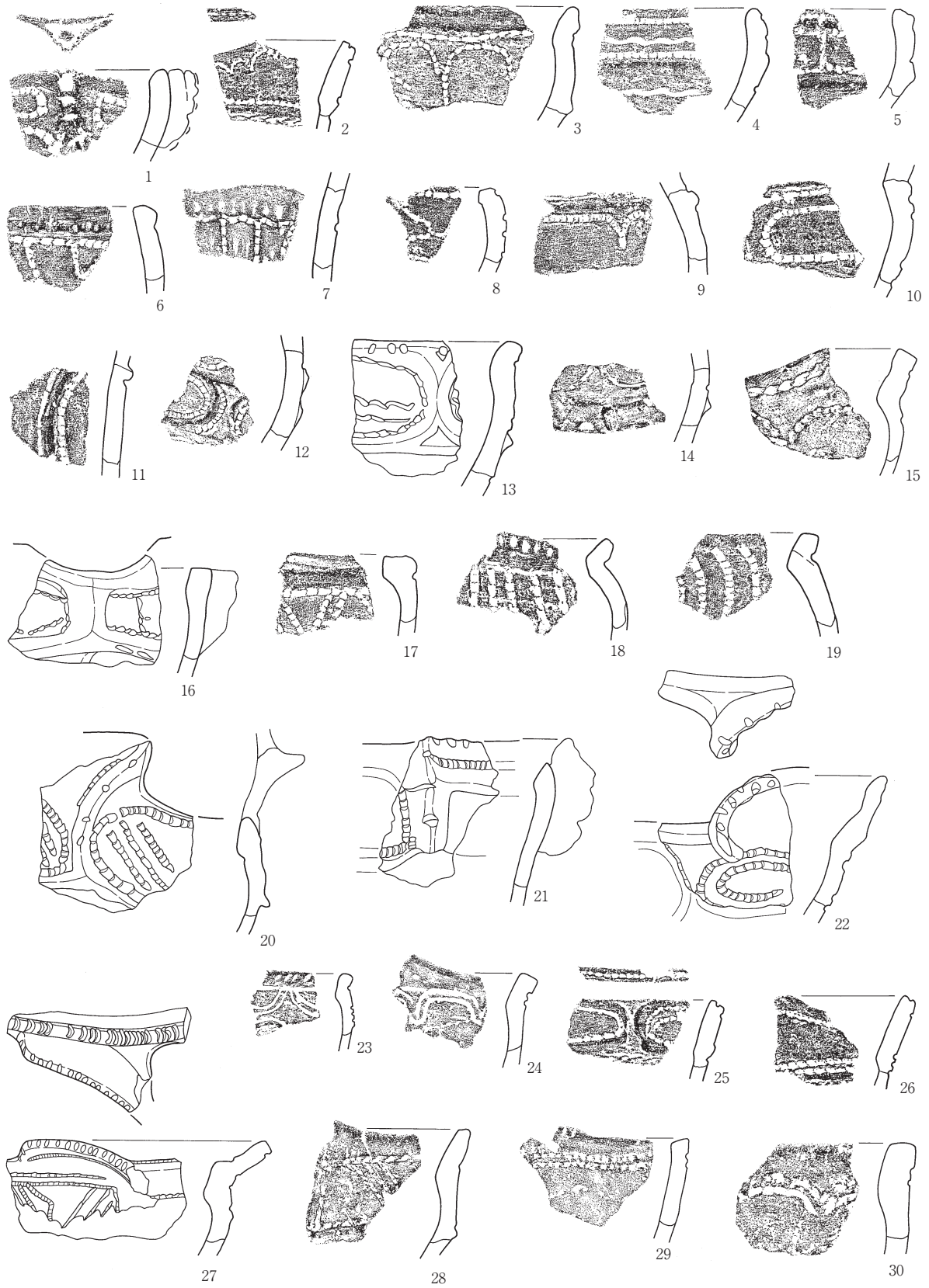
第89図 19区出土土器(1)



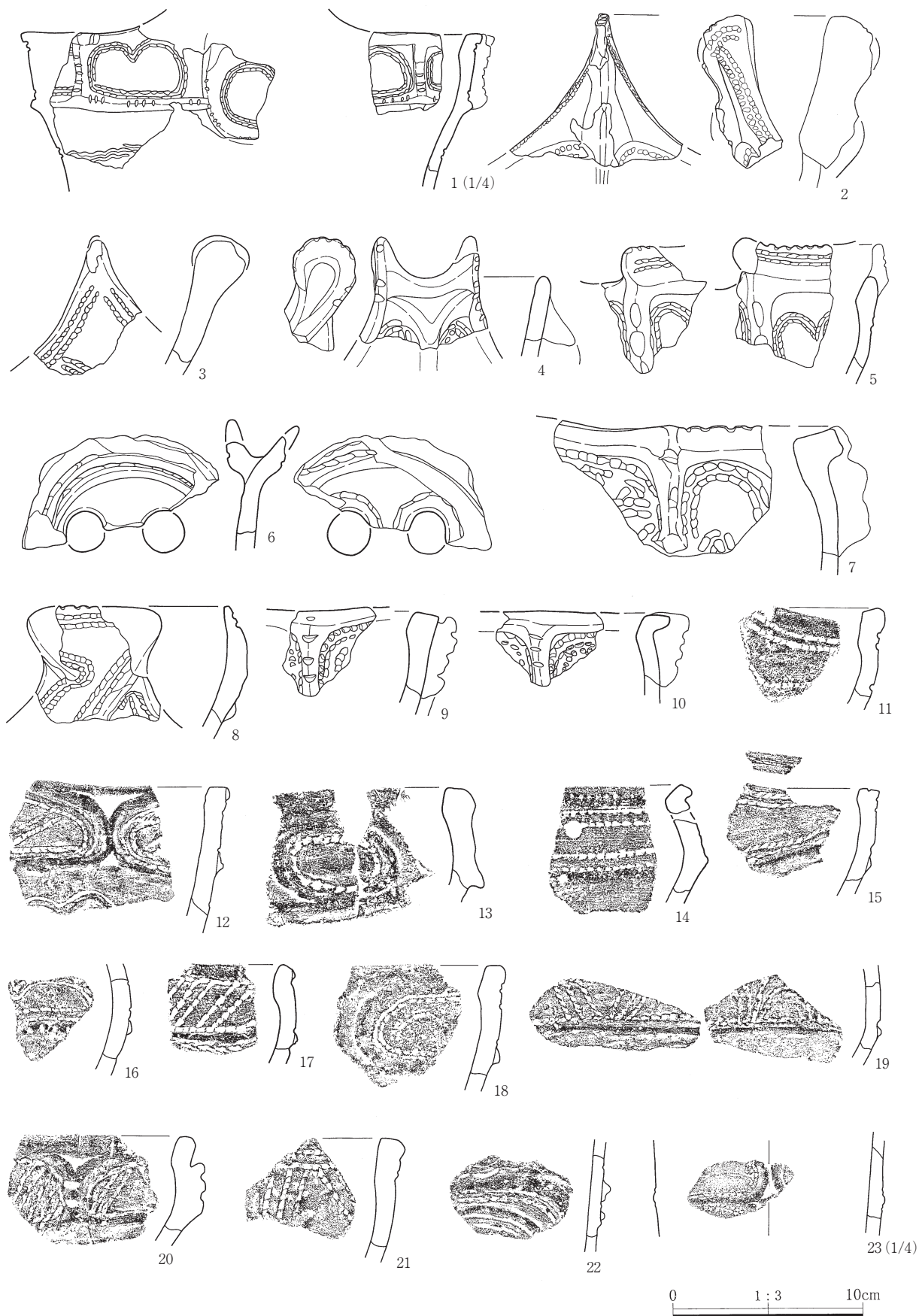


第90図 19区出土土器(2)

0 1:3 10cm



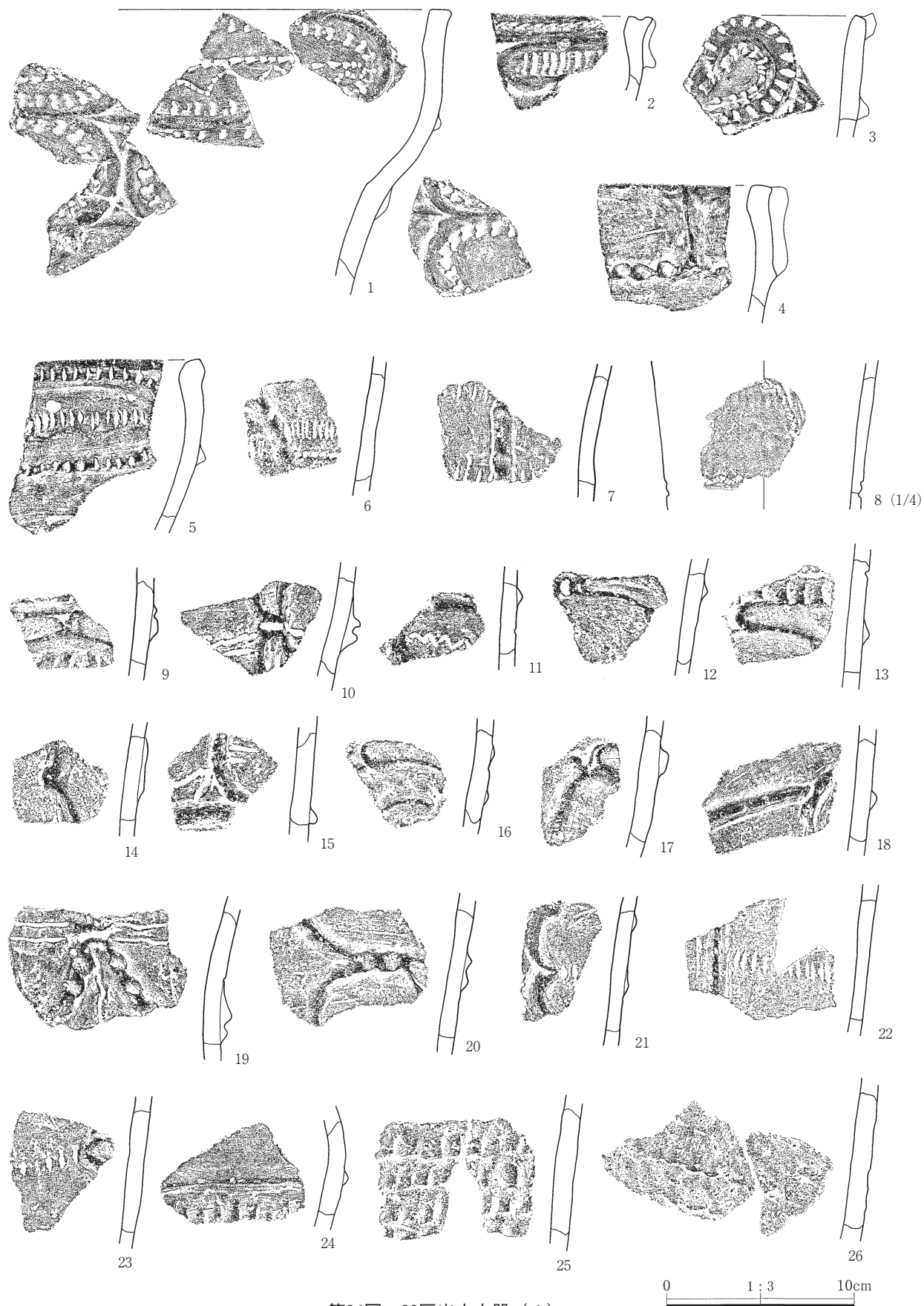
第91図 20区出土土器(1)



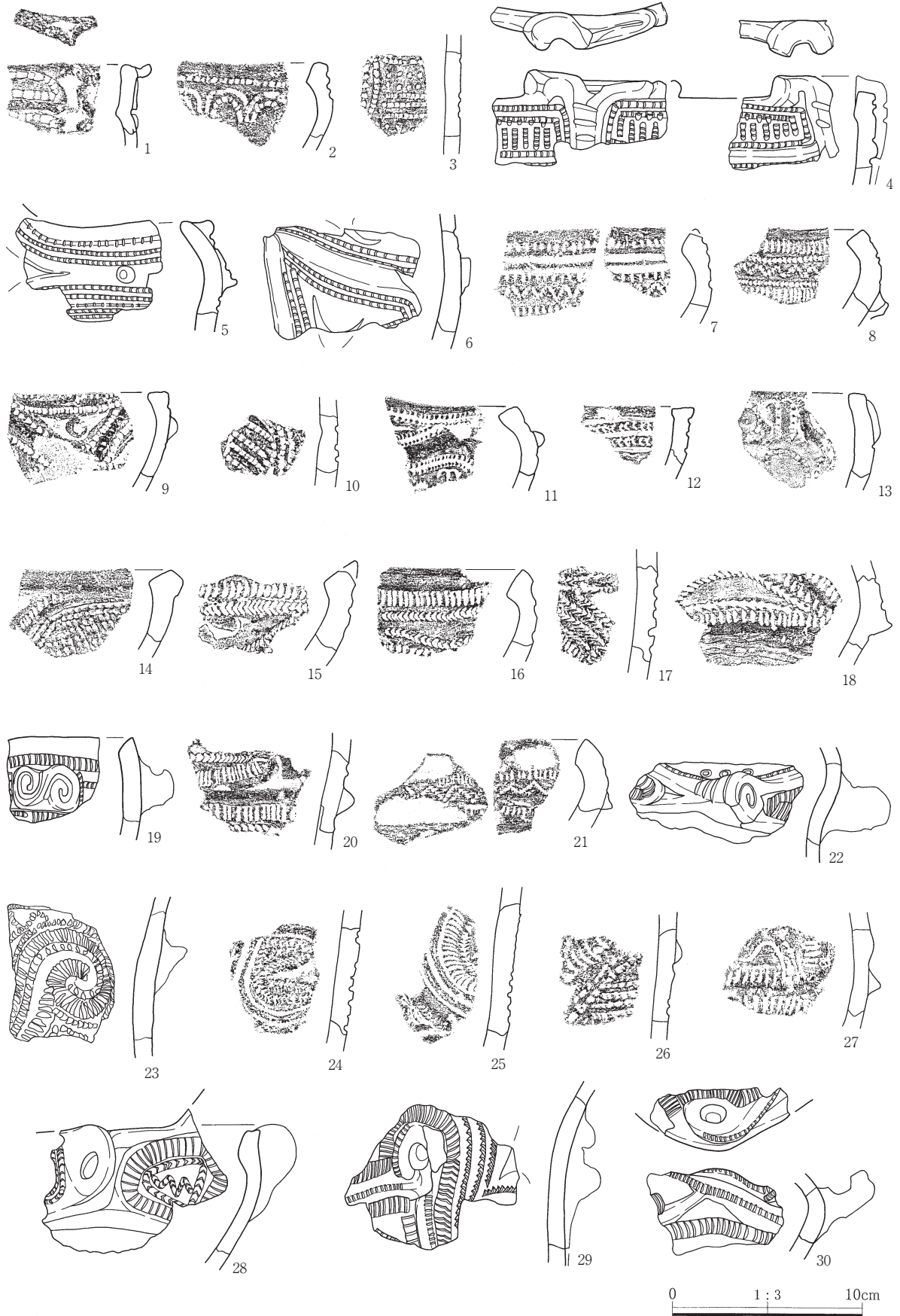
第92図 20区出土土器 (2)



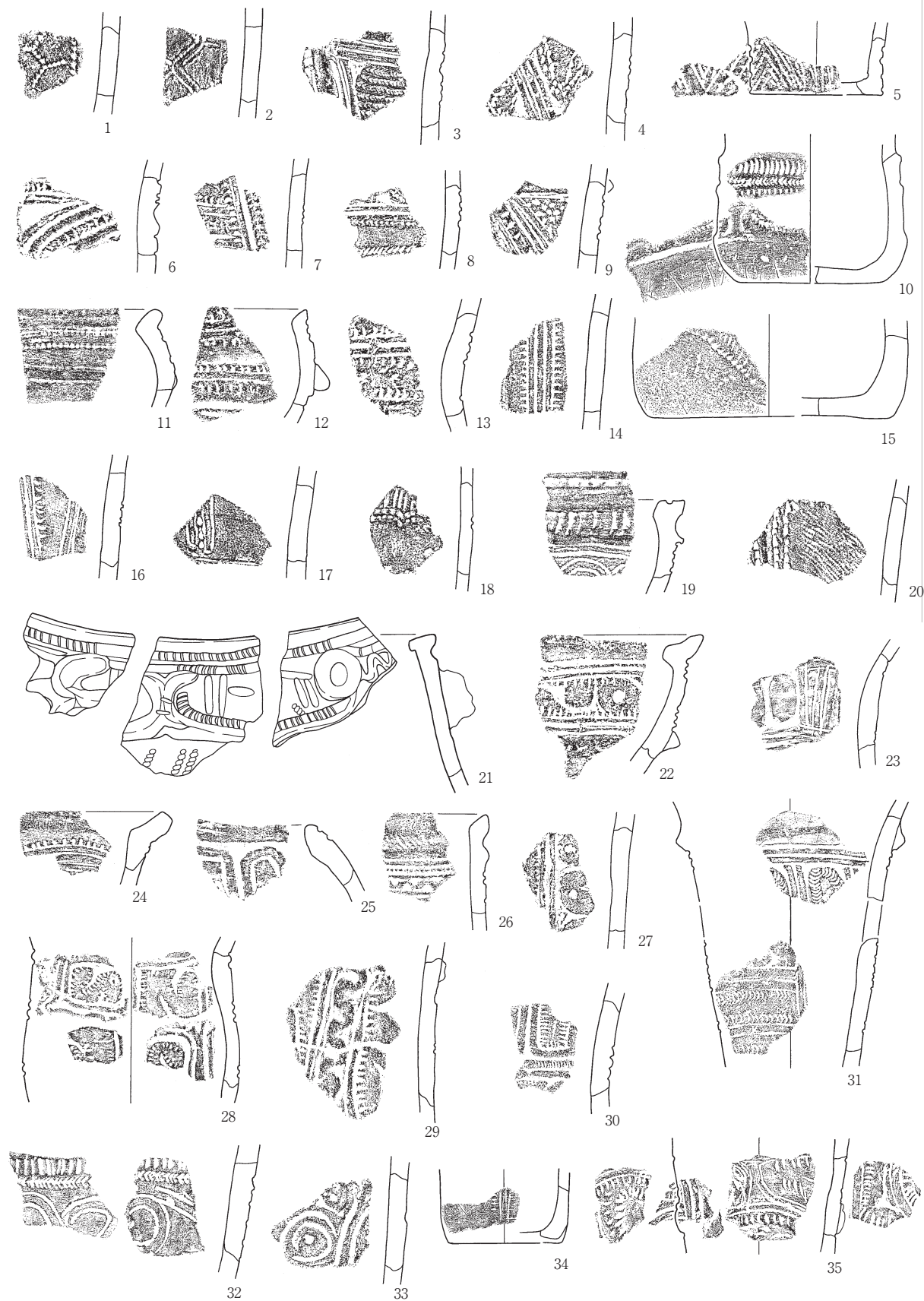
第93図 20区出土土器 (3)



第94図 20区出土土器(4)



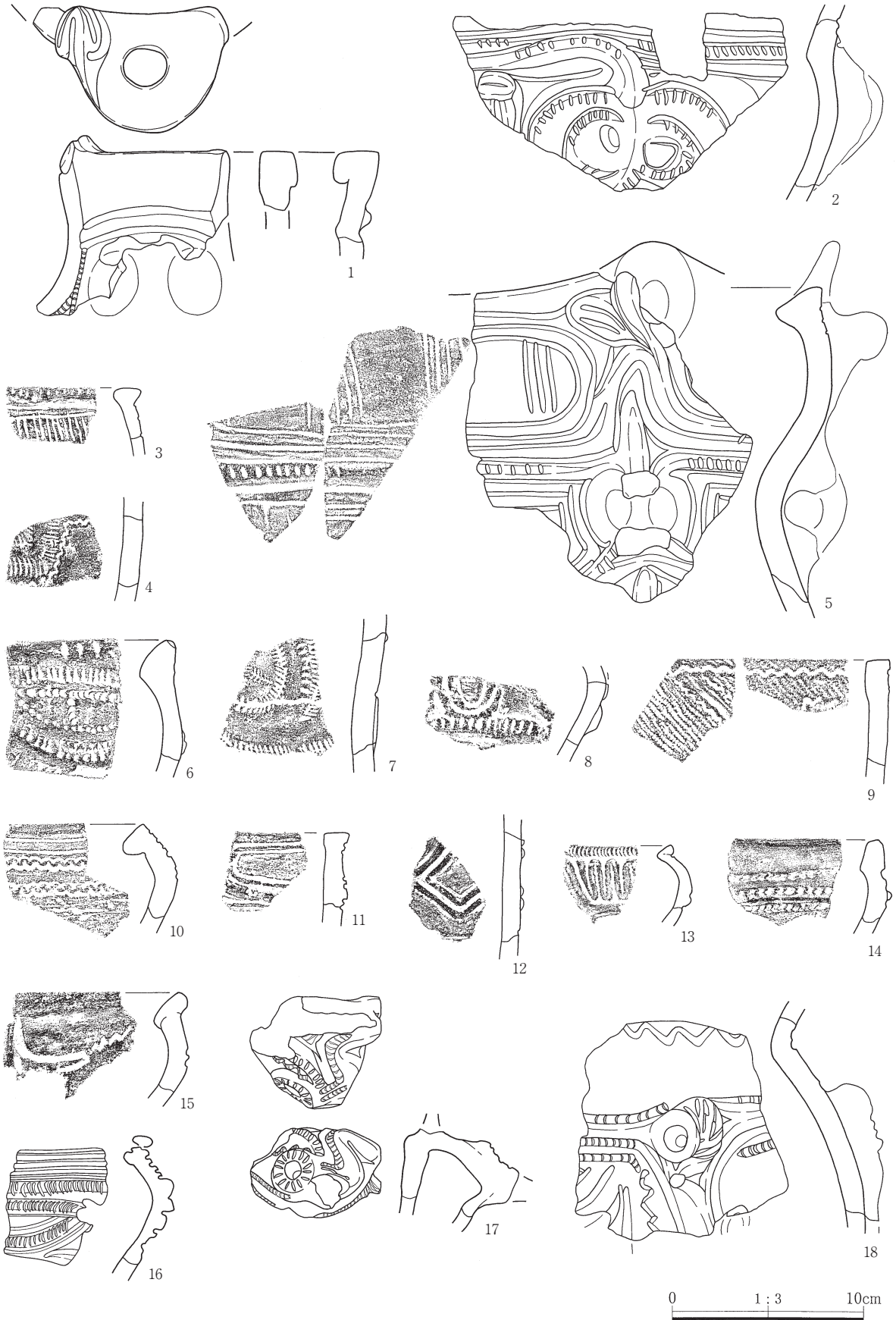
第95図 20区出土土器(5)



0 1:3 10cm

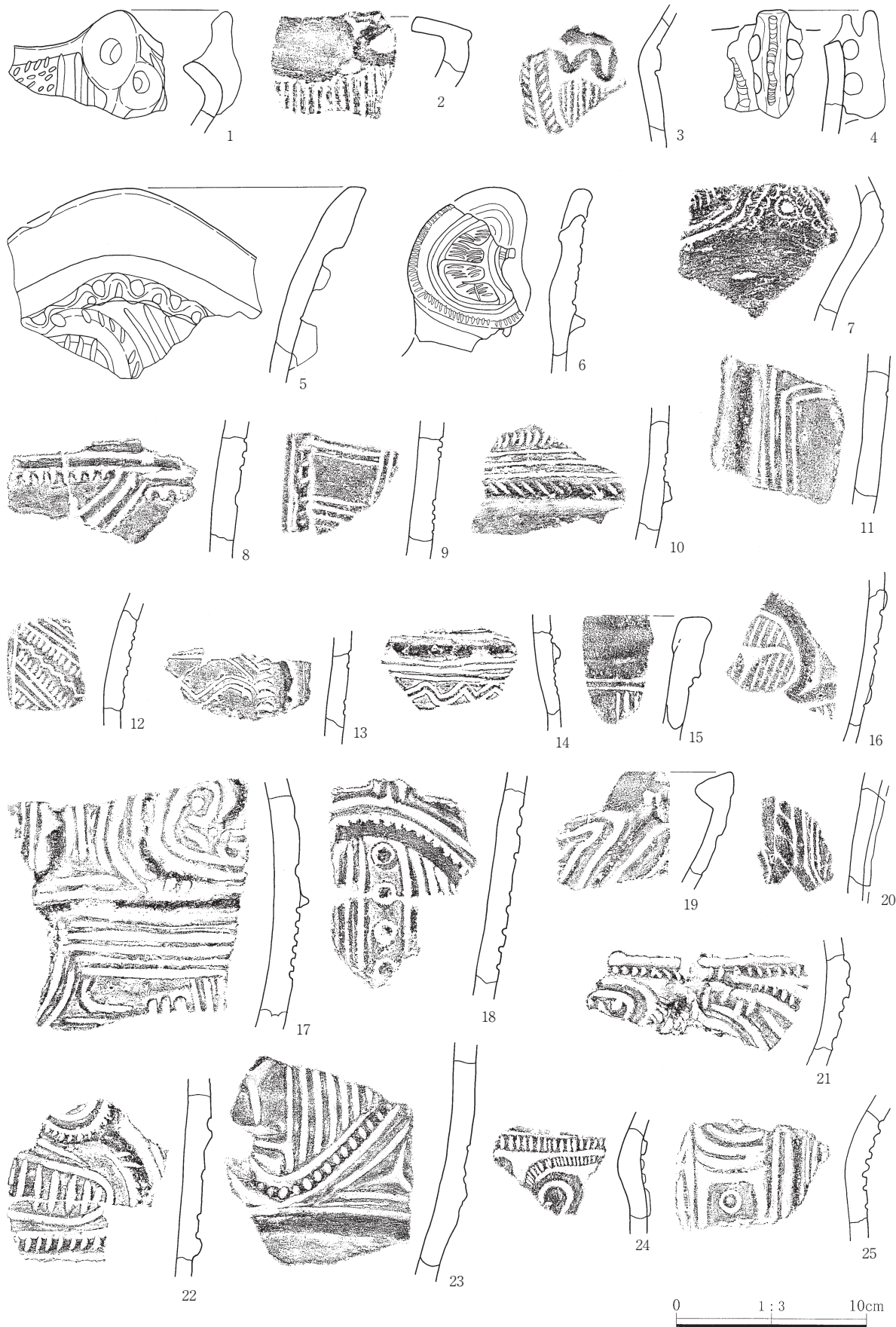
5 · 10 · 15 · 28 · 31 · 34 · 35 (1/4)

第96図 20区出土土器(6)



第97図 20区出土土器(7)



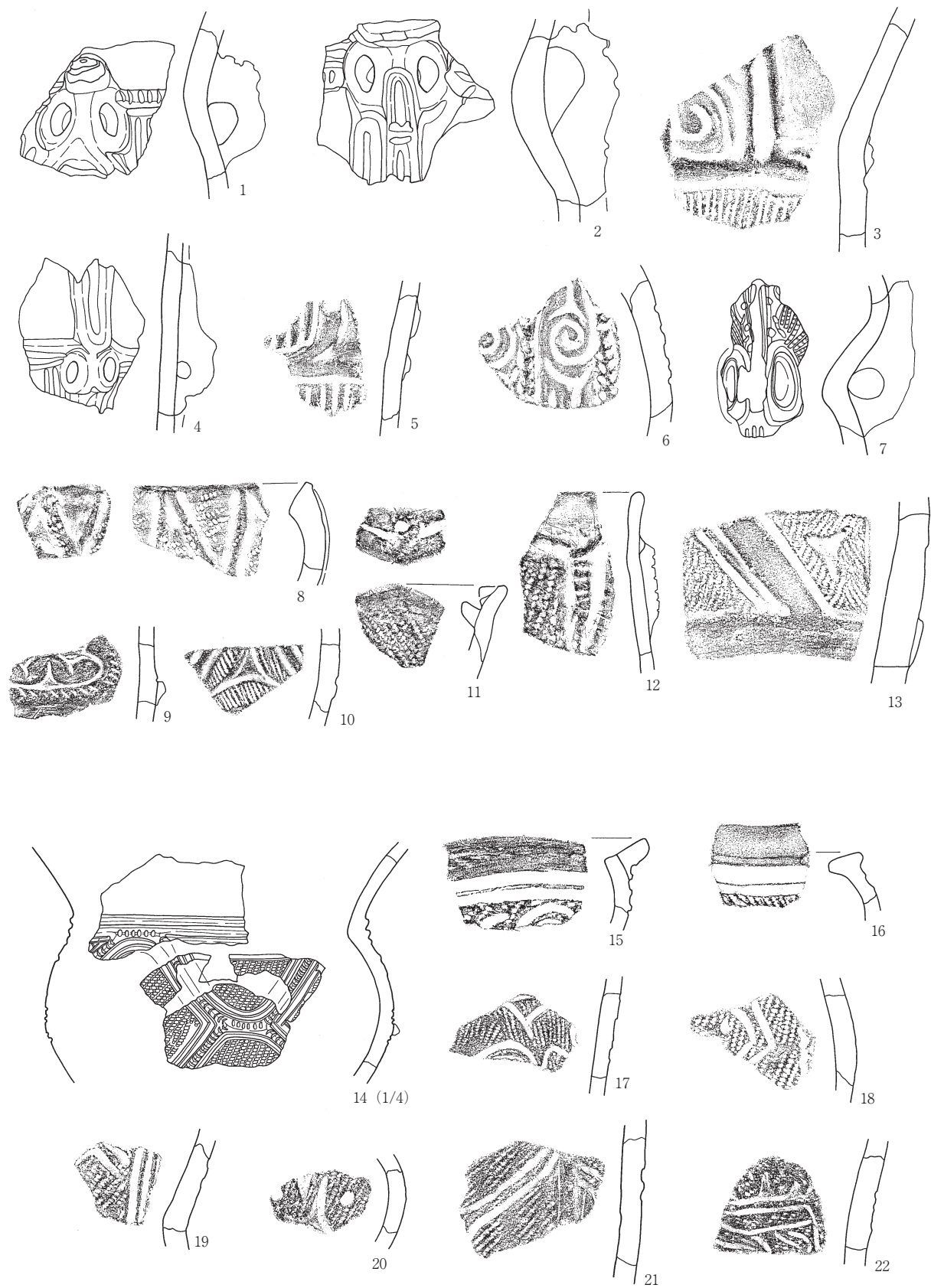


第98图 20区出土土器(8)



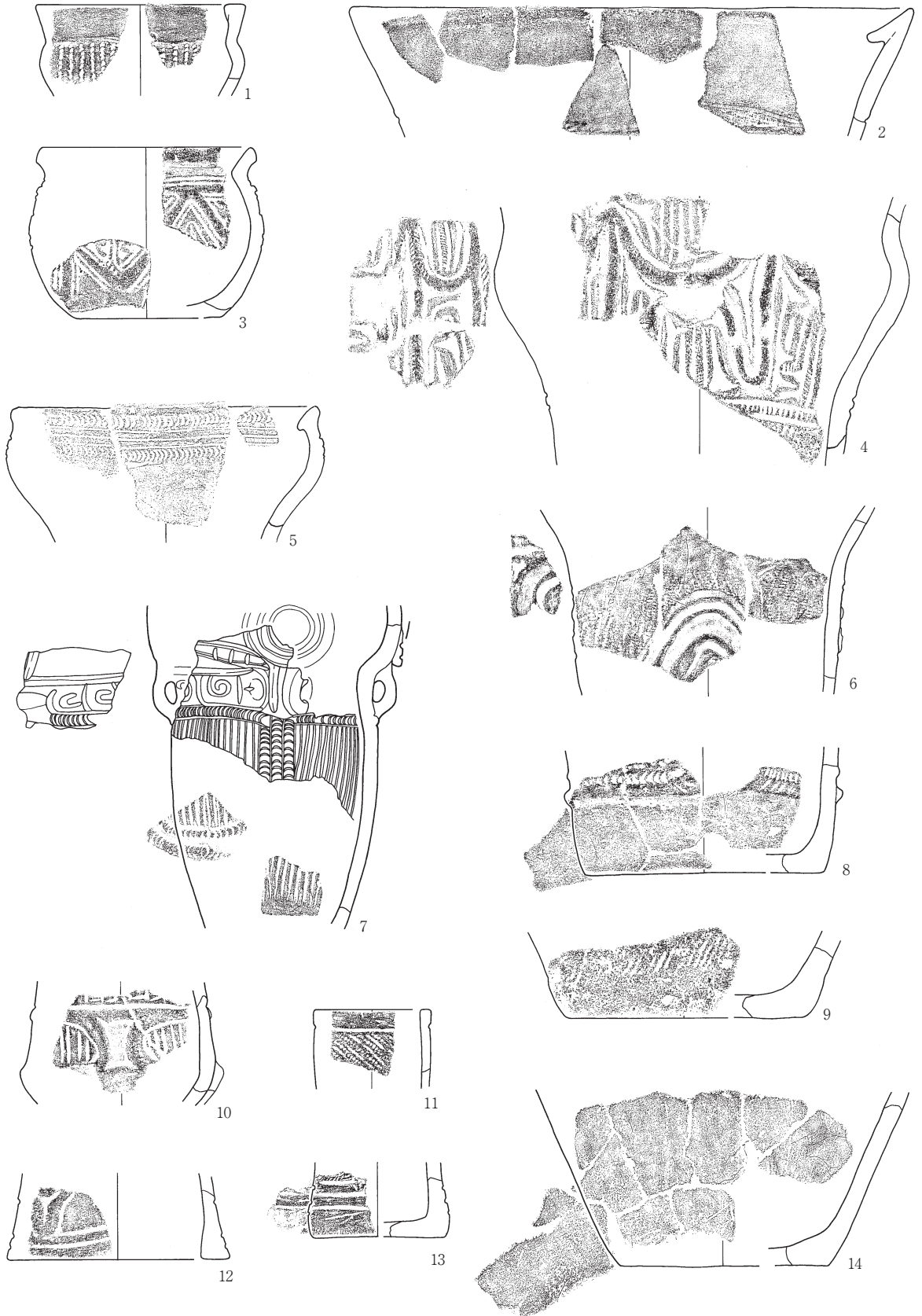
0 1:3 10cm

第99図 20区出土土器(9)



0 1:3 10cm

第100図 20区出土土器 (10)



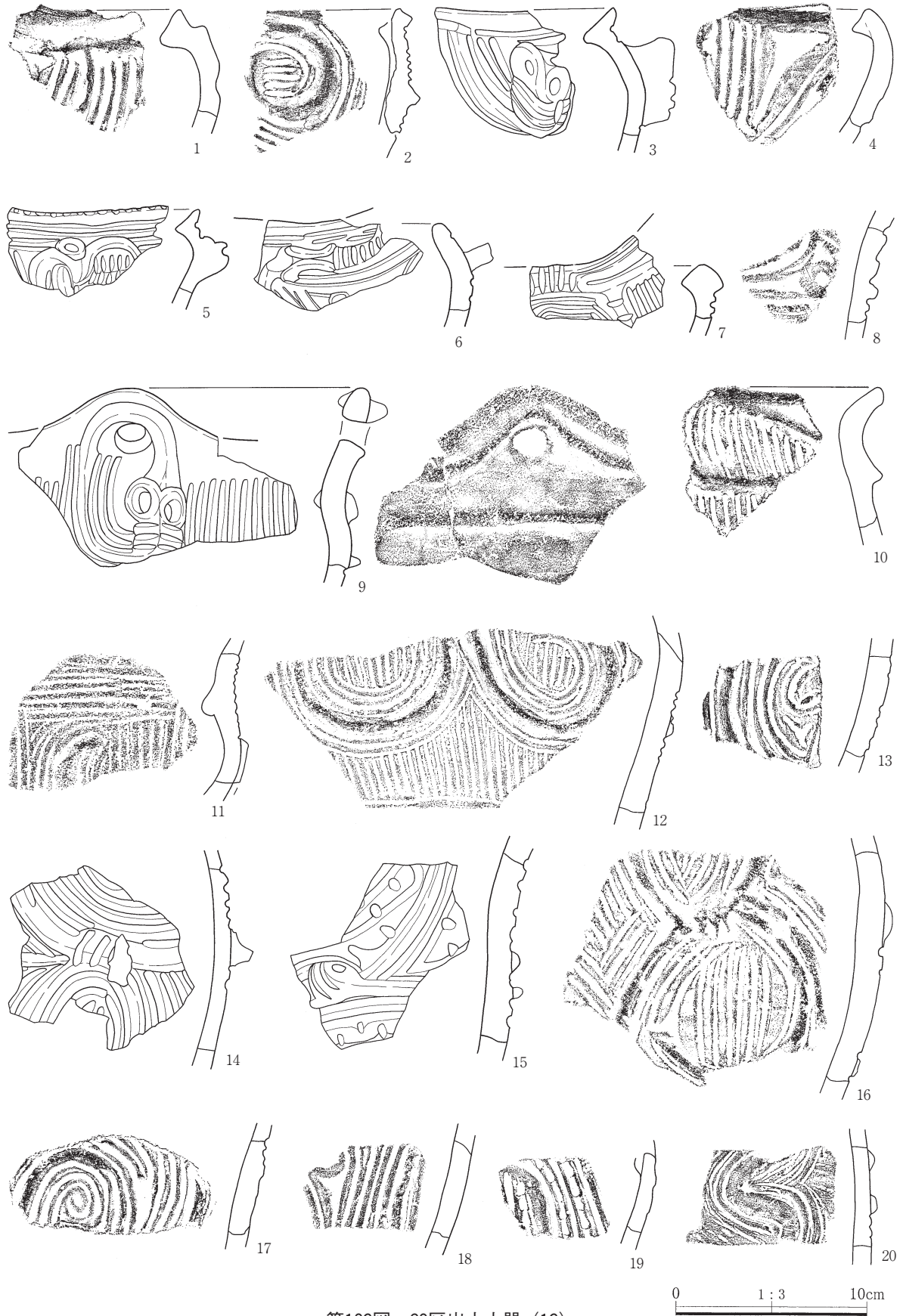
0 1:4 10cm

第101図 20区出土土器 (11)

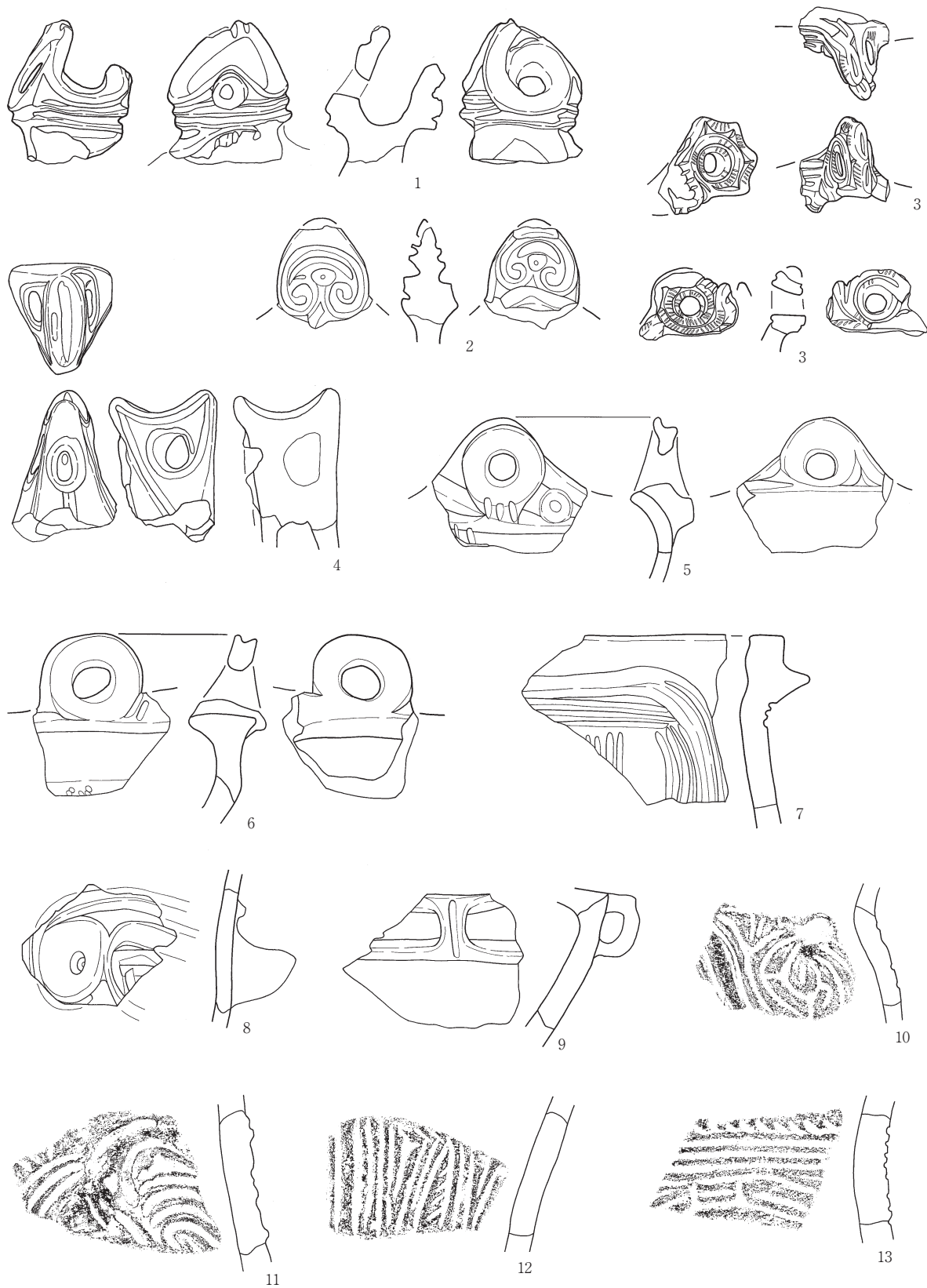


第102図 20区出土土器 (12)

0 1:4 10cm

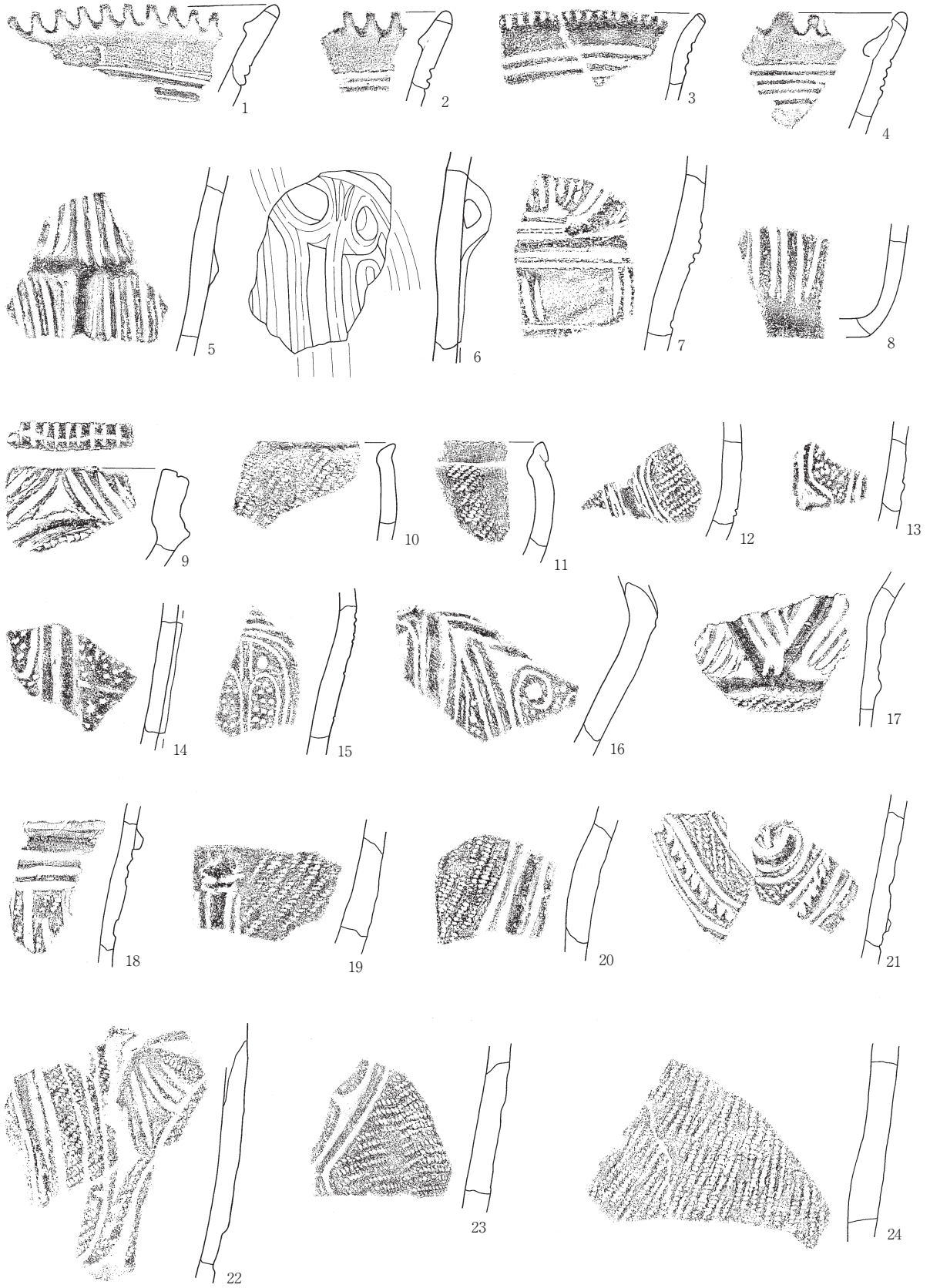


第103図 20区出土土器 (13)



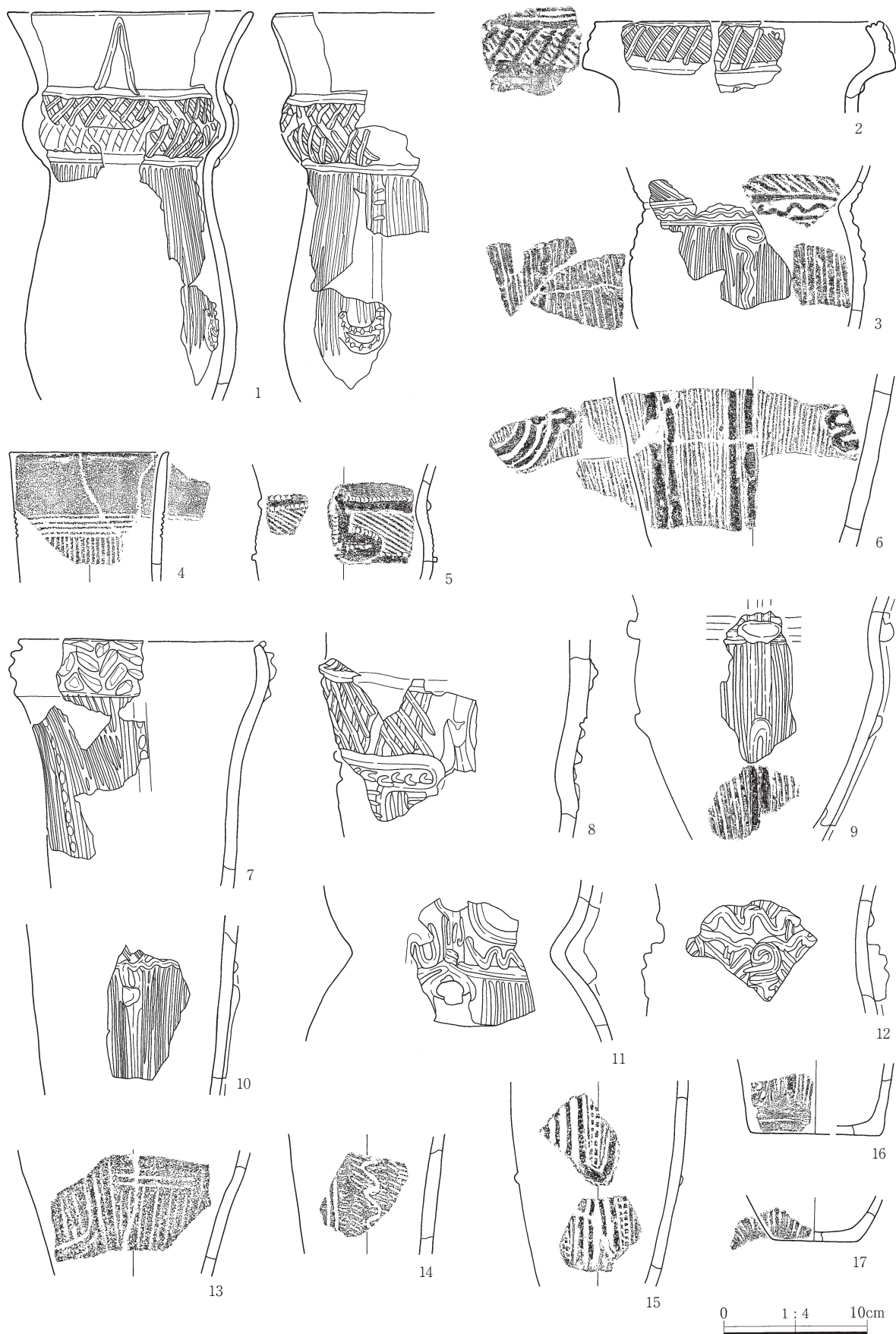
第104图 20区出土土器 (14)

0 1:3 10cm

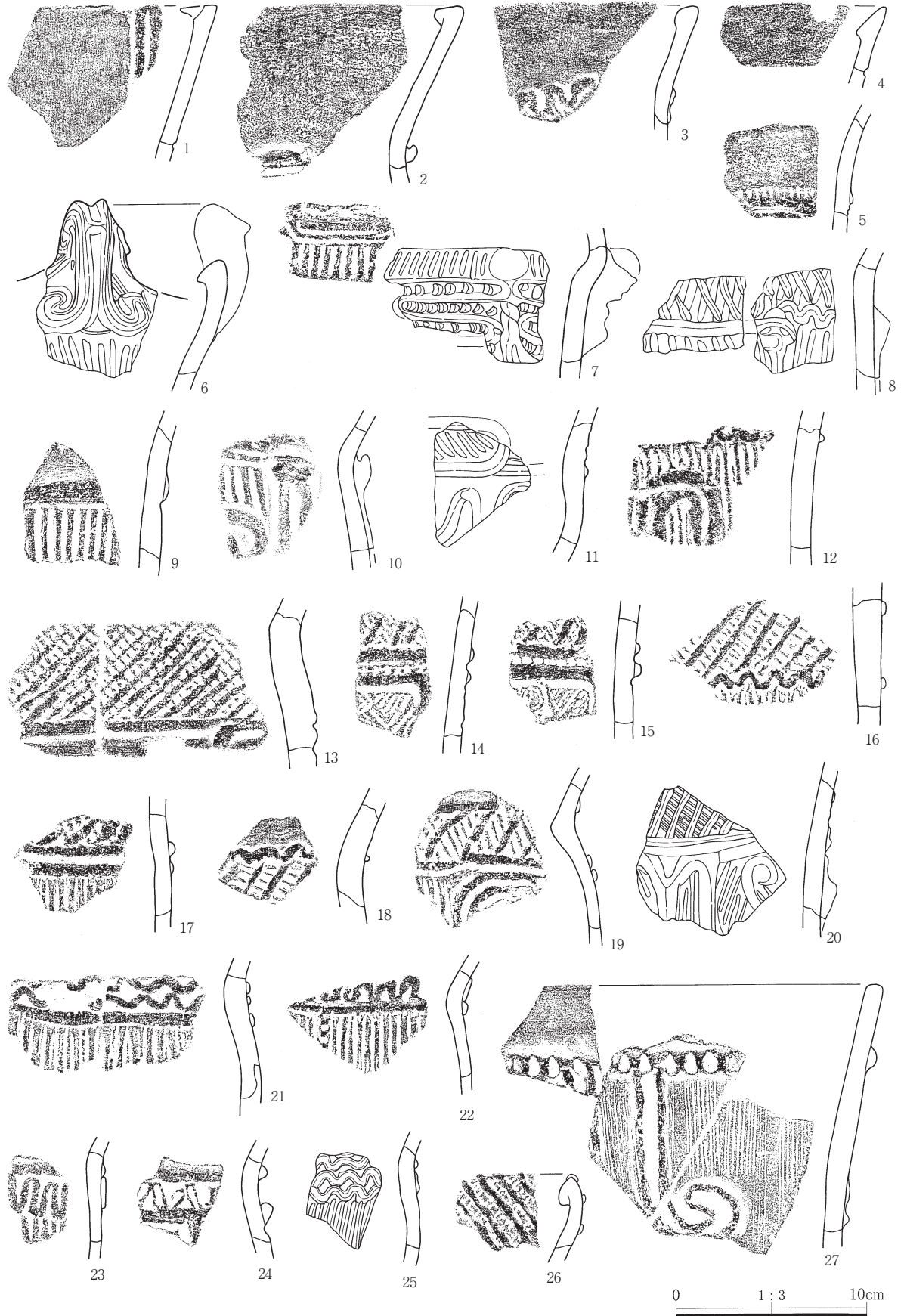


第105図 20区出土土器 (15)

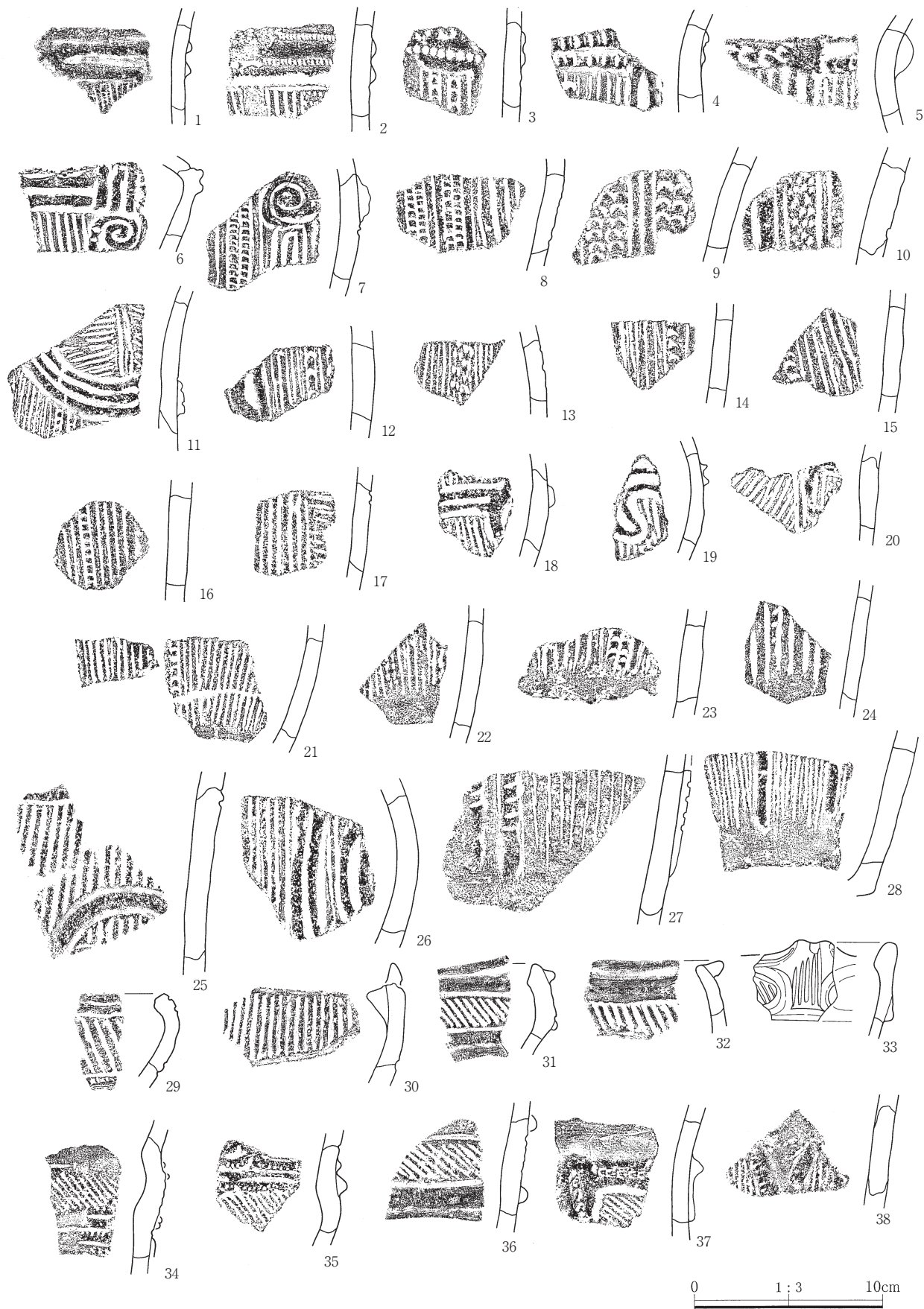




第106図 20区出土土器 (16)

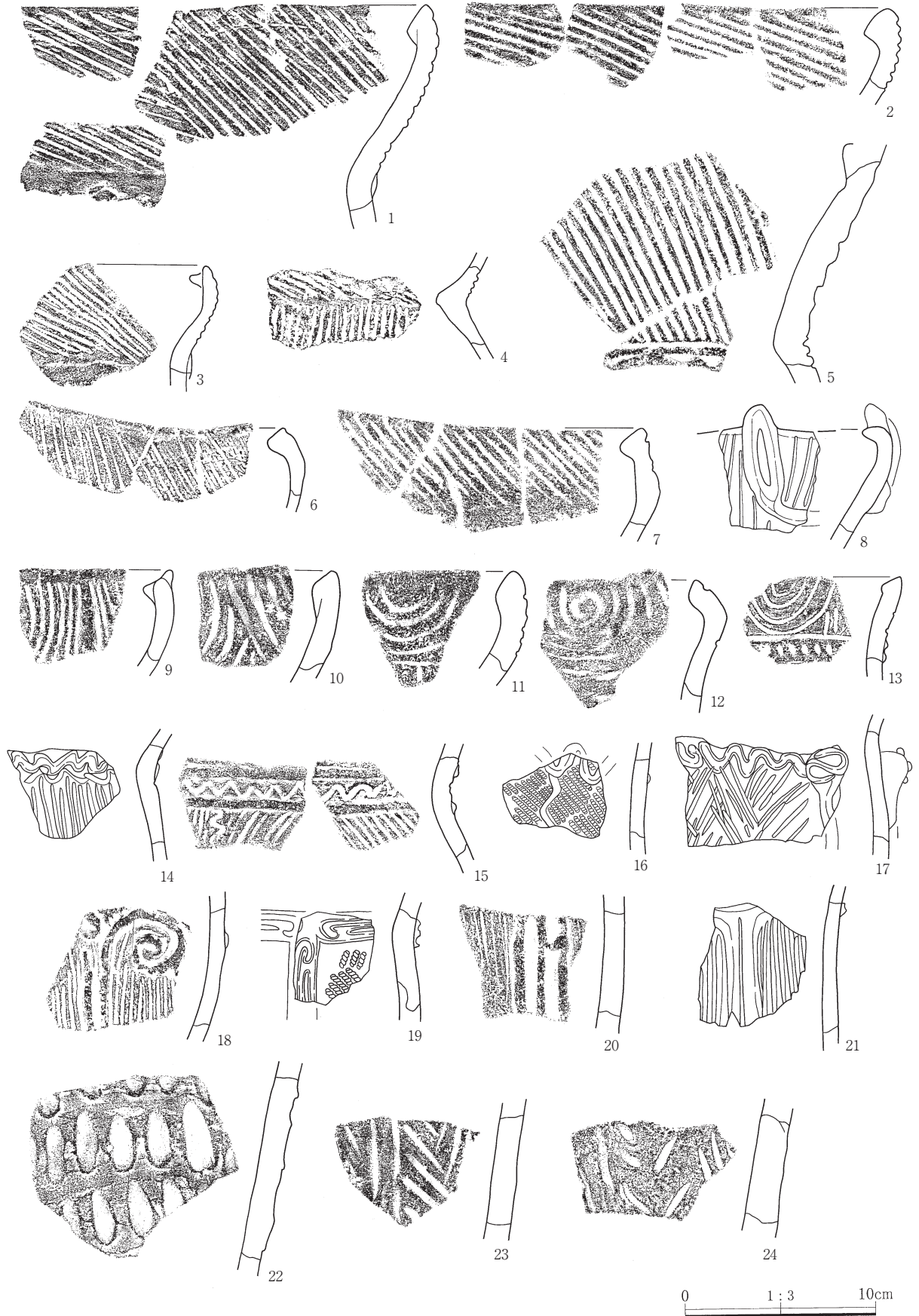


第107図 20区出土土器 (17)

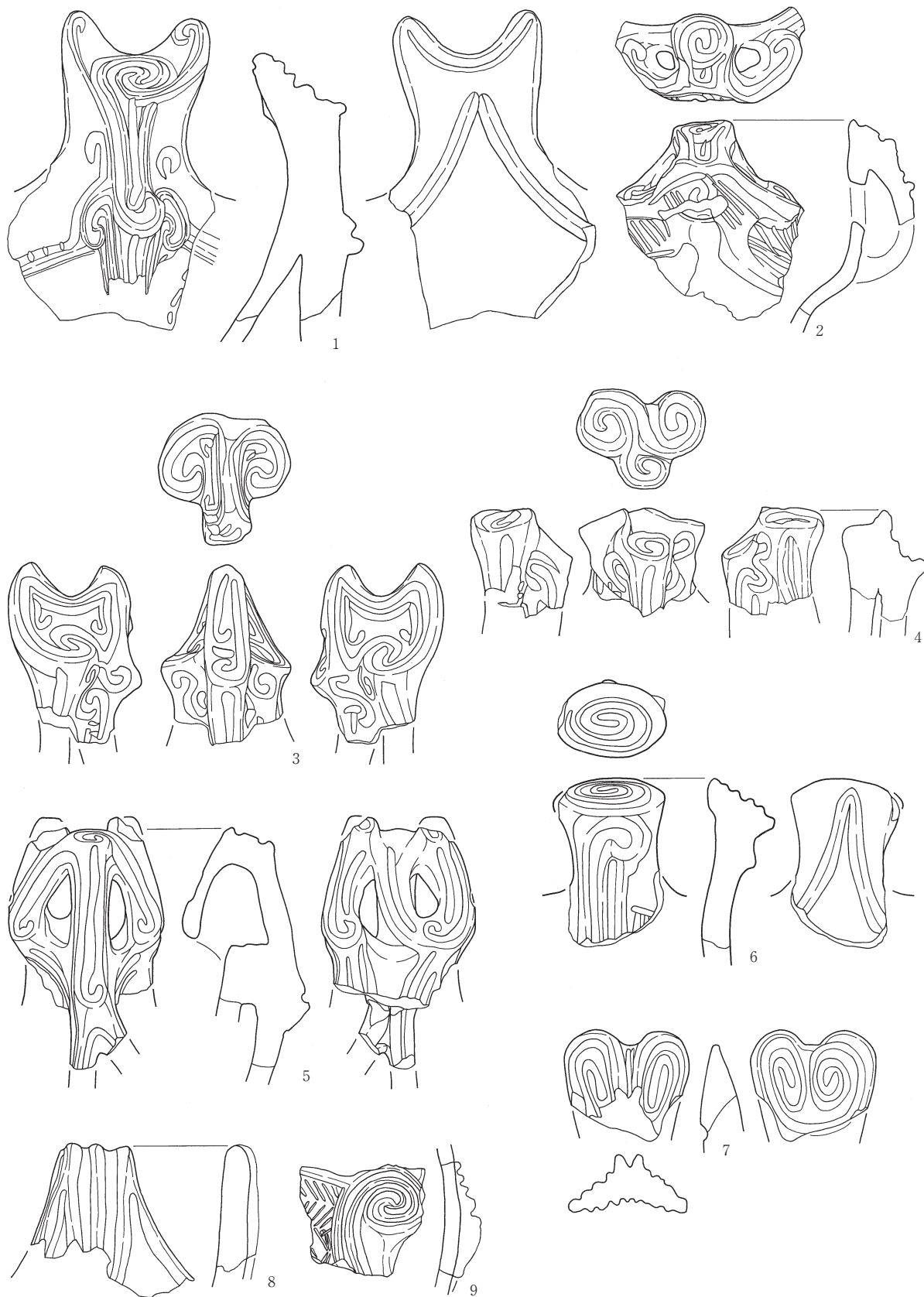


0 1:3 10cm

第108图 20区出土土器 (18)

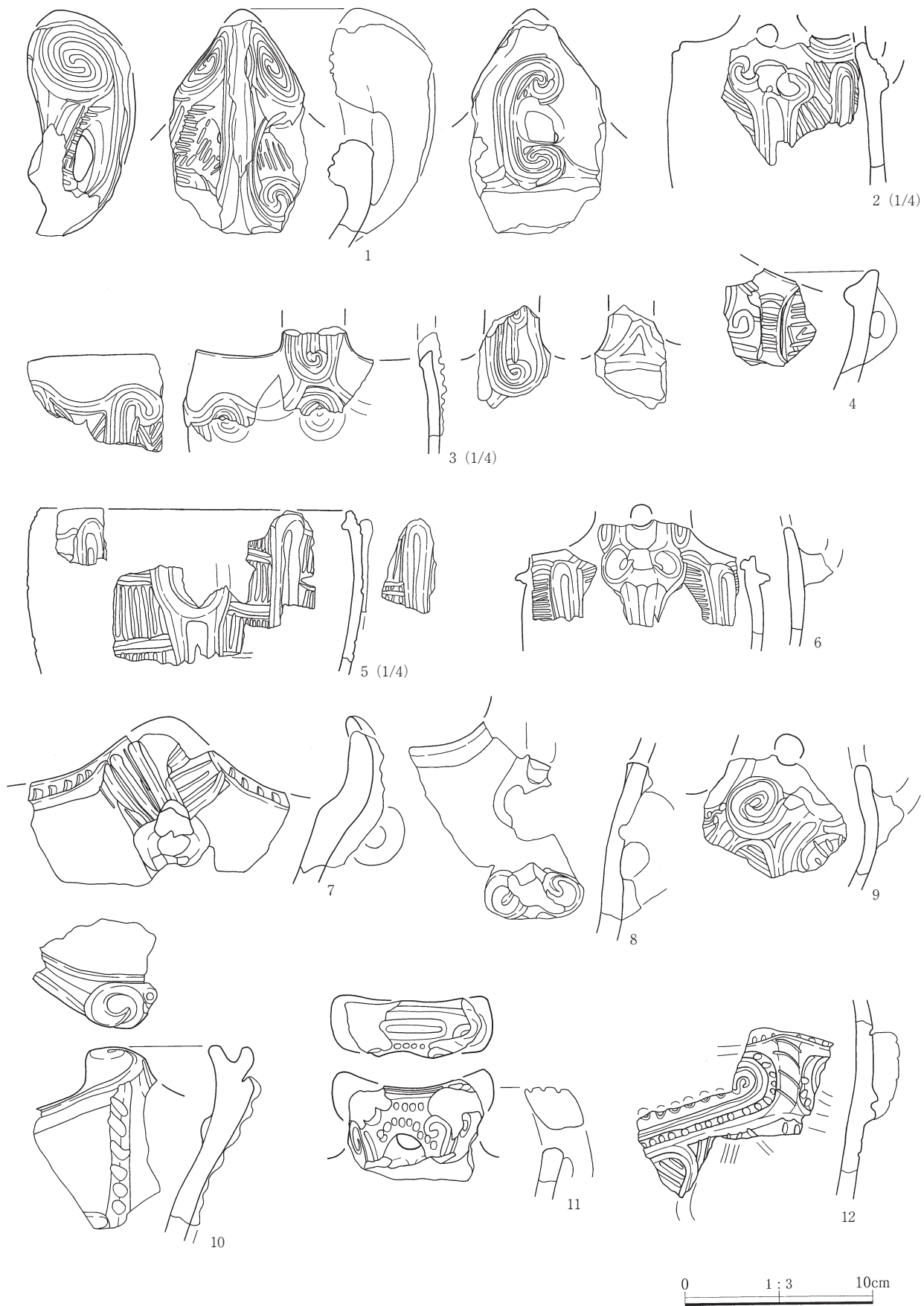


第109図 20区出土土器 (19)

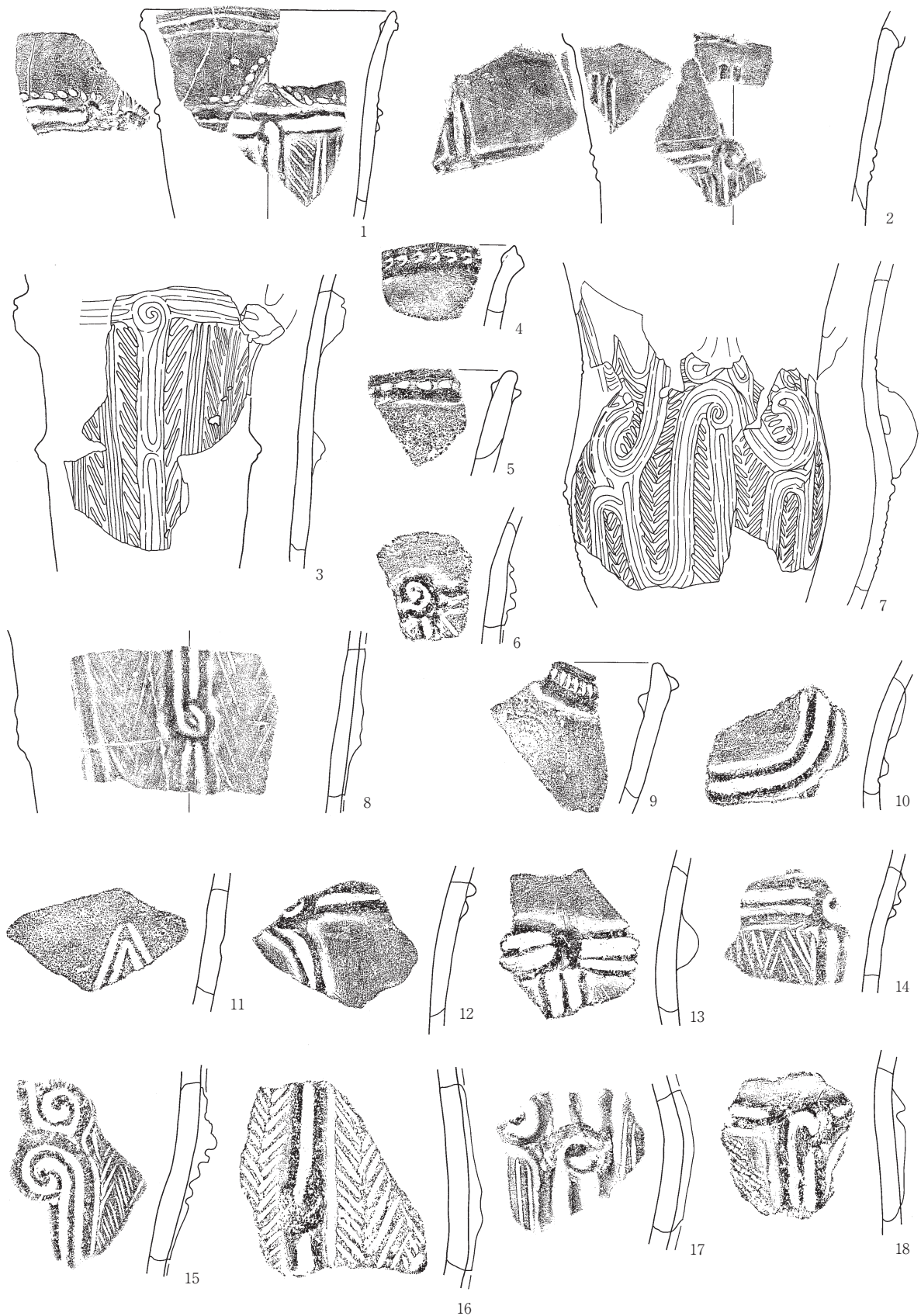


第110图 20区出土土器 (20)

0 1:3 10cm

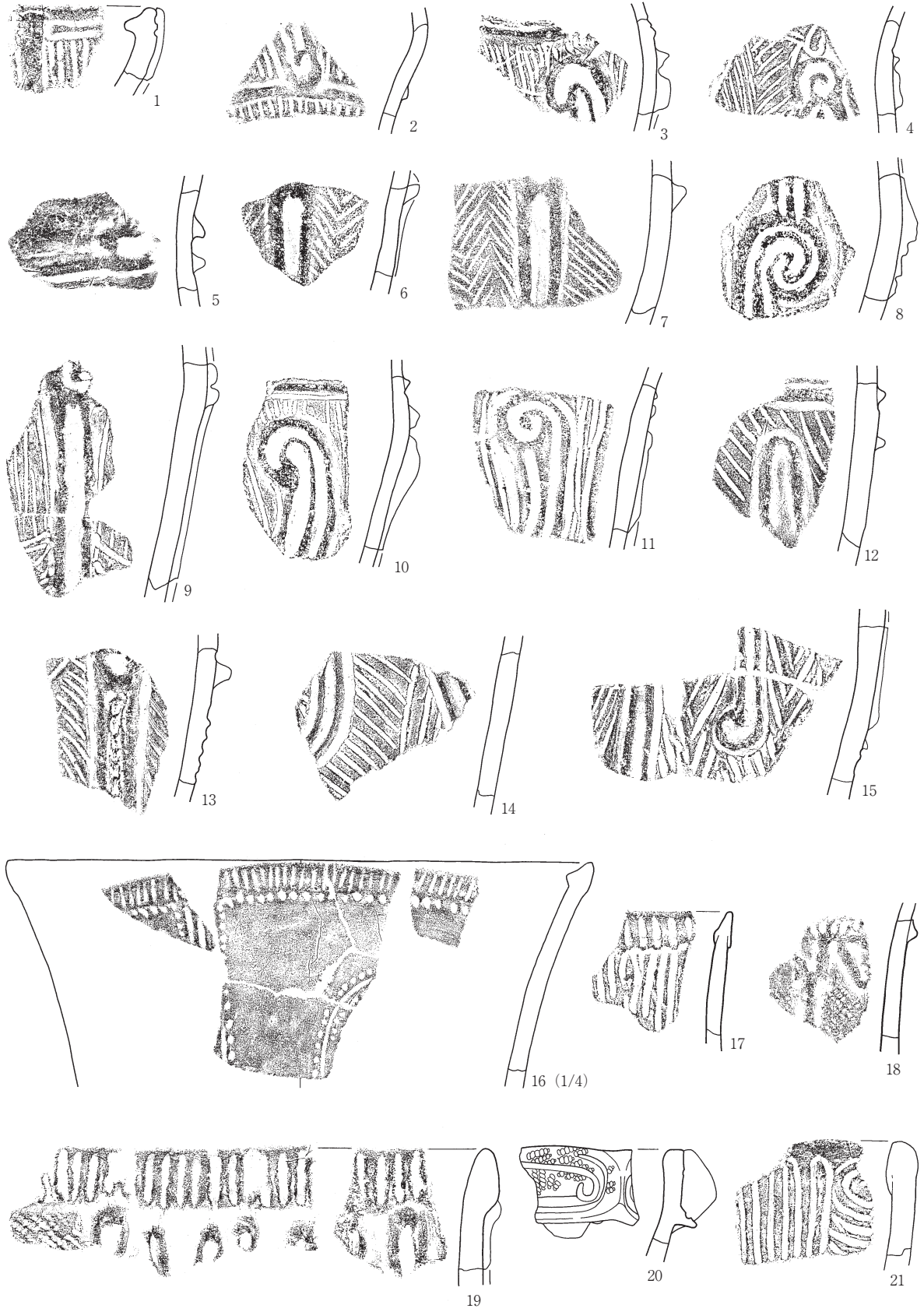


第111図 20区出土土器 (21)



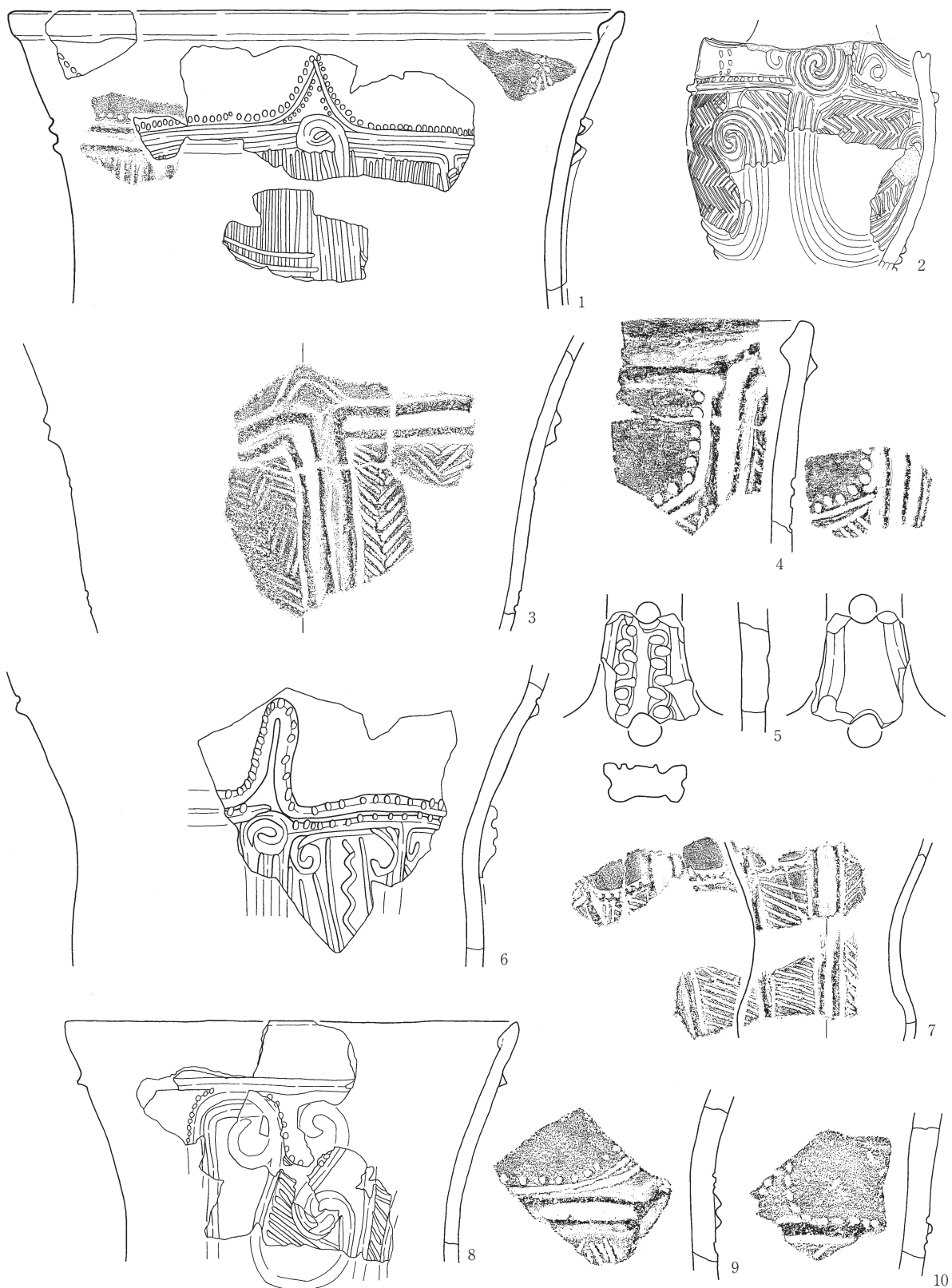
第112図 20区出土土器 (22)

0 1:3 10cm  
1·2·3·7·8 (1/4)



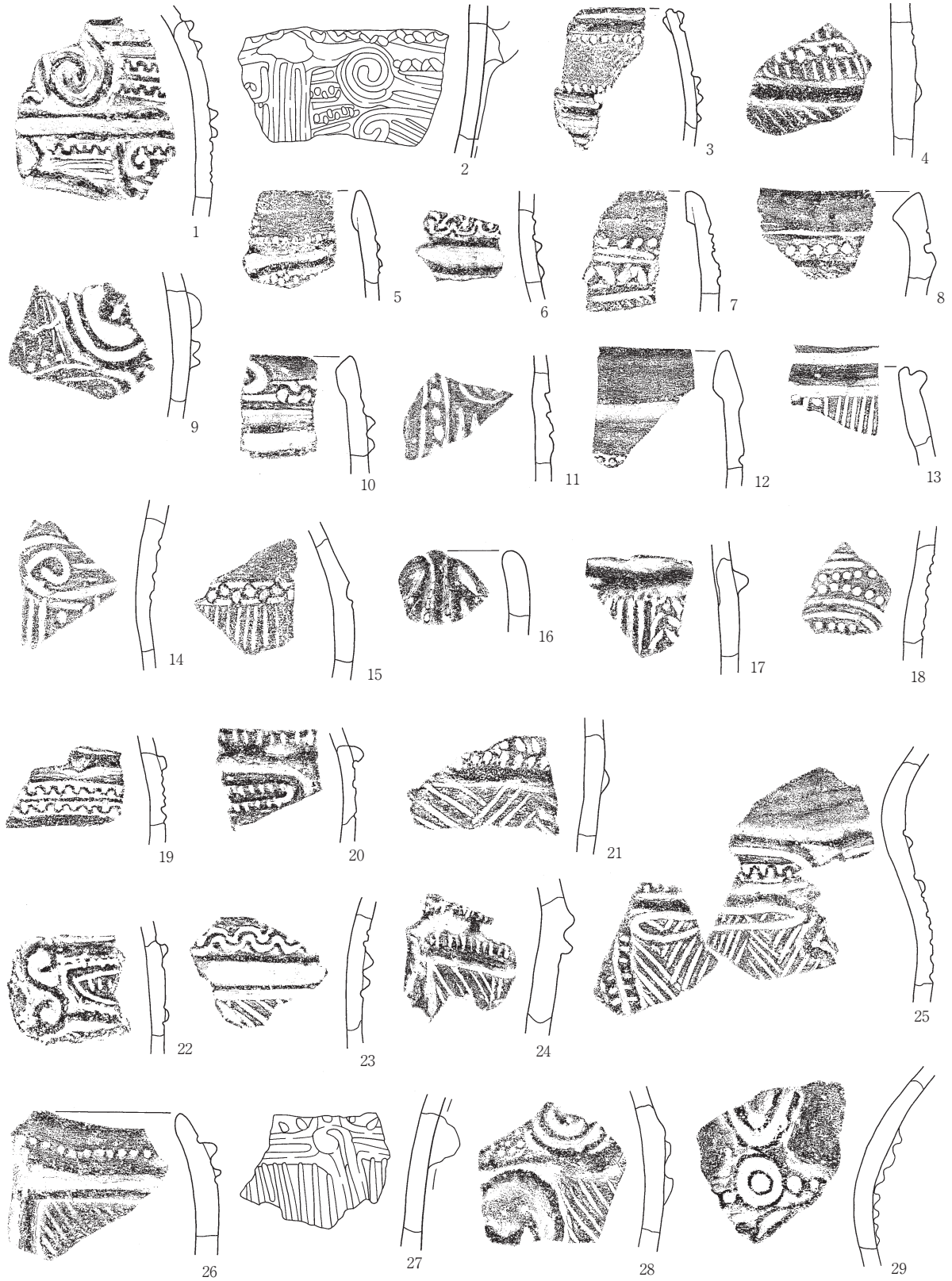
第113図 20区出土土器 (23)





第114図 20区出土土器 (24)

0 1:3 10cm  
1·2·3·6·7·8 (1/4)

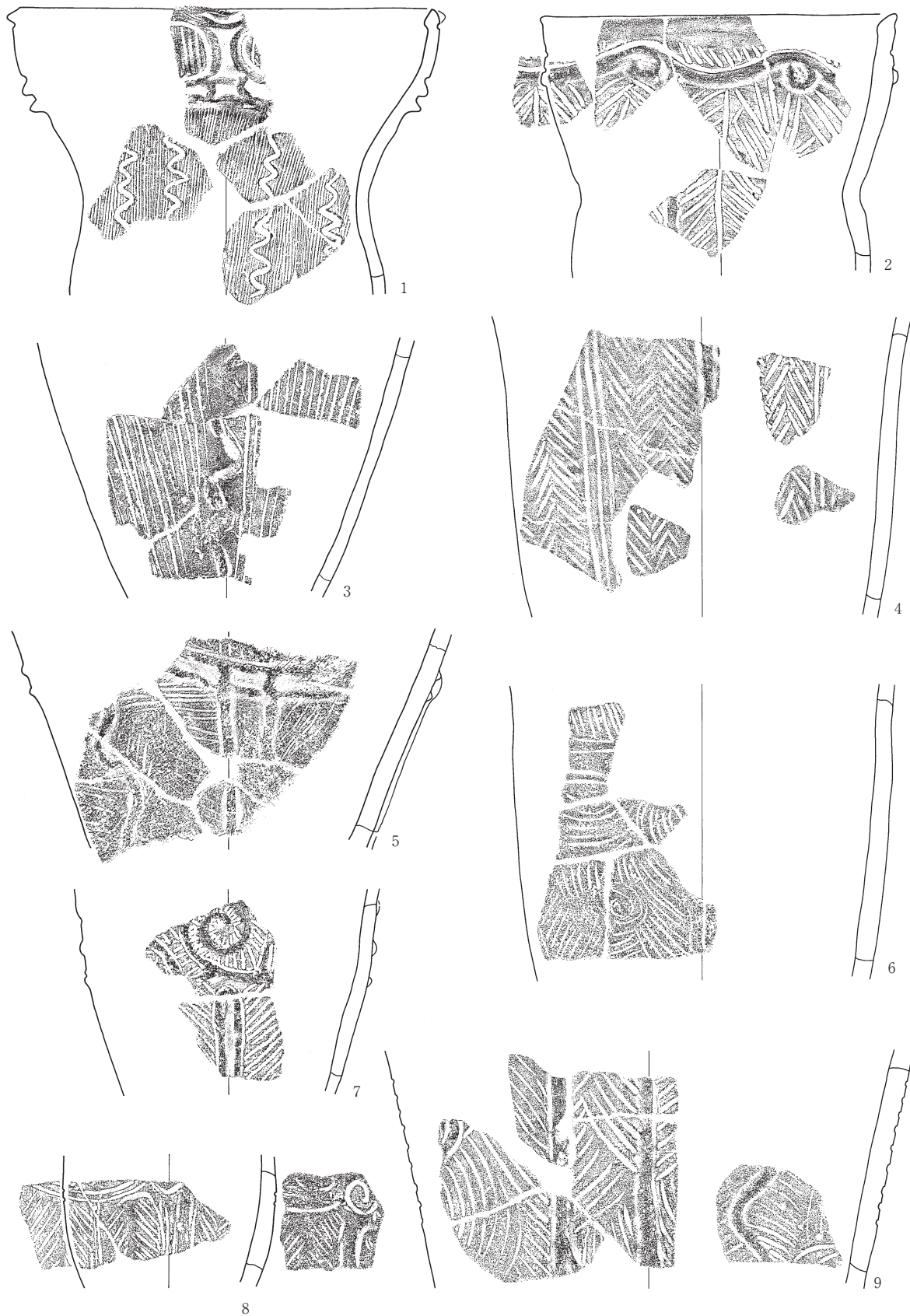


第115図 20区出土土器 (25)



第116図 20区出土土器 (26)

0 1:3 10cm

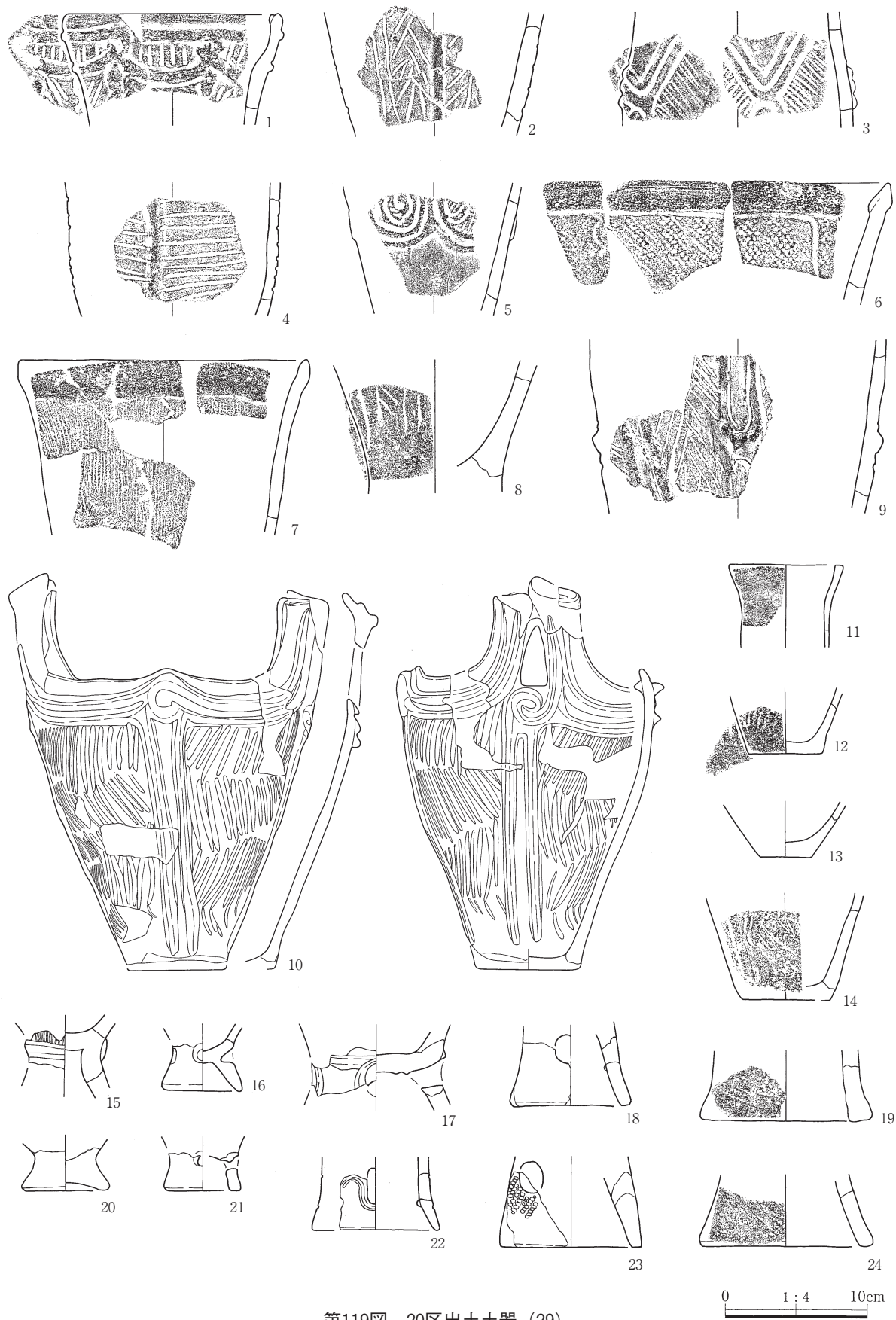


第117図 20区出土土器 (27)

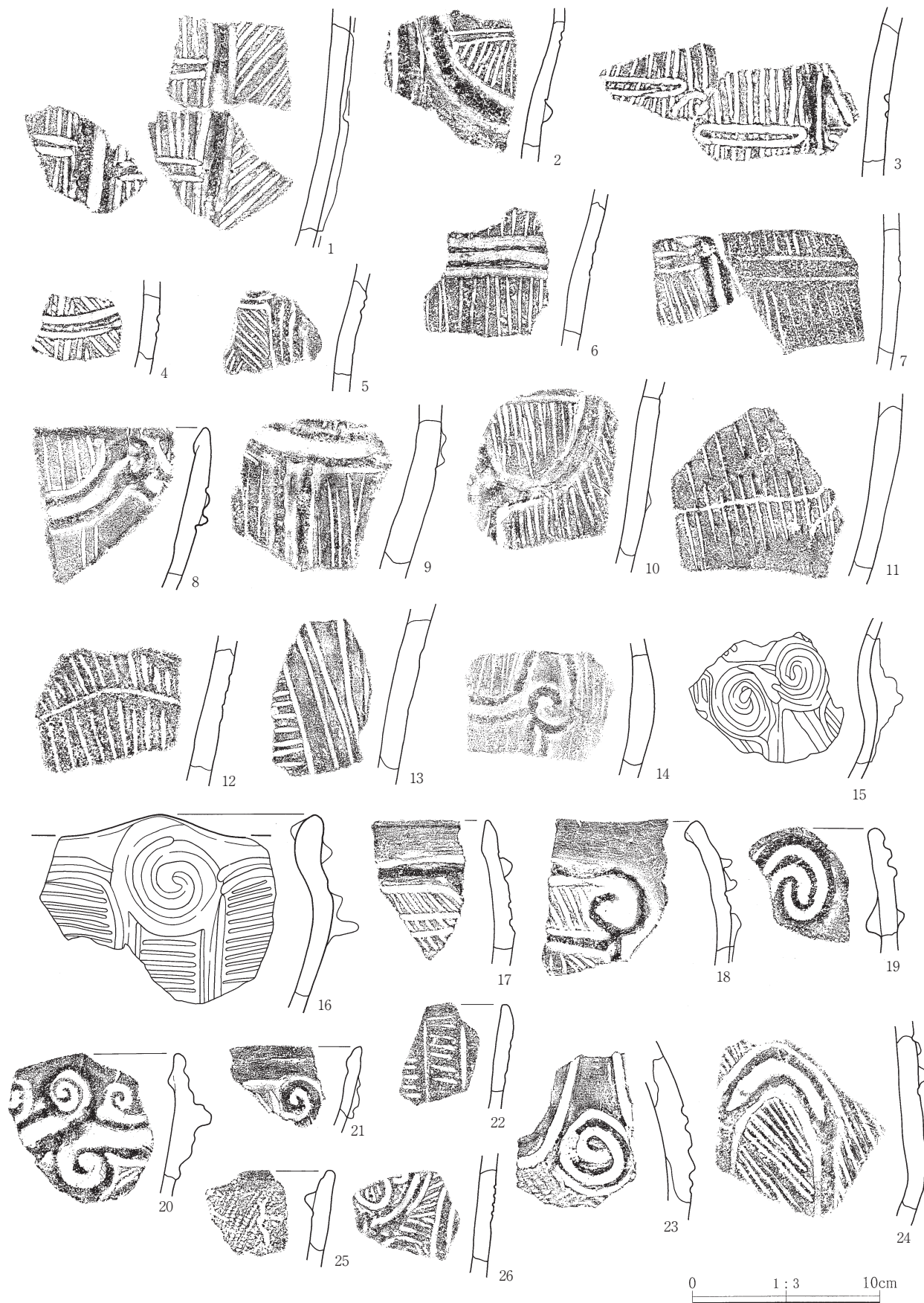
0 1 : 4 10cm



第118図 20区出土土器 (28)



第119図 20区出土土器 (29)

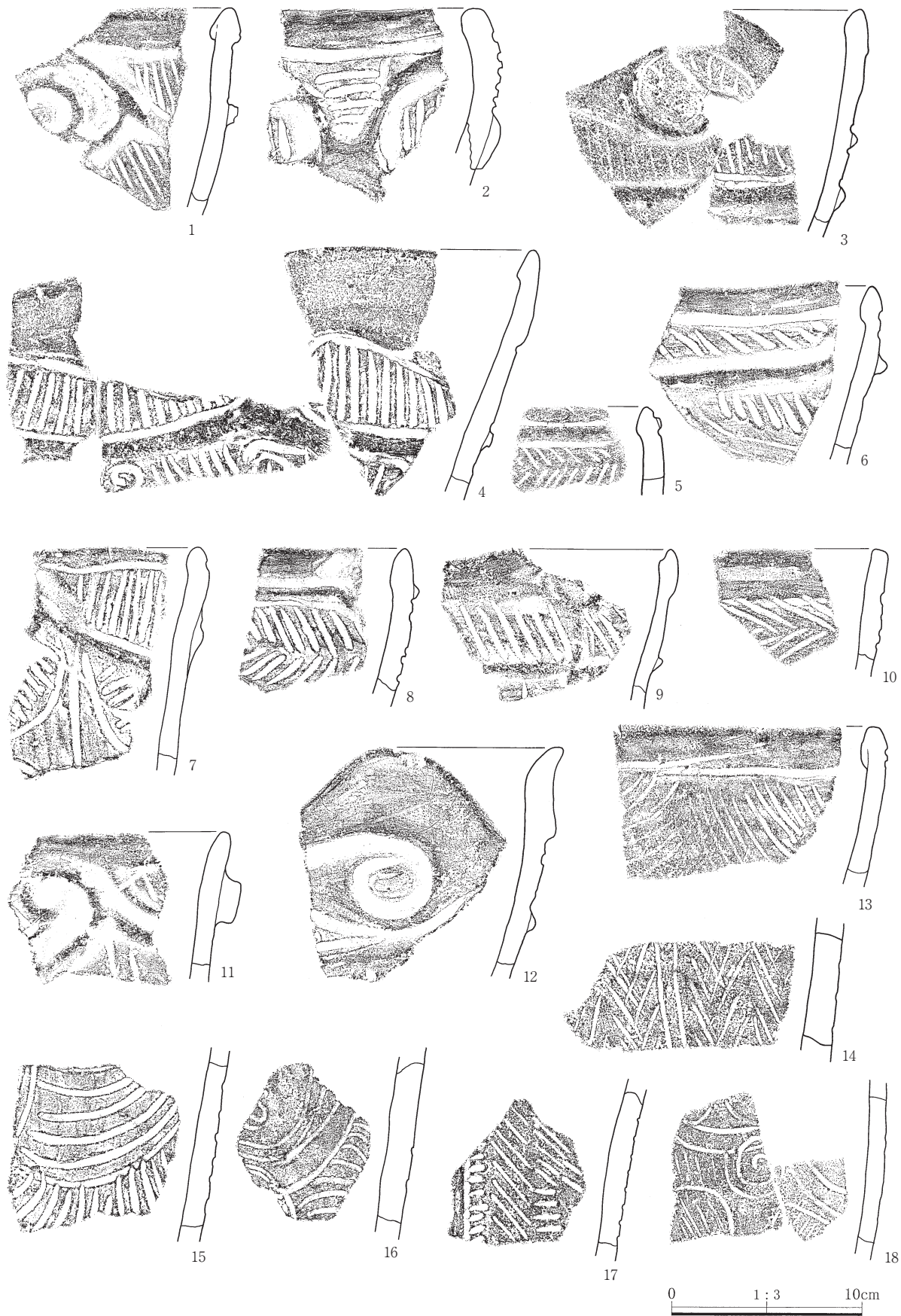


第120図 20区出土土器 (30)

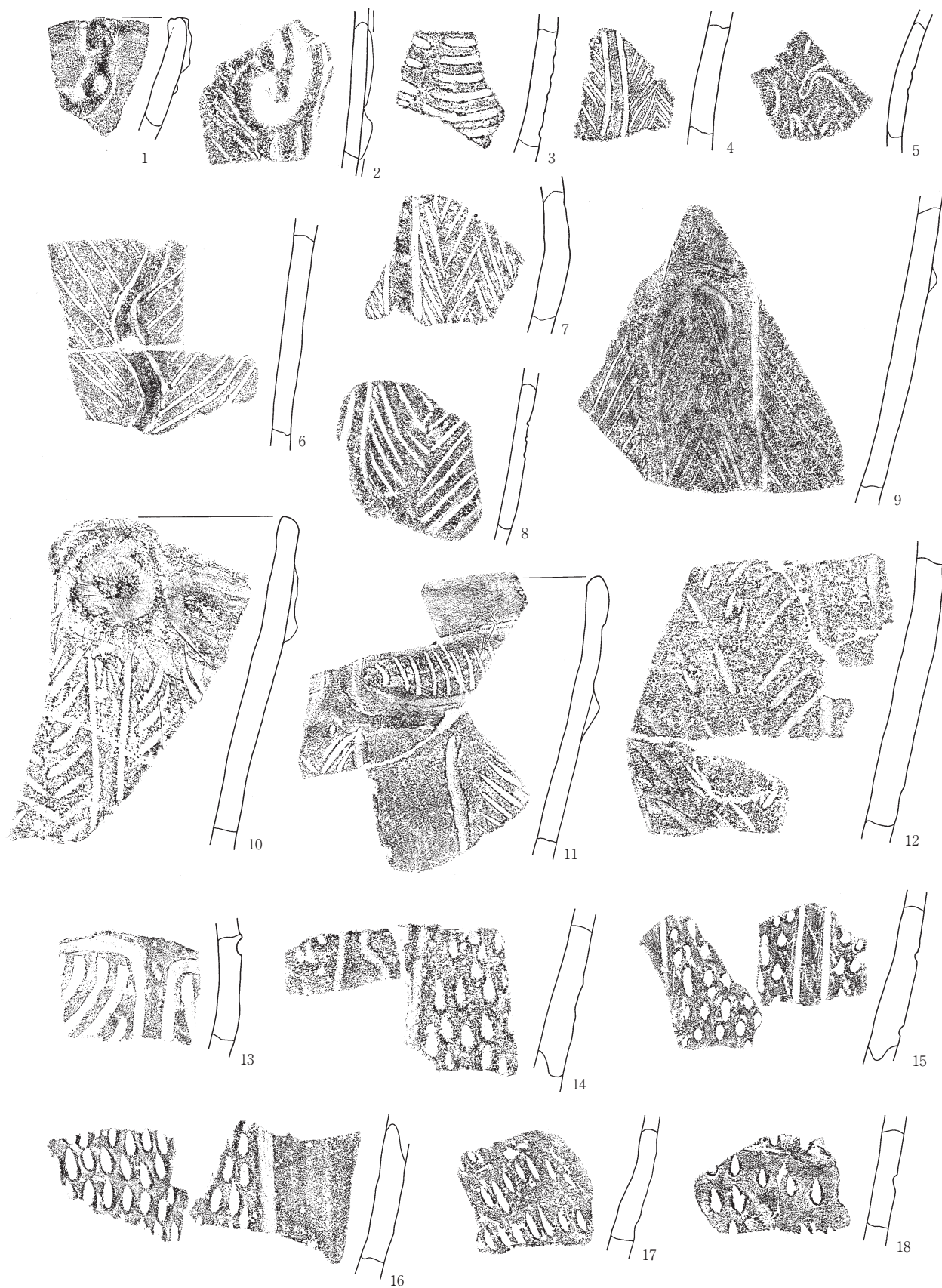


第121図 20区出土土器 (31)



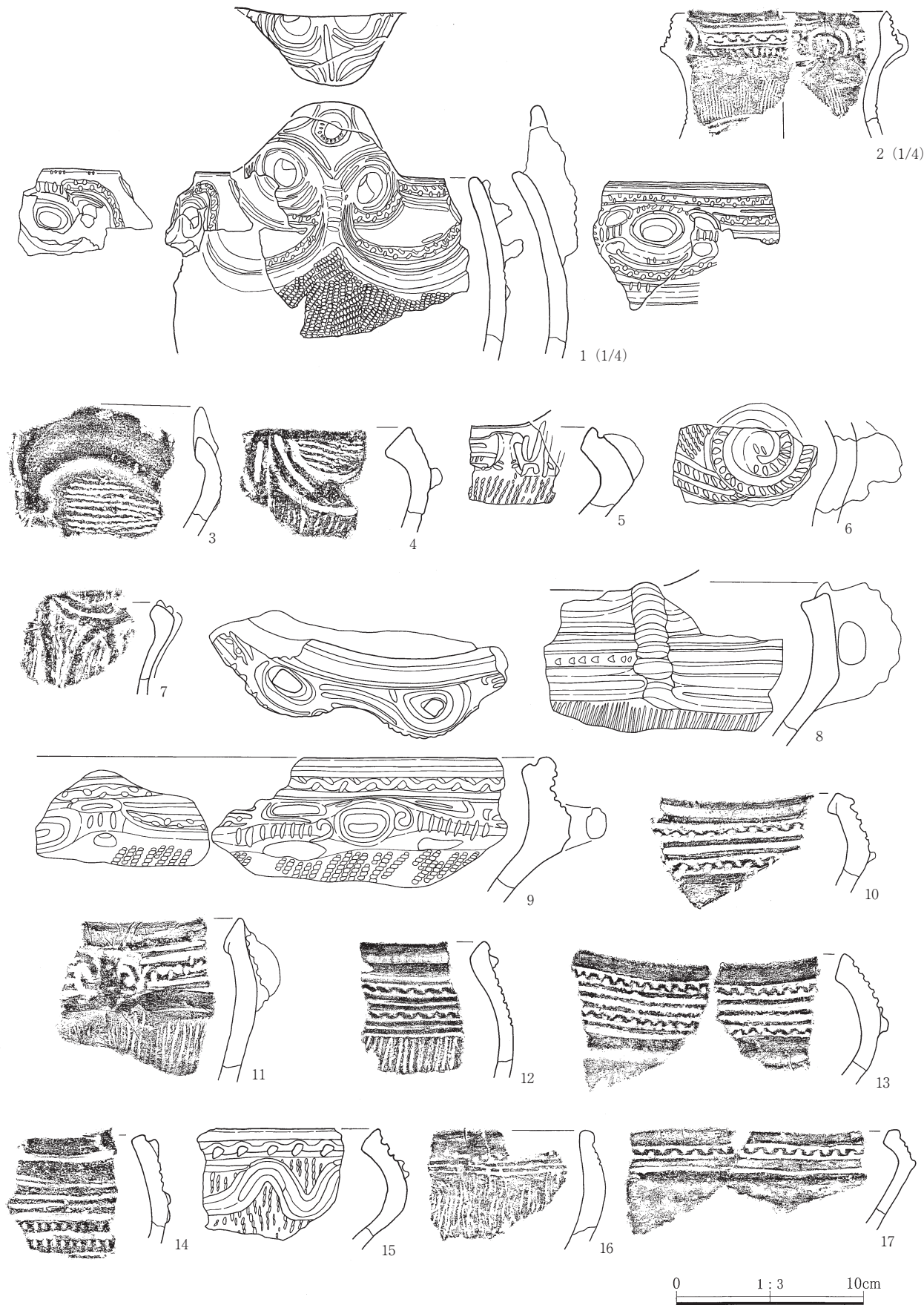


第122図 20区出土土器 (32)

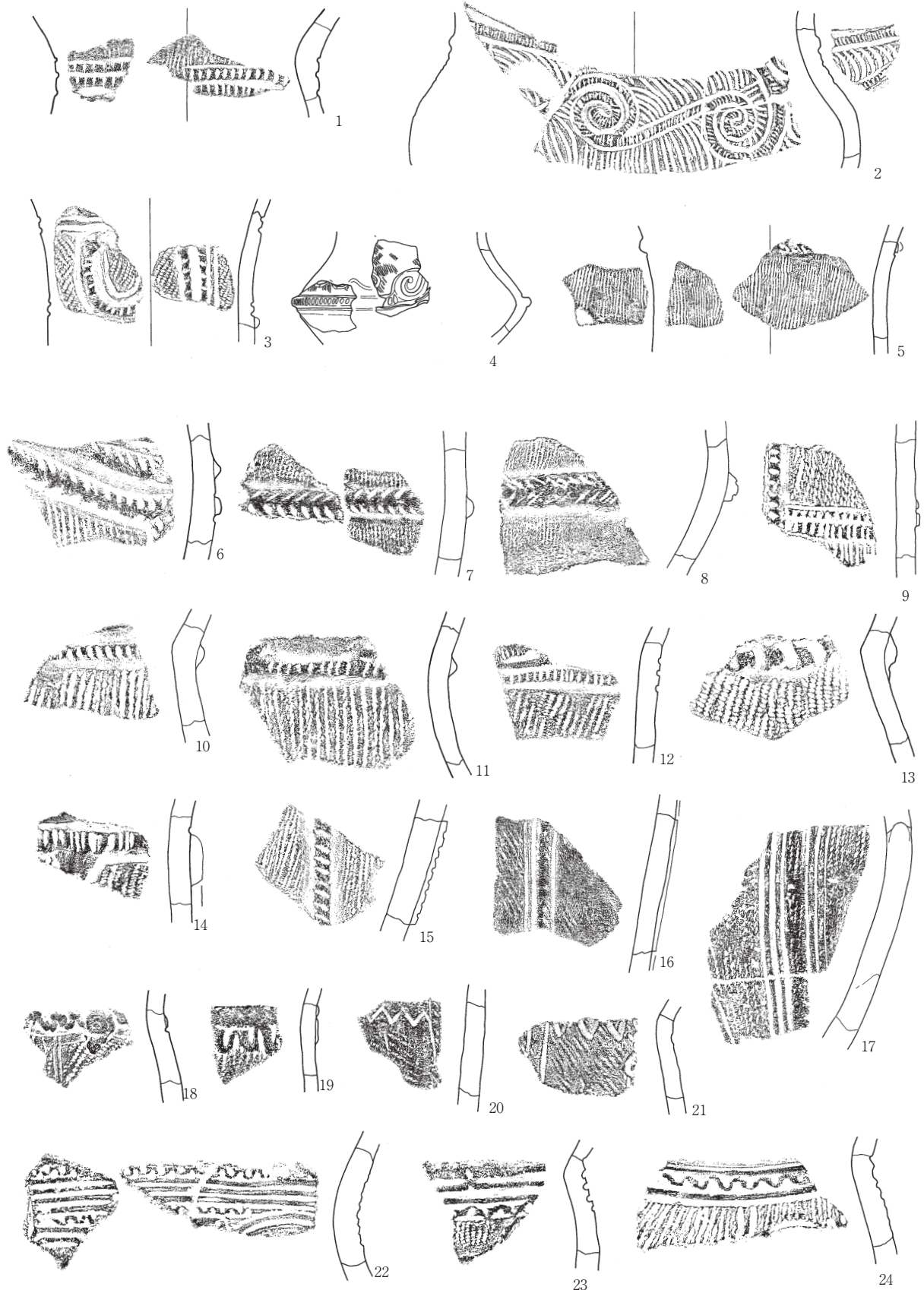


第123図 20区出土土器 (33)

0 1:3 10cm

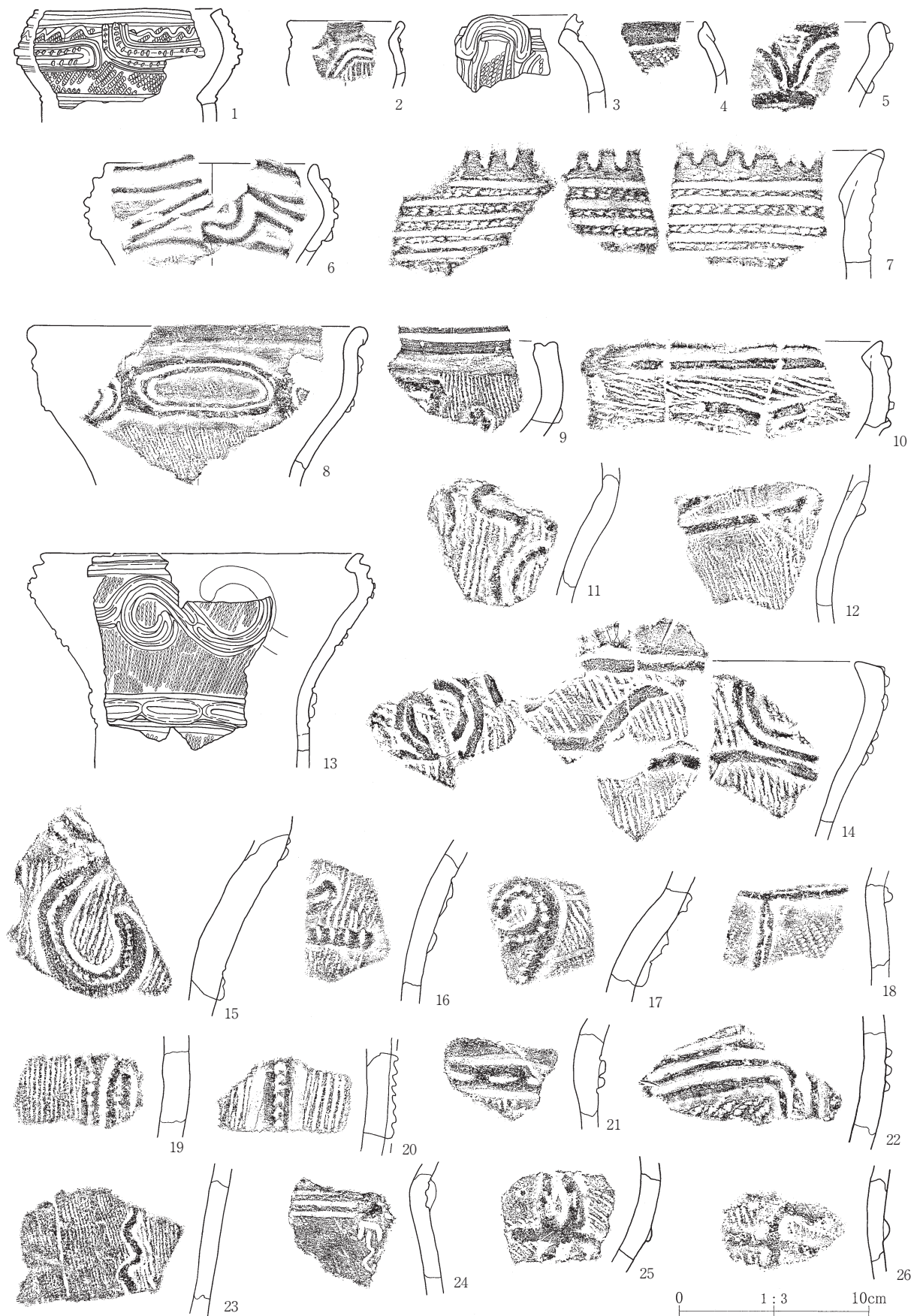


第124図 20区出土土器 (34)



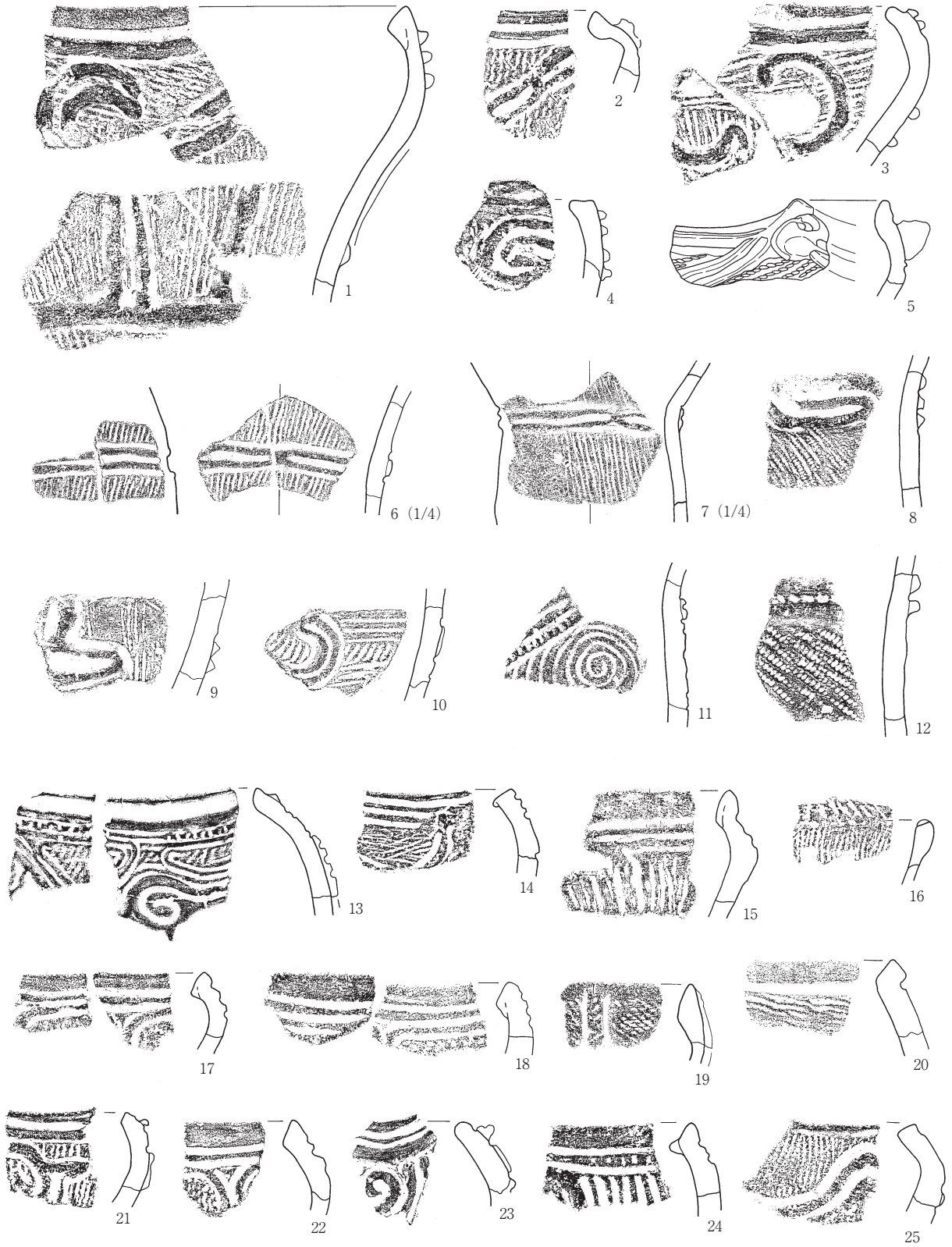
0 1:3 10cm  
1~5 (1/4)

第125図 20区出土土器 (35)



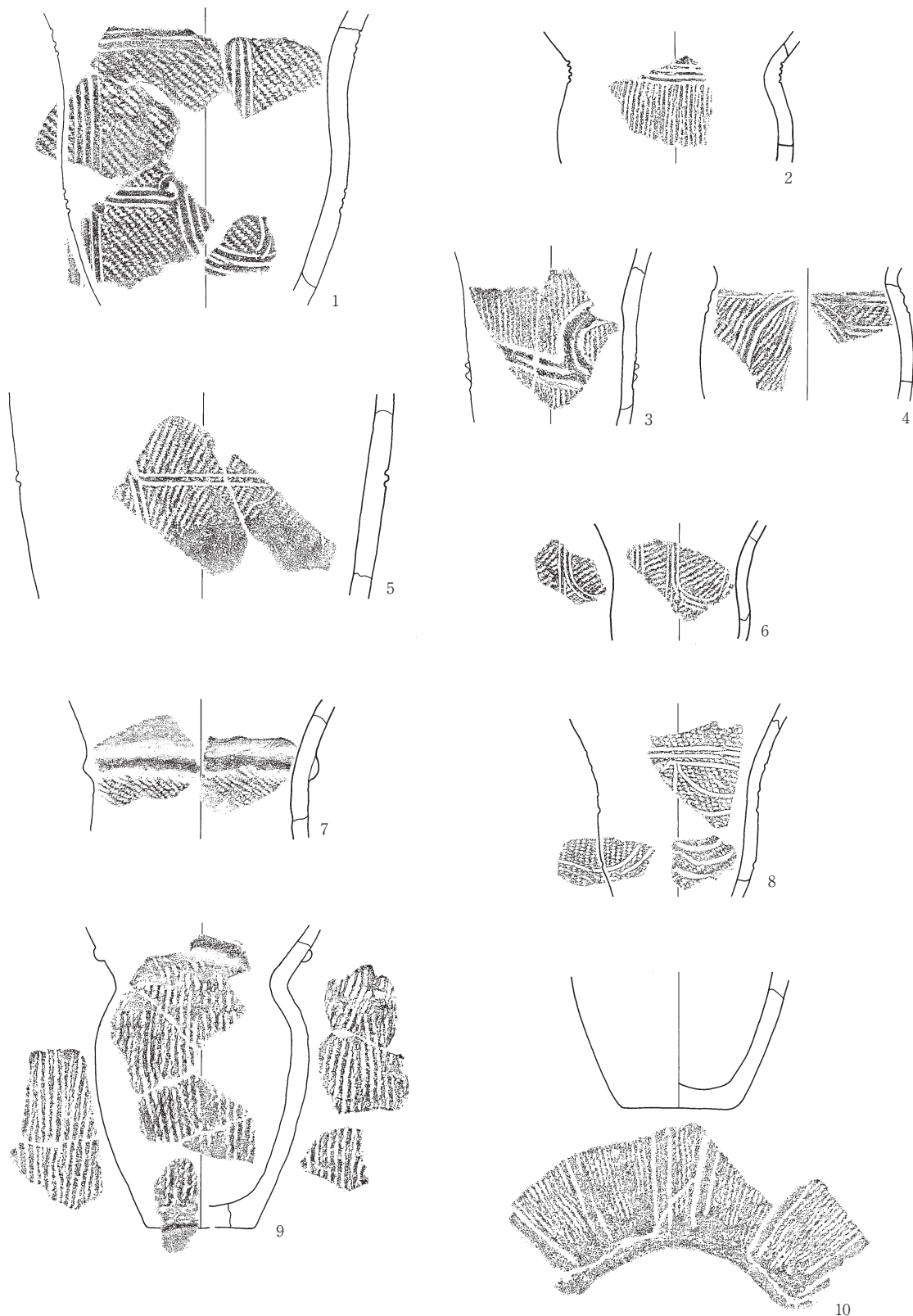
第126图 20区出土土器 (36)

0 1:3 10cm  
1·2·6·8·13 (1/4)

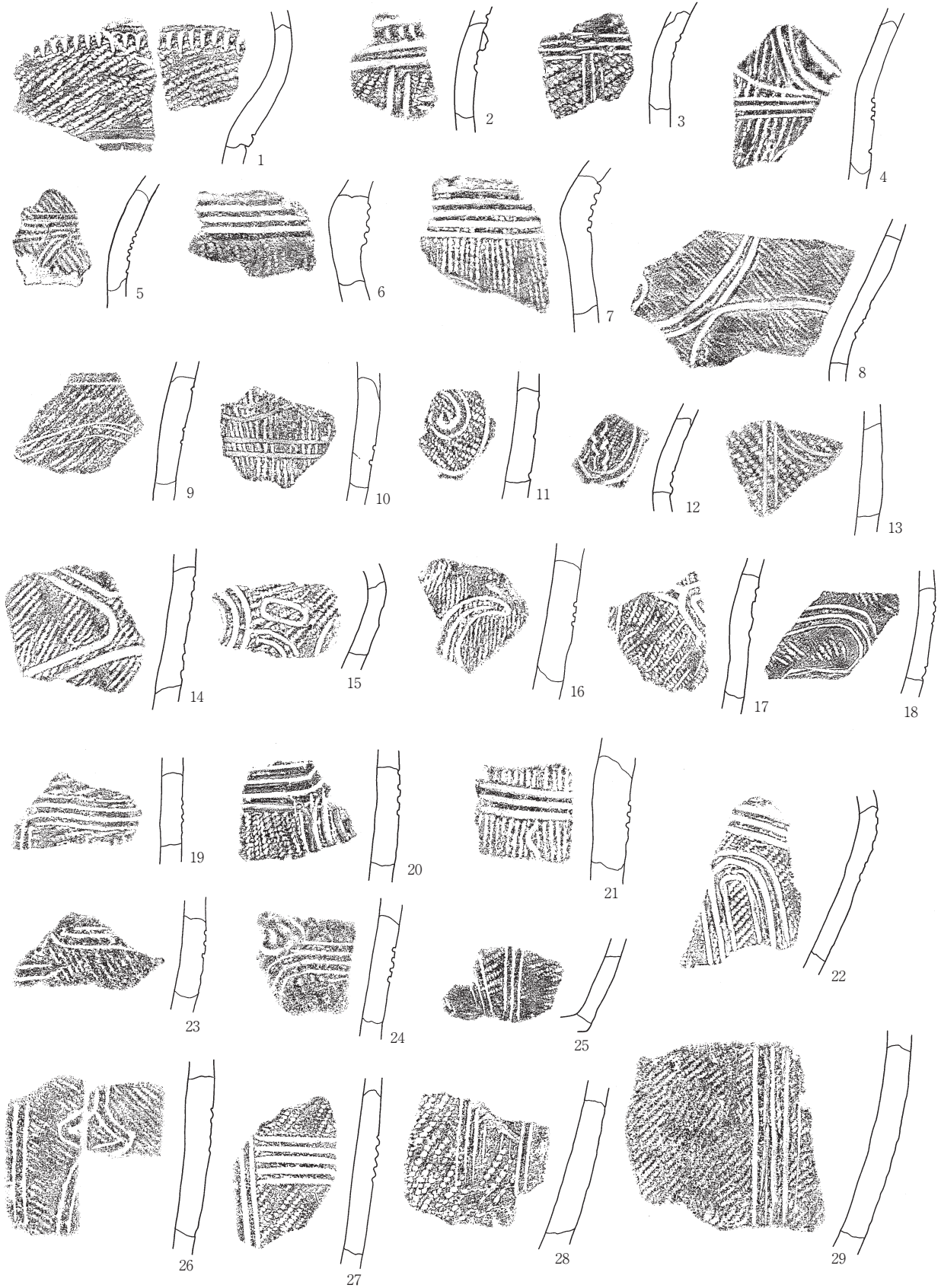


0 1:3 10cm

第127図 20区出土土器 (37)

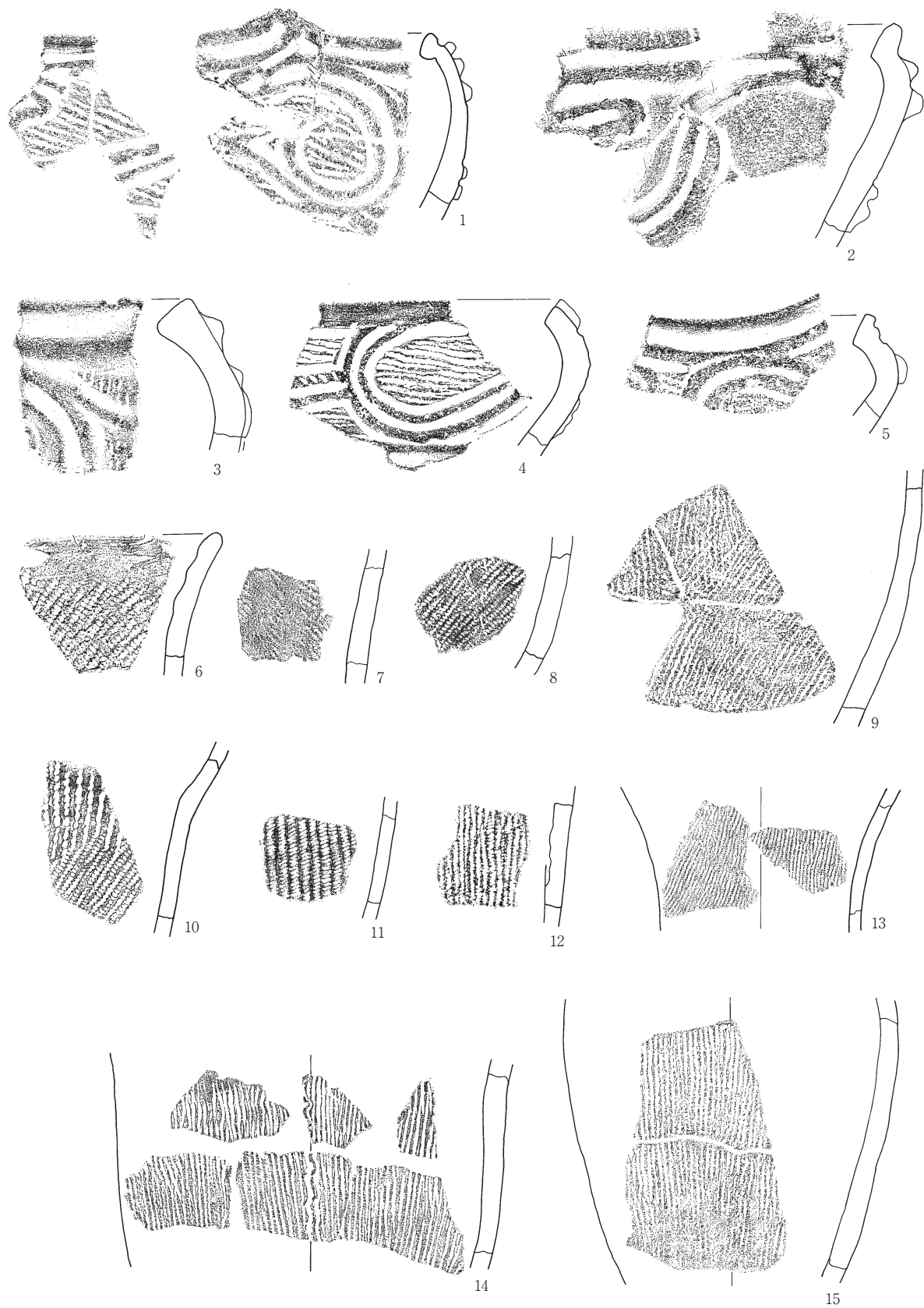


第128図 20区出土土器 (38)



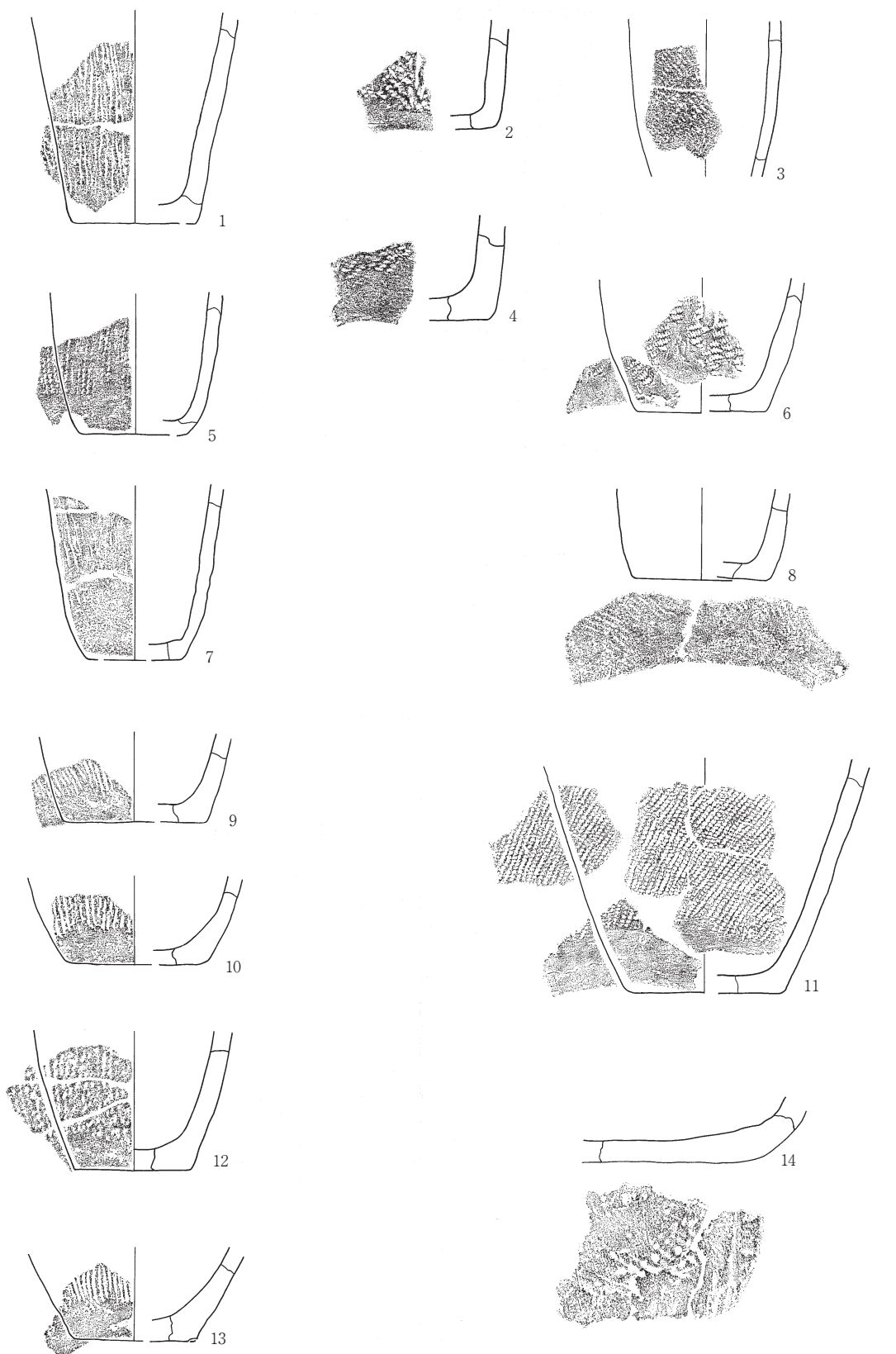
第129図 20区出土土器 (39)





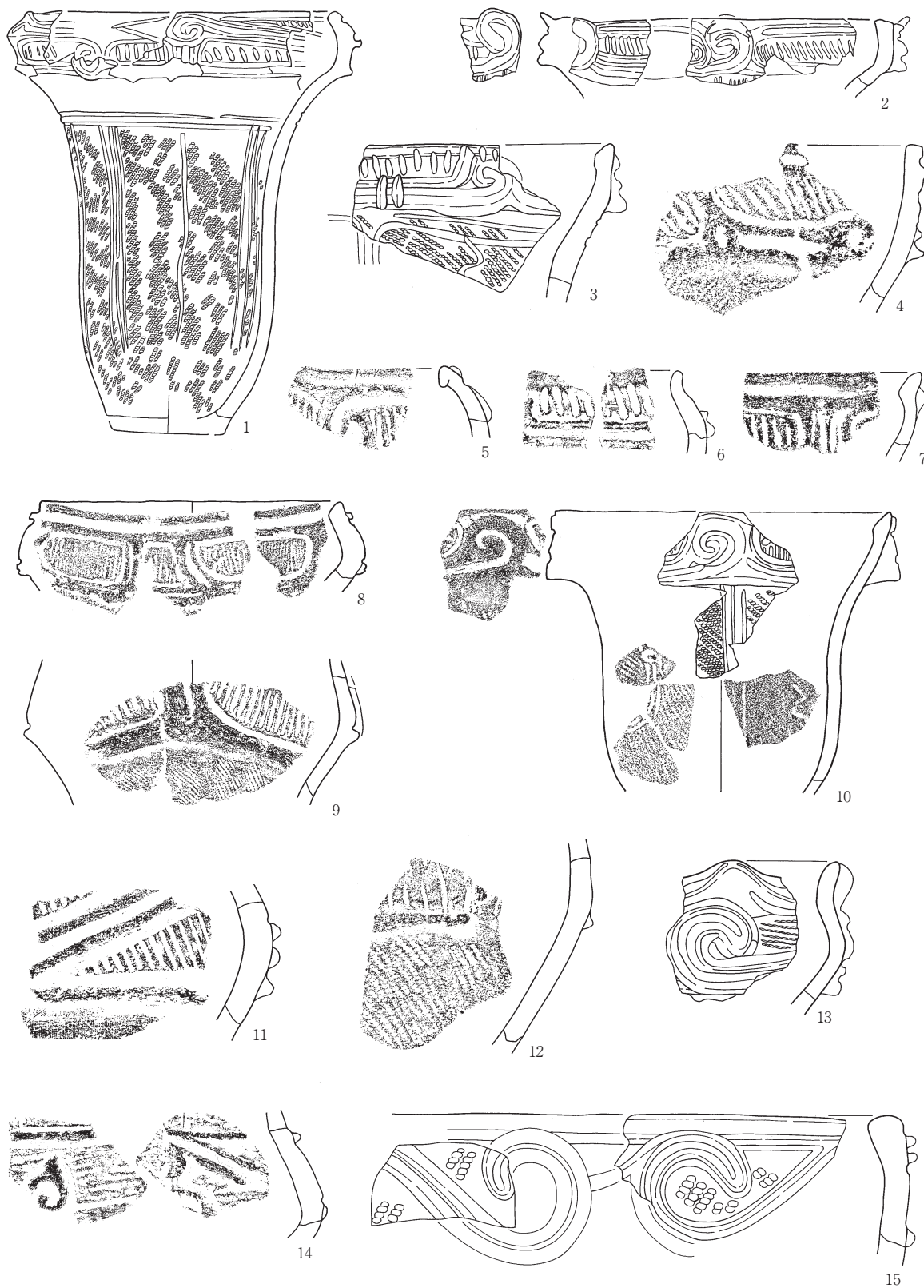
0 1:3 10cm  
13~15 (1/4)

第130图 20区出土土器 (40)



第131図 20区出土土器 (41)

0 1:4 10cm  
2・4・14 (1/3)



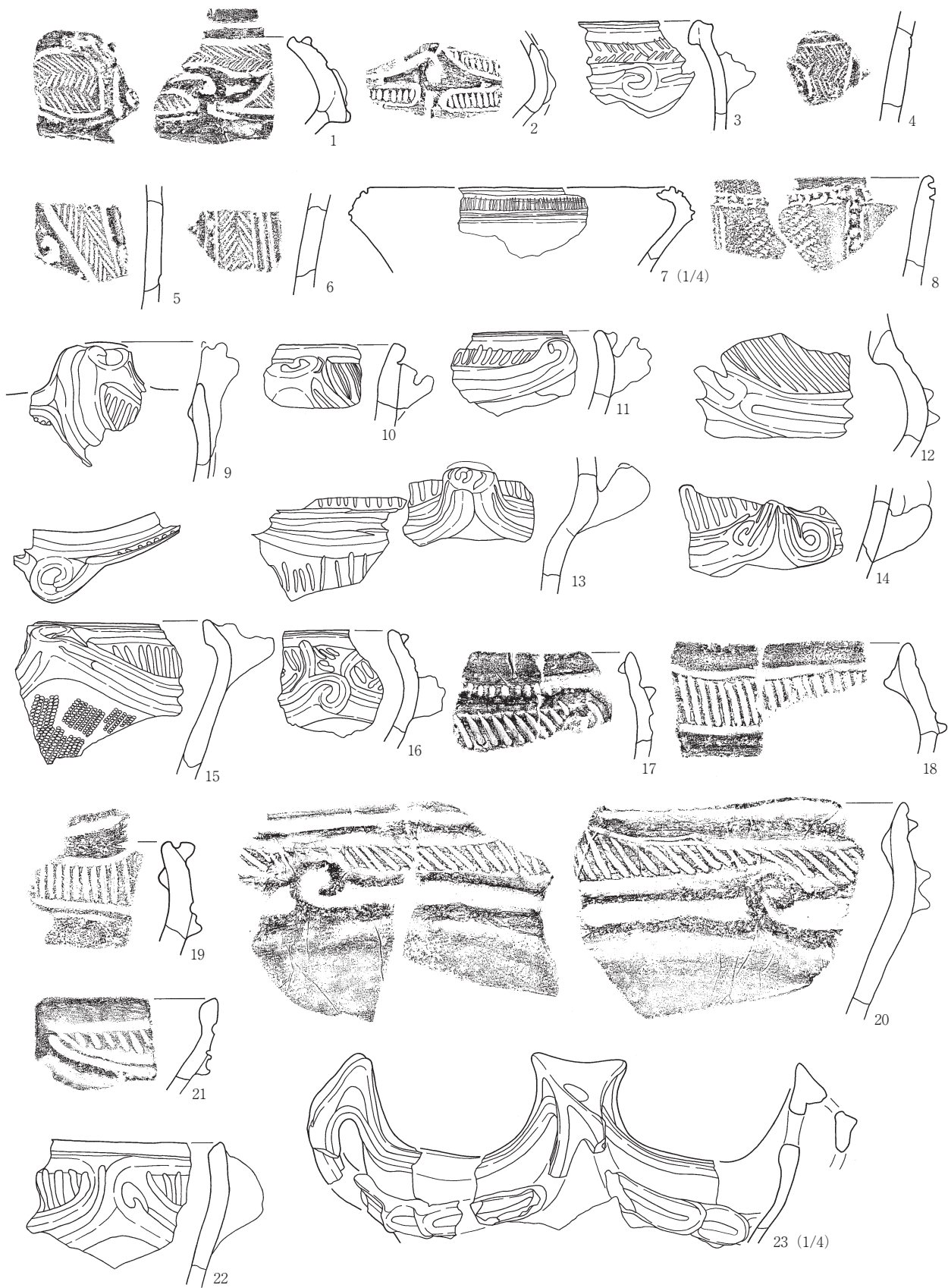
0 1:3 10cm  
1·2·8·9·10 (1/4)

第132图 20区出土土器 (42)



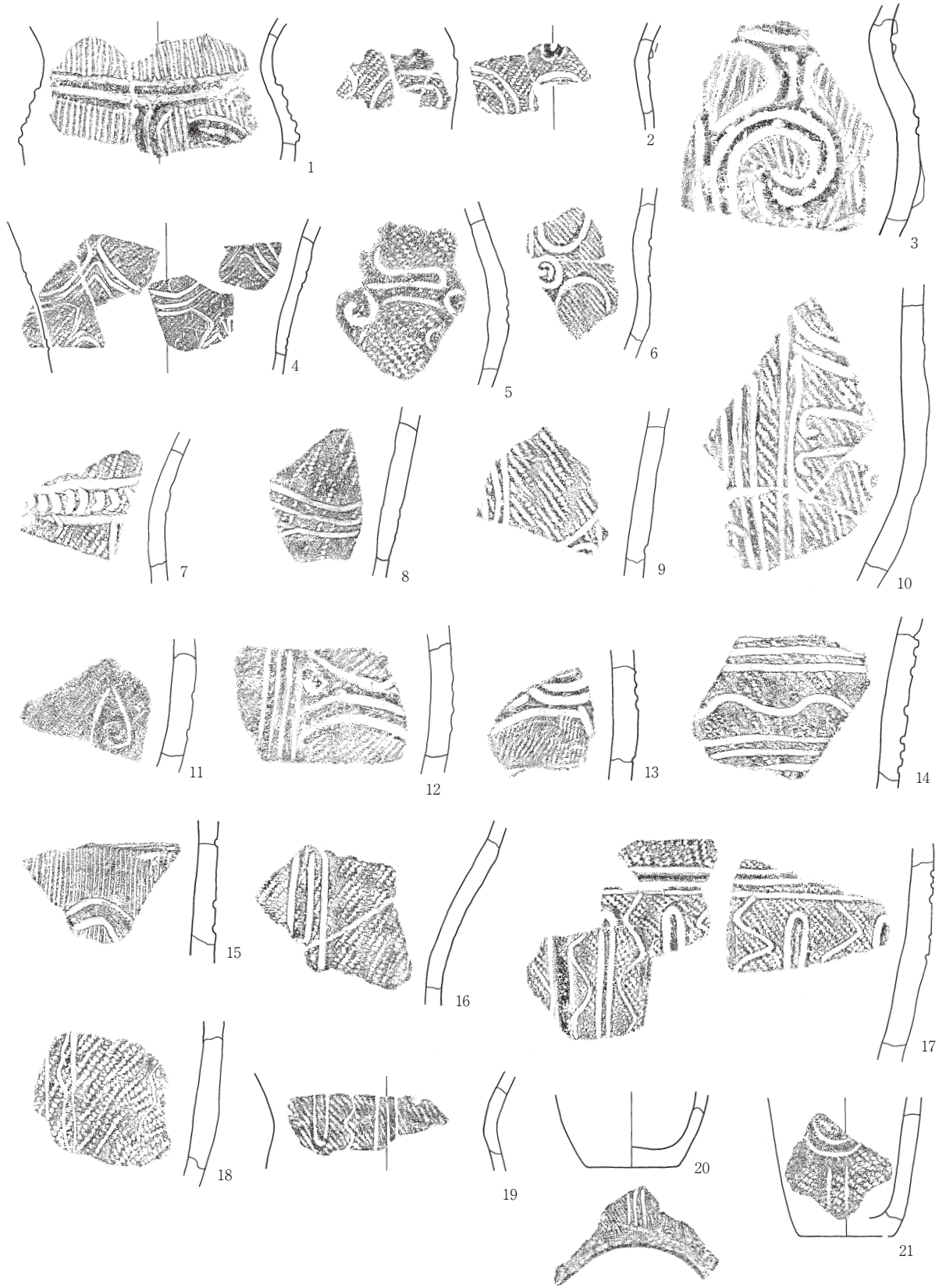
第133図 20区出土土器 (43)

0 1:3 10cm  
1・15・17・18 (1/4)



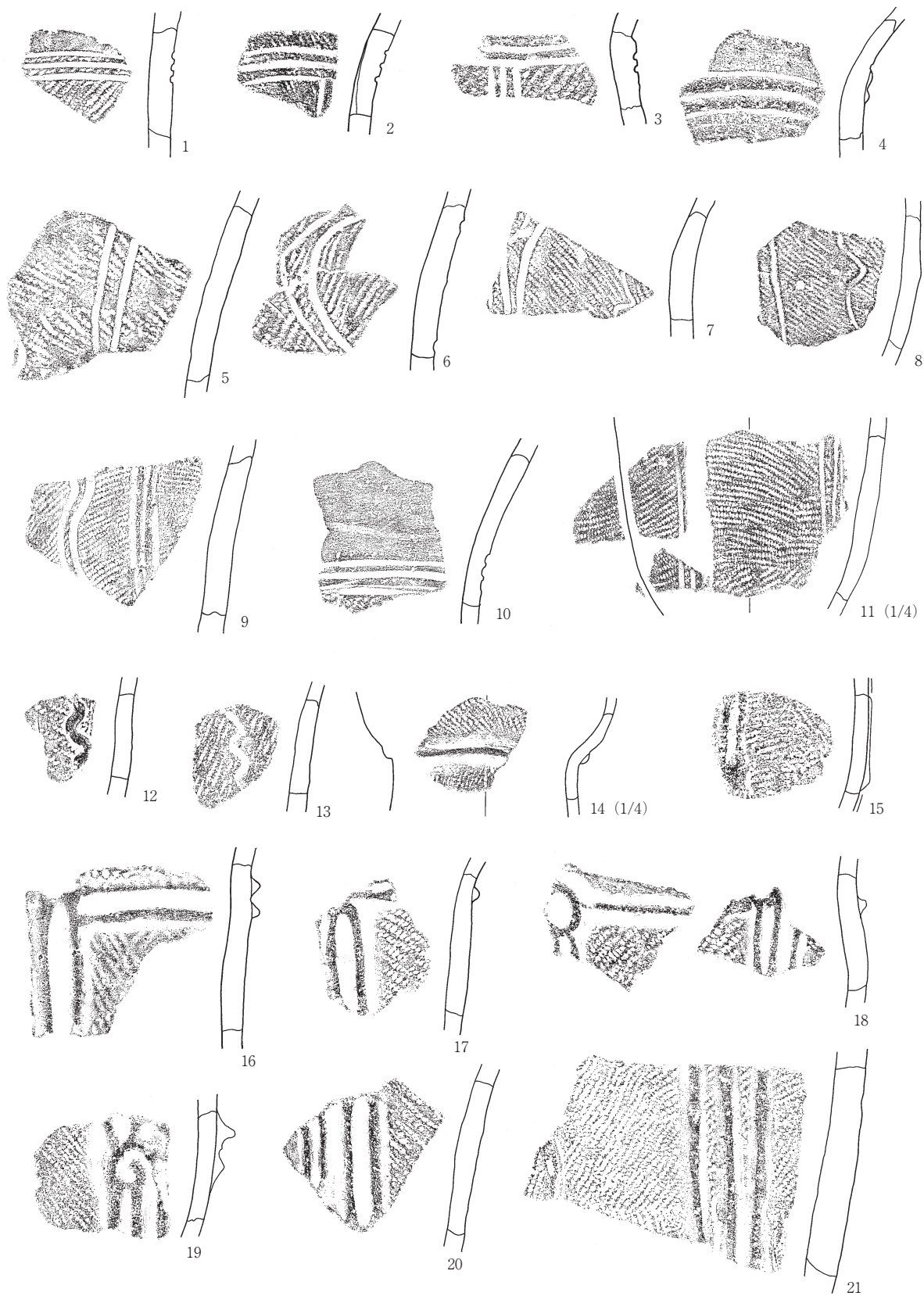
0 1 : 3 10cm

第134图 20区出土土器 (44)



第135図 20区出土土器 (45)

0 1:3 10cm  
1・2・4・20・21 (1/4)



0 1:3 10cm

第136図 20区出土土器 (46)



第137図 20区出土土器 (47)

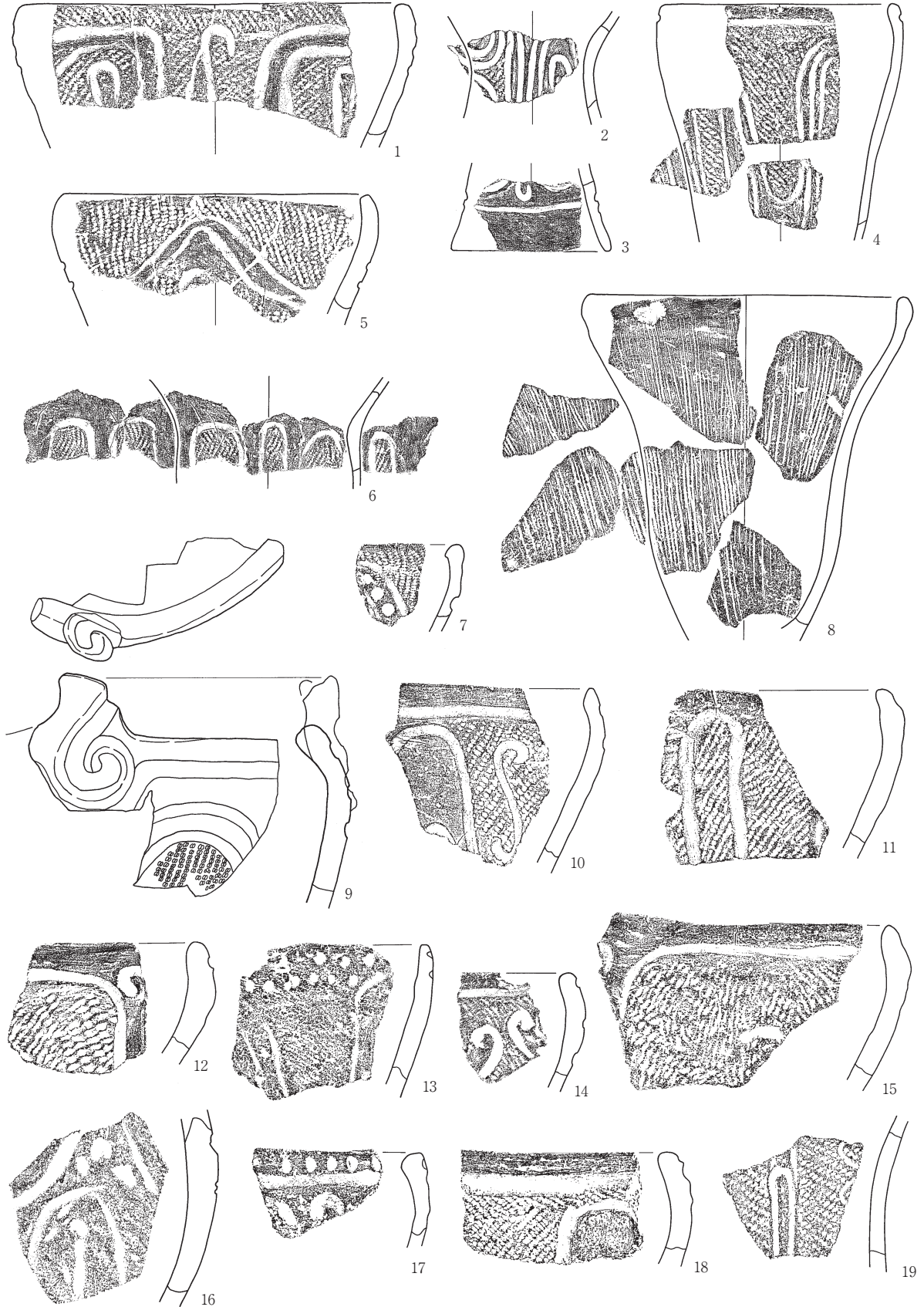
0 1 : 4 10cm  
2 · 4 · 8 · 10 · 11 (1/3)





0 1:4 10cm  
2·3·6·9 (1/3)

第138図 20区出土土器 (48)



0 1 : 3 10cm  
1~6・8 (1/4)

第139図 20区出土土器 (49)



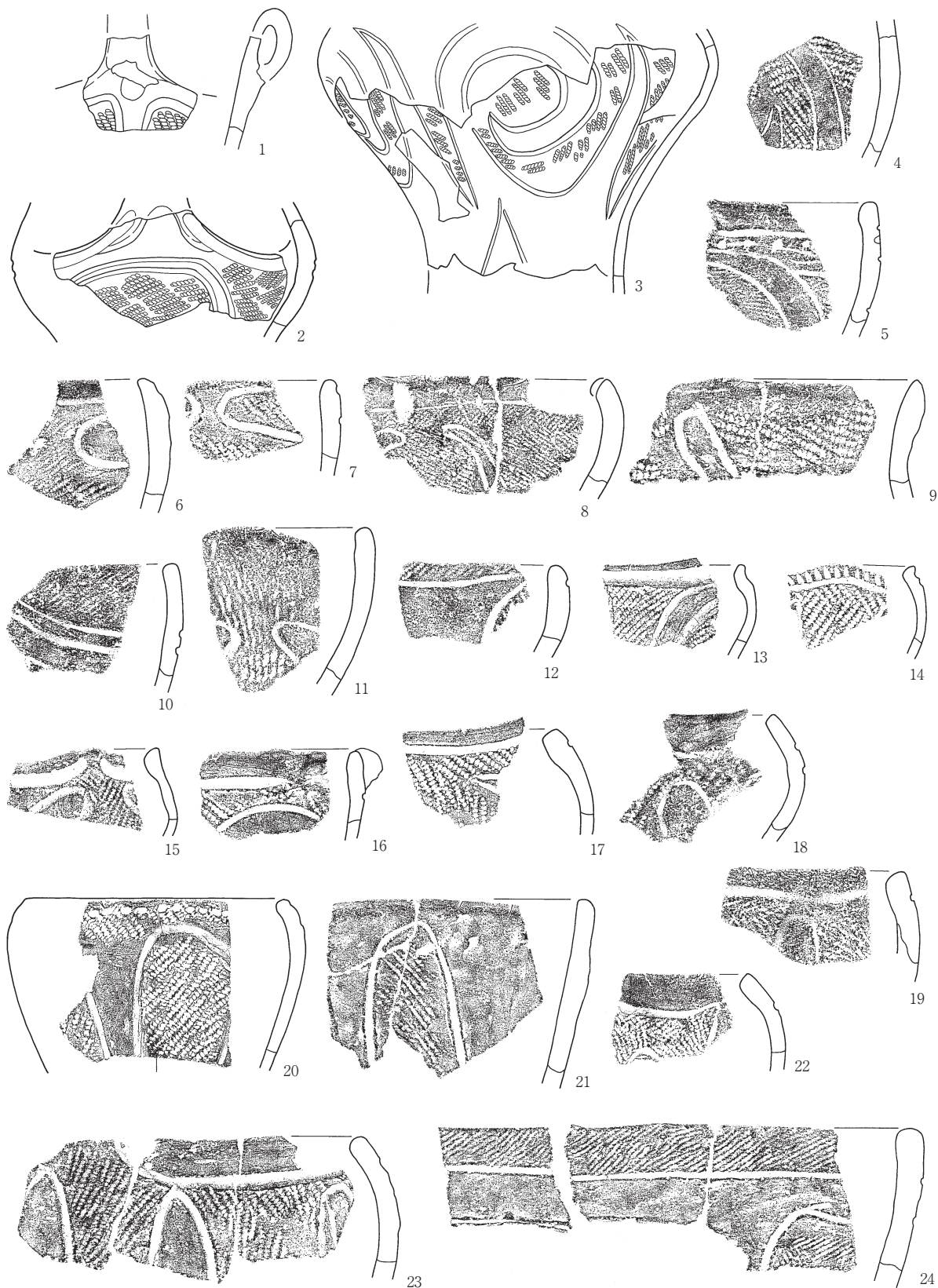
0 1:3 10cm  
5 · 14 · 15 (1/4)

第140图 20区出土土器 (50)



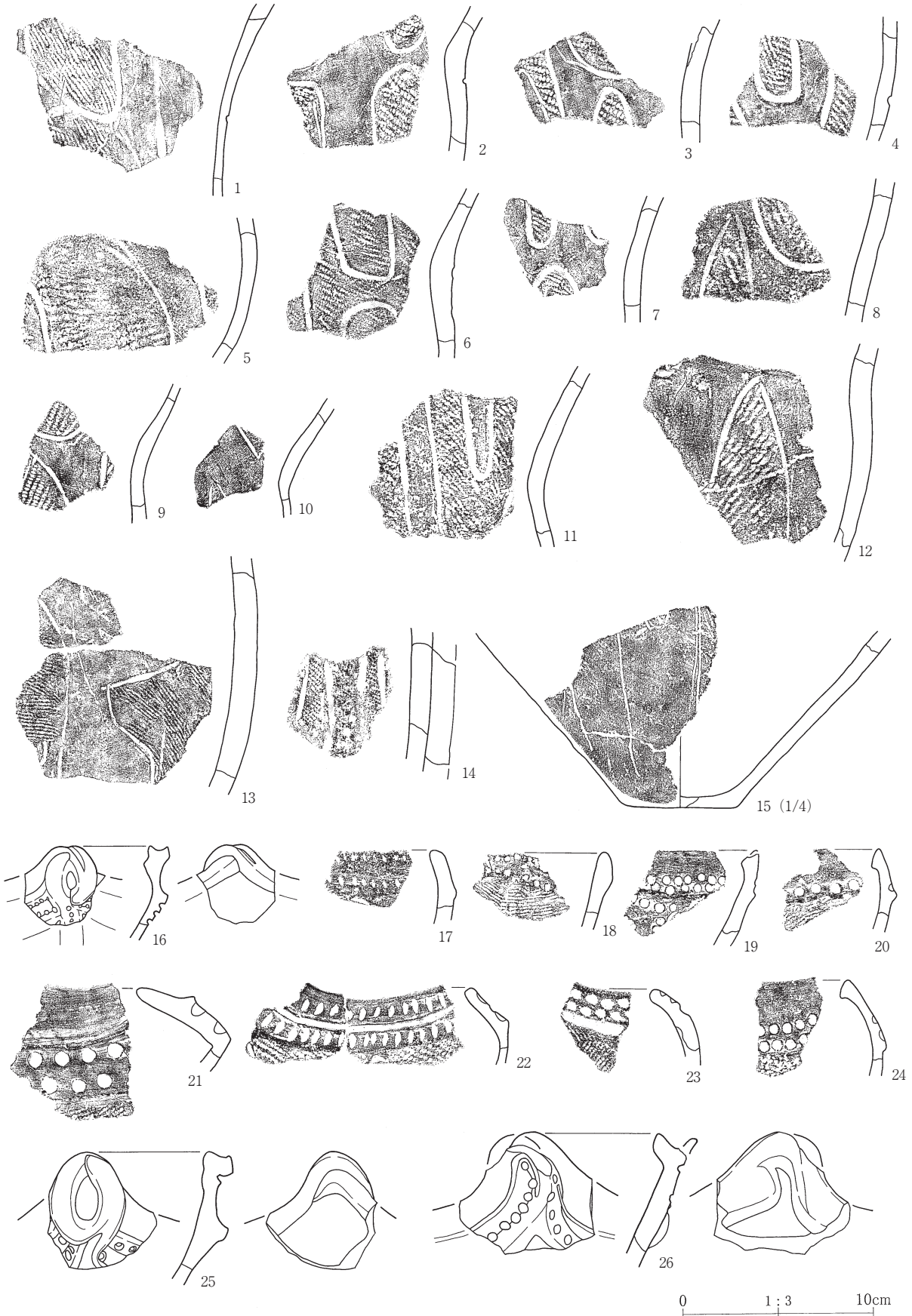
第141図 20区出土土器 (51)

0 1:3 10cm

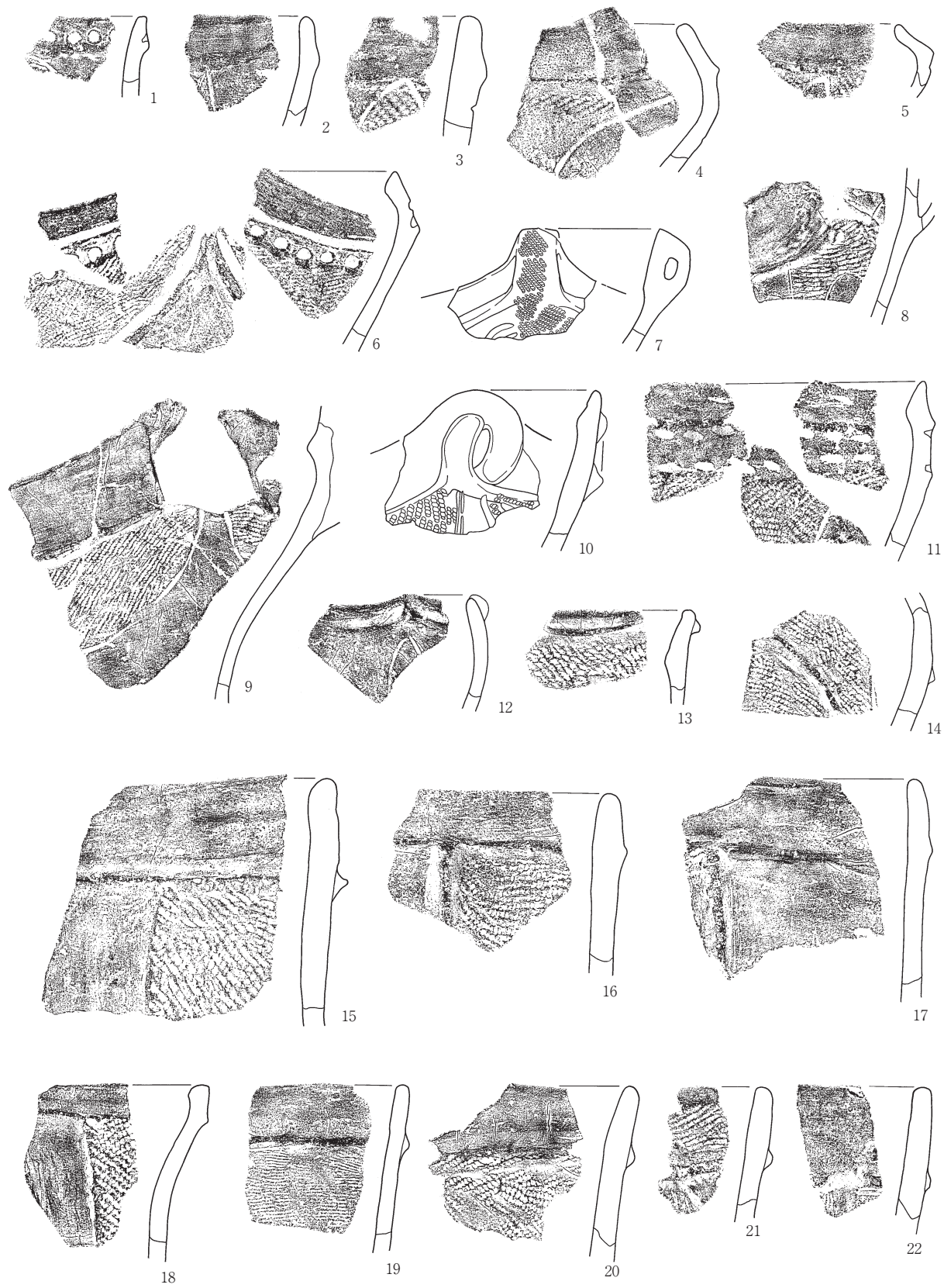


第142図 20区出土土器 (52)

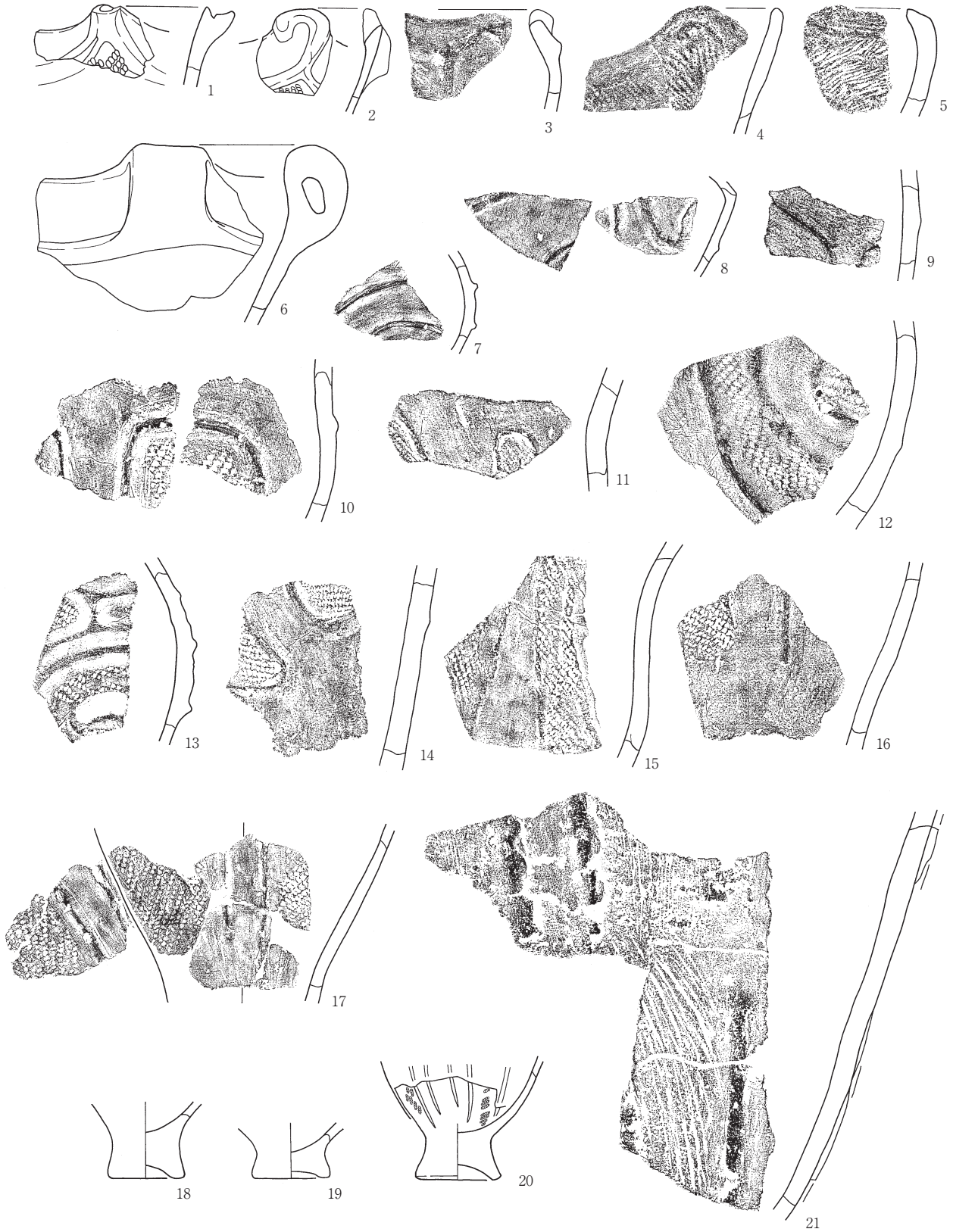
0 1:3 10cm  
2・3・20 (1/4)



第143図 20区出土土器 (53)



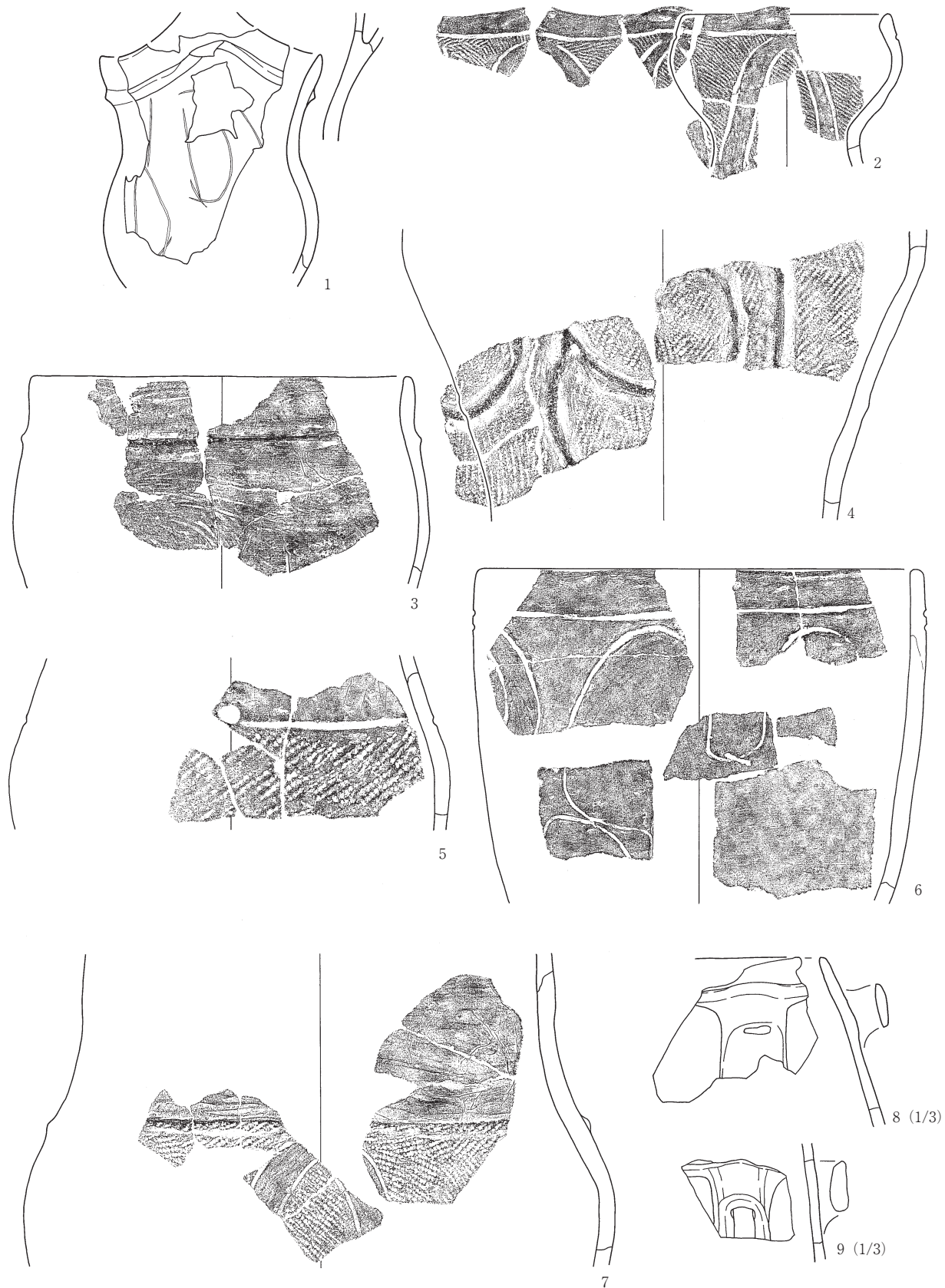
第144図 20区出土土器 (54)



第145図 20区出土土器 (55)

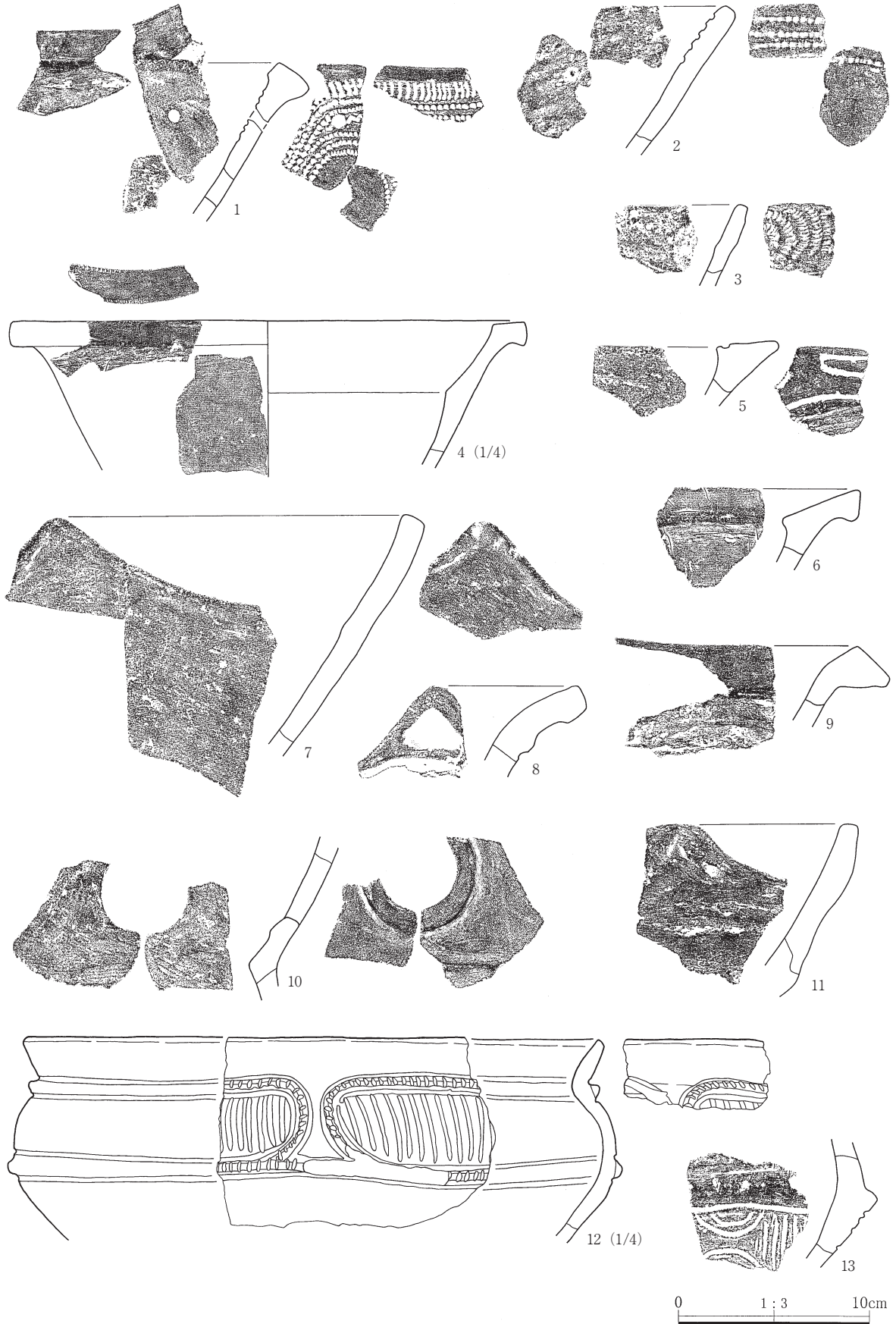
0 1:3 10cm  
17~20 (1/4)



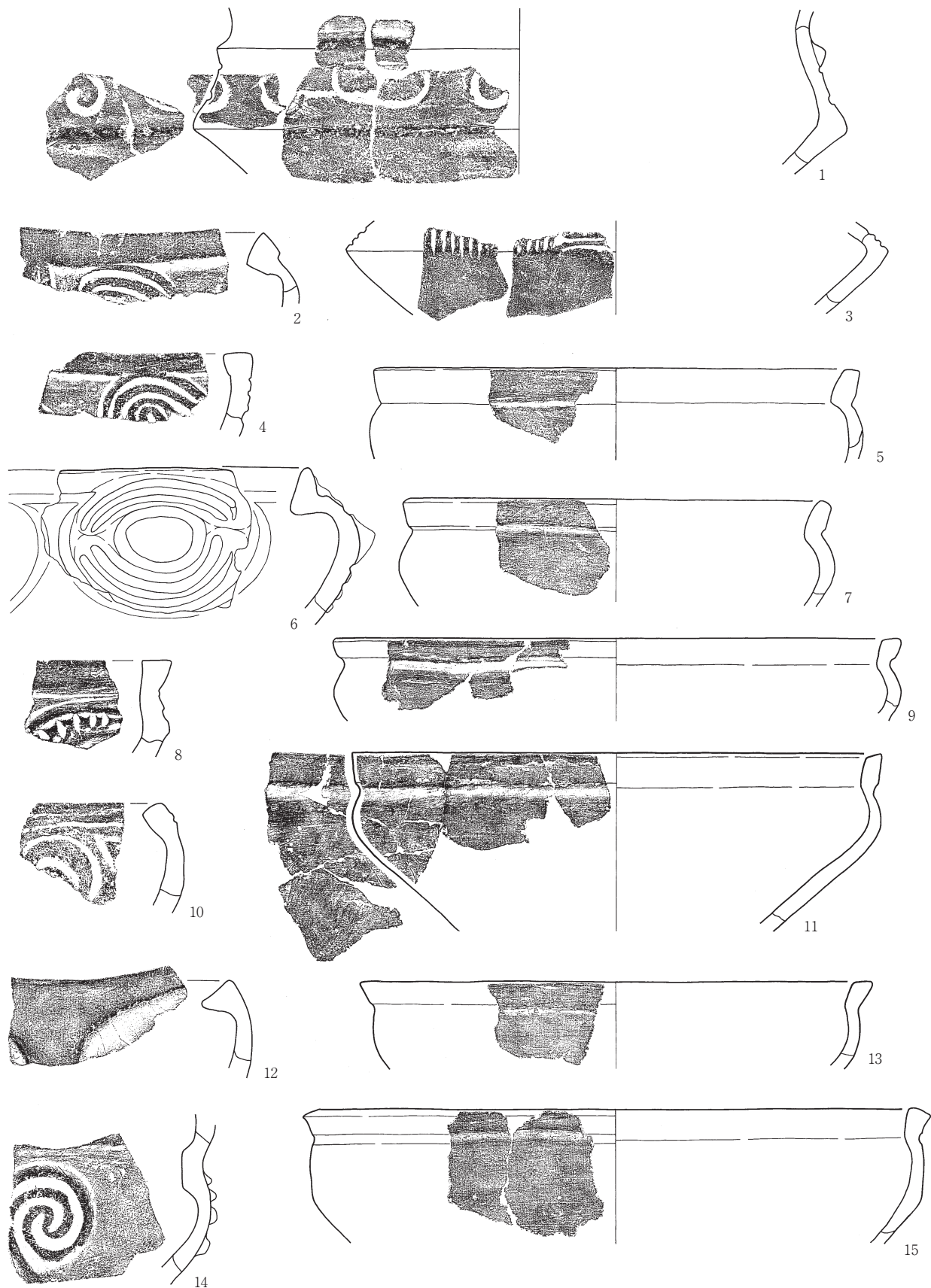


0 1 : 4 10cm

第146図 20区出土土器 (56)



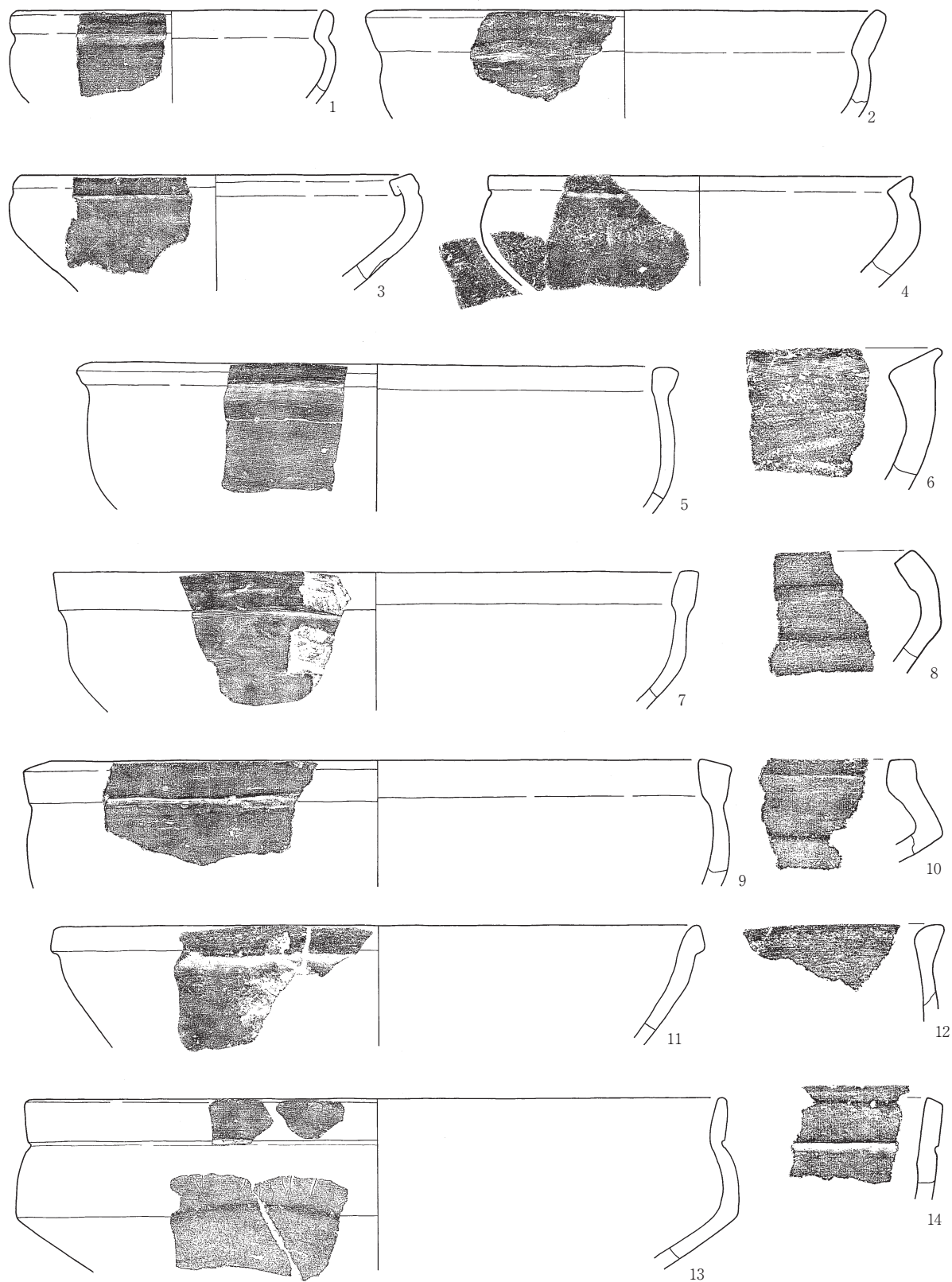
第147図 20区出土土器 (57)



0 1:4 10cm

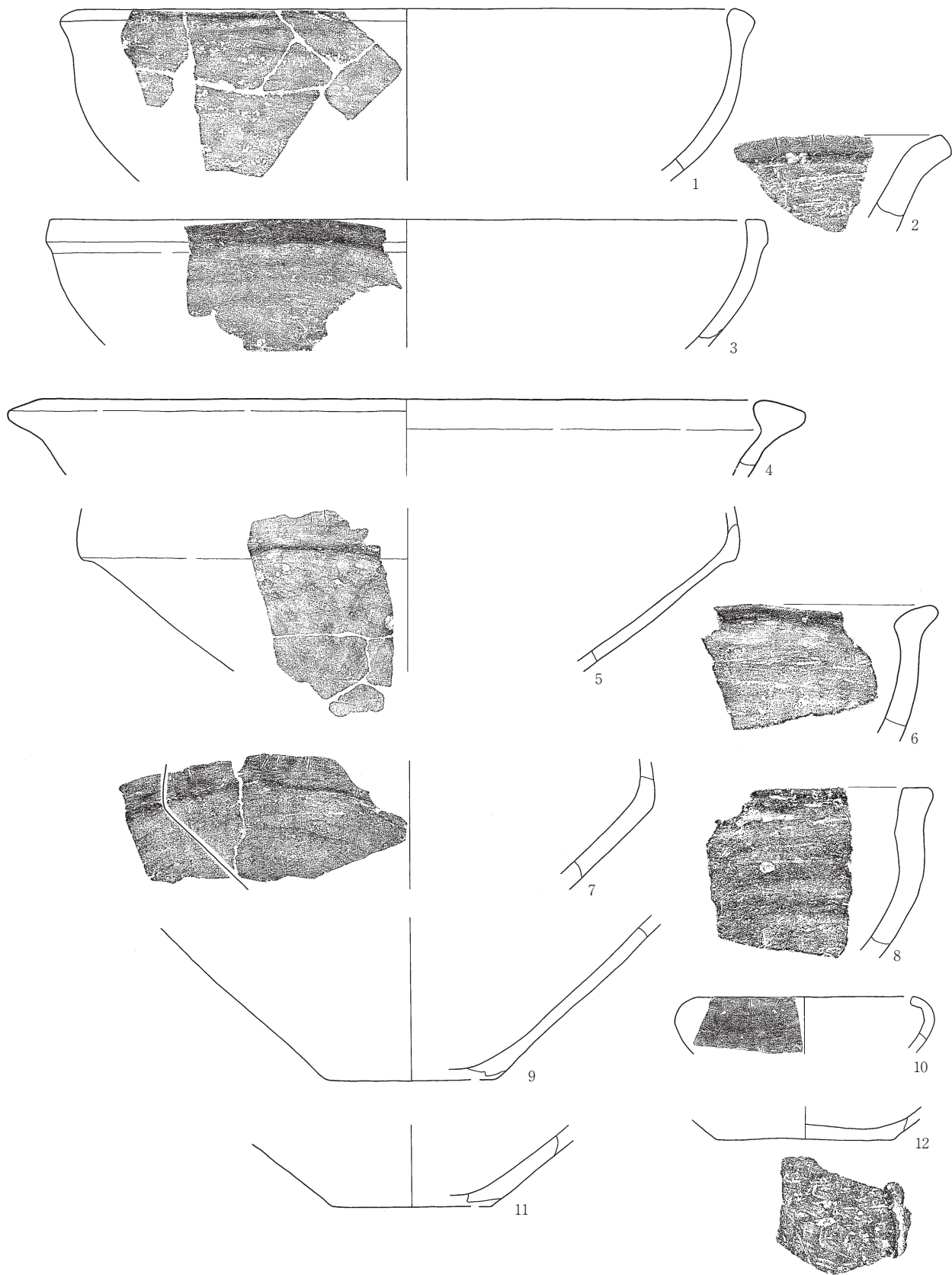
第148図 20区出土土器 (58)

2・4・6・8・10・12・14 (1/3)



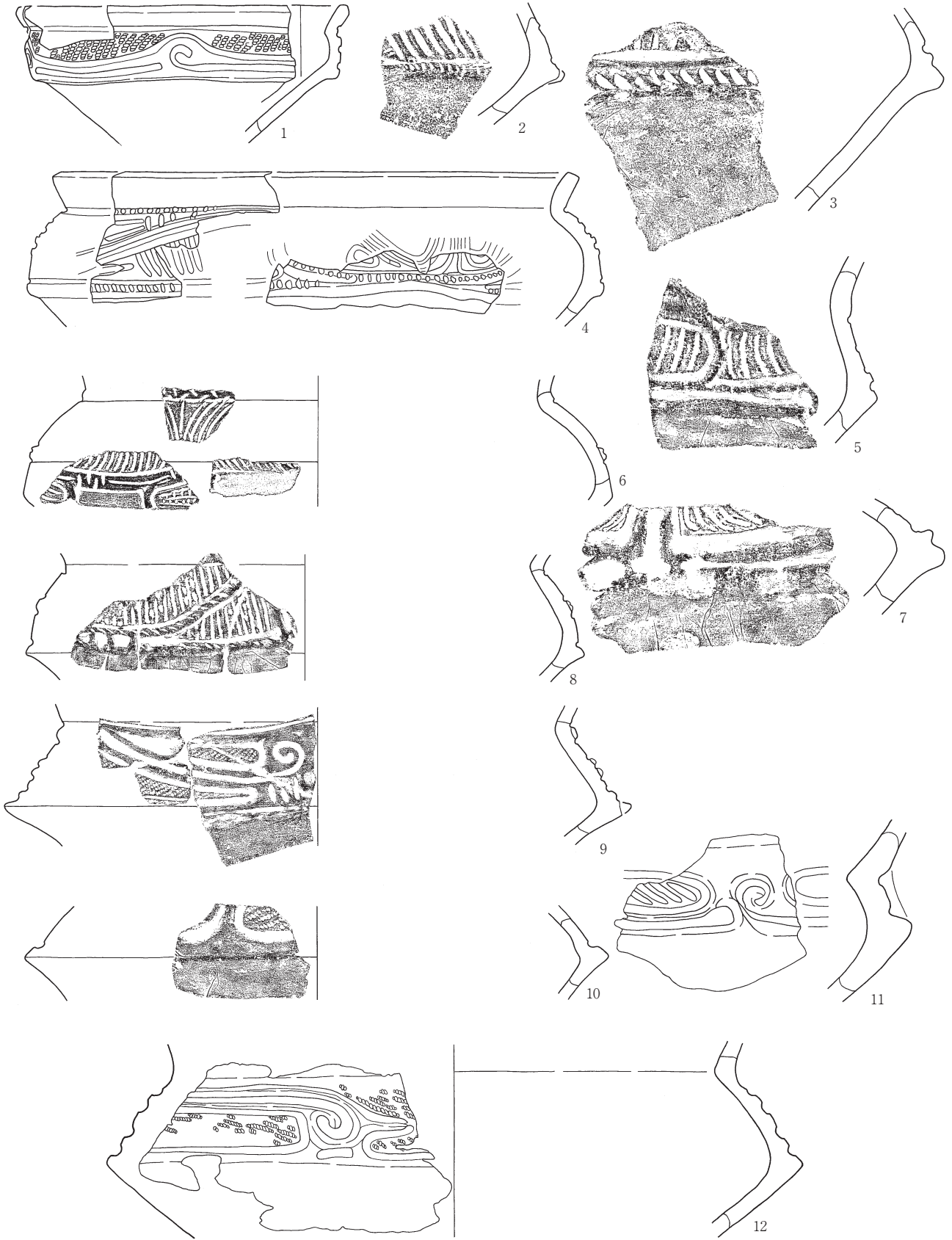
第149図 20区出土土器 (59)

0 1 : 4 10cm  
6・8・10・12・14 (1/3)



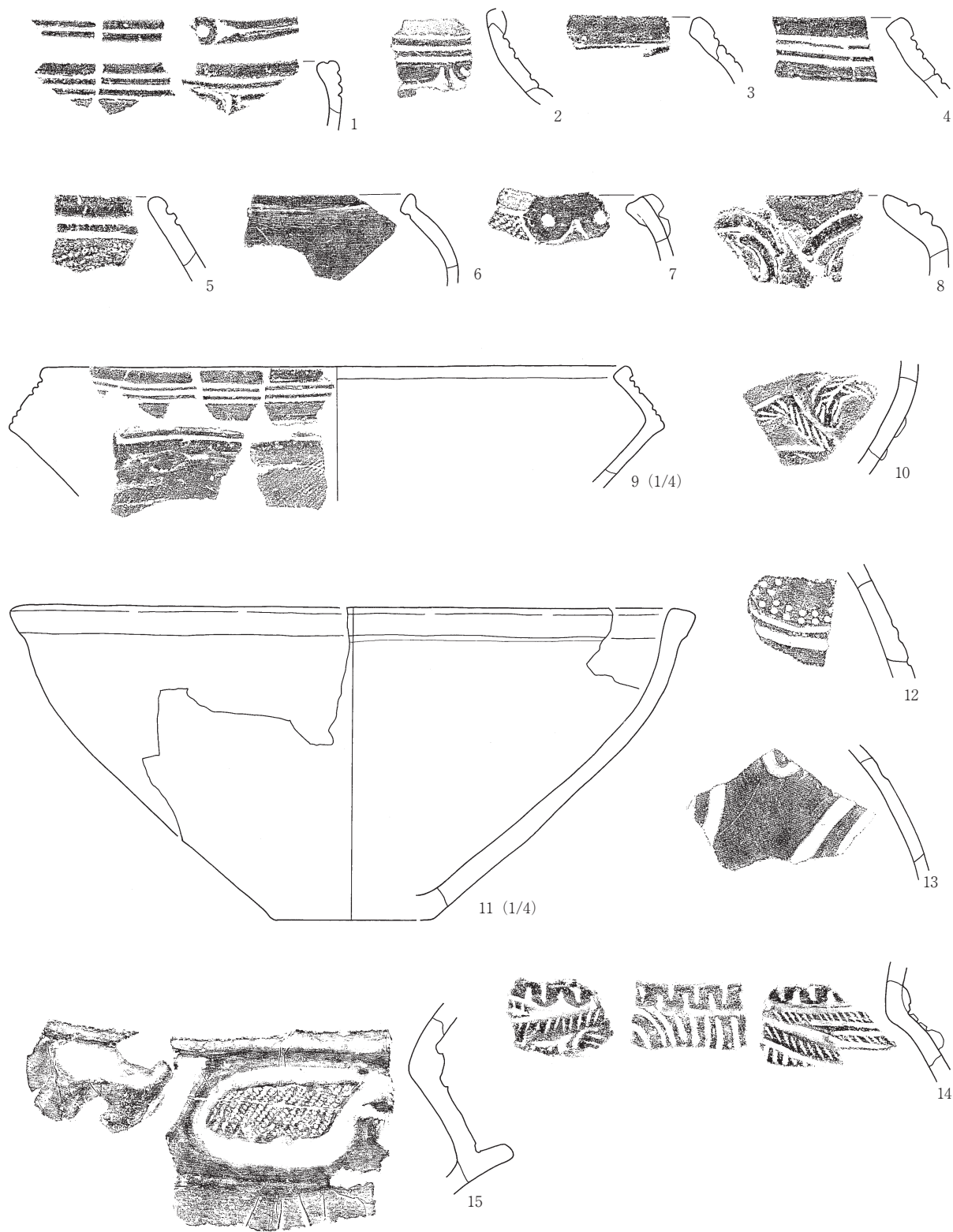
0 1:4 10cm  
2·6·8 (1/3)

第150図 20区出土土器 (60)

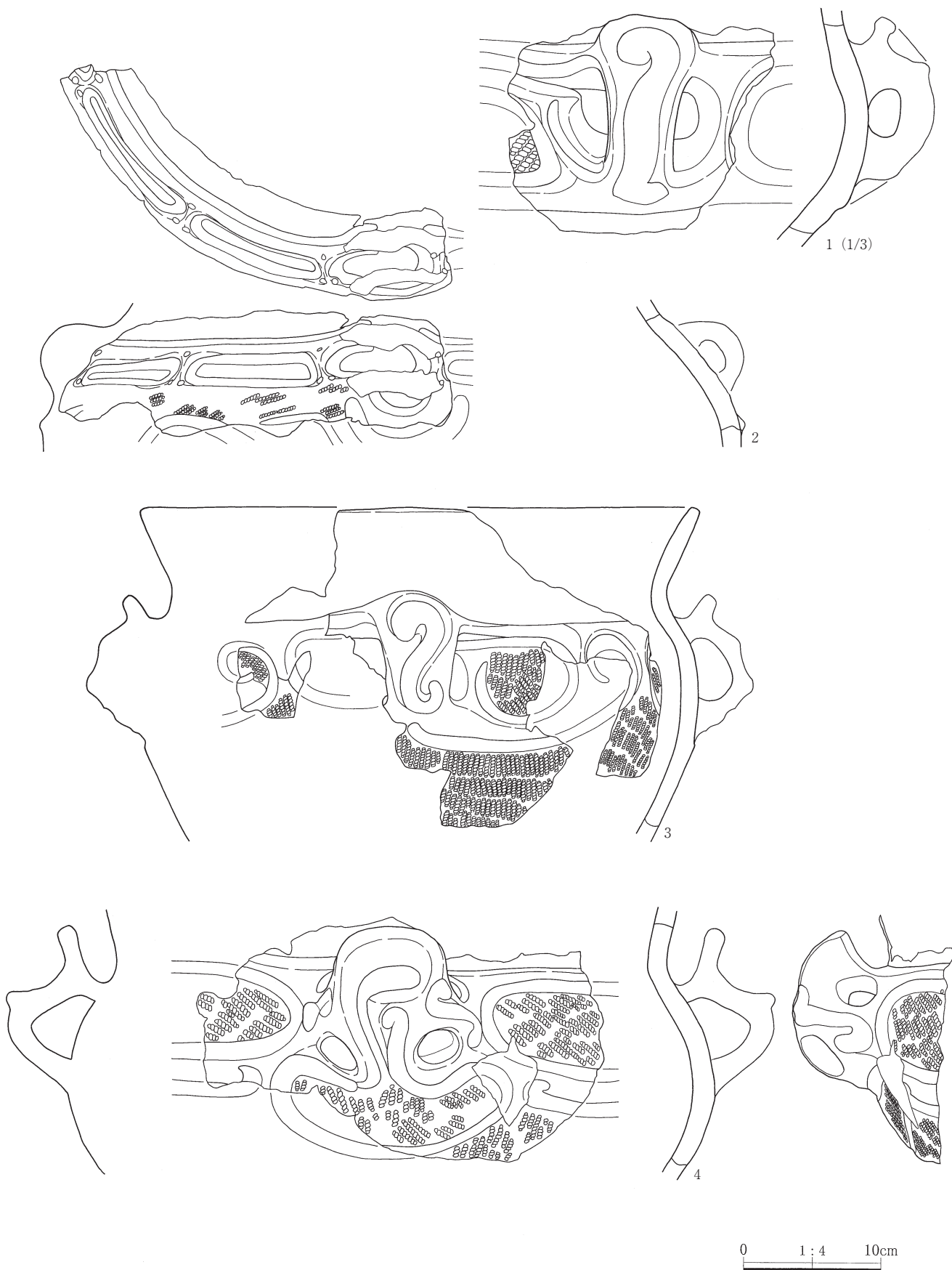


第151図 20区出土土器 (61)

0 1 : 4 10cm  
2 · 3 · 5 · 7 · 11 (1/3)

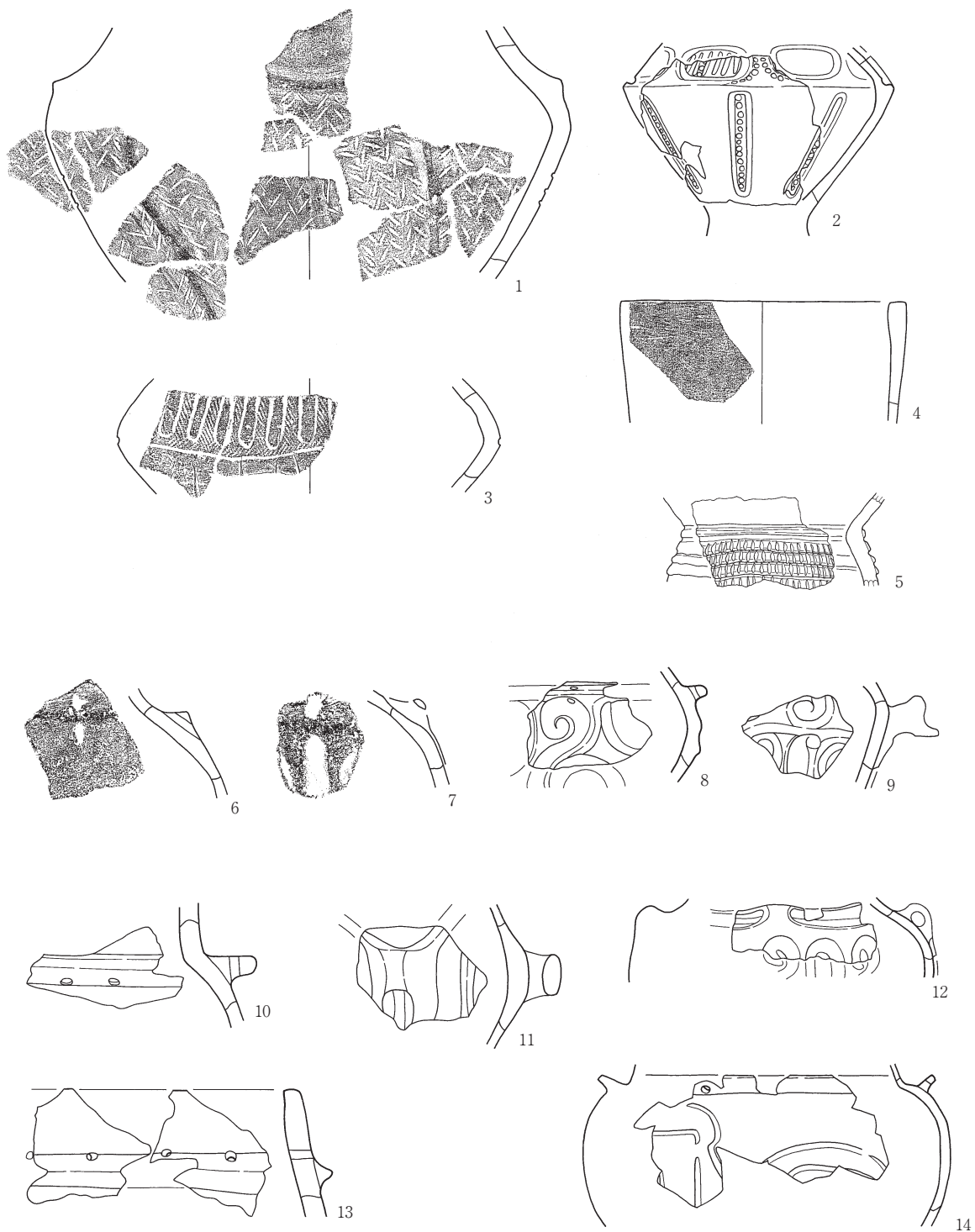


第152図 20区出土土器 (62)



第153図 20区出土土器 (63)





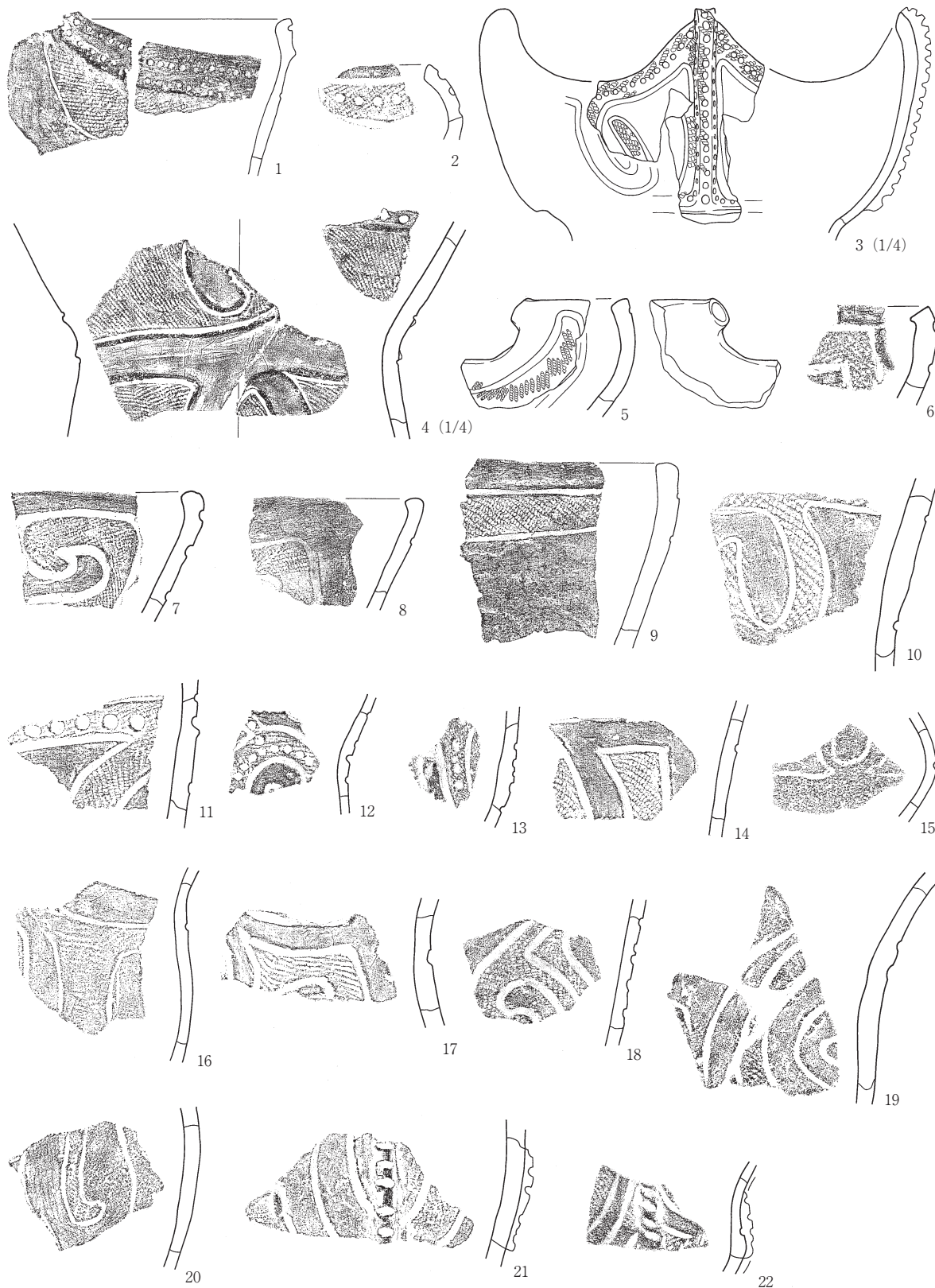
0 1:4 10cm  
6~11・13 (1/3)

第154図 20区出土土器 (64)

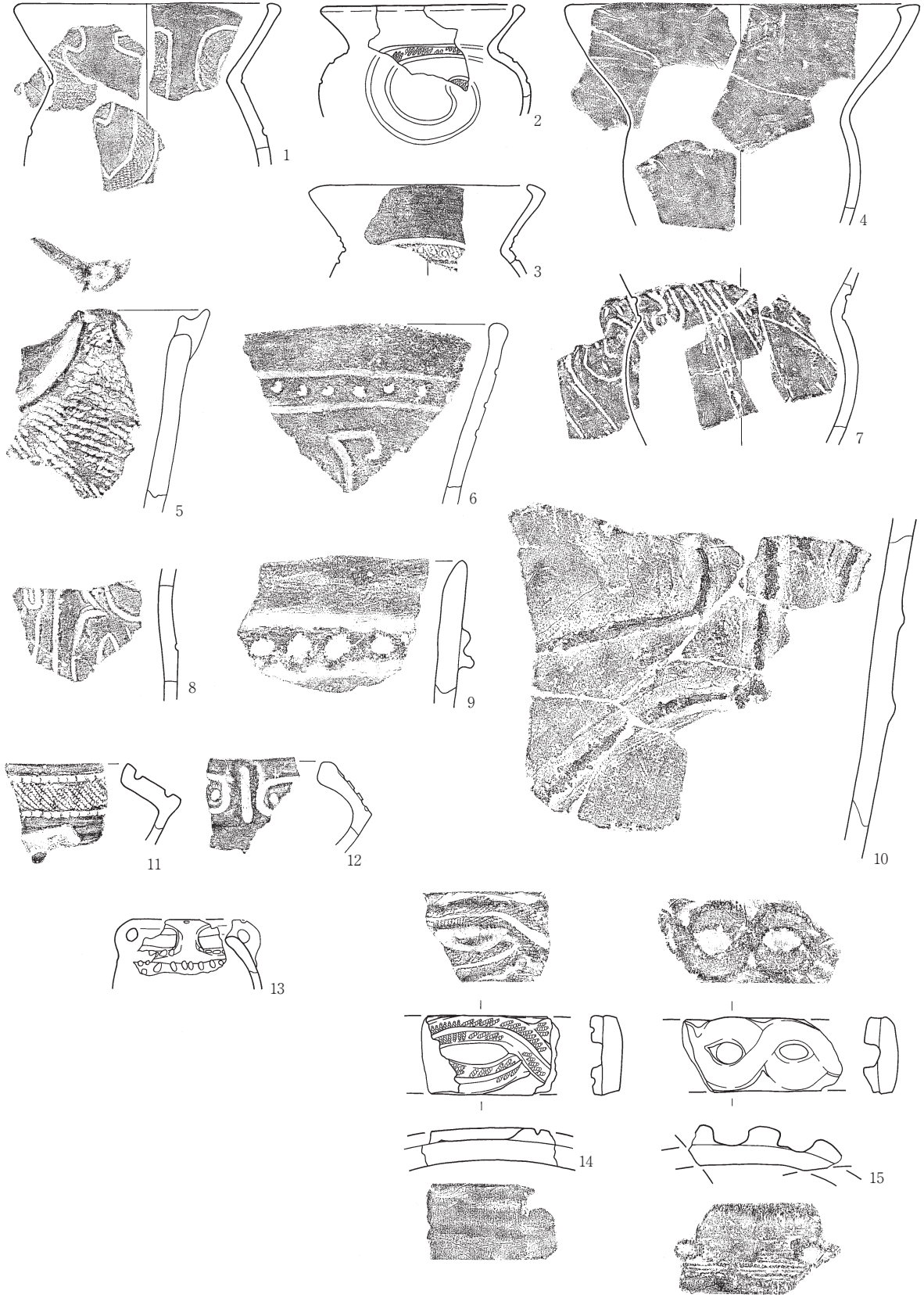


0 1:3 10cm

第155図 20区出土土器 (65)

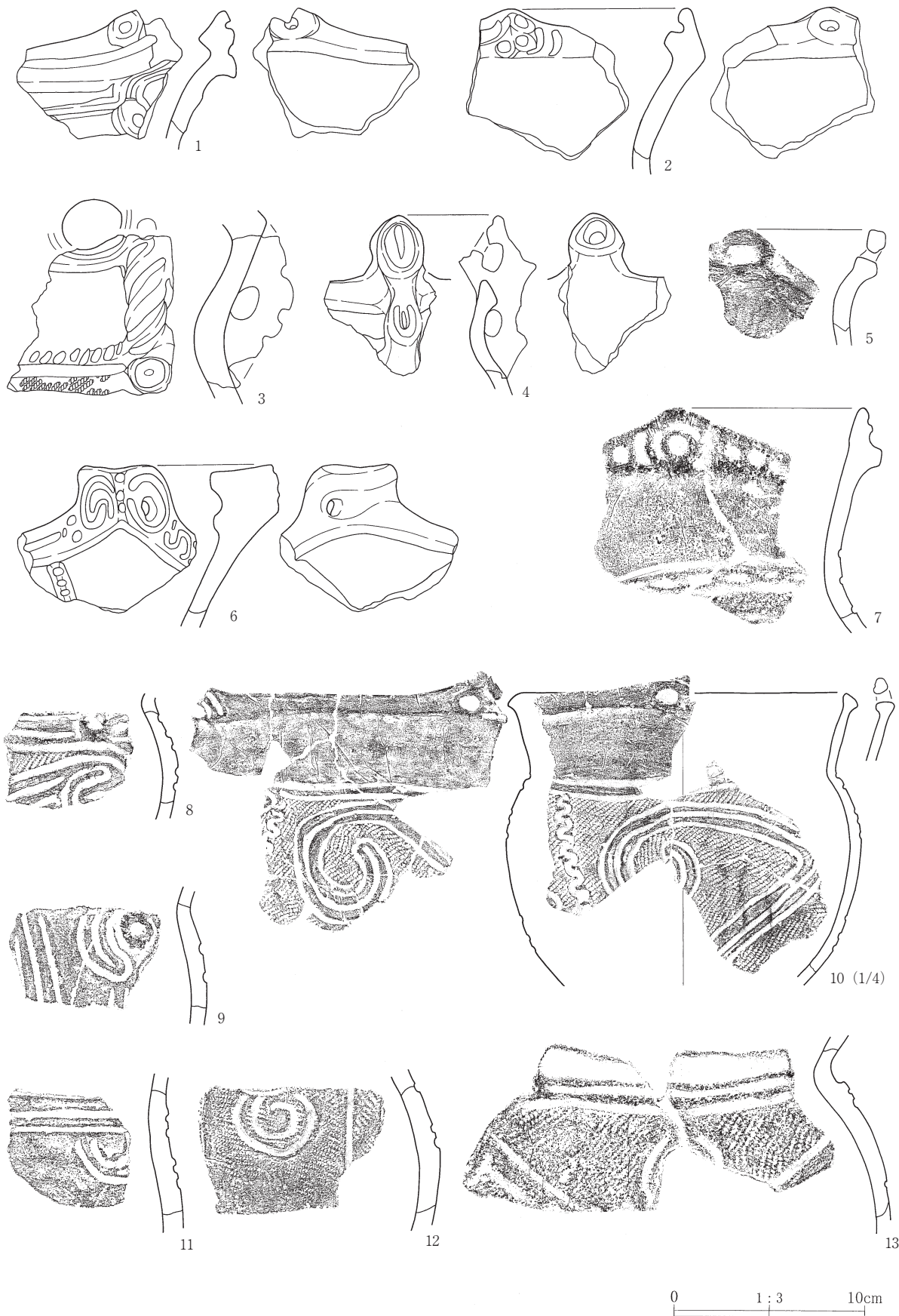


第156図 20区出土土器 (66)

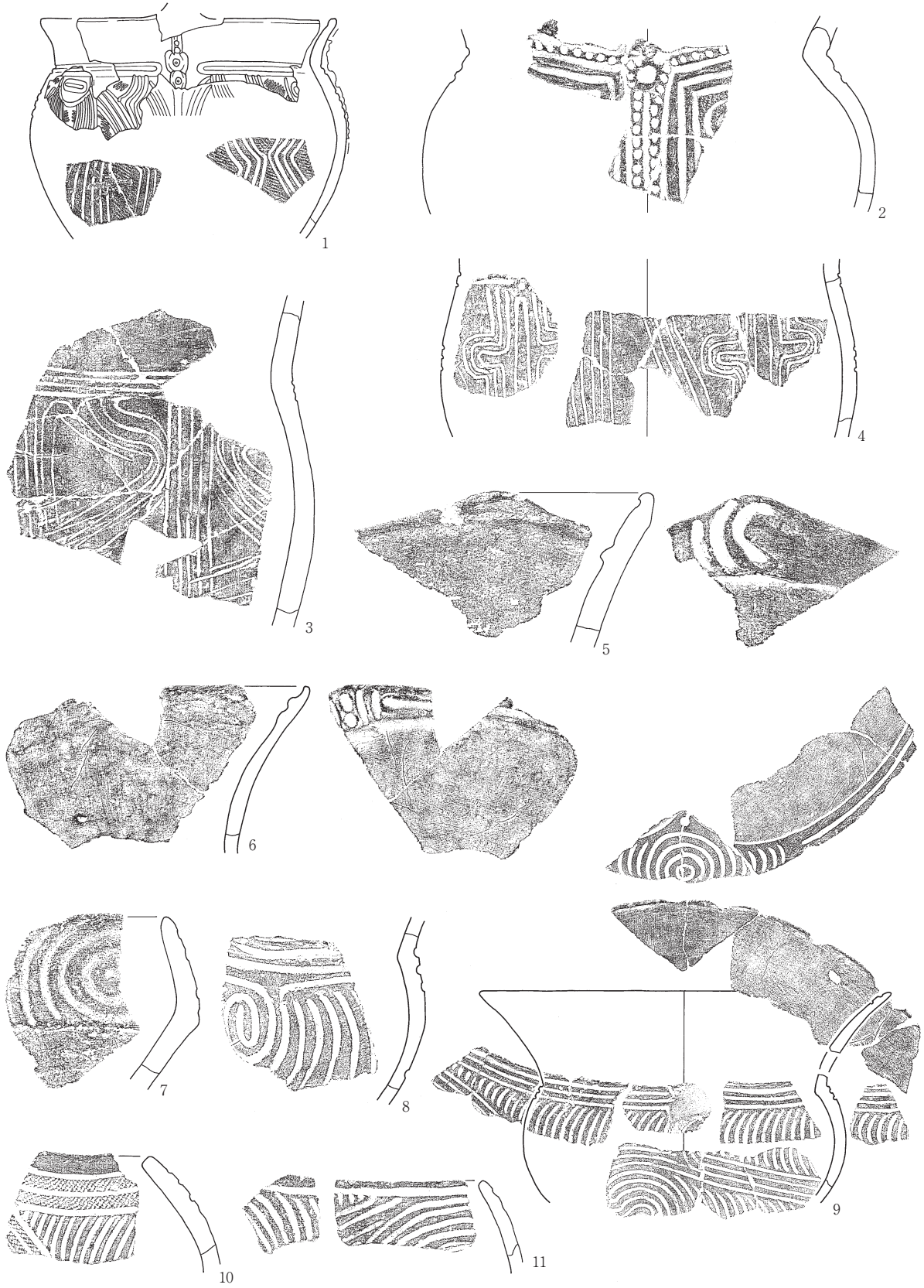


0 1:3 10cm  
1~4・7・13 (1/4)

第157図 20区出土土器 (67)

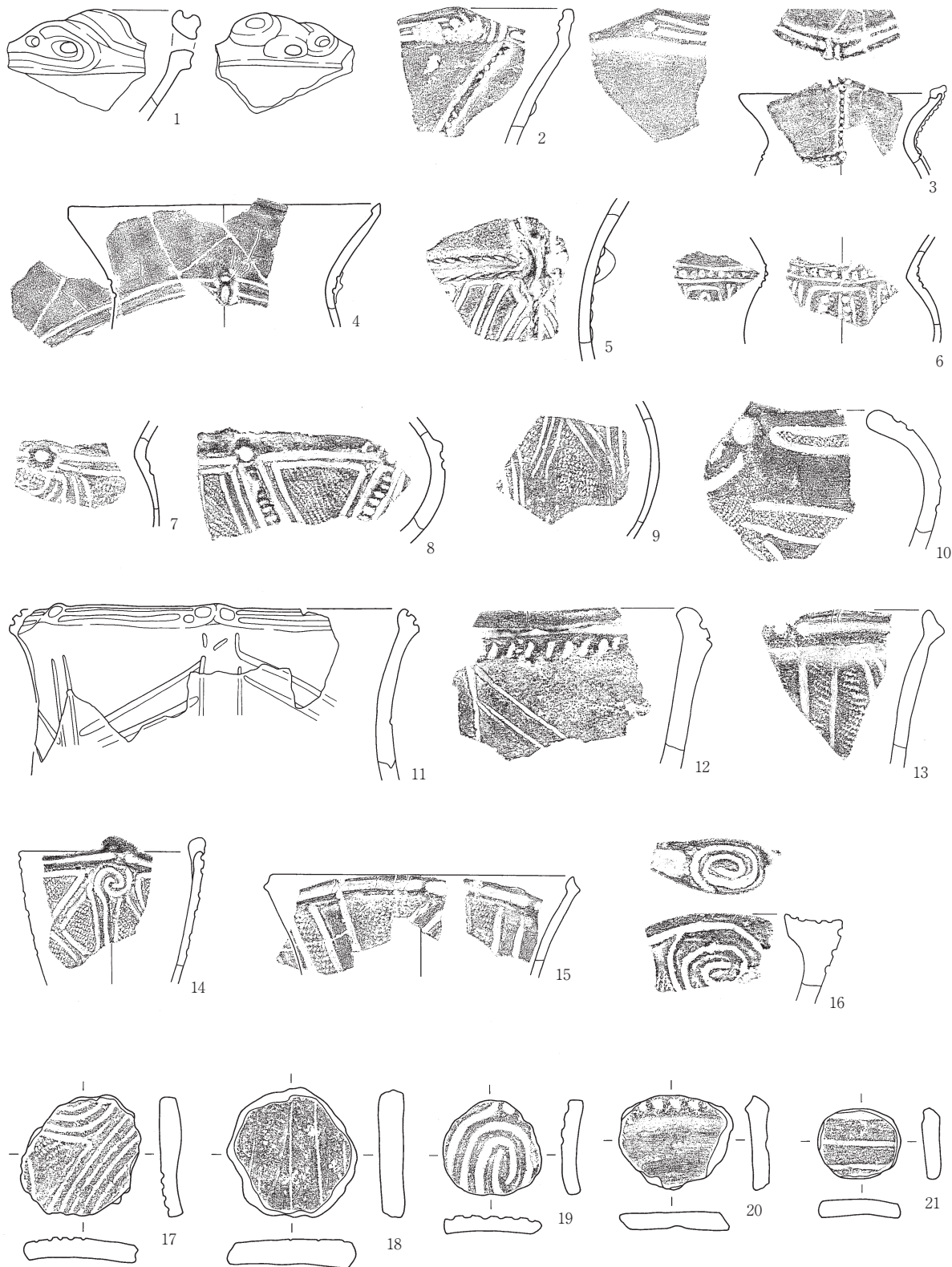


第158図 20区出土土器 (68)



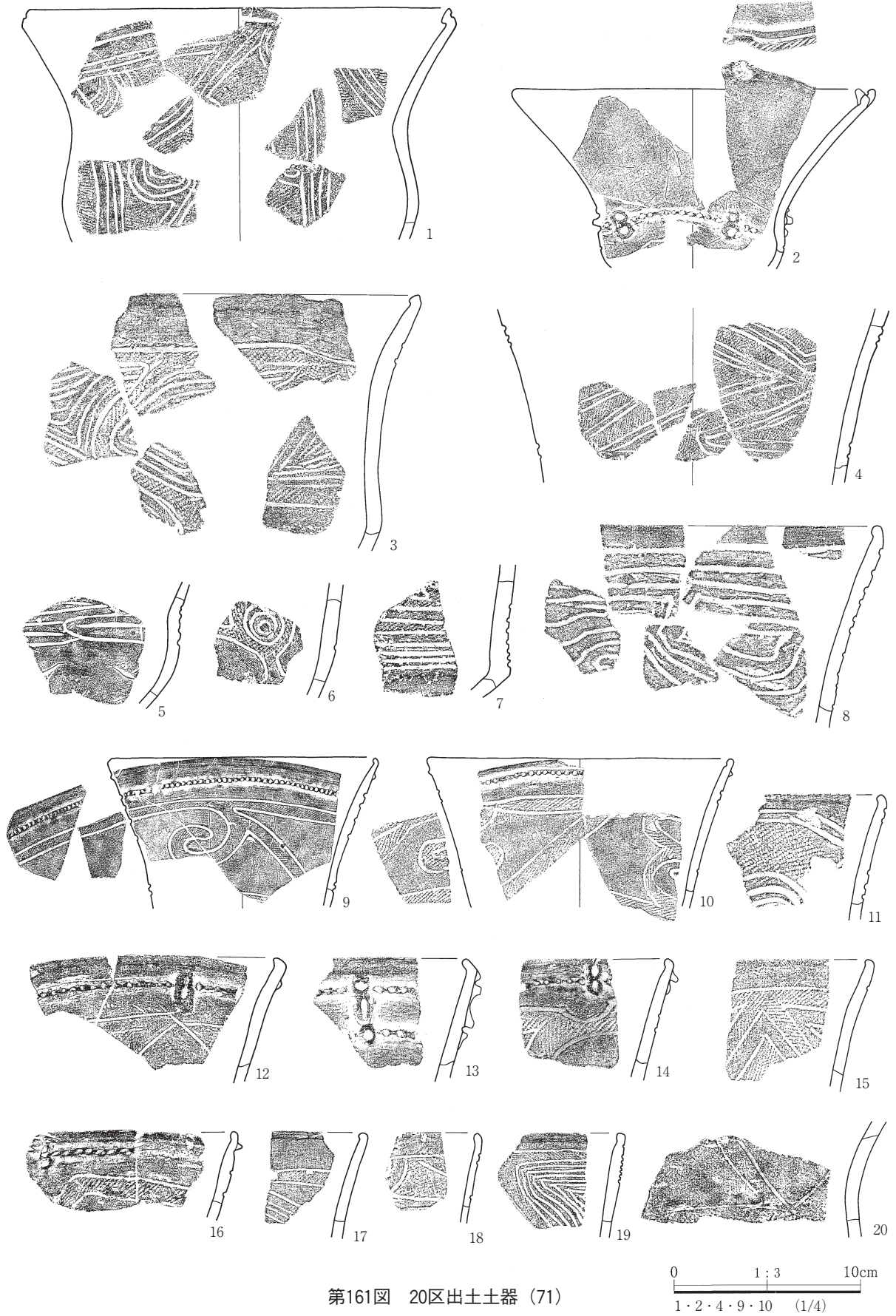
第159図 20区出土土器 (69)

0 1:3 10cm  
1・2・4・9 (1/4)



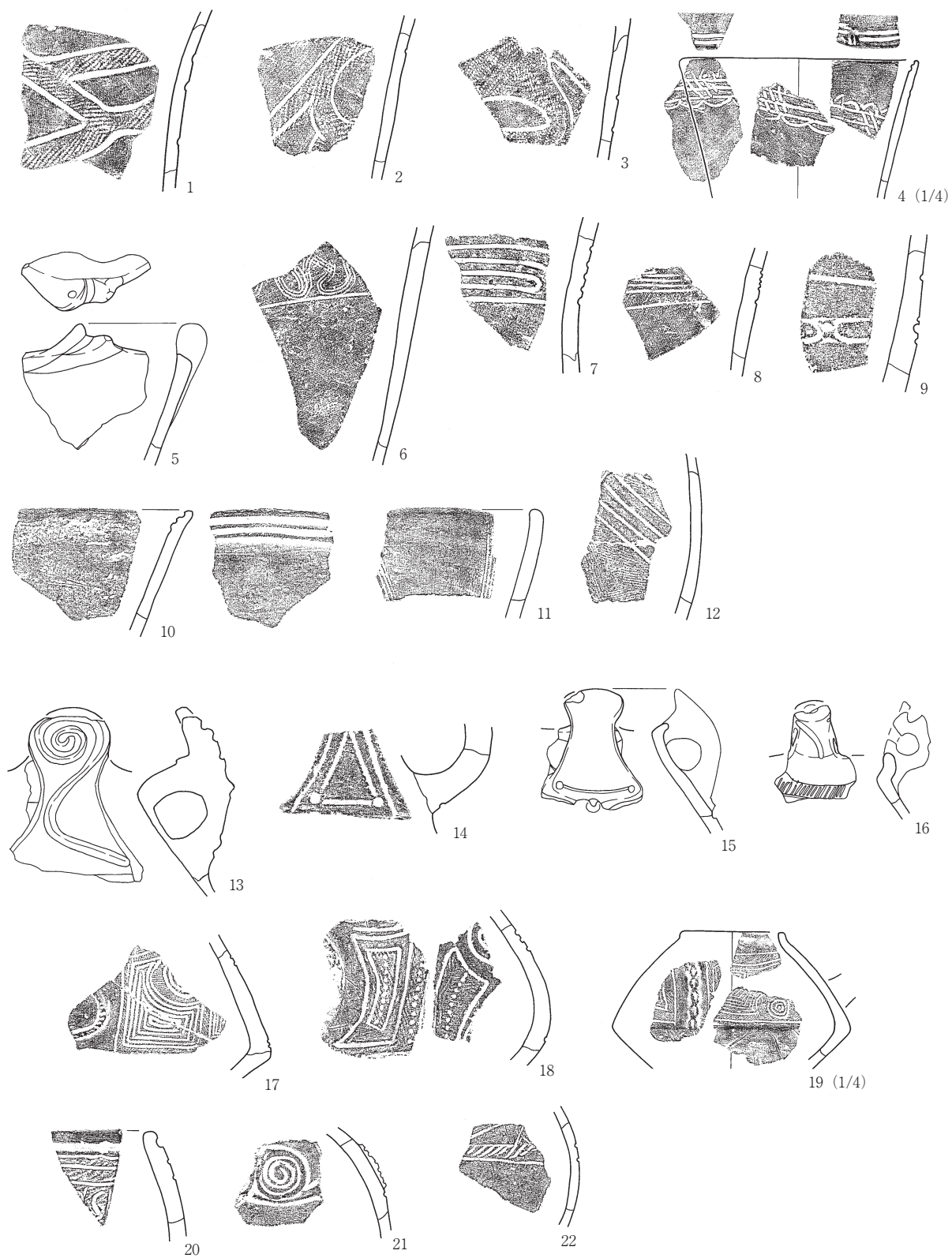
第160图 20区出土土器 (70)

0 1:3 10cm  
3·4·6·11·15 (1/4)

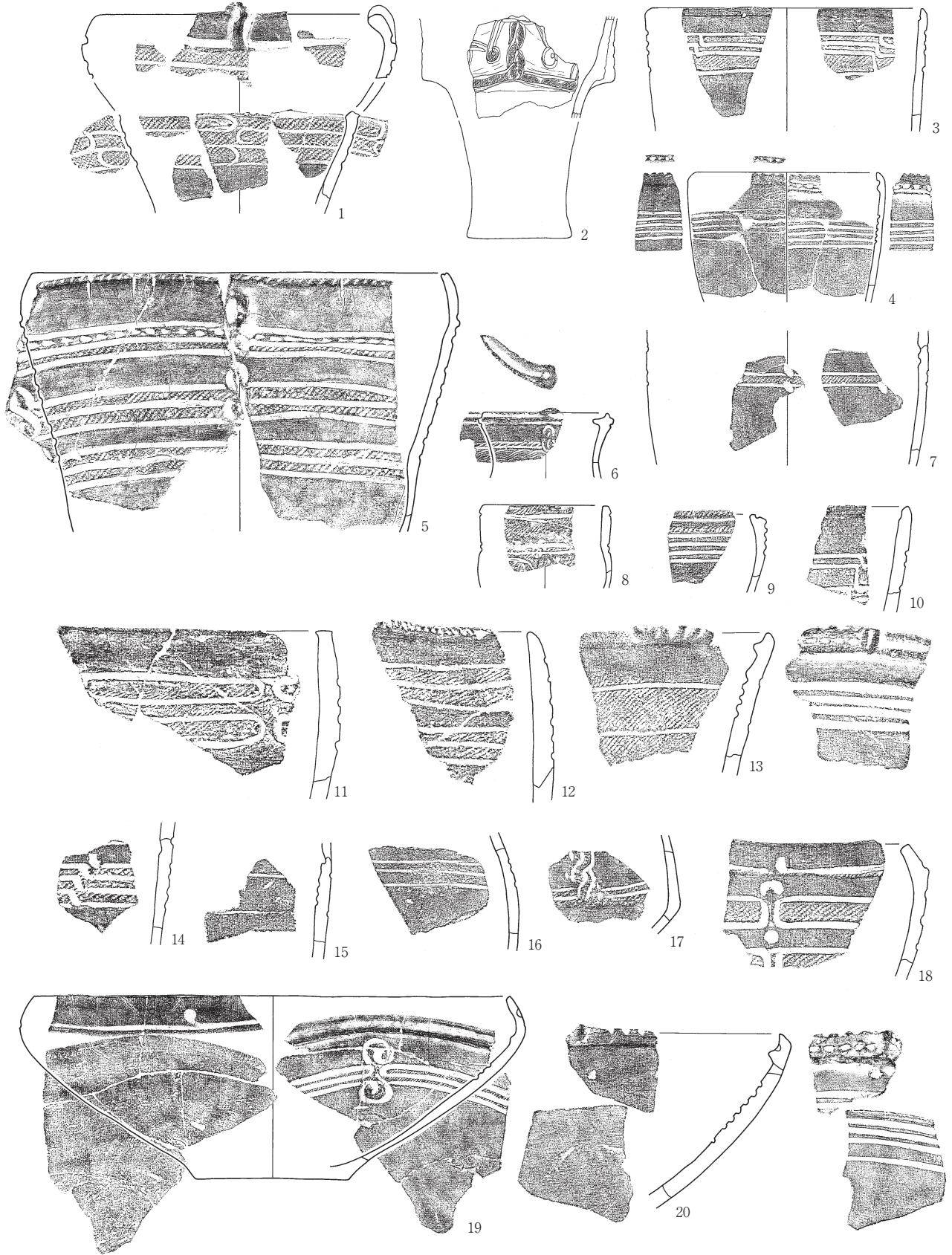


第161図 20区出土土器 (71)



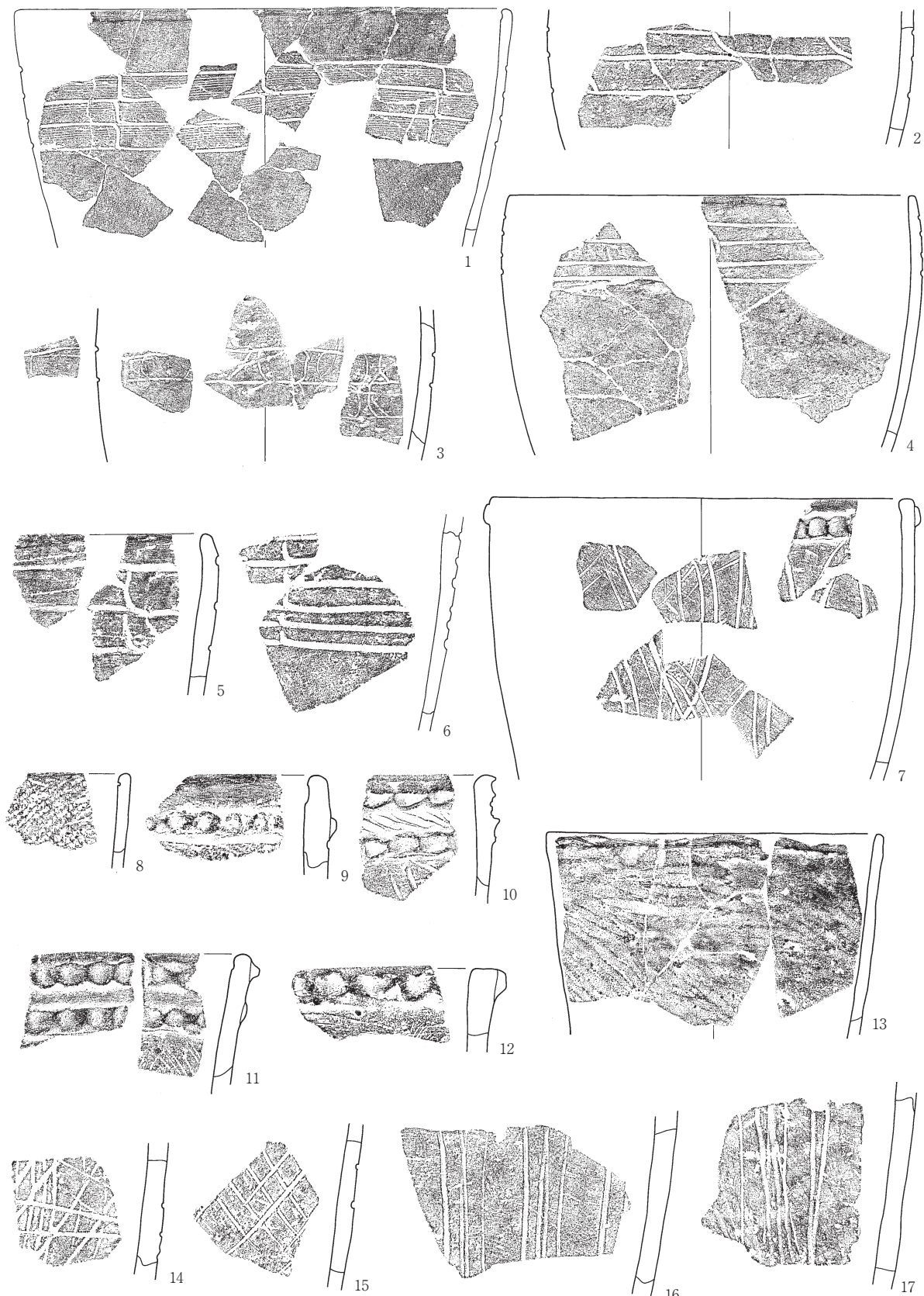


第162図 20区出土土器 (72)



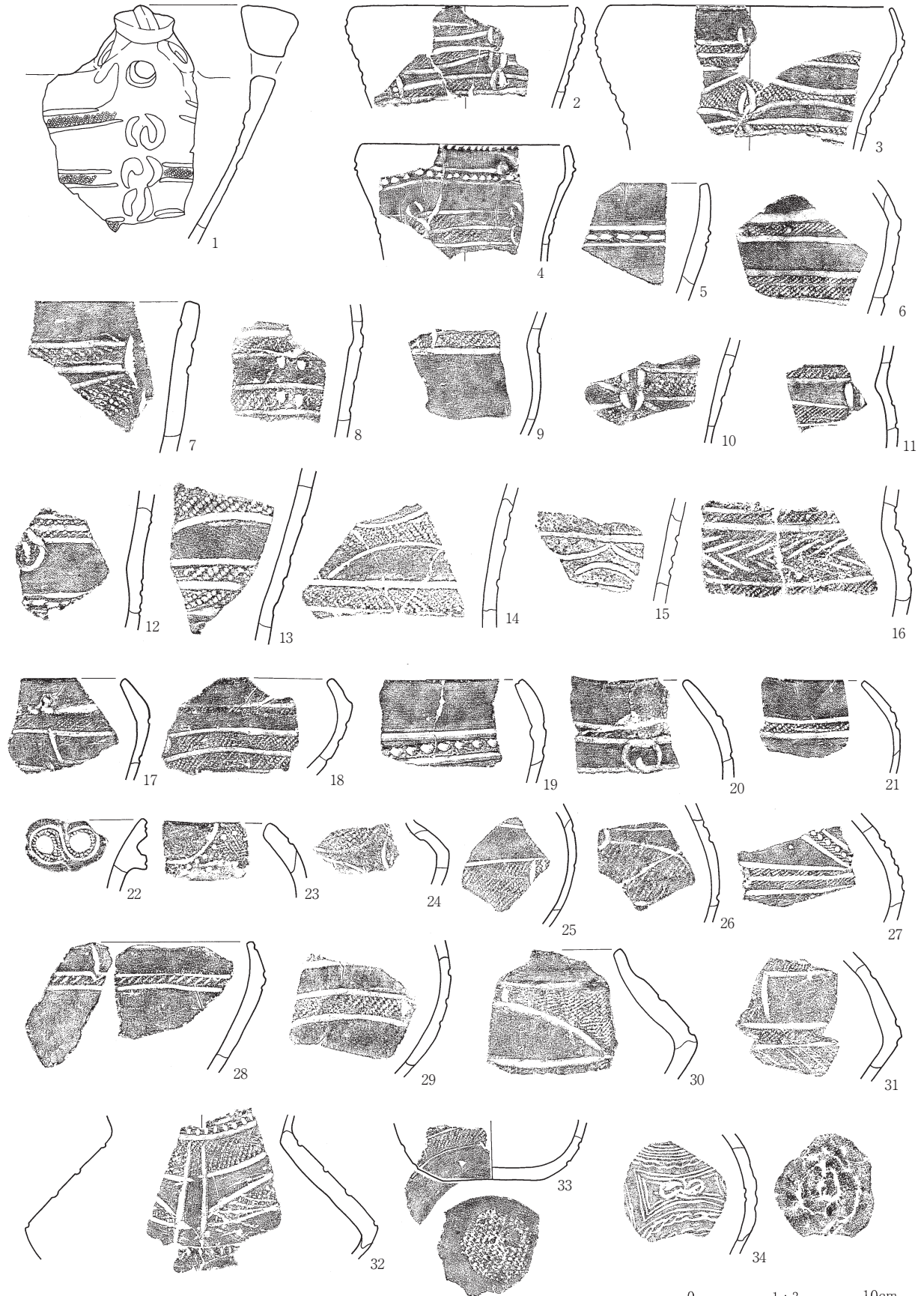
第163図 20区出土土器 (73)

0 1:3 10cm  
1~8・19 (1/4)



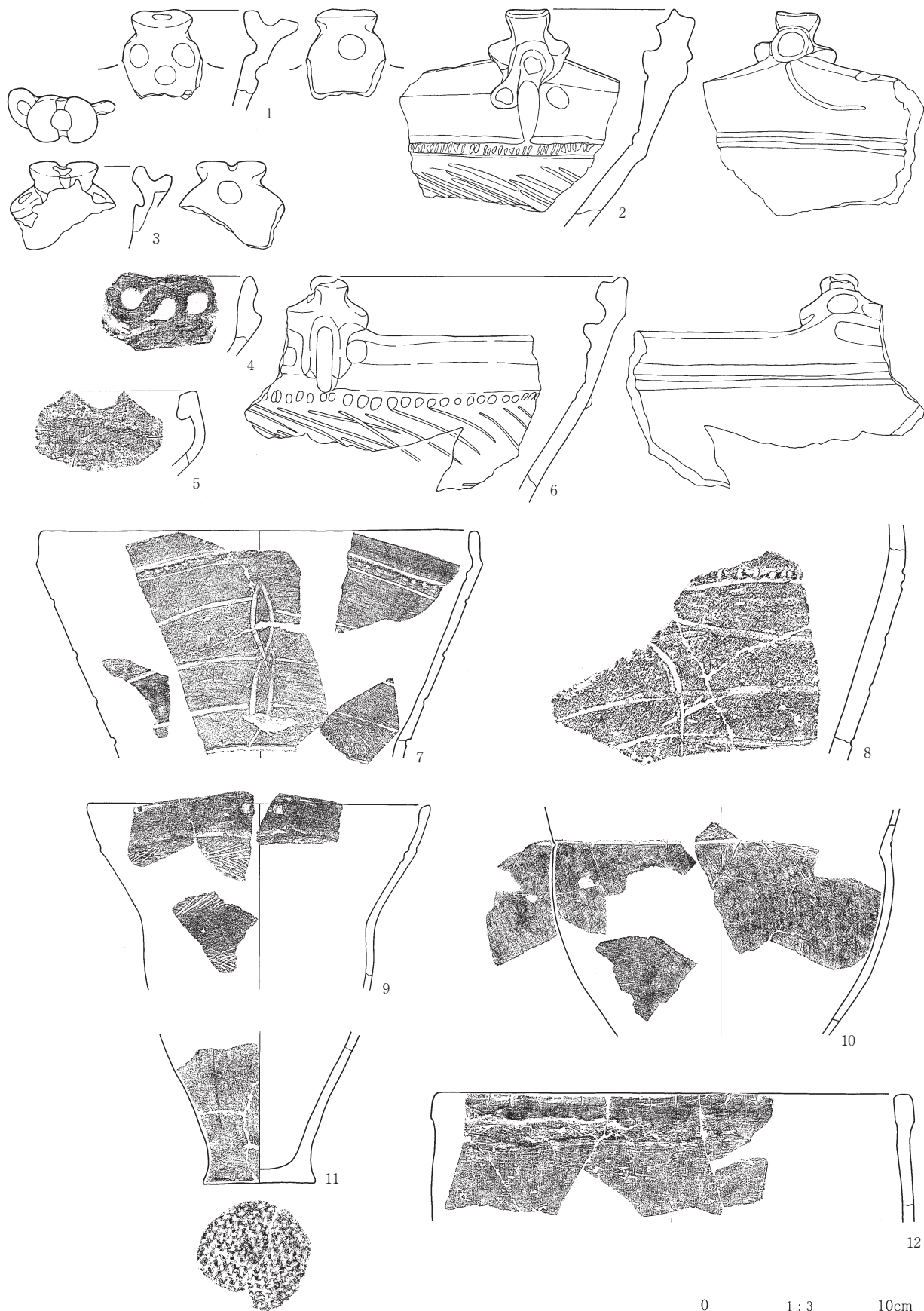
第164図 20区出土土器 (74)

0 1:3 10cm  
1~4・7・13 (1/4)



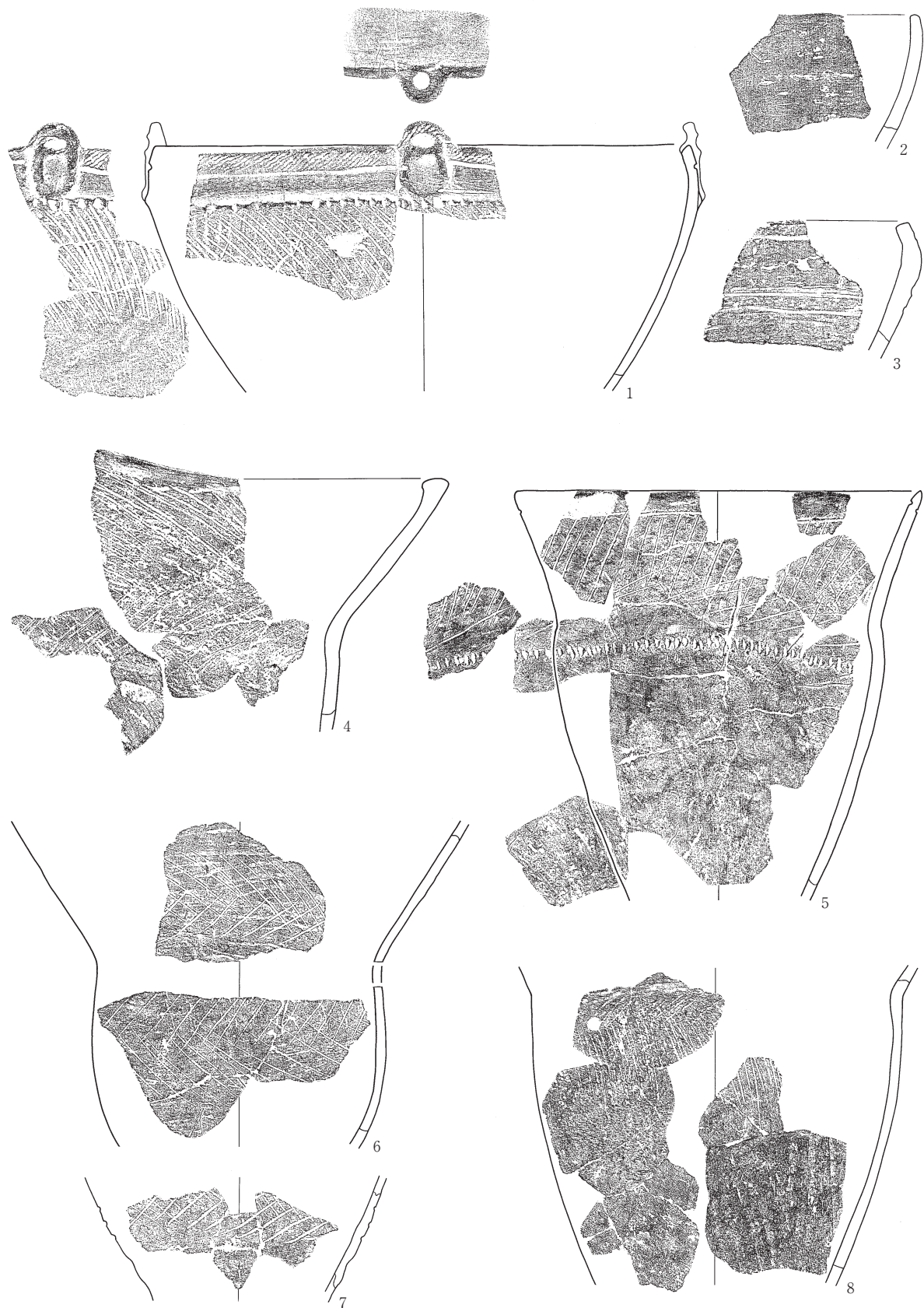
第165図 20区出土土器 (75)

0 1:3 10cm  
2~4・32・33 (1/4)



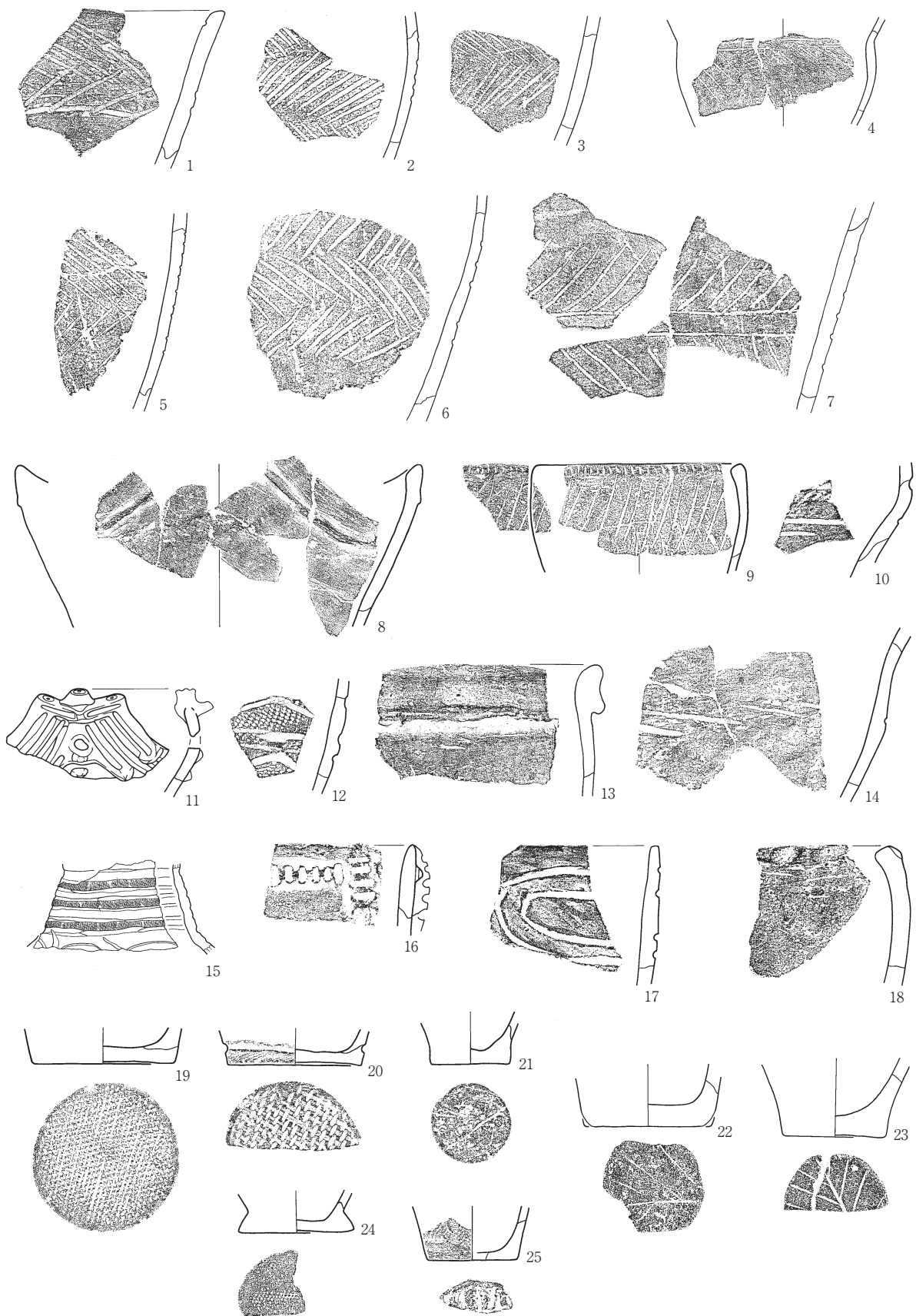
第166図 20区出土土器 (76)

0 1:3 10cm  
7・9~12 (1/4)



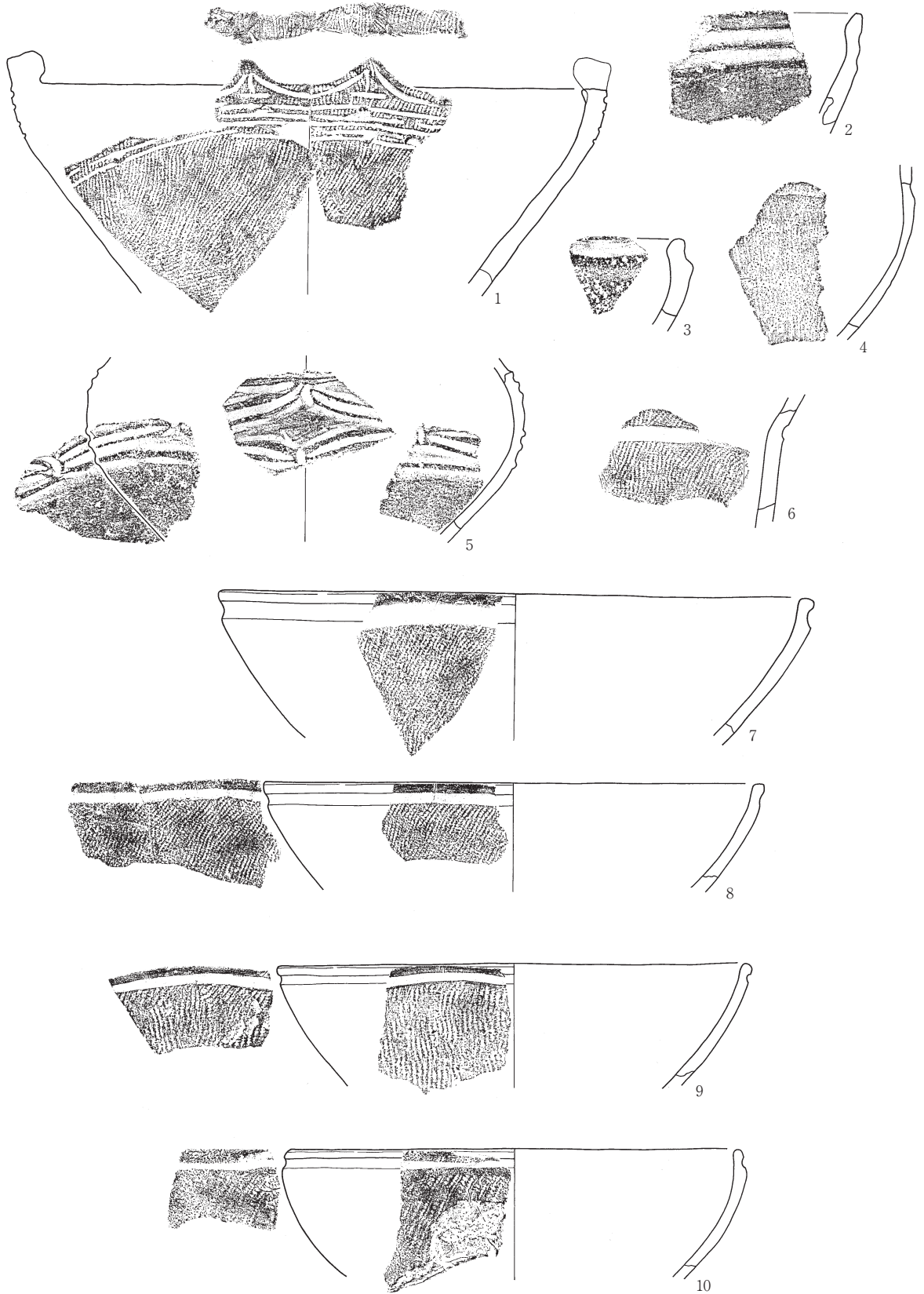
第167図 20区出土土器 (77)

0 1 : 4 10cm  
2~4 (1/3)



第168図 20区出土土器 (78)

0 1:3 10cm  
4・8・9・15・19~25 (1/4)



0 1:3 10cm

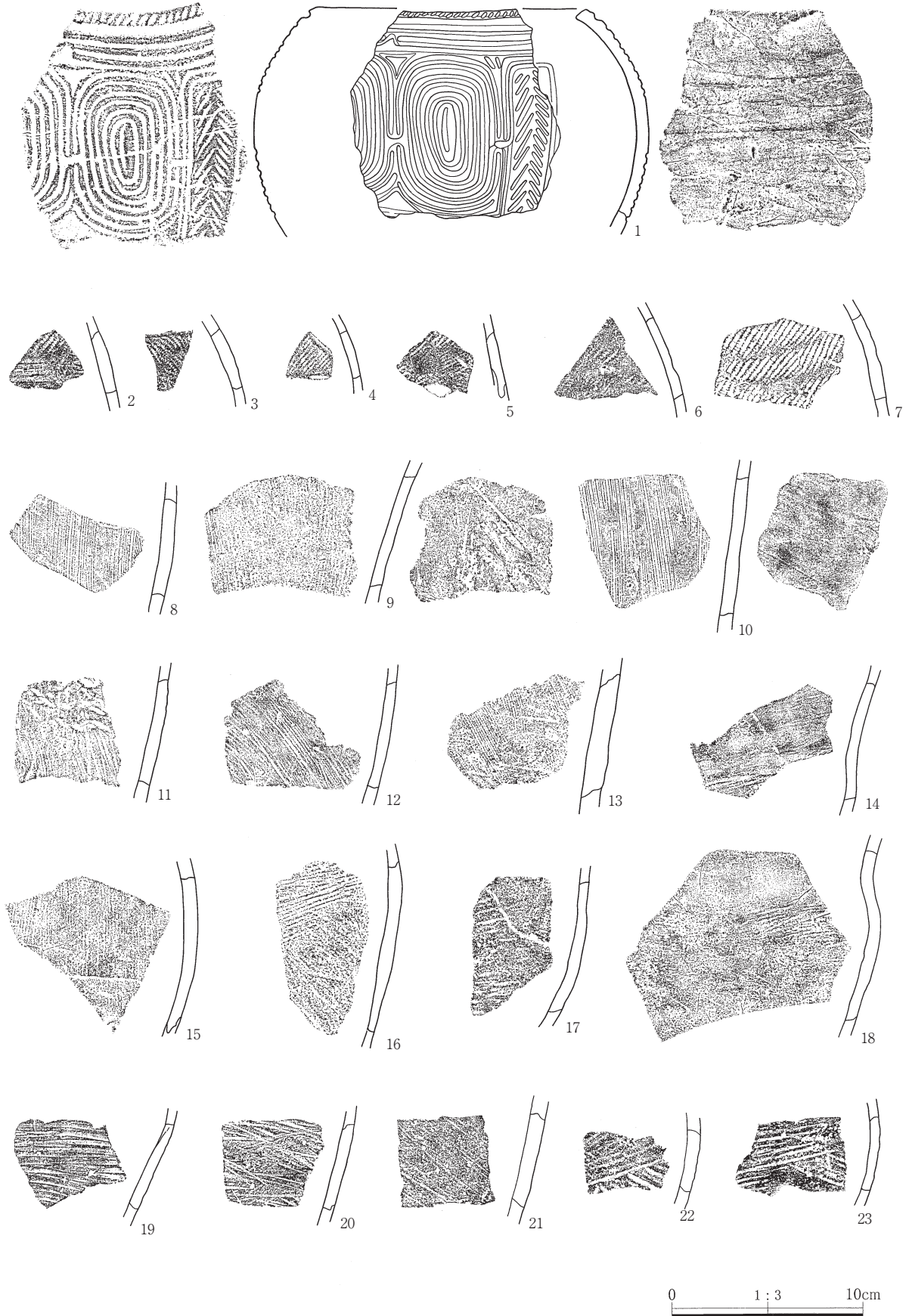
第169図 20区出土土器 (79)



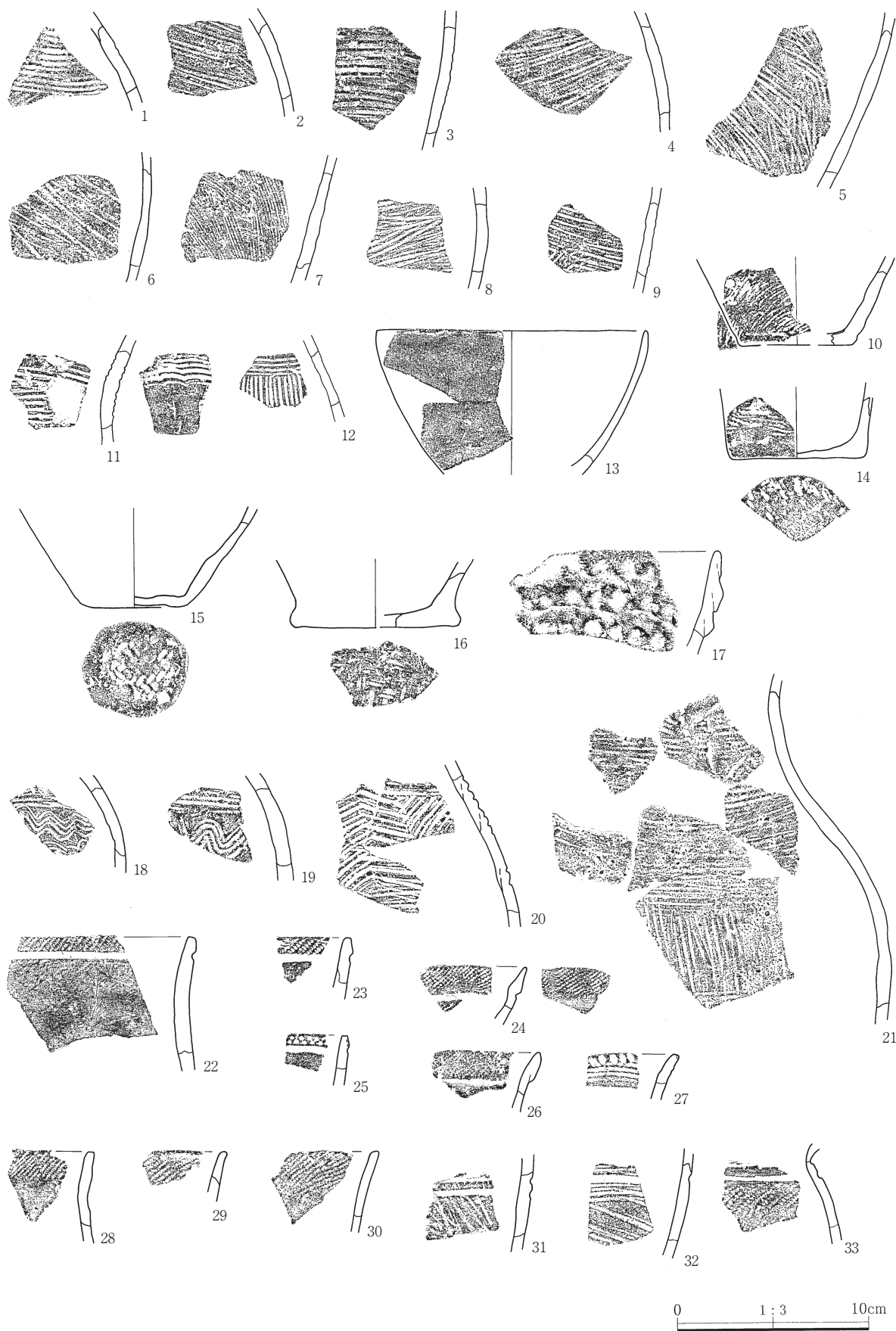


0 1:3 10cm

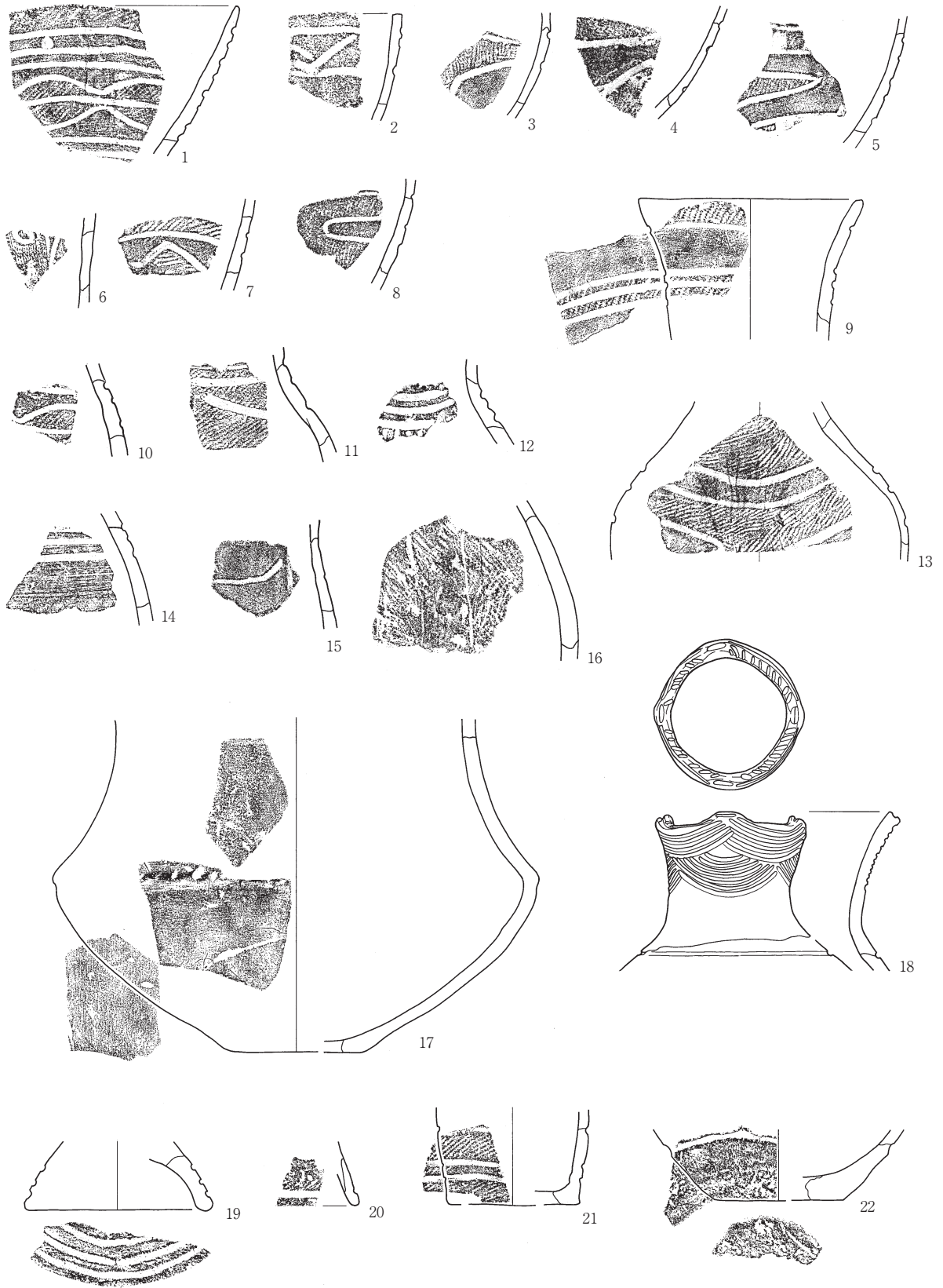
第170图 20区出土土器 (80)



第171図 20区出土土器 (81)

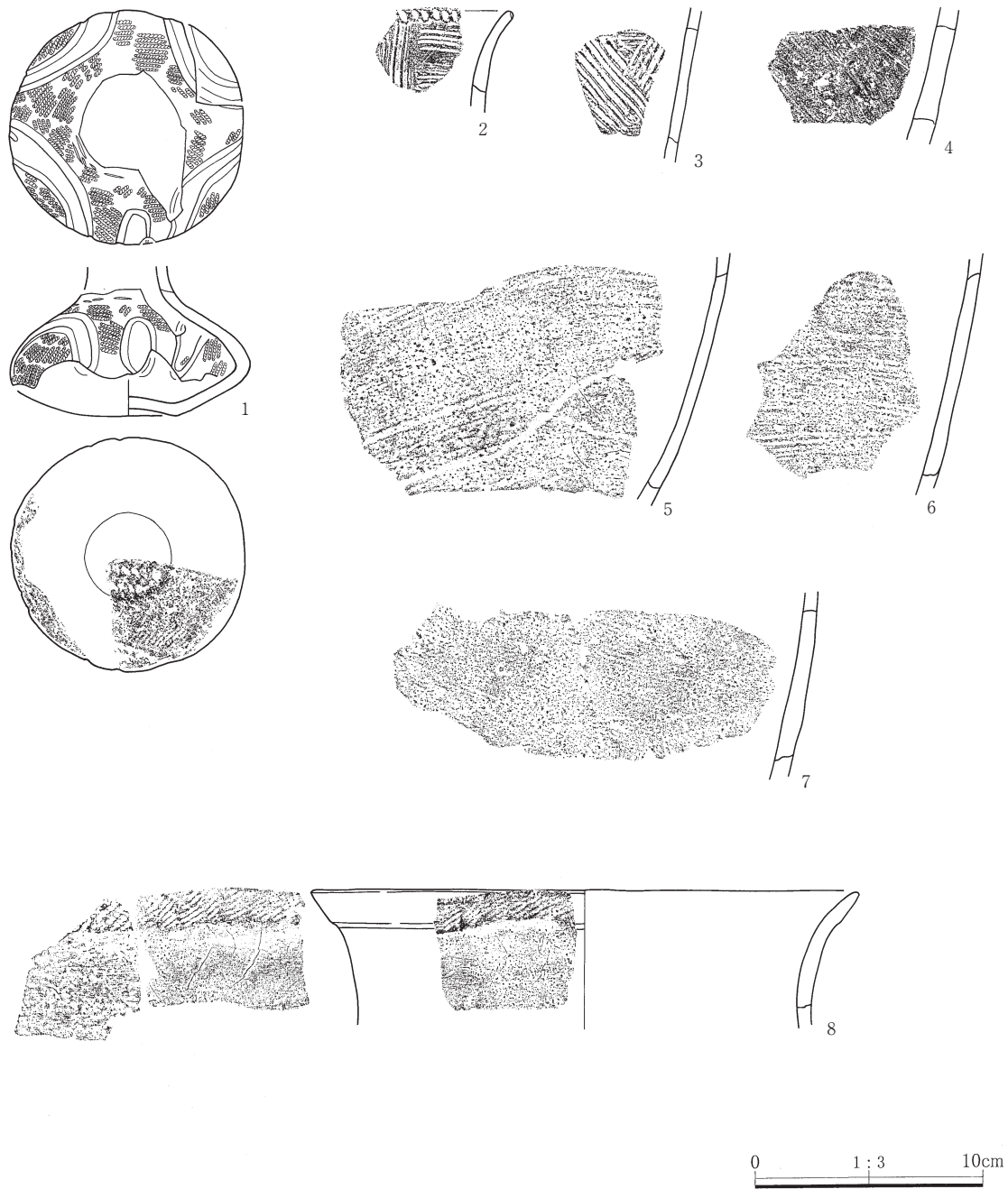


第172図 20区出土土器 (82)



0 1:3 10cm

第173図 20区出土土器 (83)

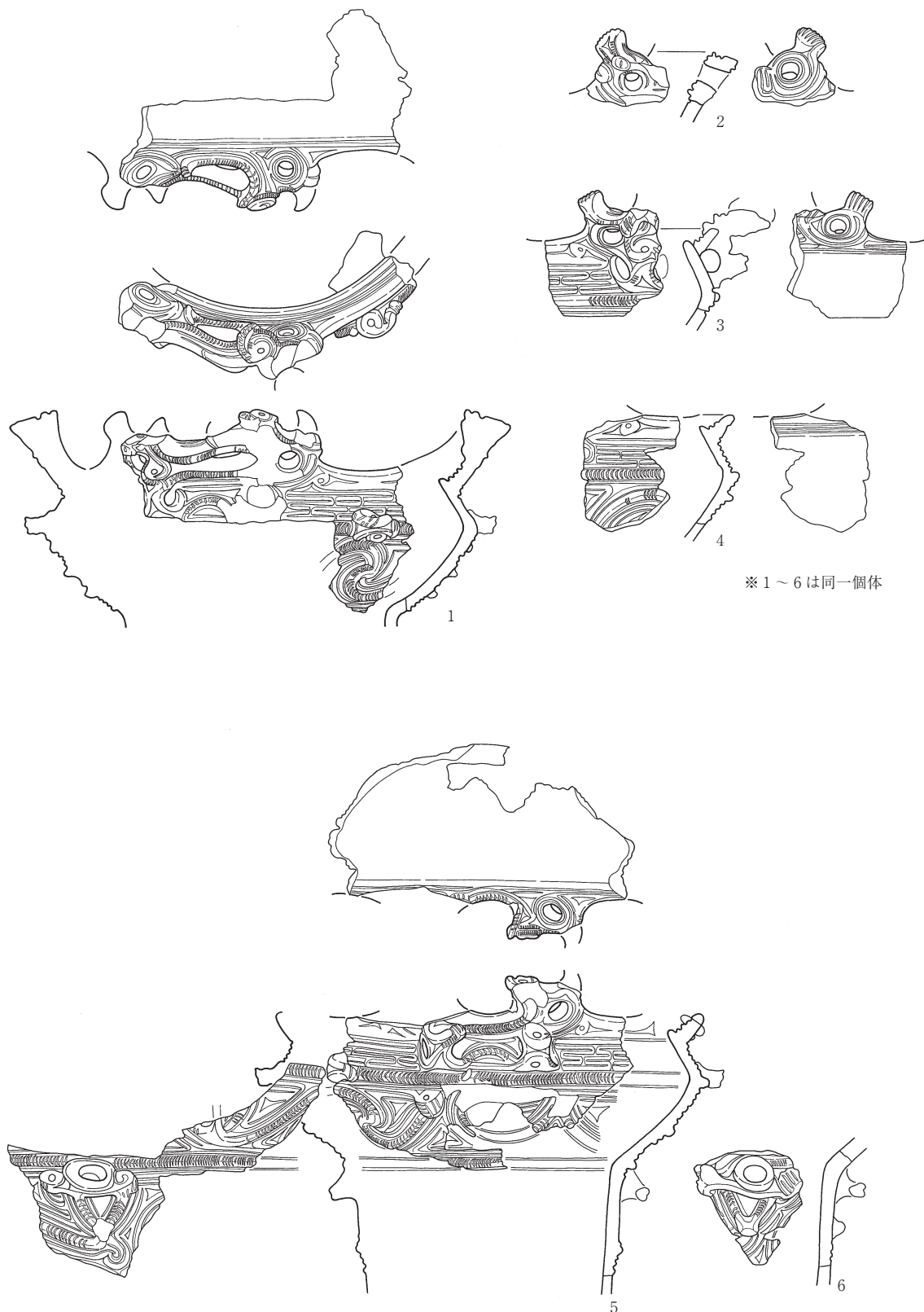


第174図 20区出土土器 (84)



第175図 28区出土土器(1)

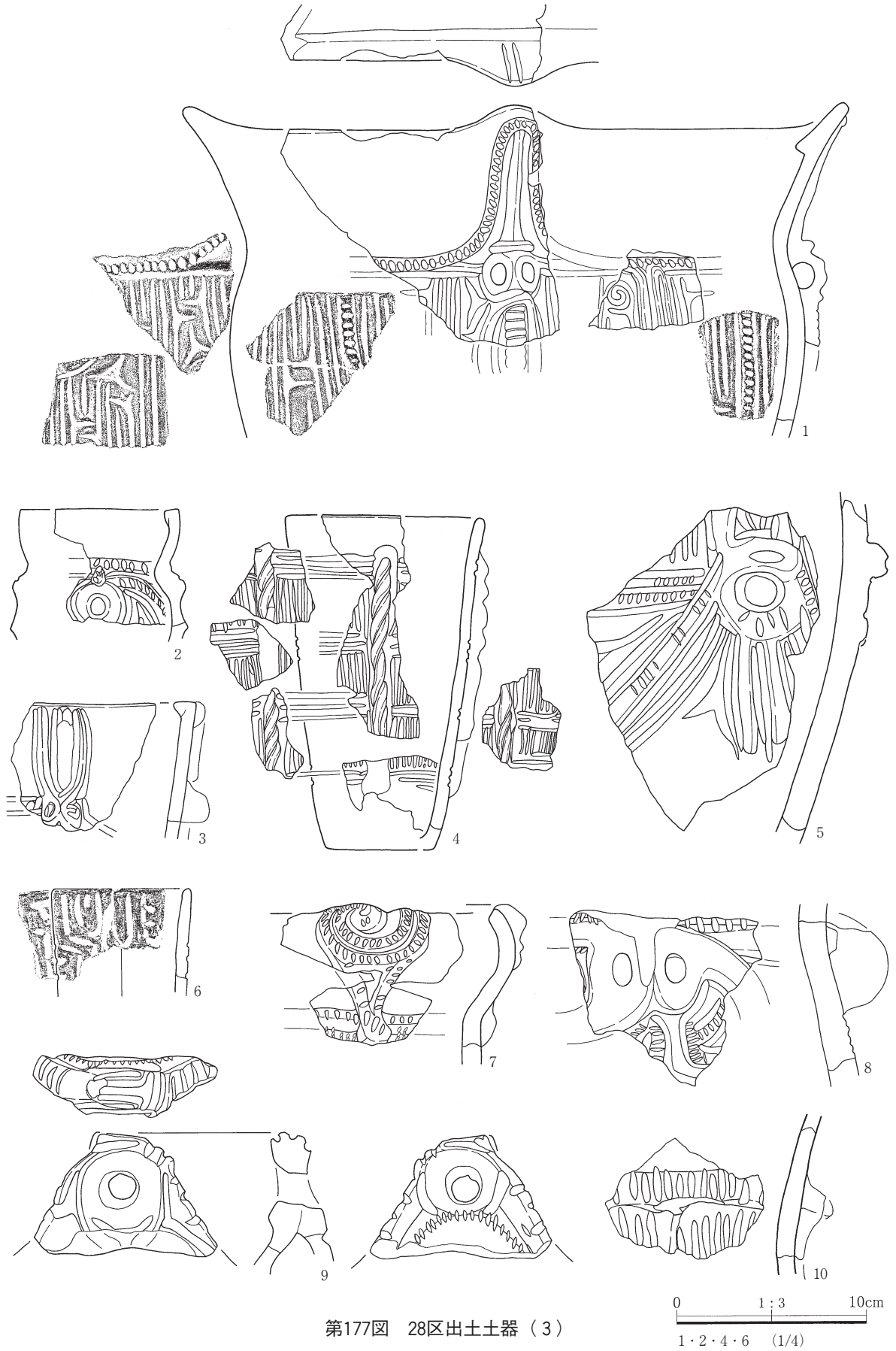
0 1:3 10cm  
10・12・13 (1/4)



※1～6は同一個体

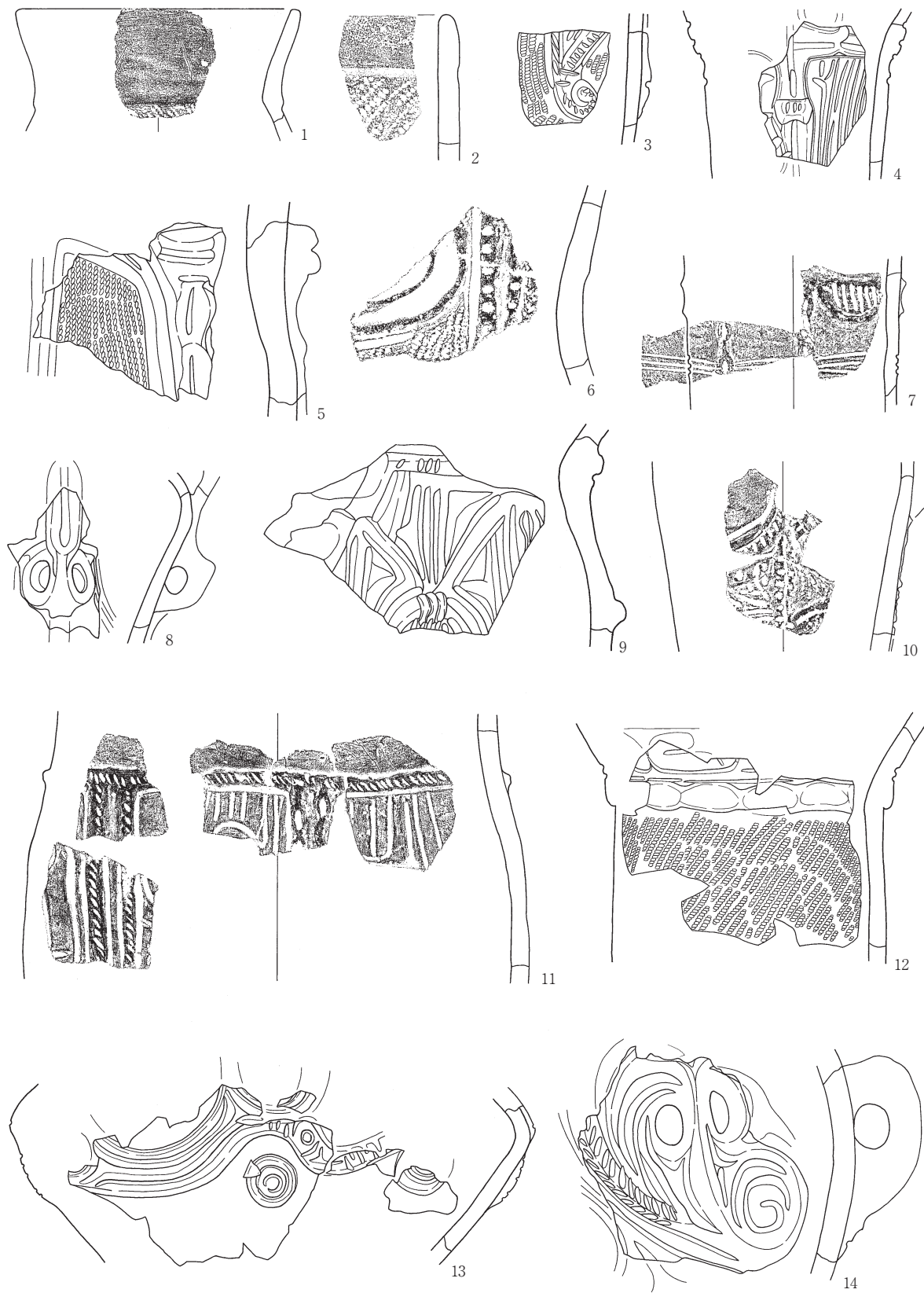
0 1:4 10cm

第176図 28区出土土器(2)



第177図 28区出土土器 (3)





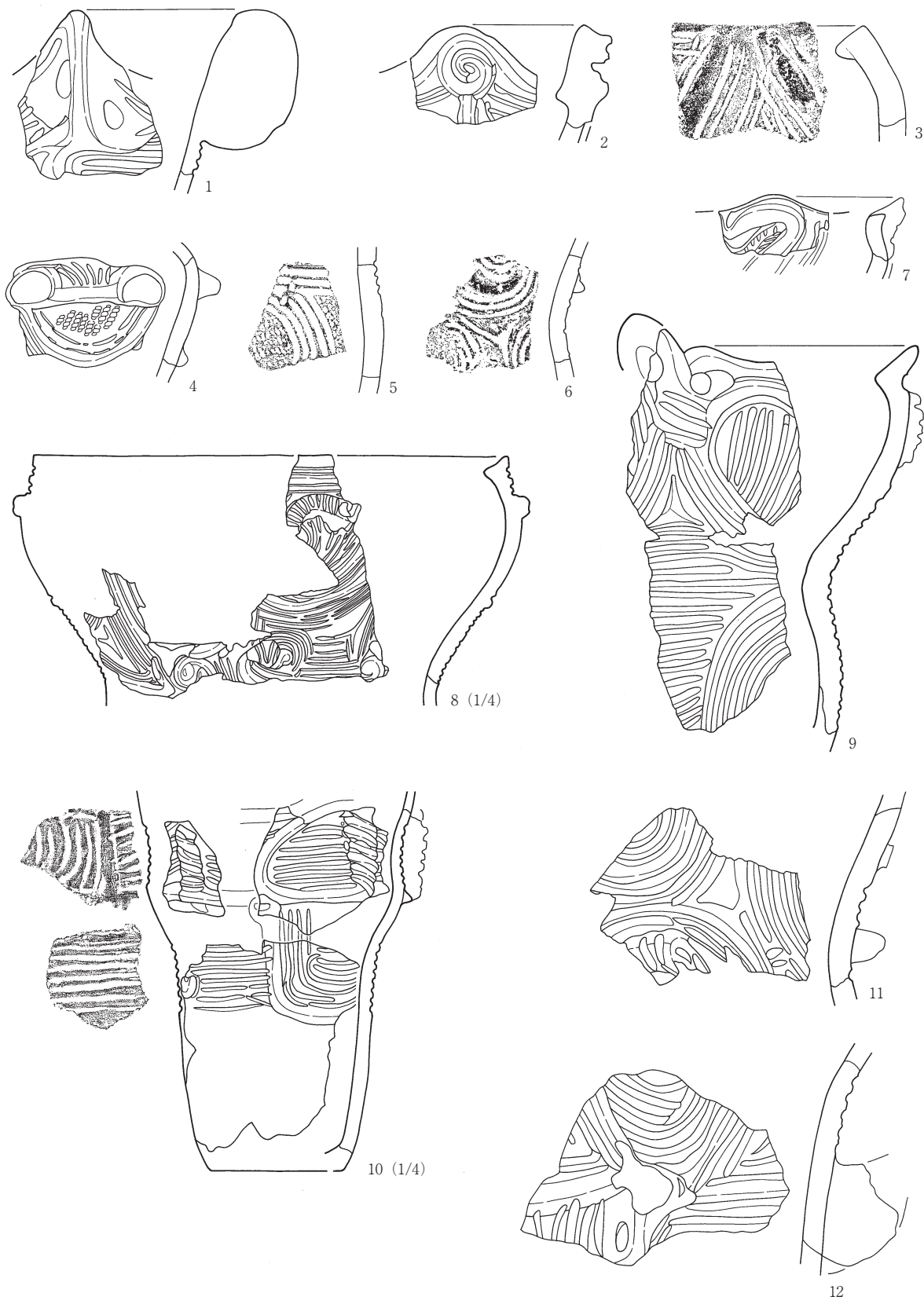
第178図 28区出土土器 (4)

0 1:3 10cm  
1・4・7・10~13 (1/4)



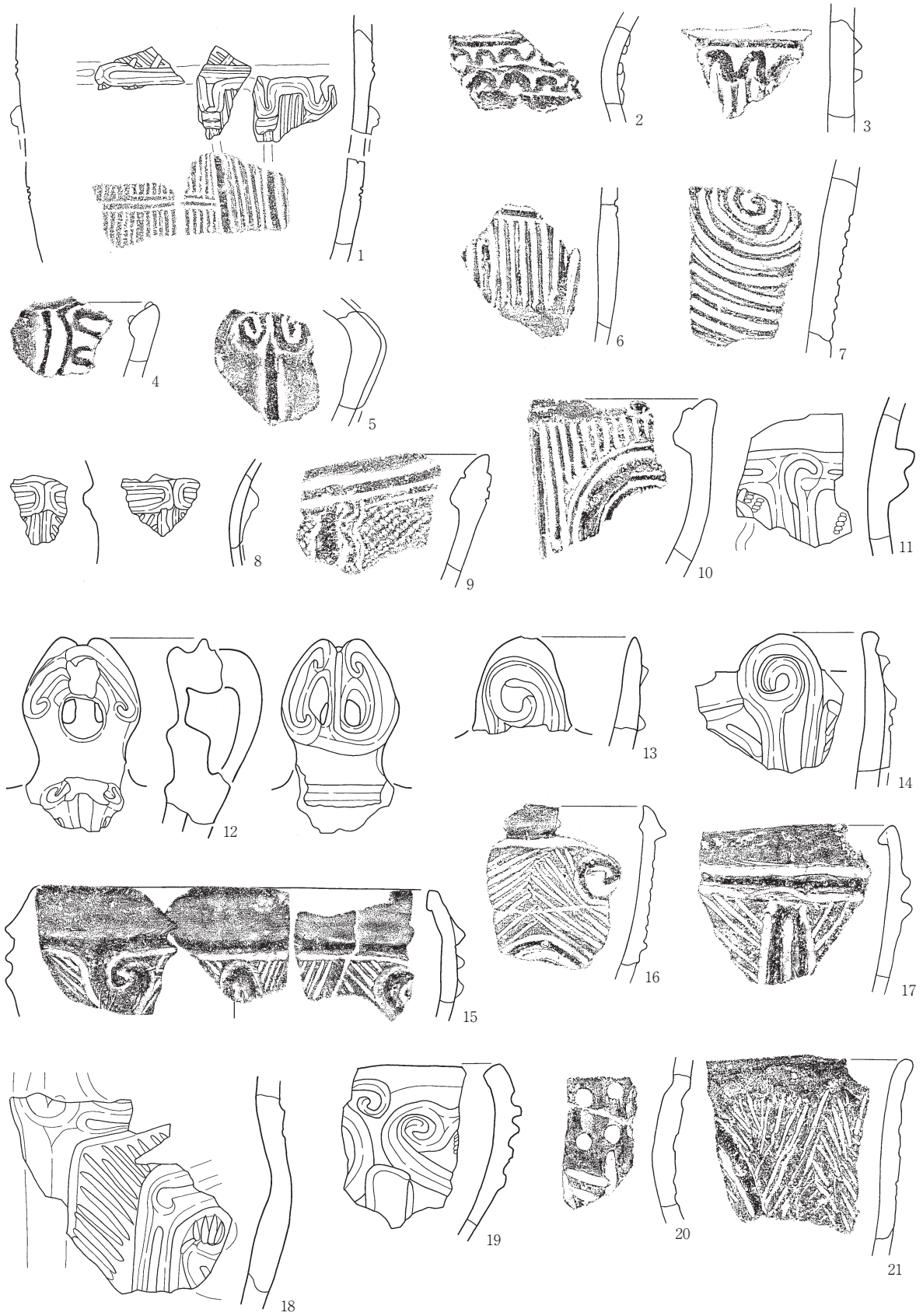
0 1:3 10cm

第179図 28区出土土器(5)



第180图 28区出土土器 (6)

0 1:3 10cm



第181図 28区出土土器 (7)

0 1:3 10cm  
1・8・15 (1/4)



第182図 28区出土土器 (8)

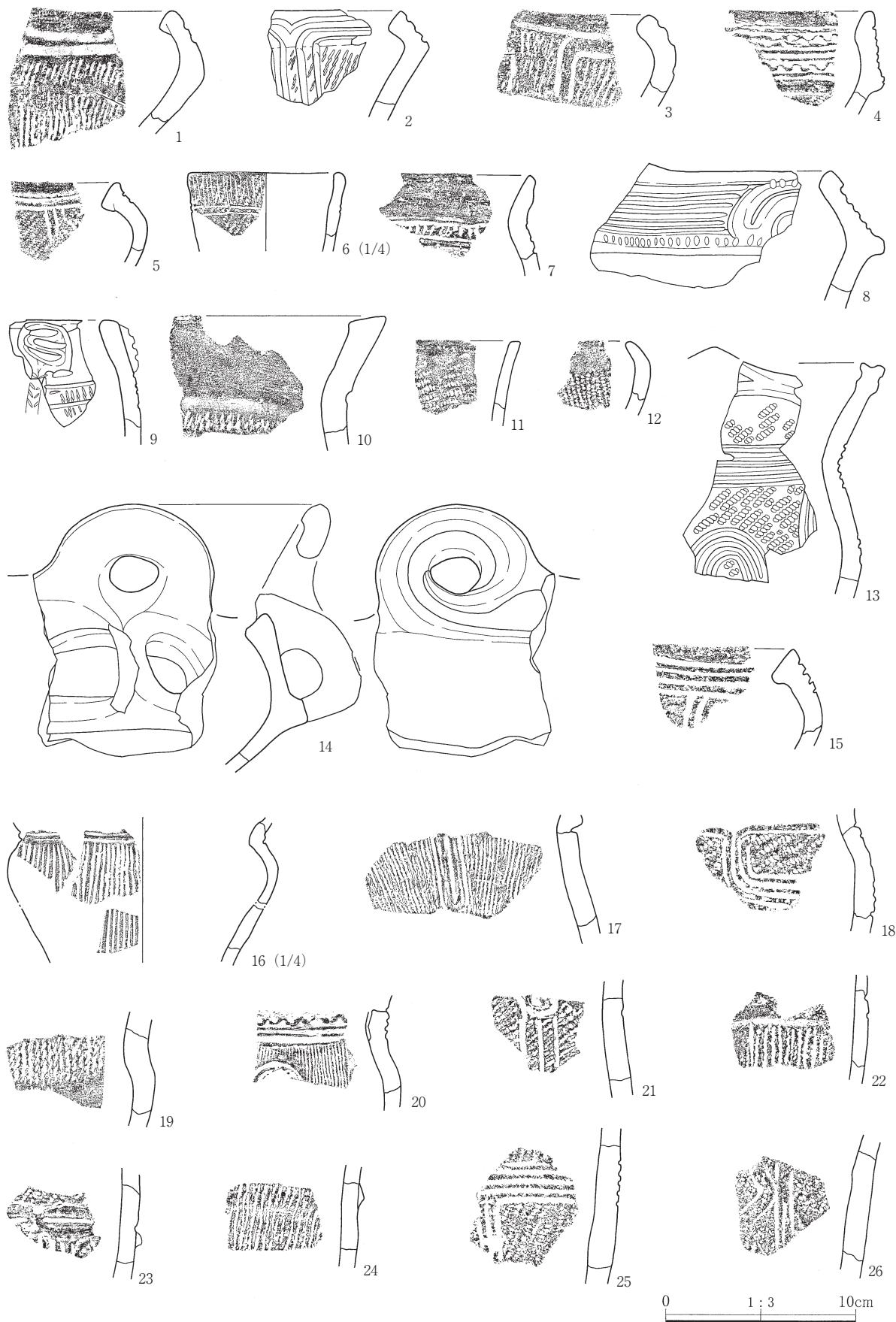
0 1:3 10cm  
2~6 (1/4)



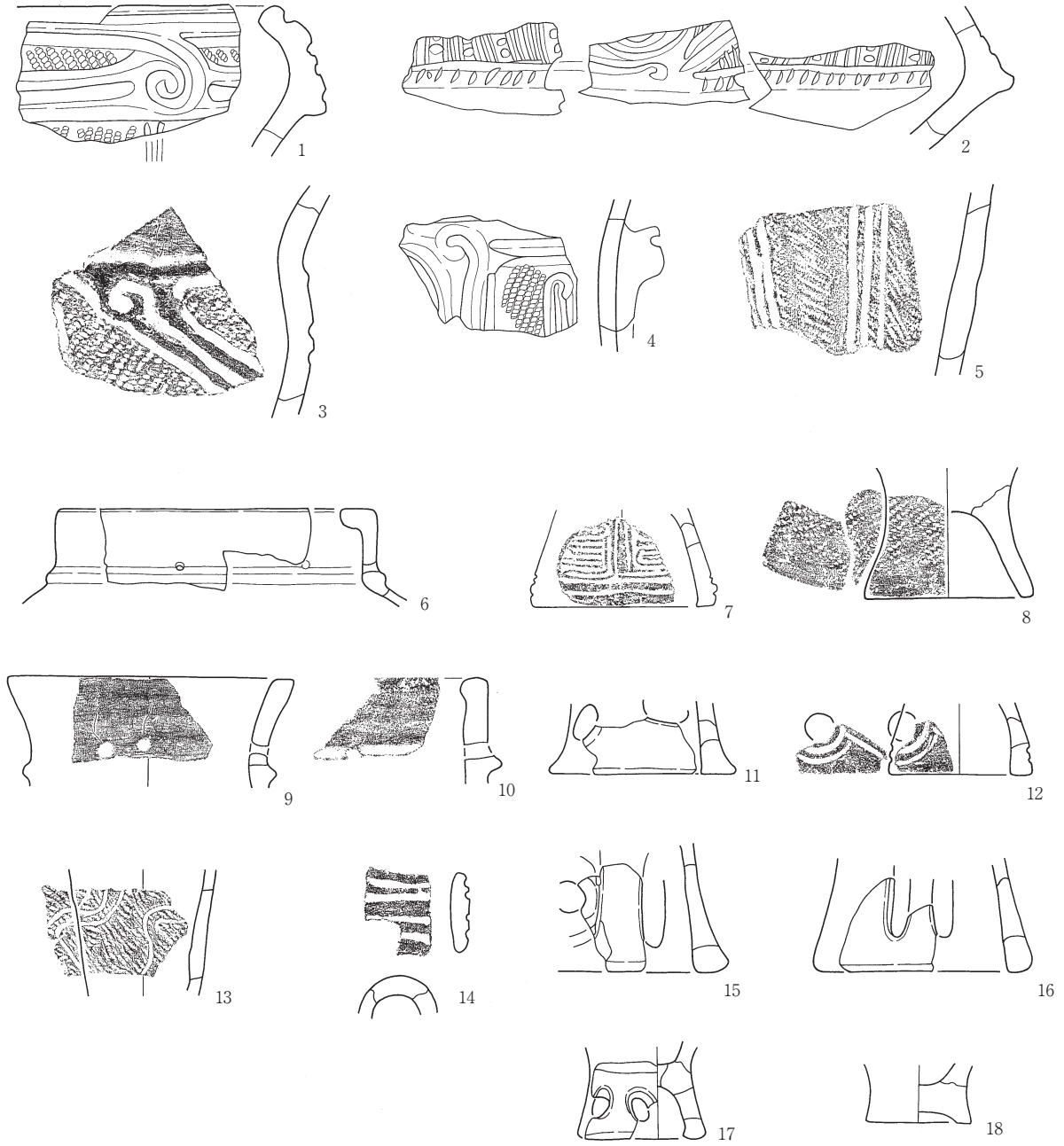
0 1:3 10cm

第183図 28区出土土器 (9)

1~3・9・10・13~15 (1/4)



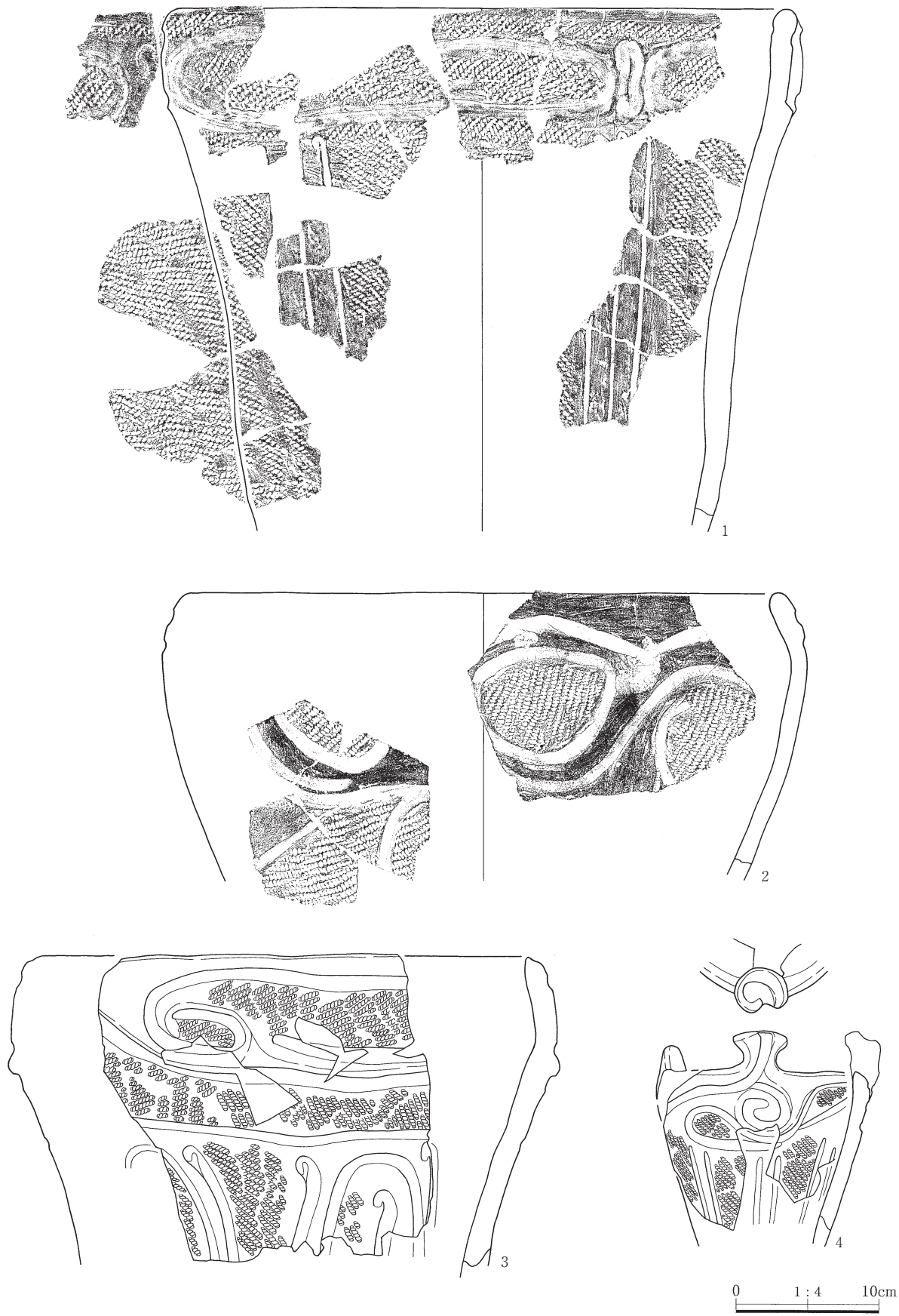
第184図 28区出土土器 (10)



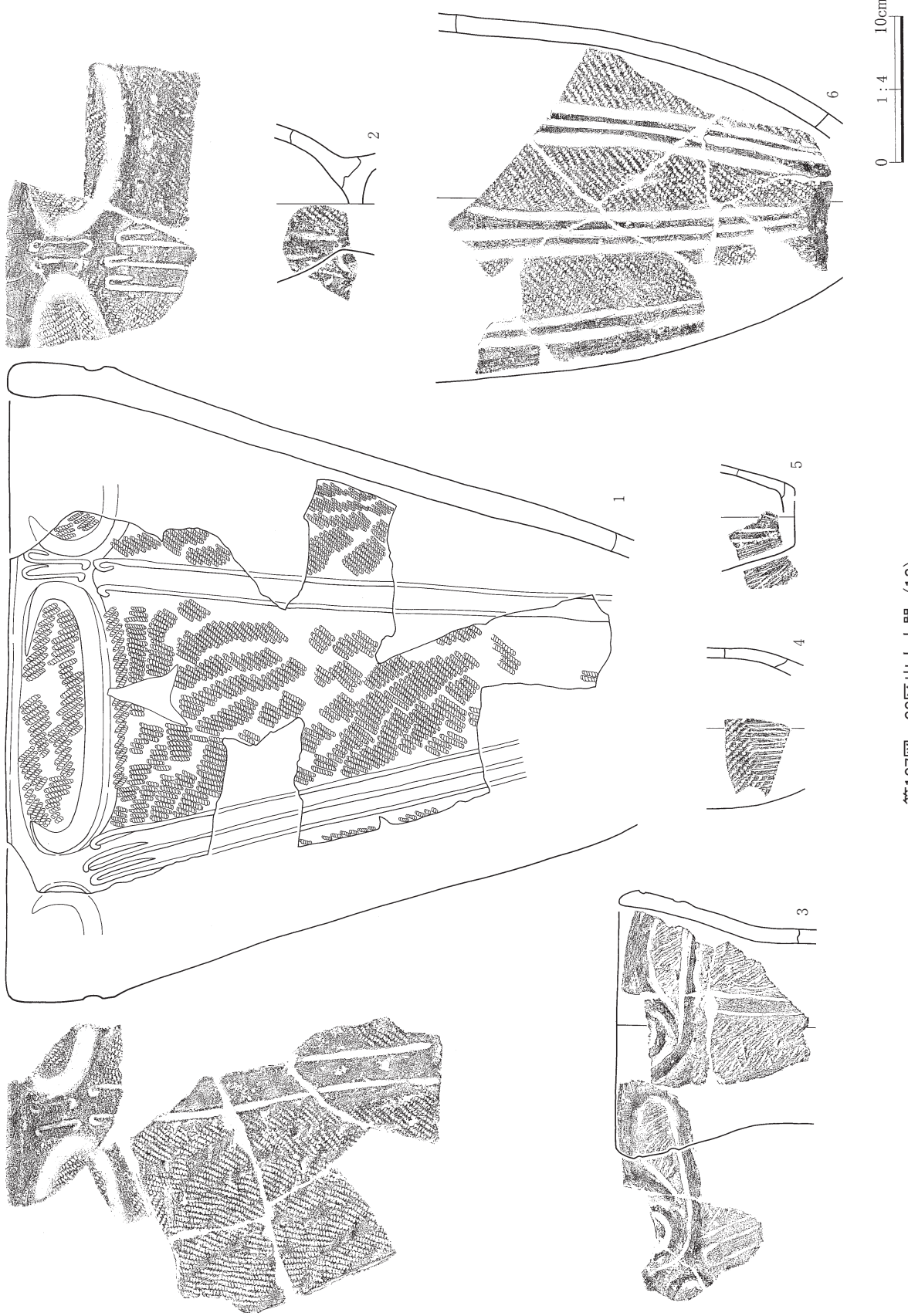
0 1 : 4 10cm  
1~5・10・14 (1/3)

第185図 28区出土土器 (11)

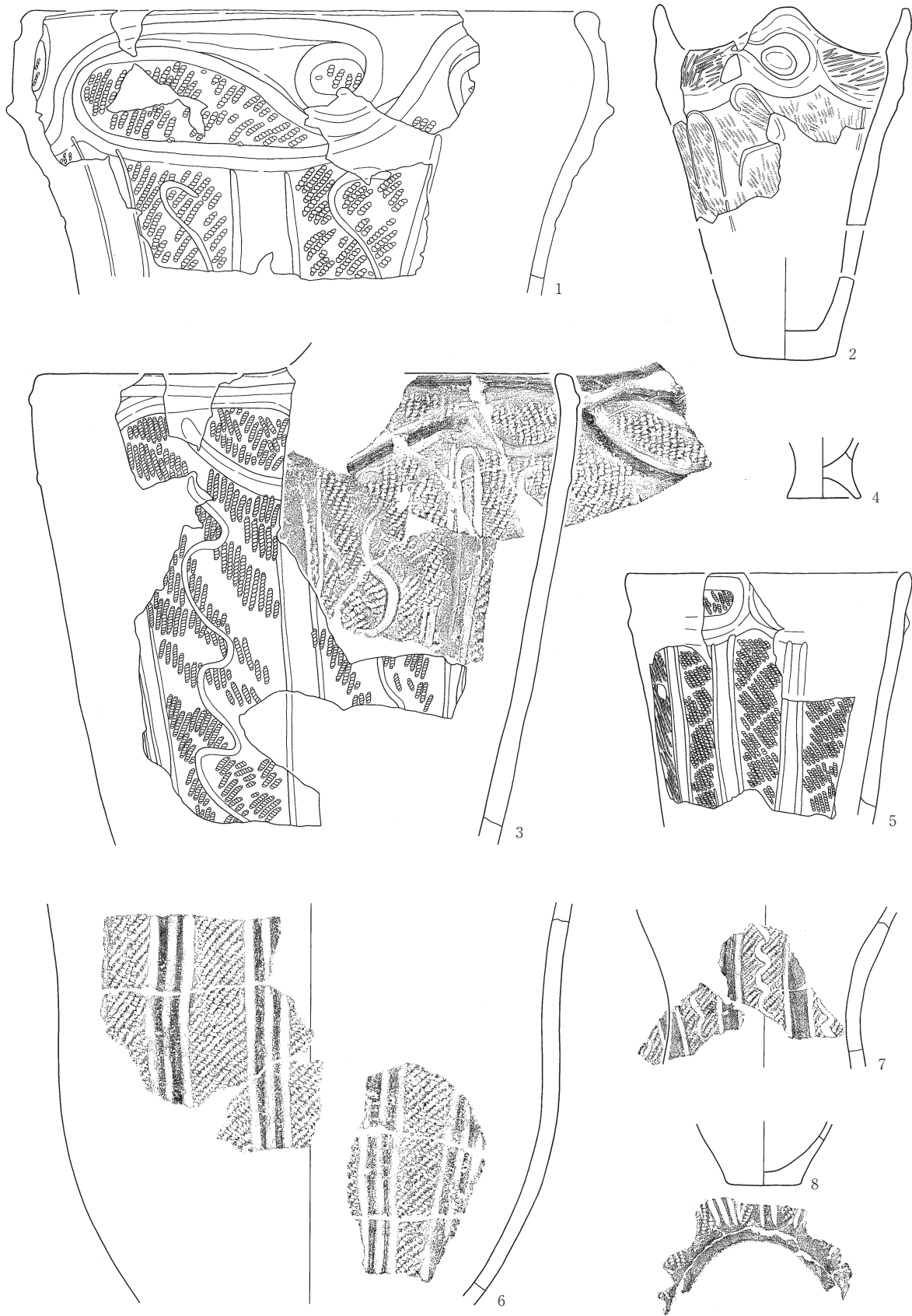




第186図 28区出土土器 (12)

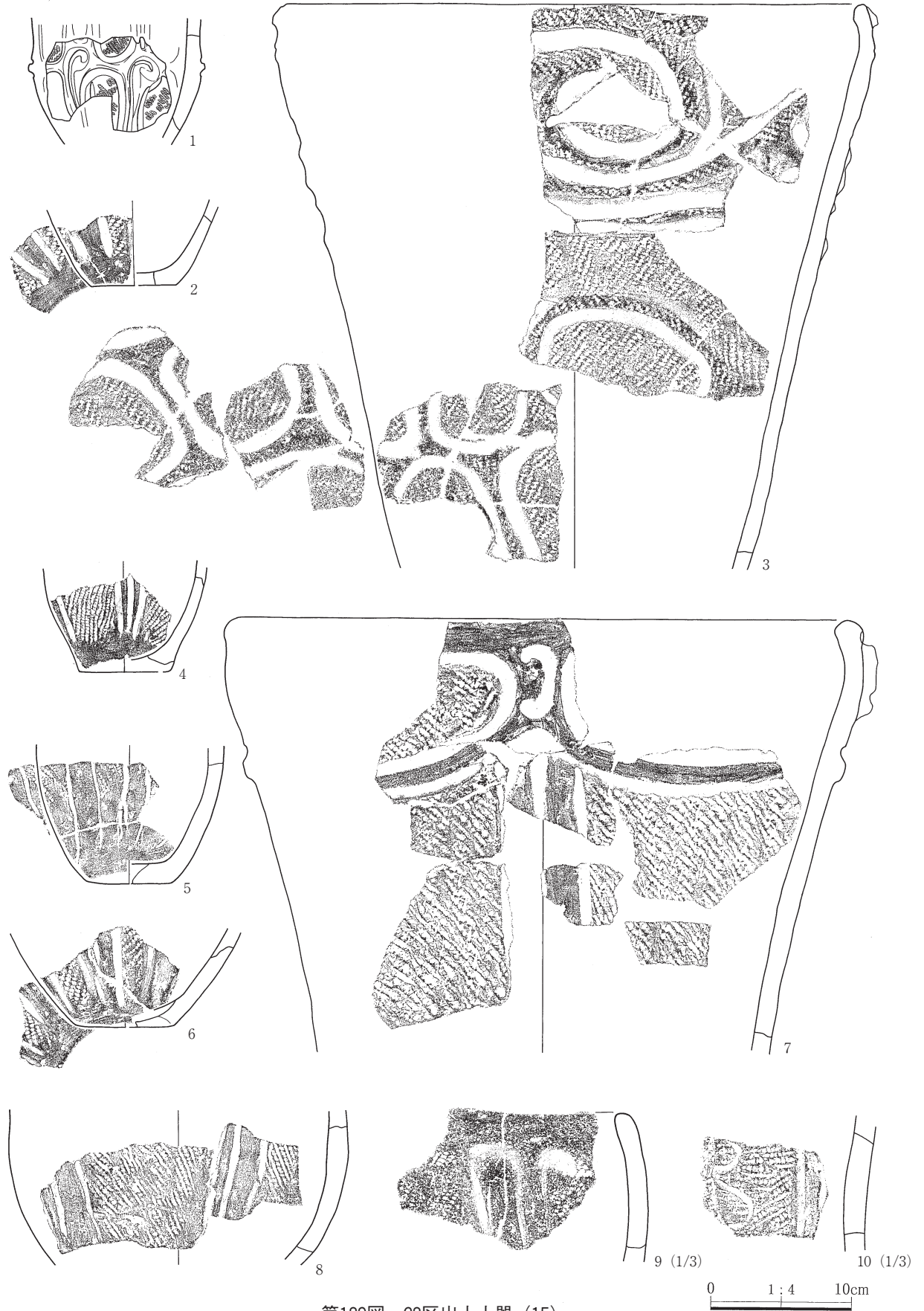


第187図 28区出土土器 (13)

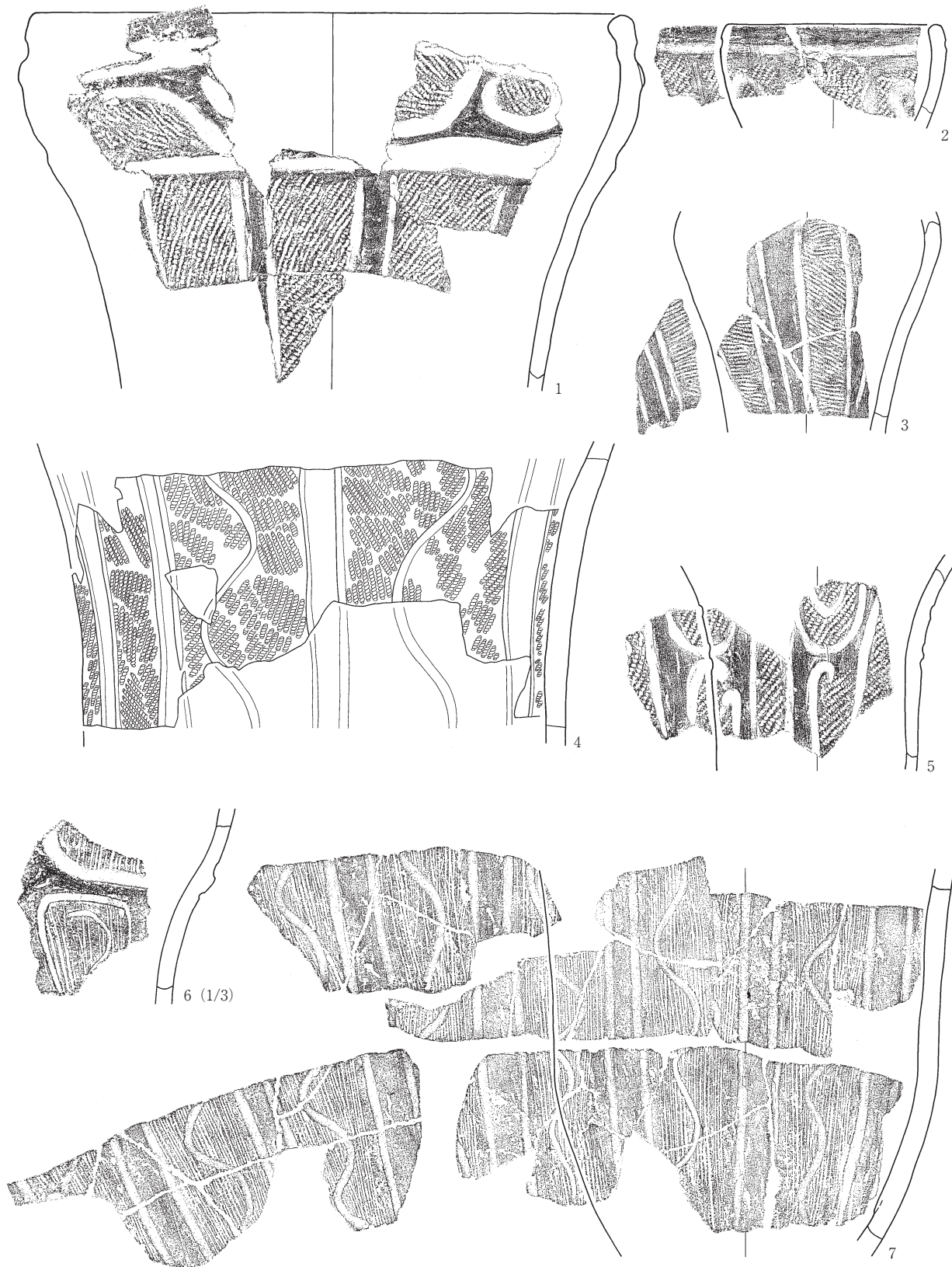


第188図 28区出土土器 (14)

0 1:4 10cm

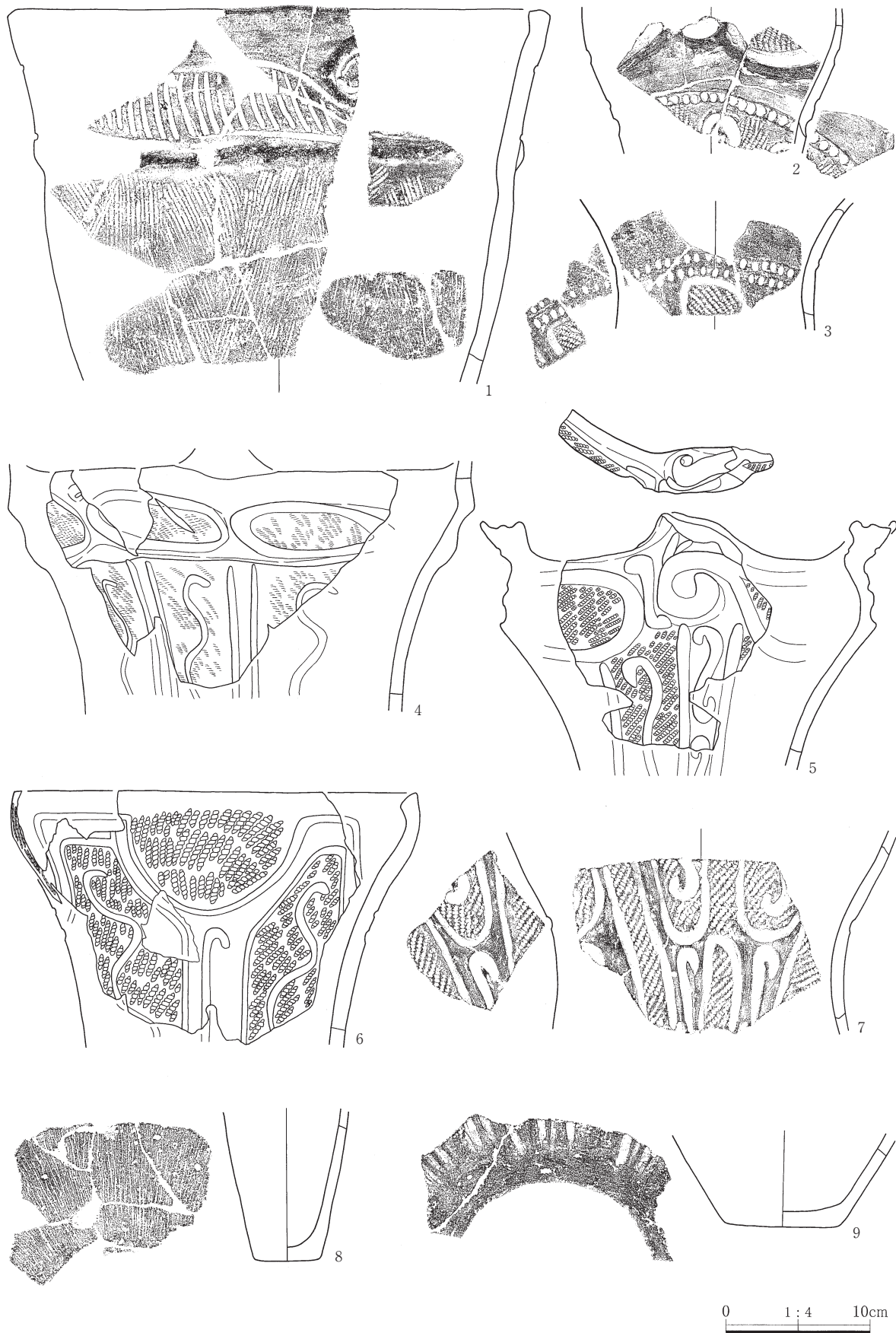


第189図 28区出土土器 (15)

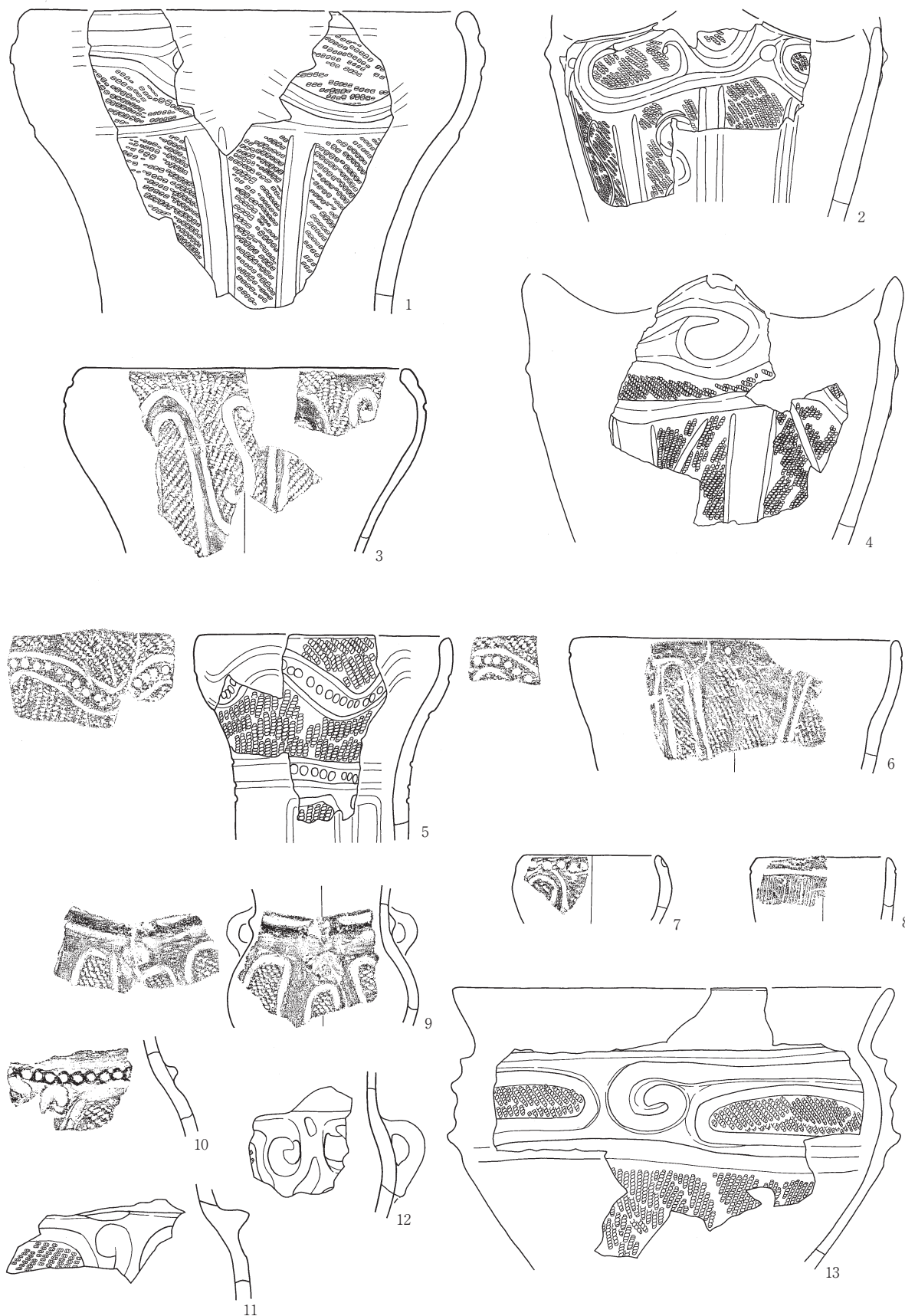


0 1 : 4 10cm

第190図 28区出土土器 (16)

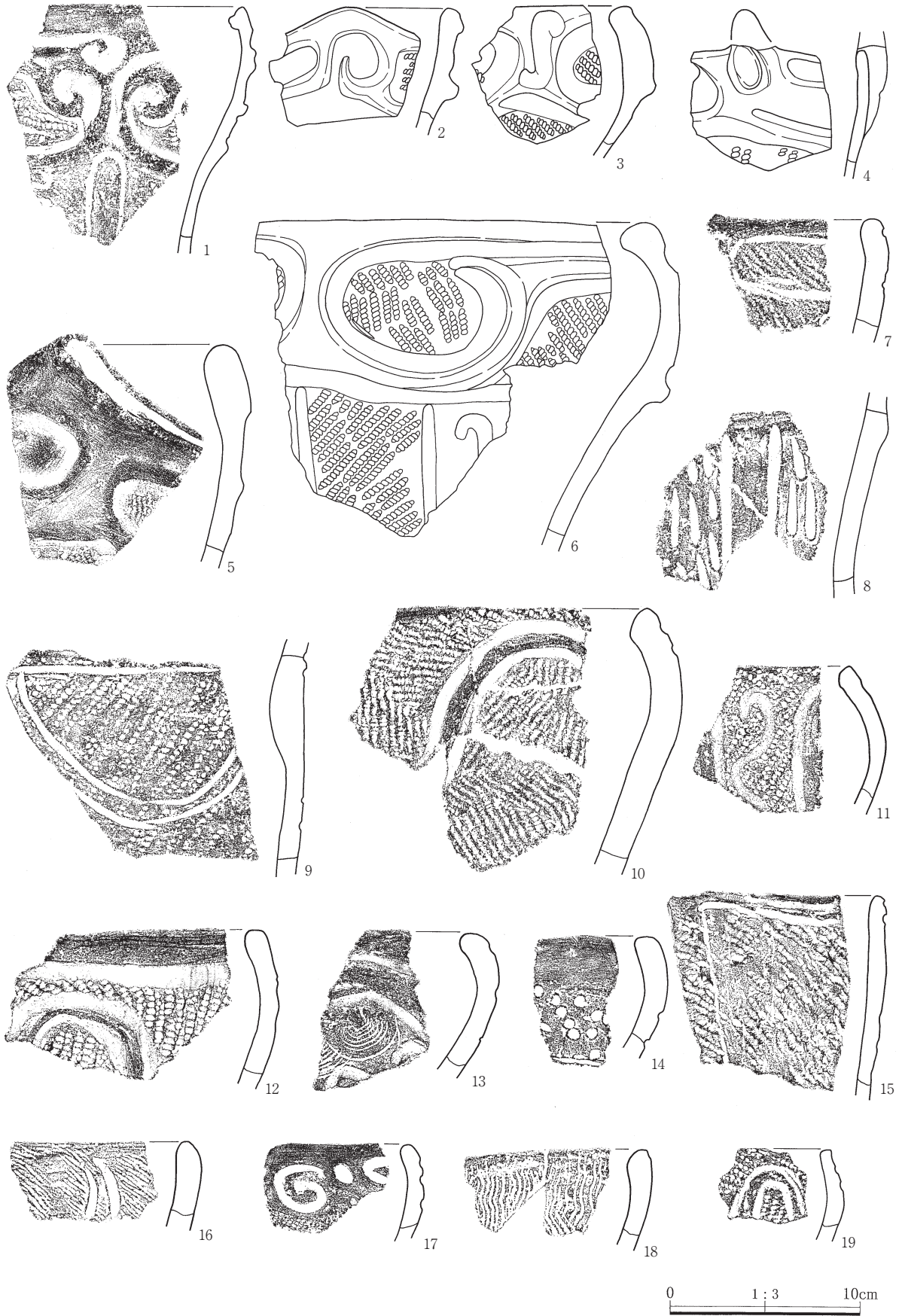


第191図 28区出土土器 (17)



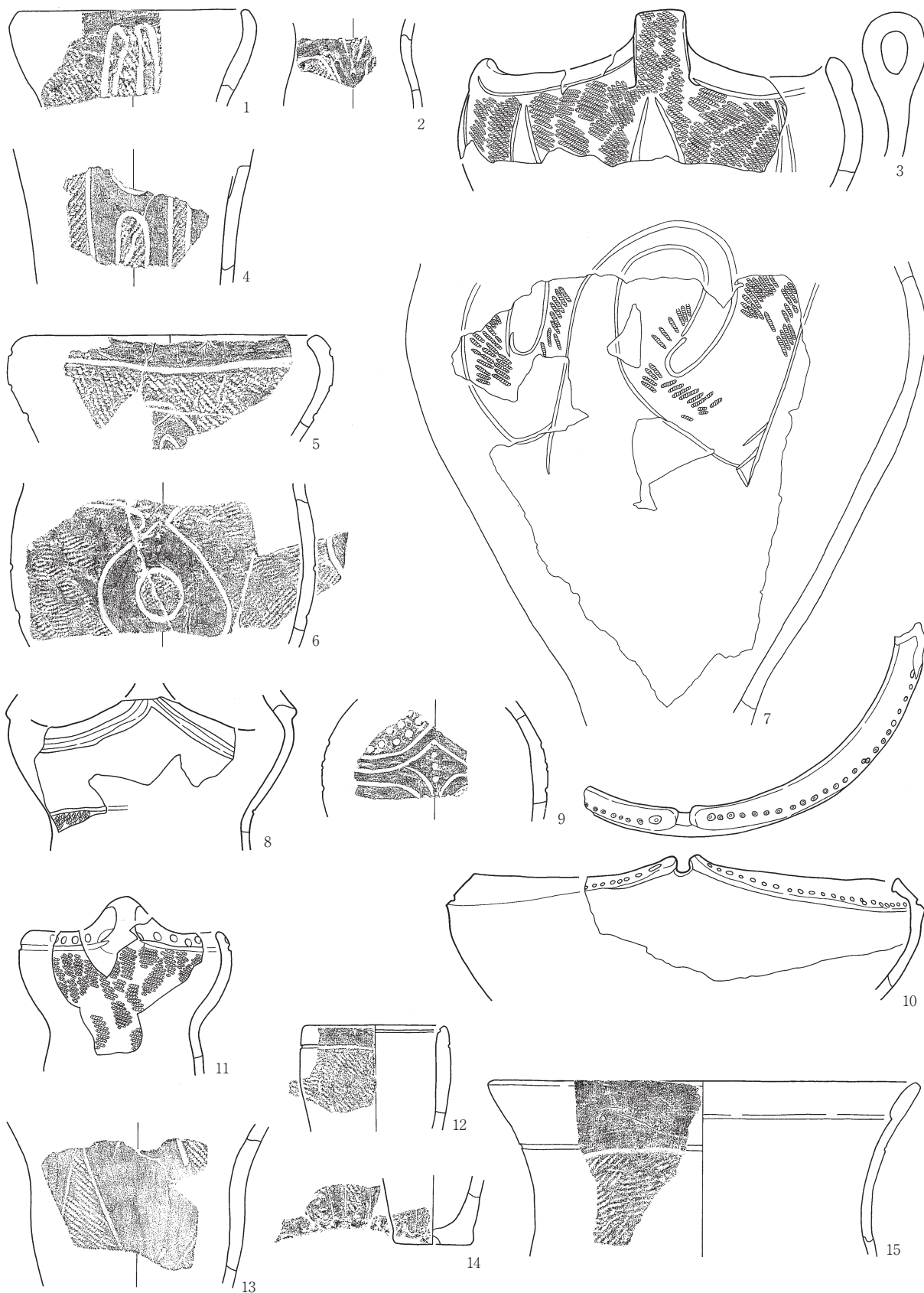
第192図 28区出土土器 (18)

0 1:4 10cm  
10~12 (1/3)



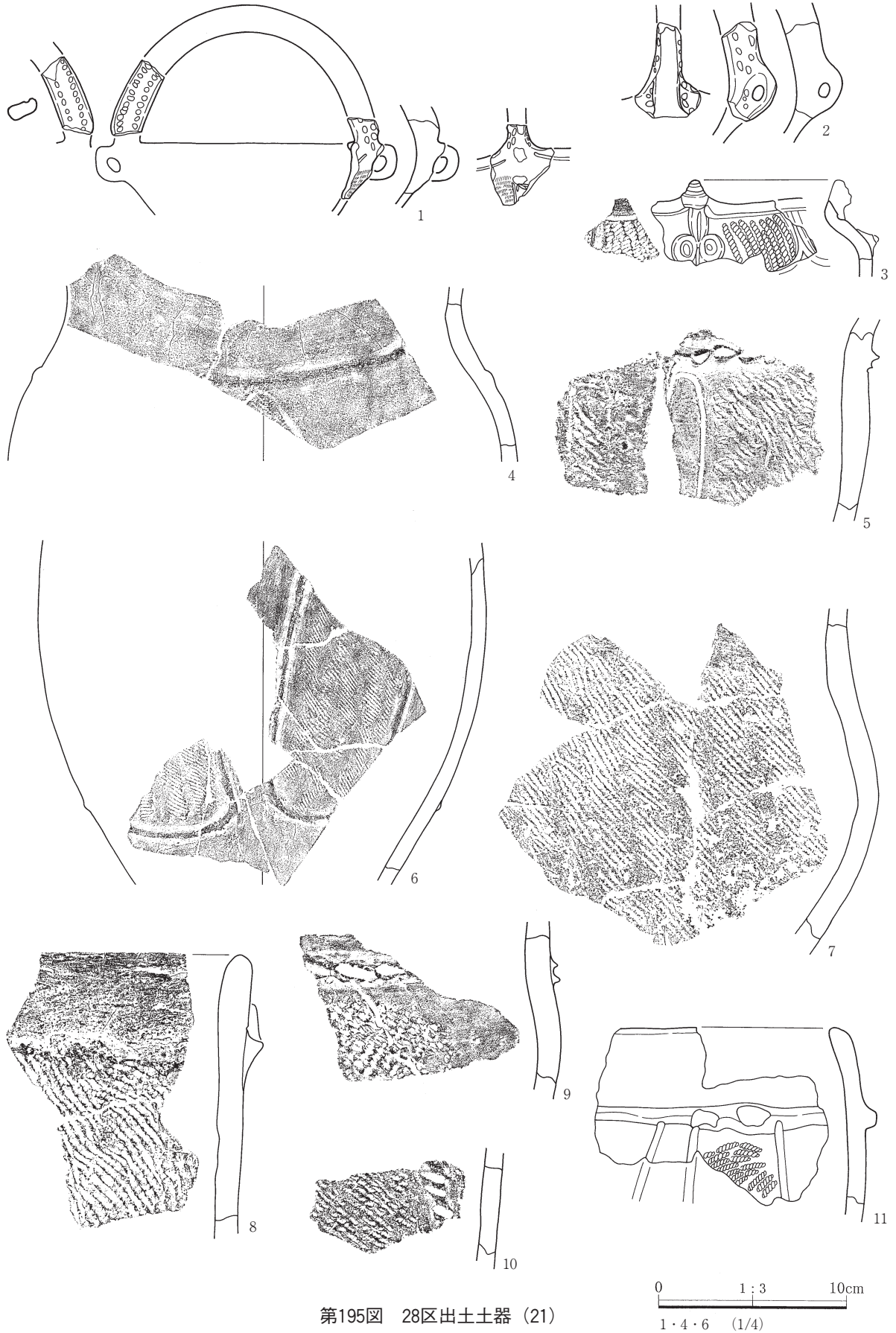
第193図 28区出土土器 (19)



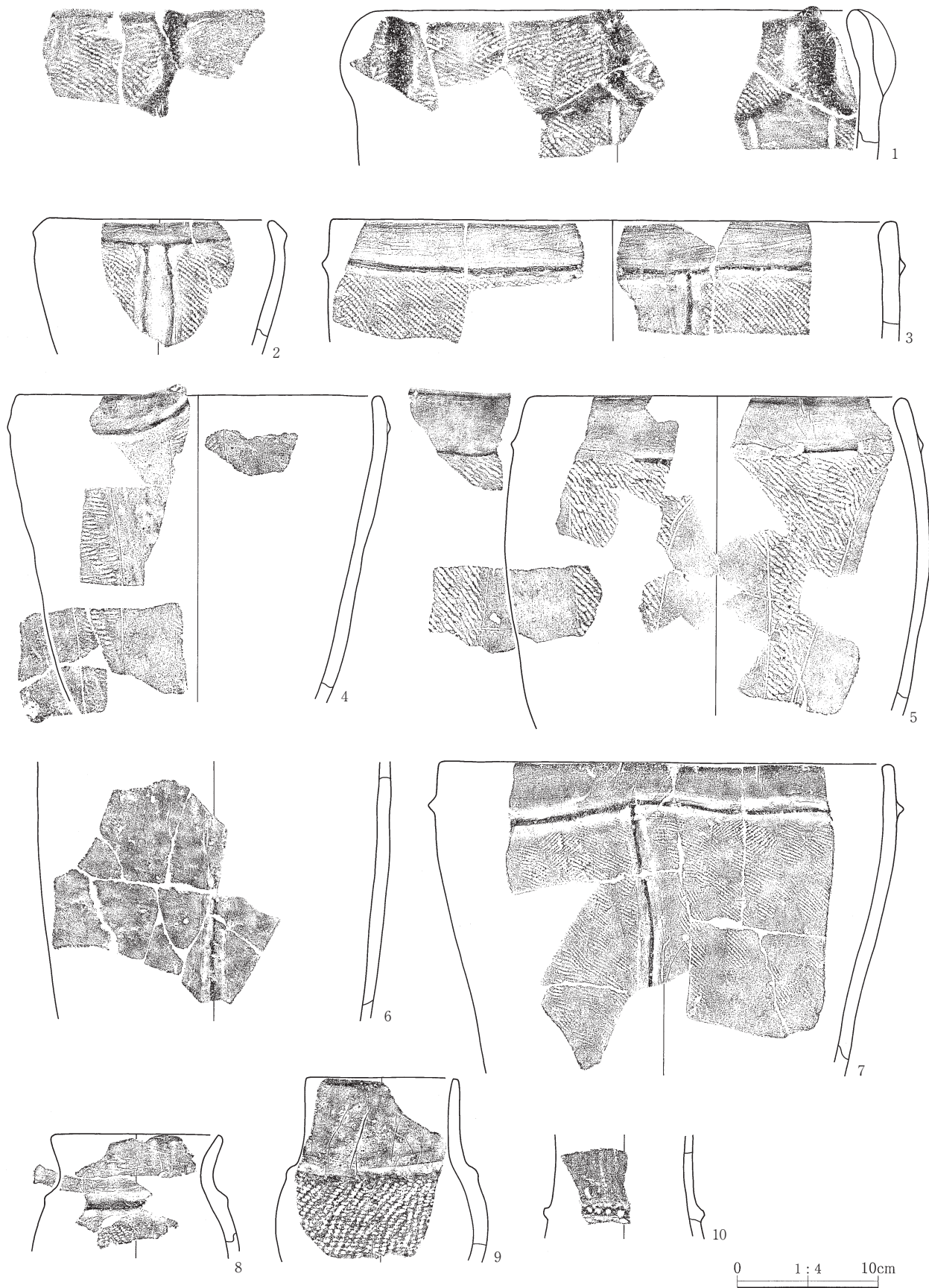


第194図 28区出土土器 (20)

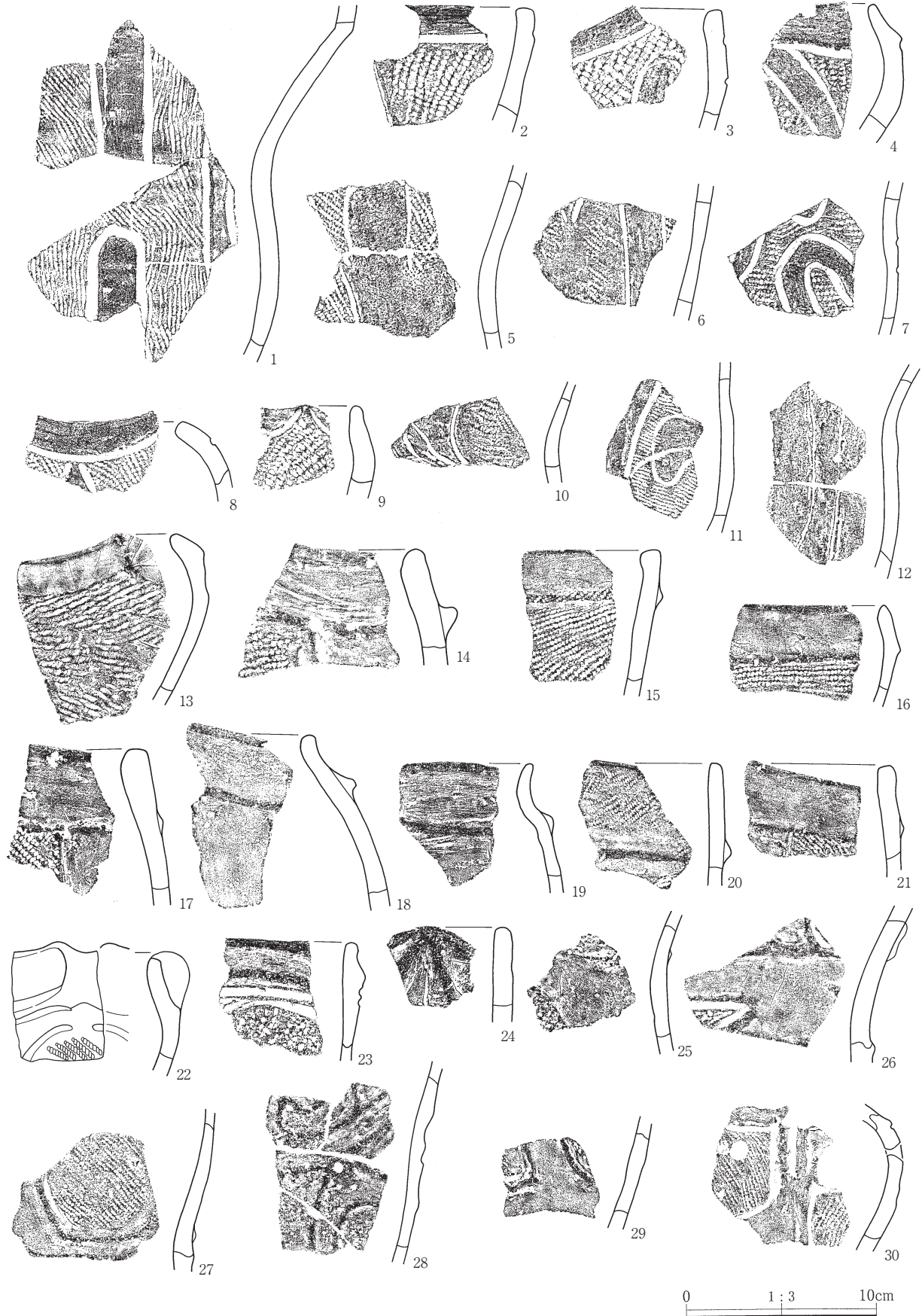
0 1:4 10cm



第195図 28区出土土器 (21)



第196図 28区出土土器 (22)

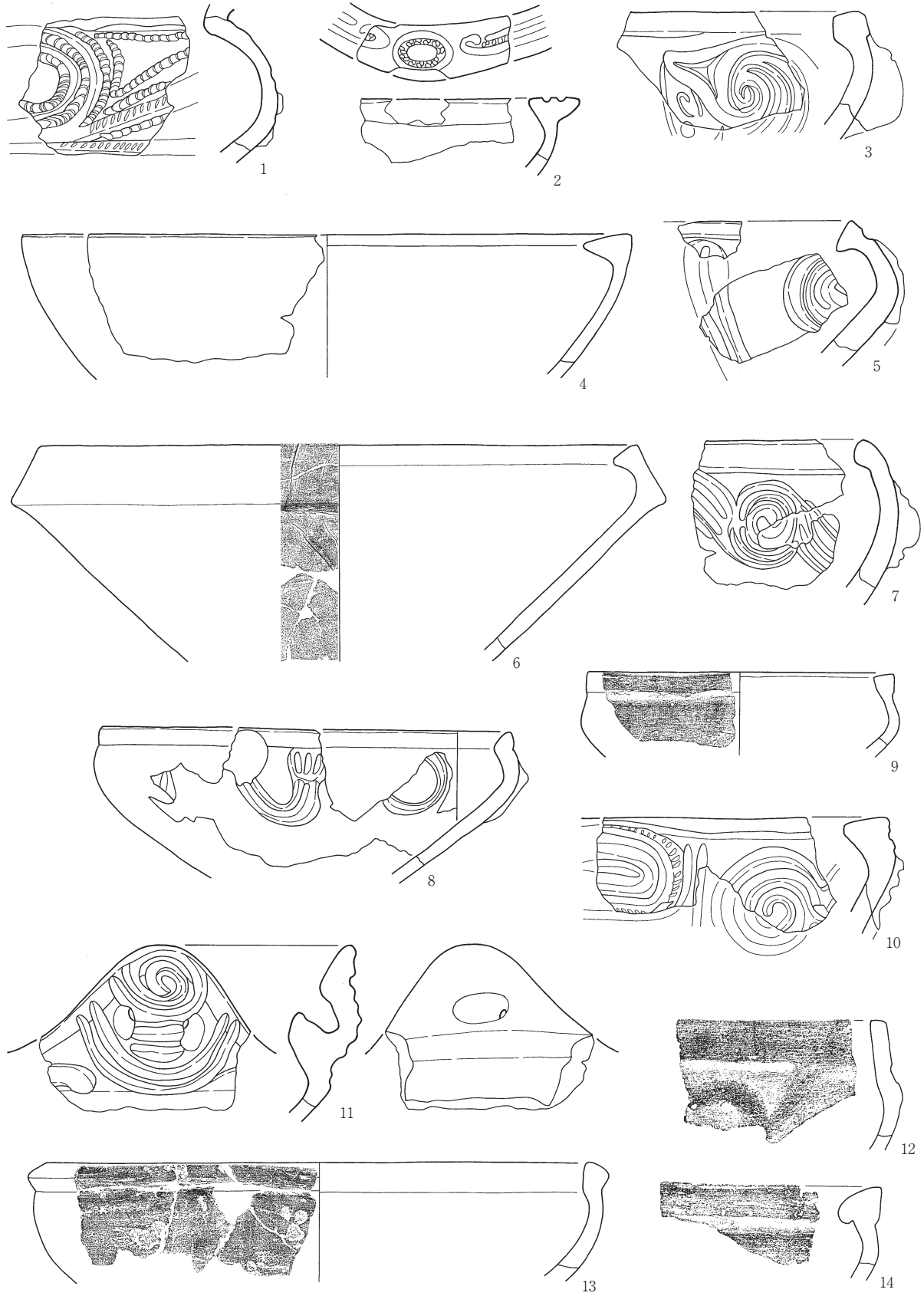


第197図 28区出土土器 (23)



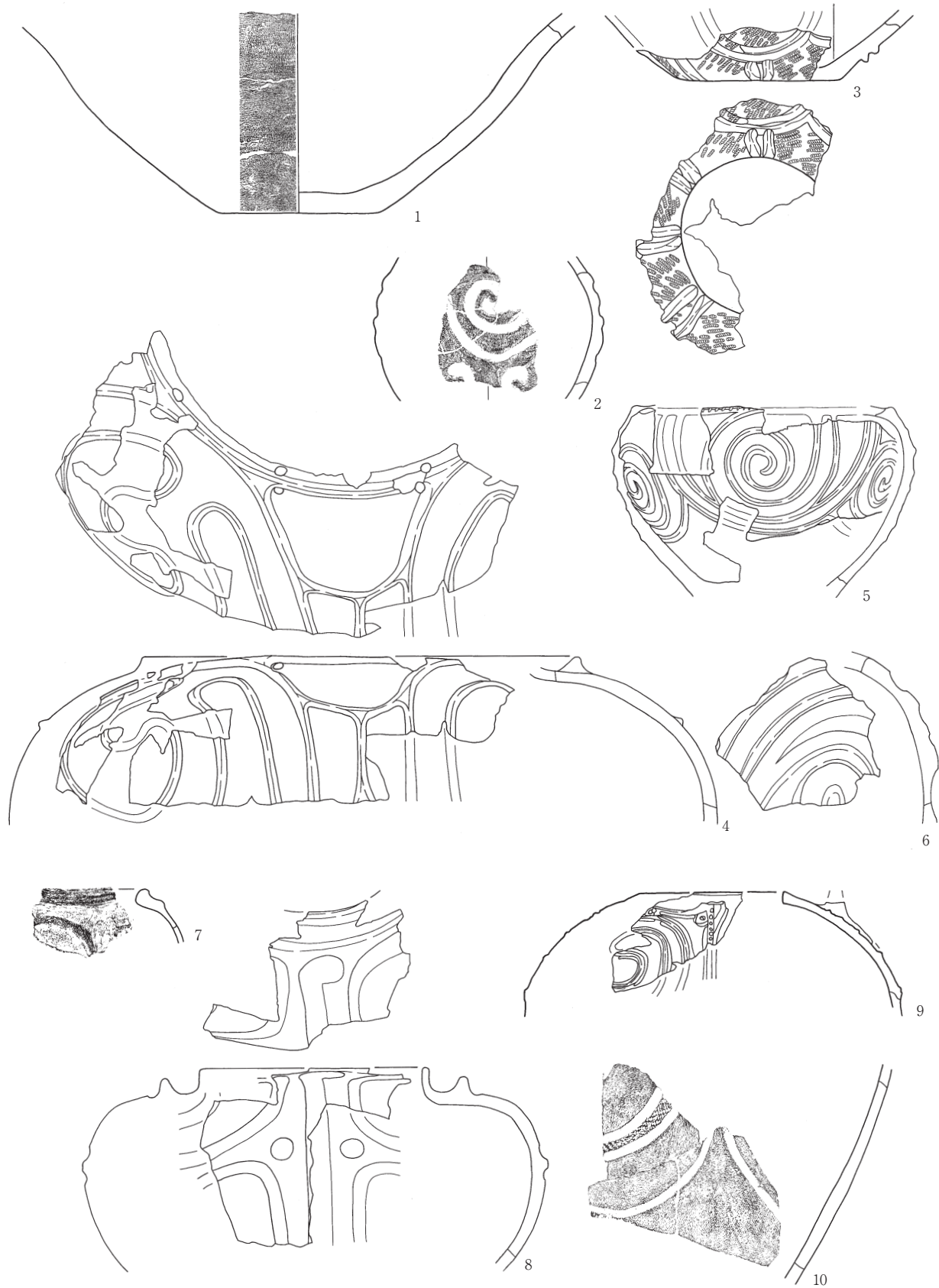
0 1:3 10cm

第198図 28区出土土器 (24)



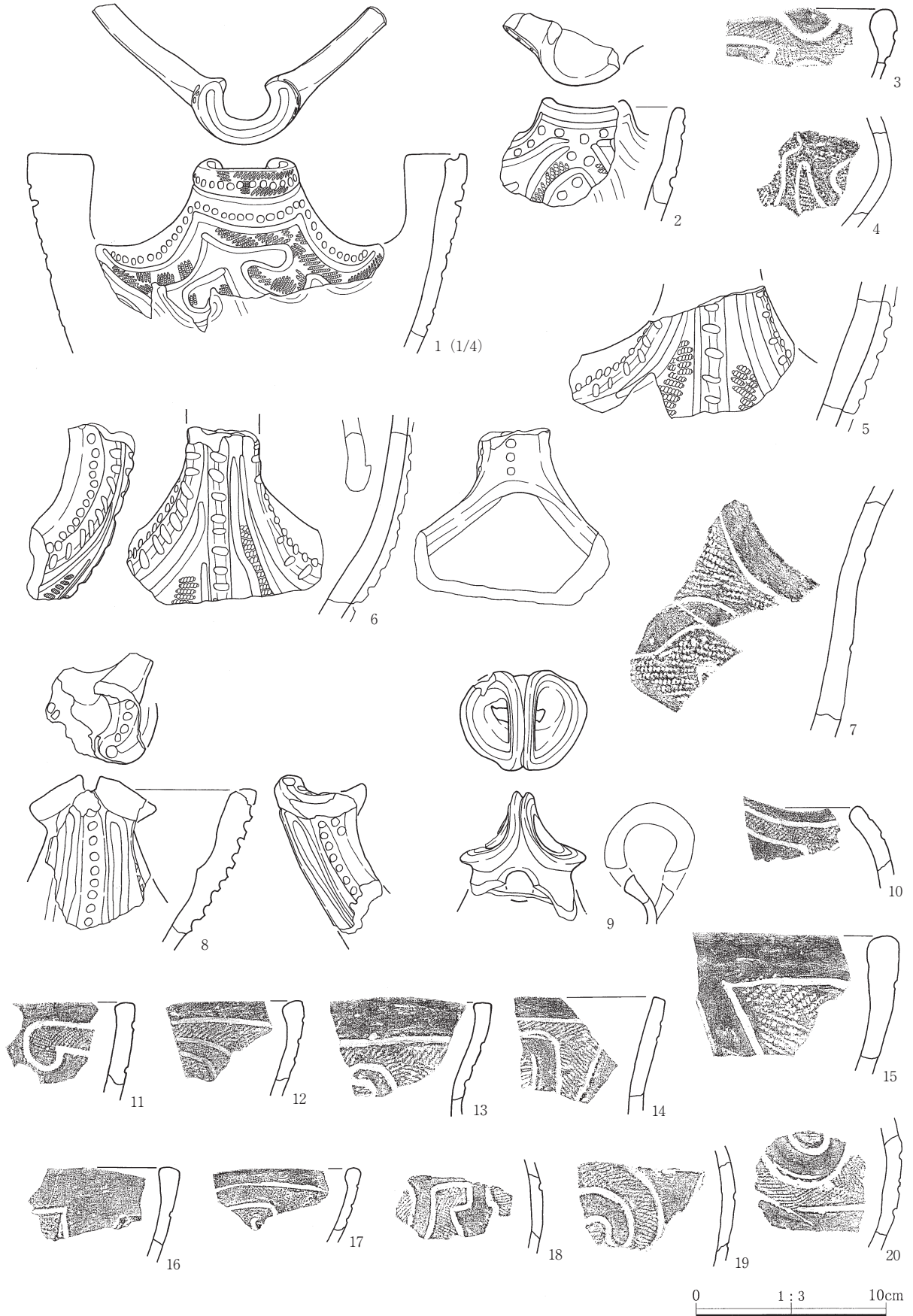
0 1 : 3 10cm  
4・6・8・9・13 (1/4)

第199図 28区出土土器 (25)



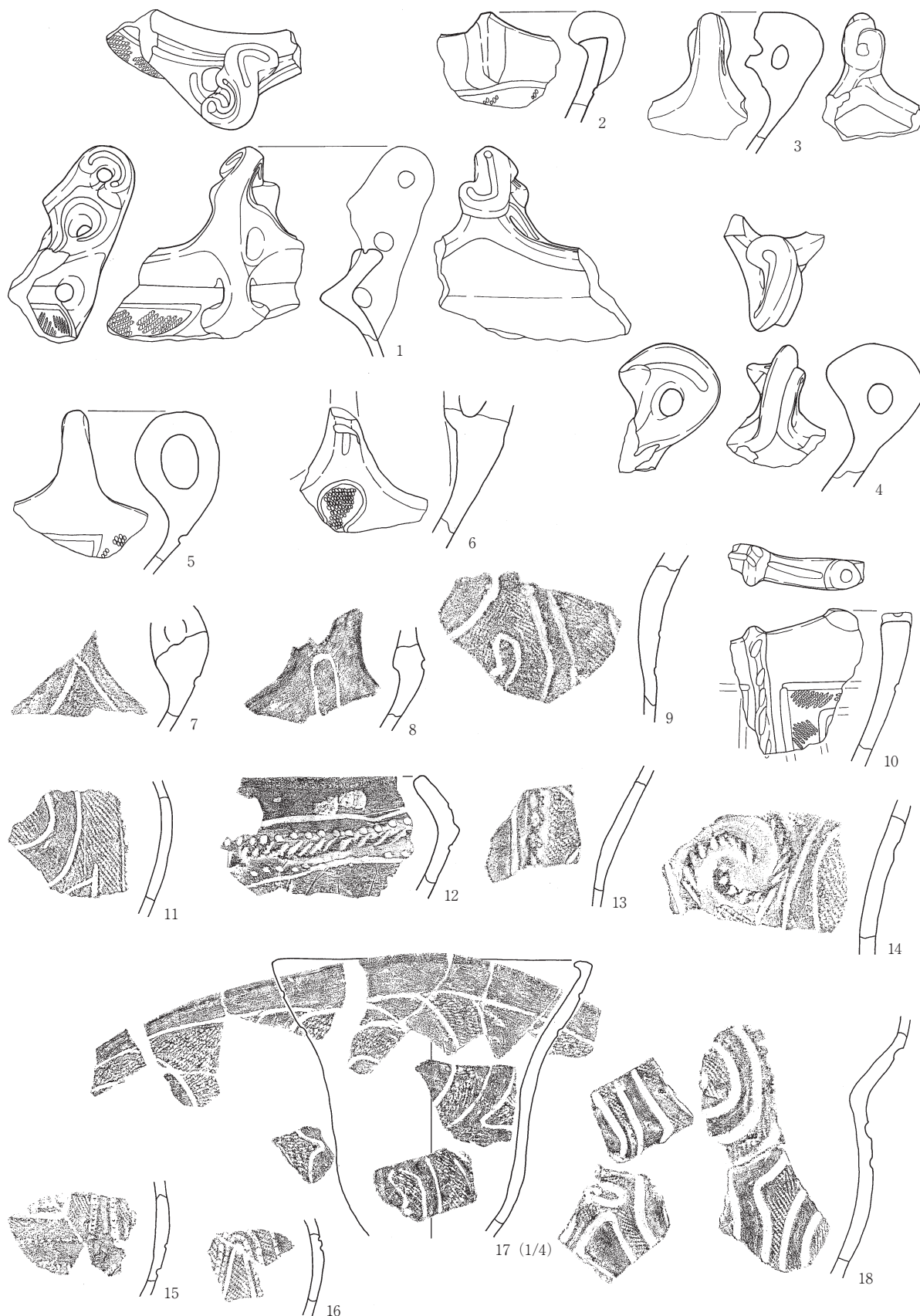
第200図 28区出土土器 (26)

0 1 : 4 10cm  
6 · 7 · 10 (1/3)



第201図 28区出土土器 (27)





第202図 28区出土土器 (28)

0 1:3 10cm

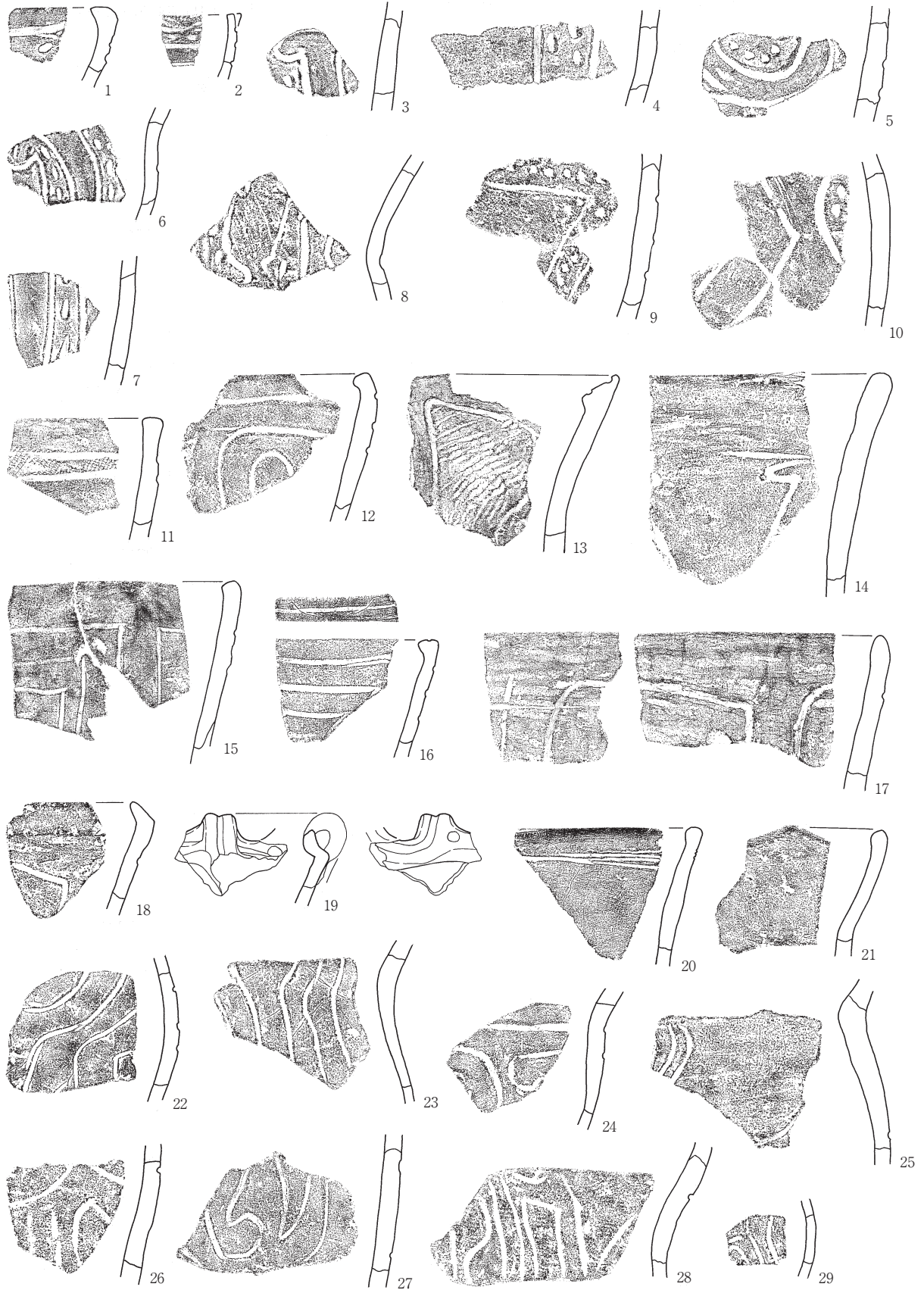


第203図 28区出土土器 (29)

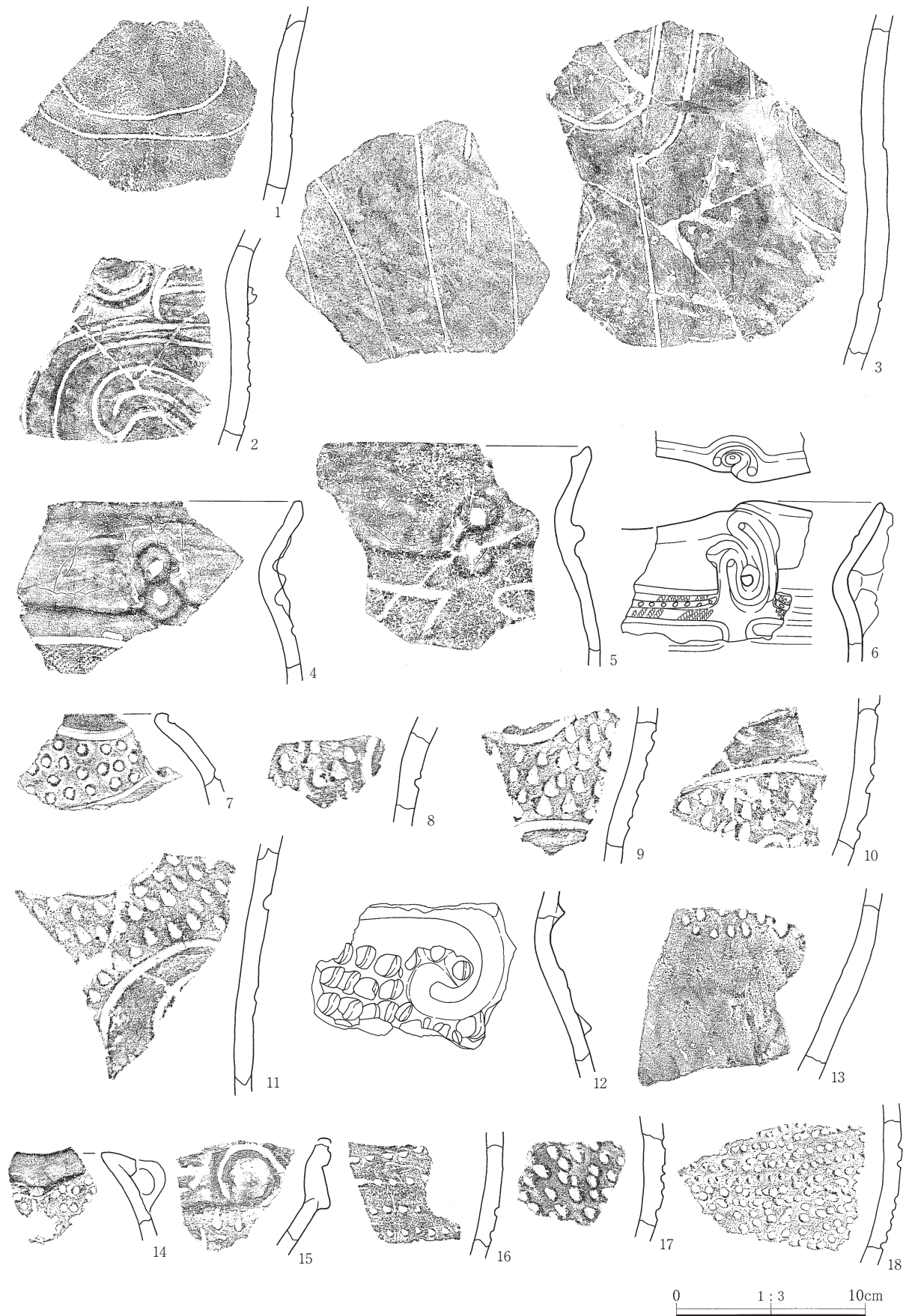


0 1 : 4 10cm

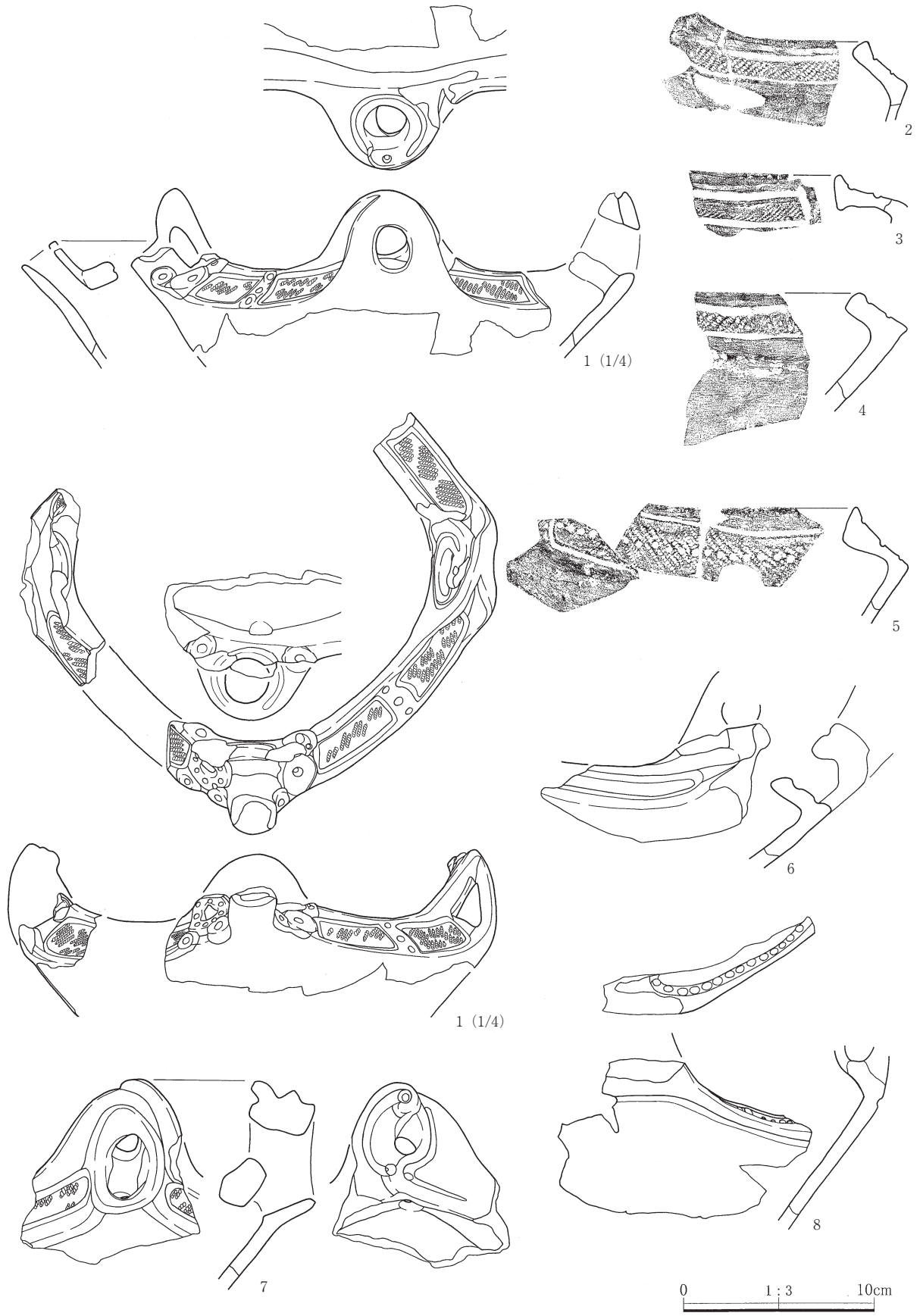
第204図 28区出土土器 (30)



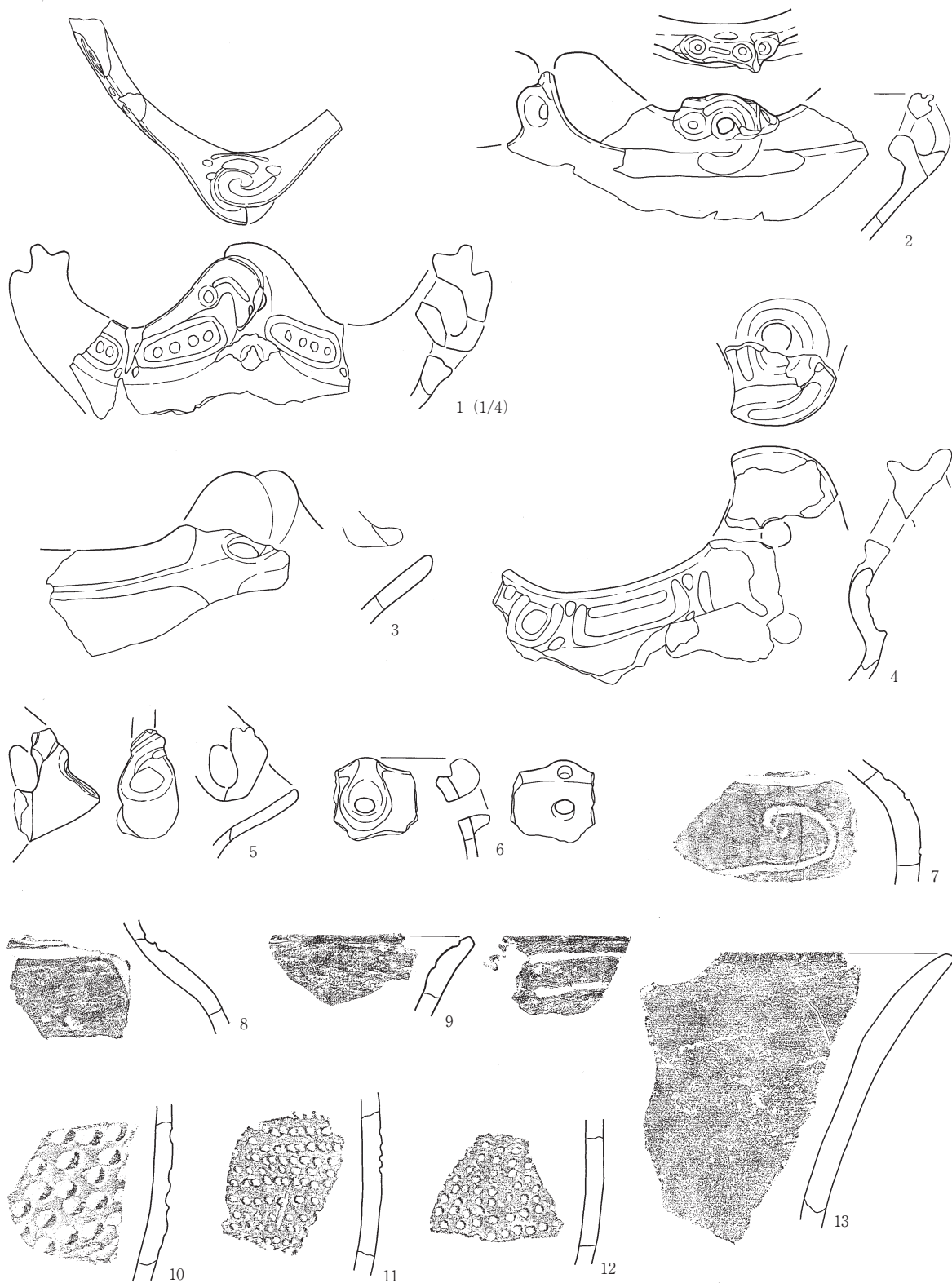
第205図 28区出土土器 (31)



第206図 28区出土土器 (32)

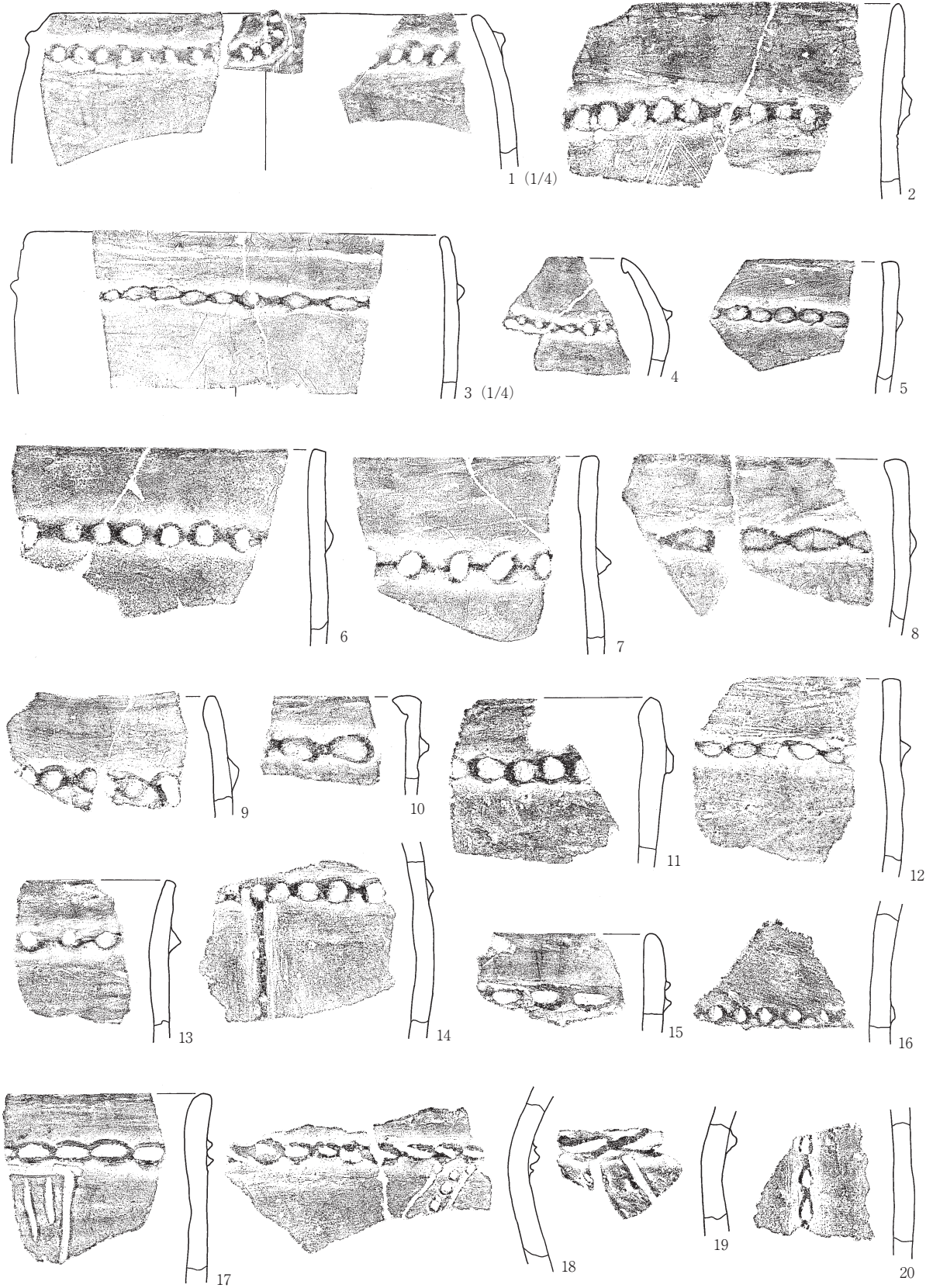


第207図 28区出土土器 (33)



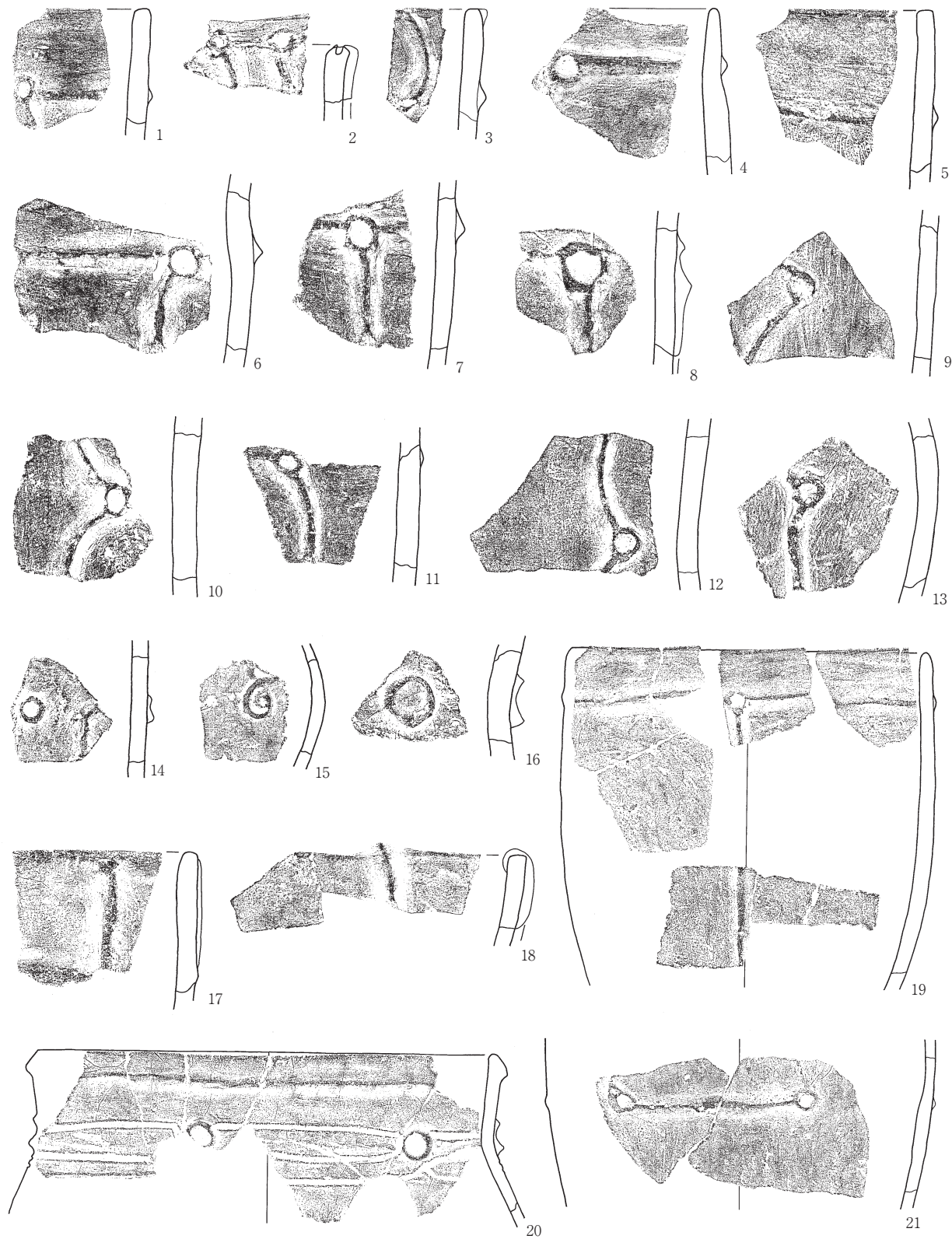
第208図 28区出土土器 (34)

0 1:3 10cm



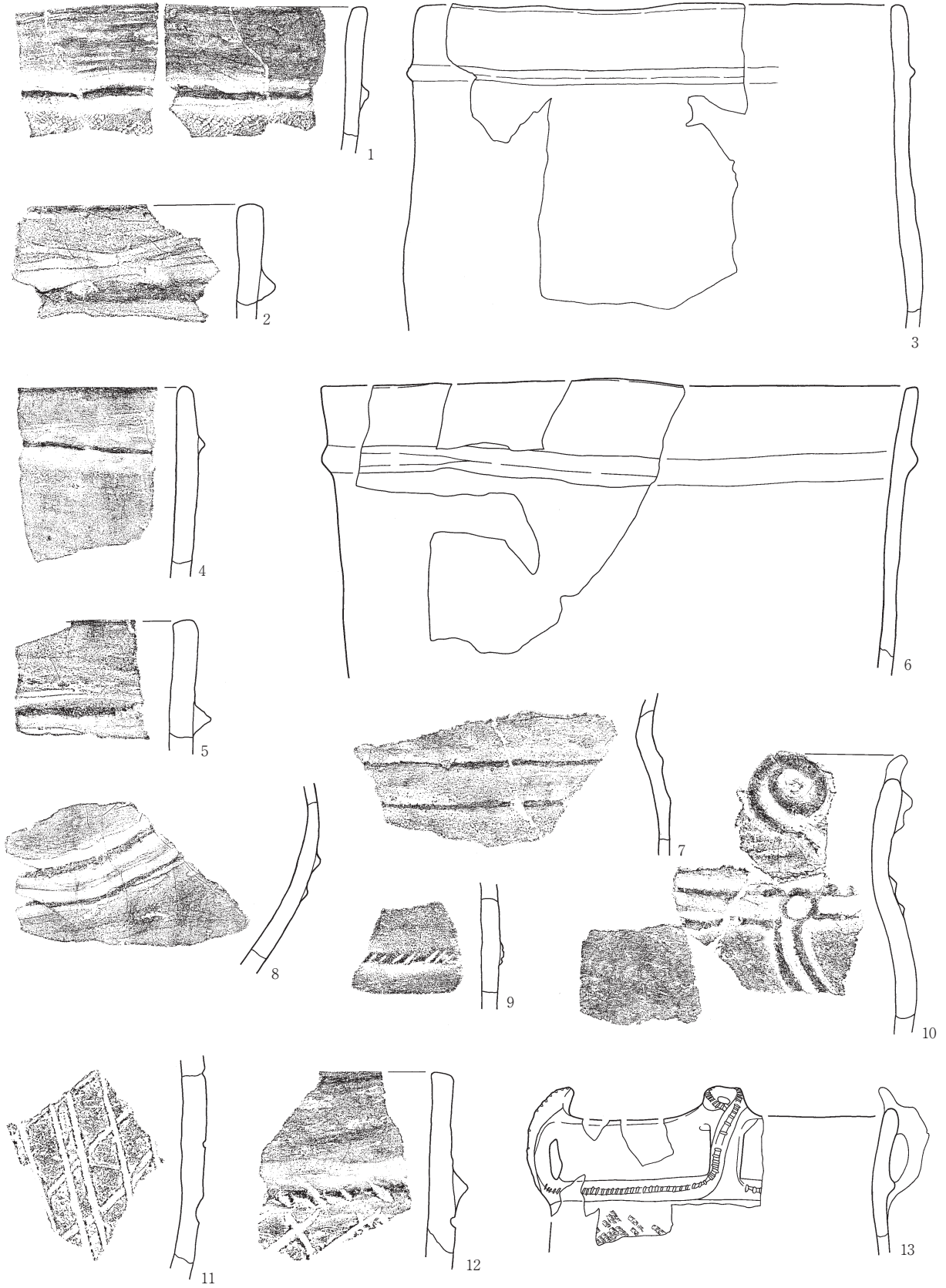
第209図 28区出土土器 (35)





第210図 28区出土土器 (36)

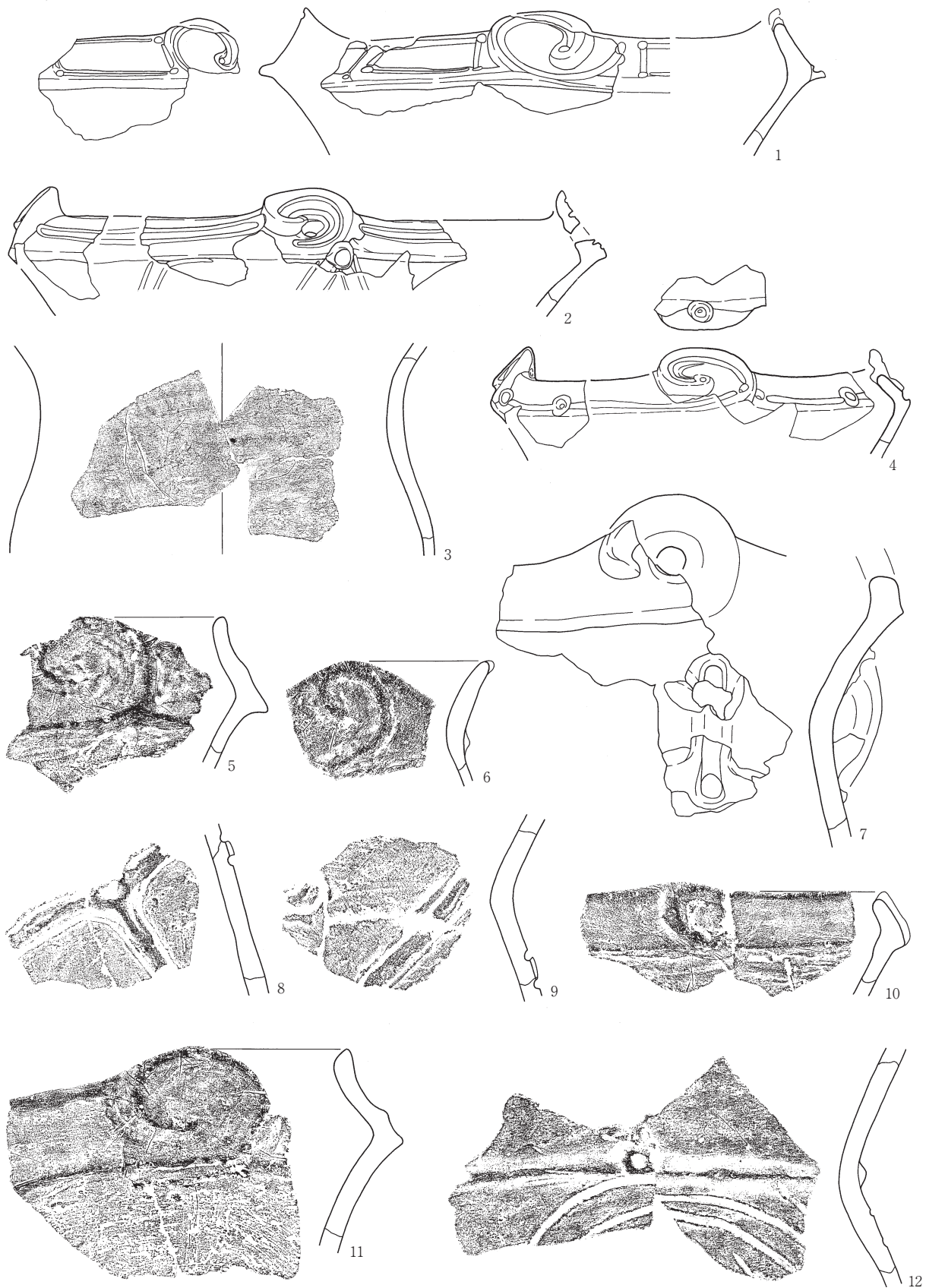
0 1:3 10cm  
19~21 (1/4)



0 1:3 10cm

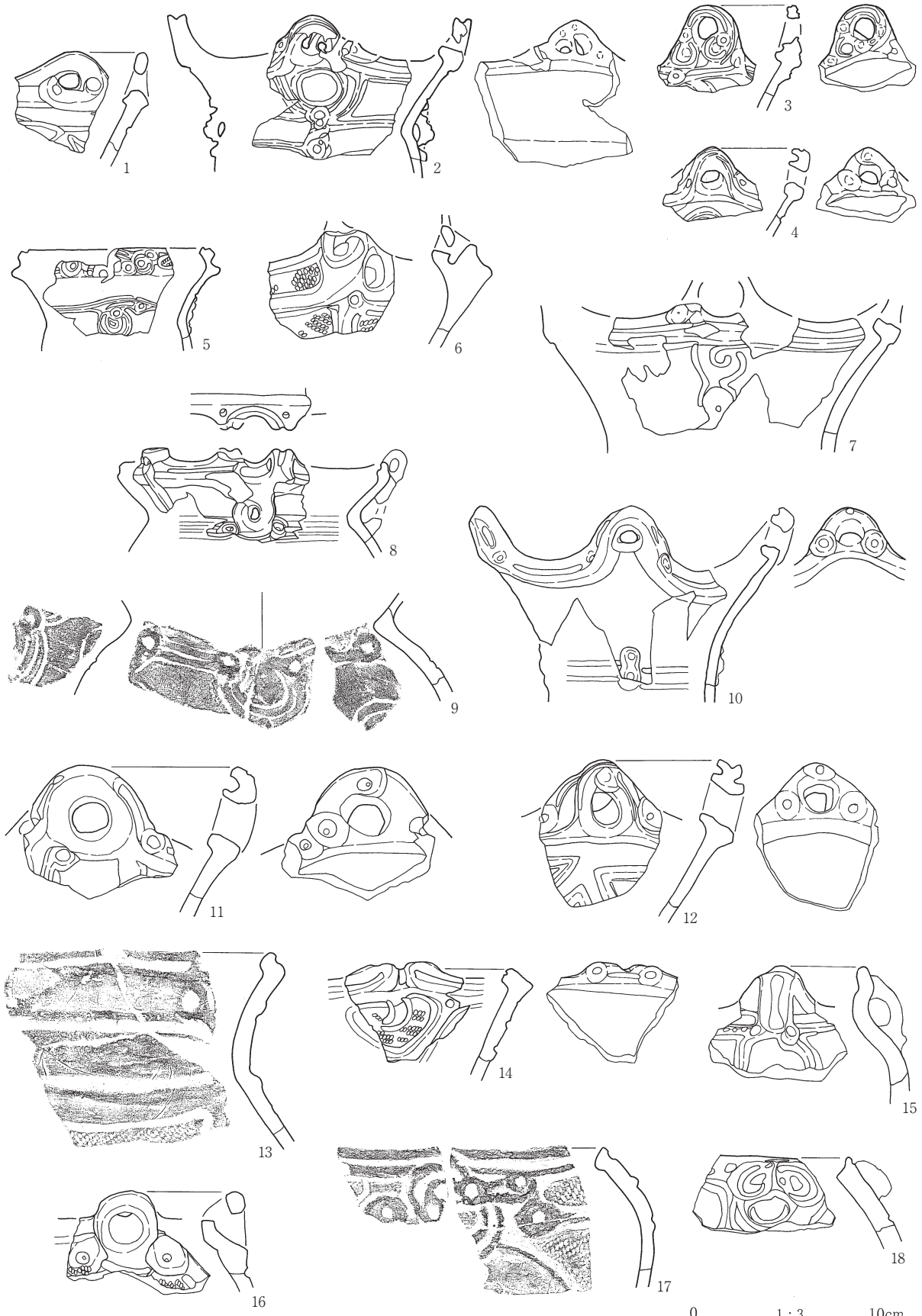
3・6・13 (1/4)

第211図 28区出土土器 (37)



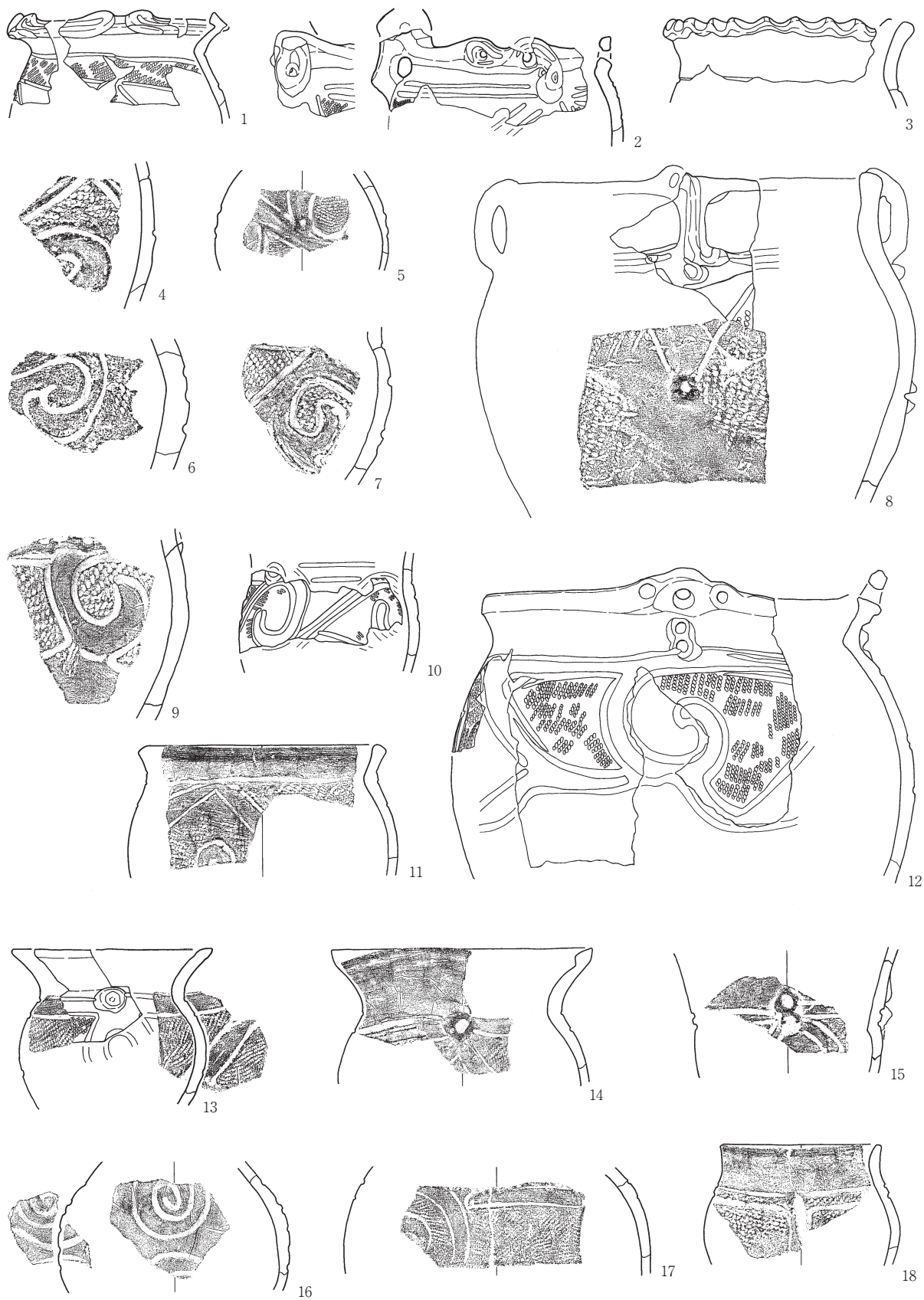
第212図 28区出土土器 (38)

0 1:3 10cm  
1~4 (1/4)



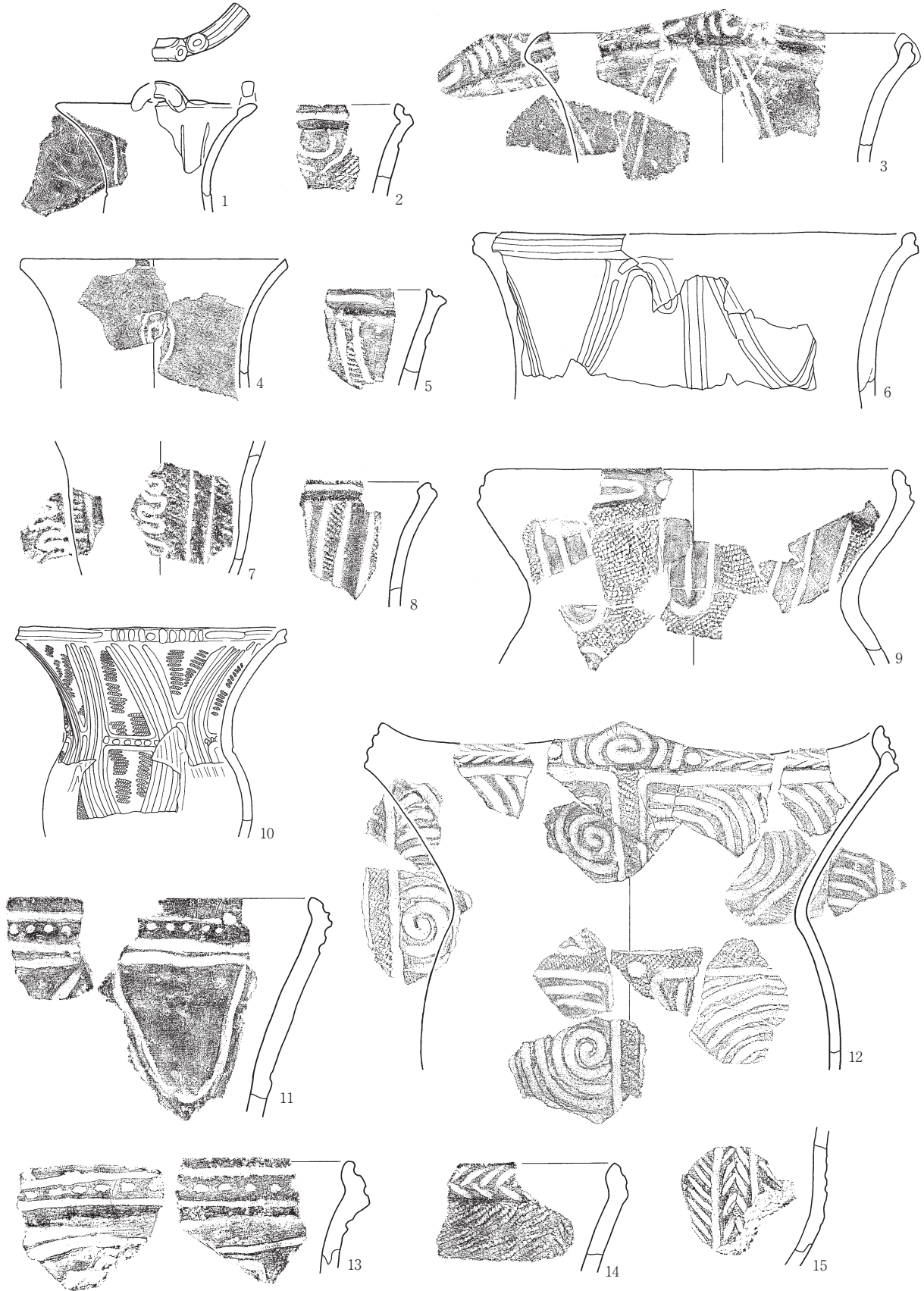
0 1:3 10cm  
2・5・7~10 (1/4)

第213図 28区出土土器 (39)



第214図 28区出土土器 (40)

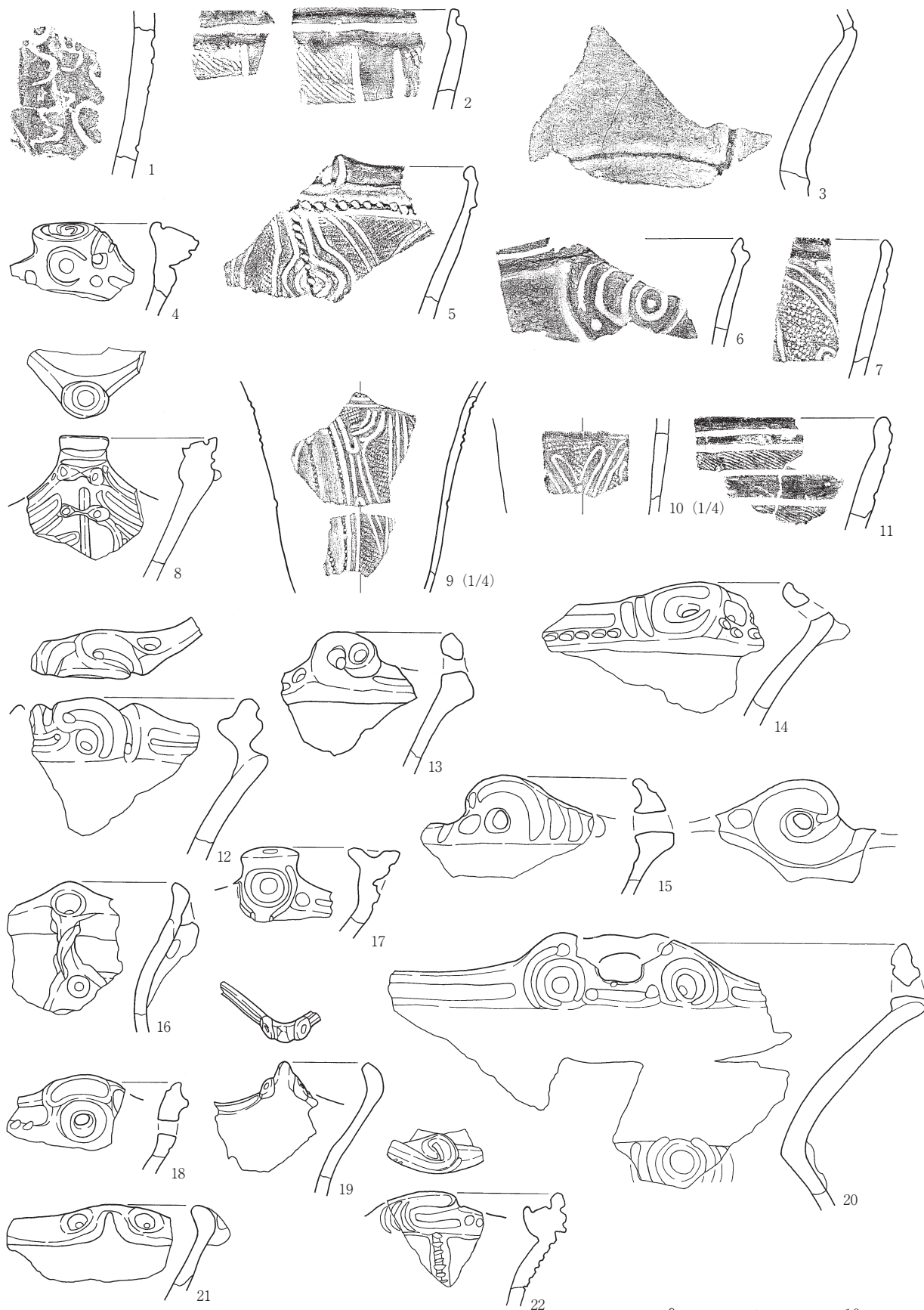
0 1:4 10cm  
4・6・7・9 (1/3)



第215図 28区出土土器 (41)

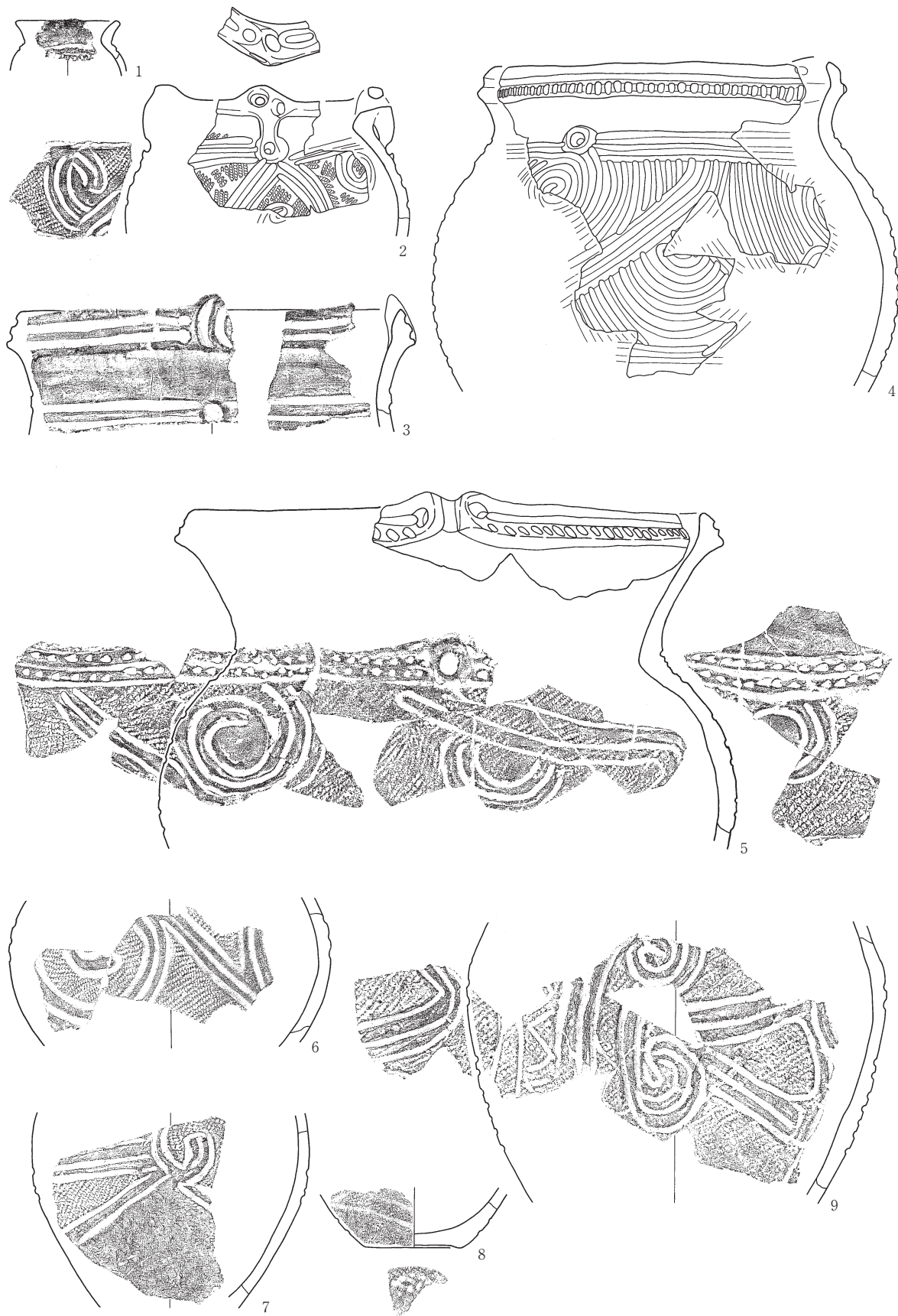
0 1 : 4 10cm

2・5・8・11・13~15 (1/3)



第216圖 28区出土土器 (42)

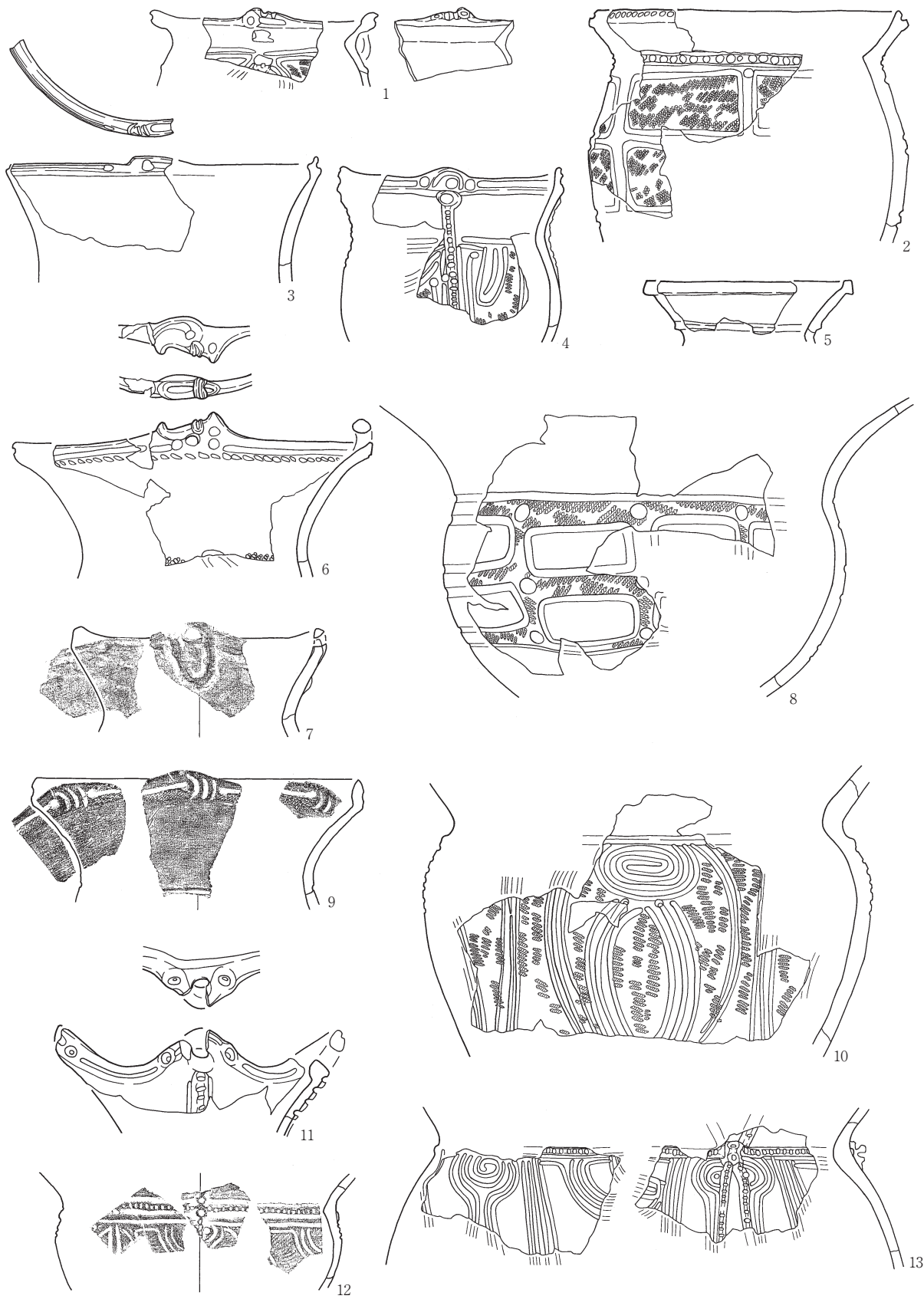
0 1:3 10cm



第217図 28区出土土器 (43)

0 1:4 10cm





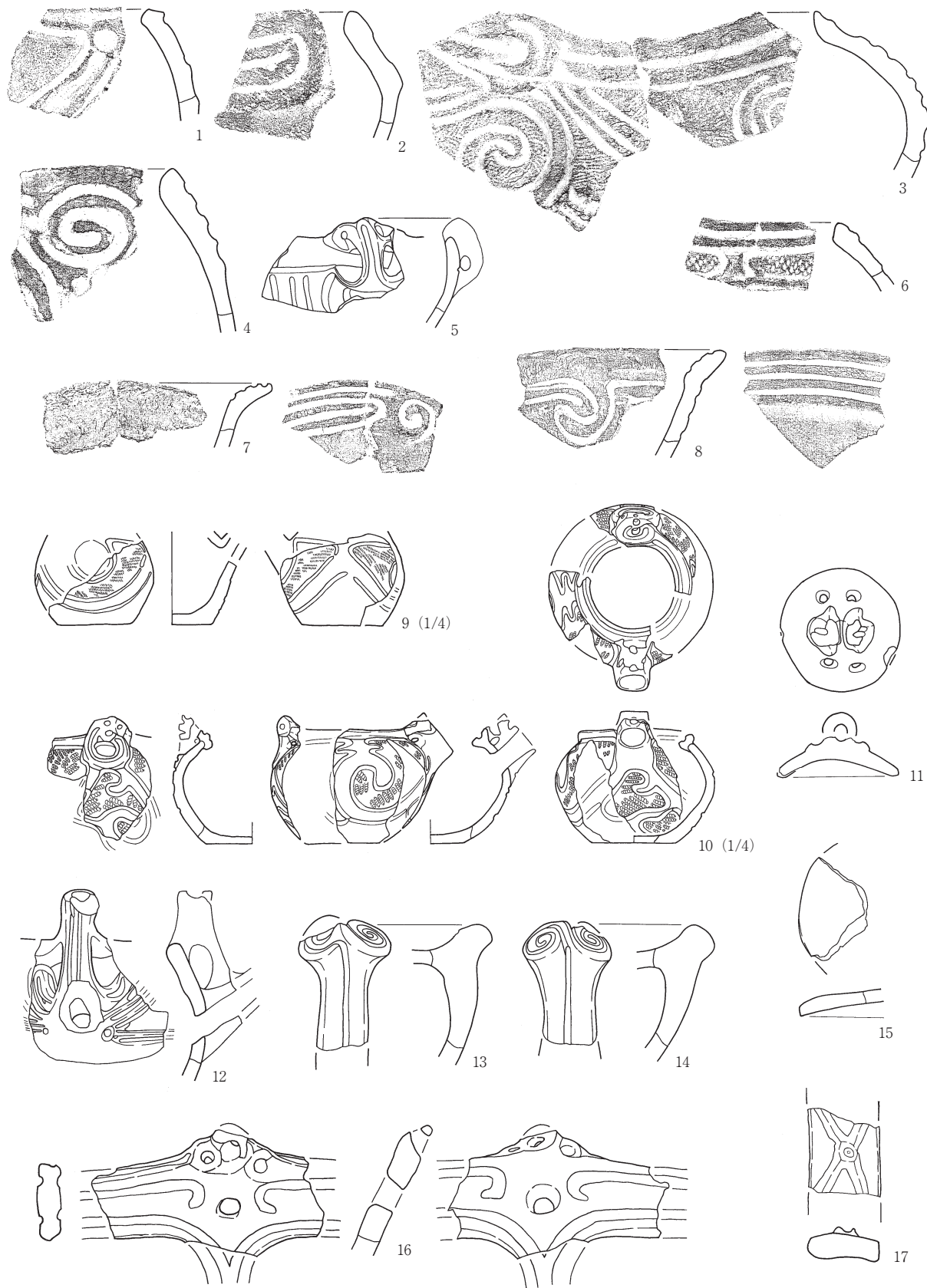
0 1:4 10cm

第218図 28区出土土器 (44)



第219図 28区出土土器 (45)

0 1:3 10cm



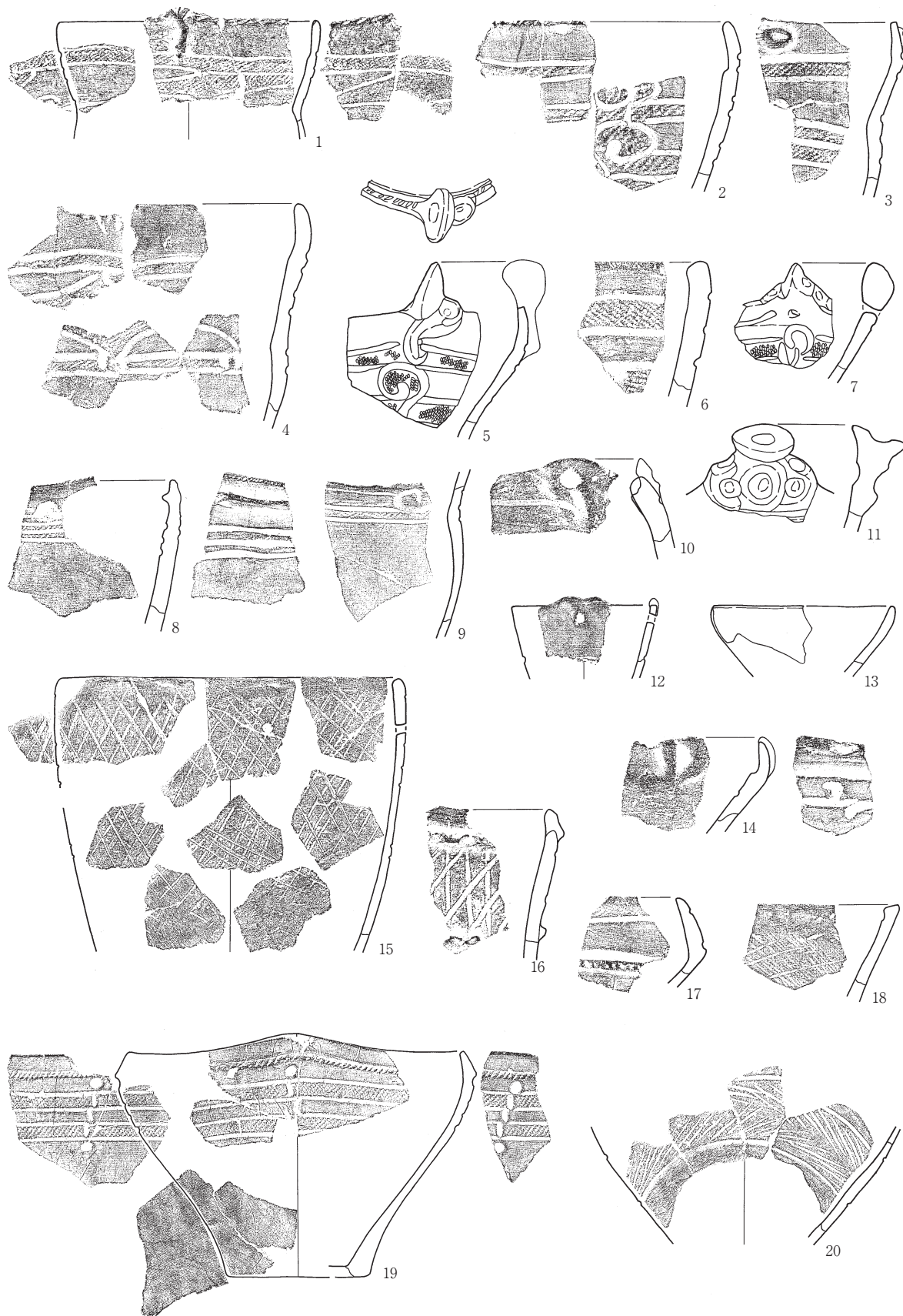
第220図 28区出土土器 (46)

0 1:3 10cm



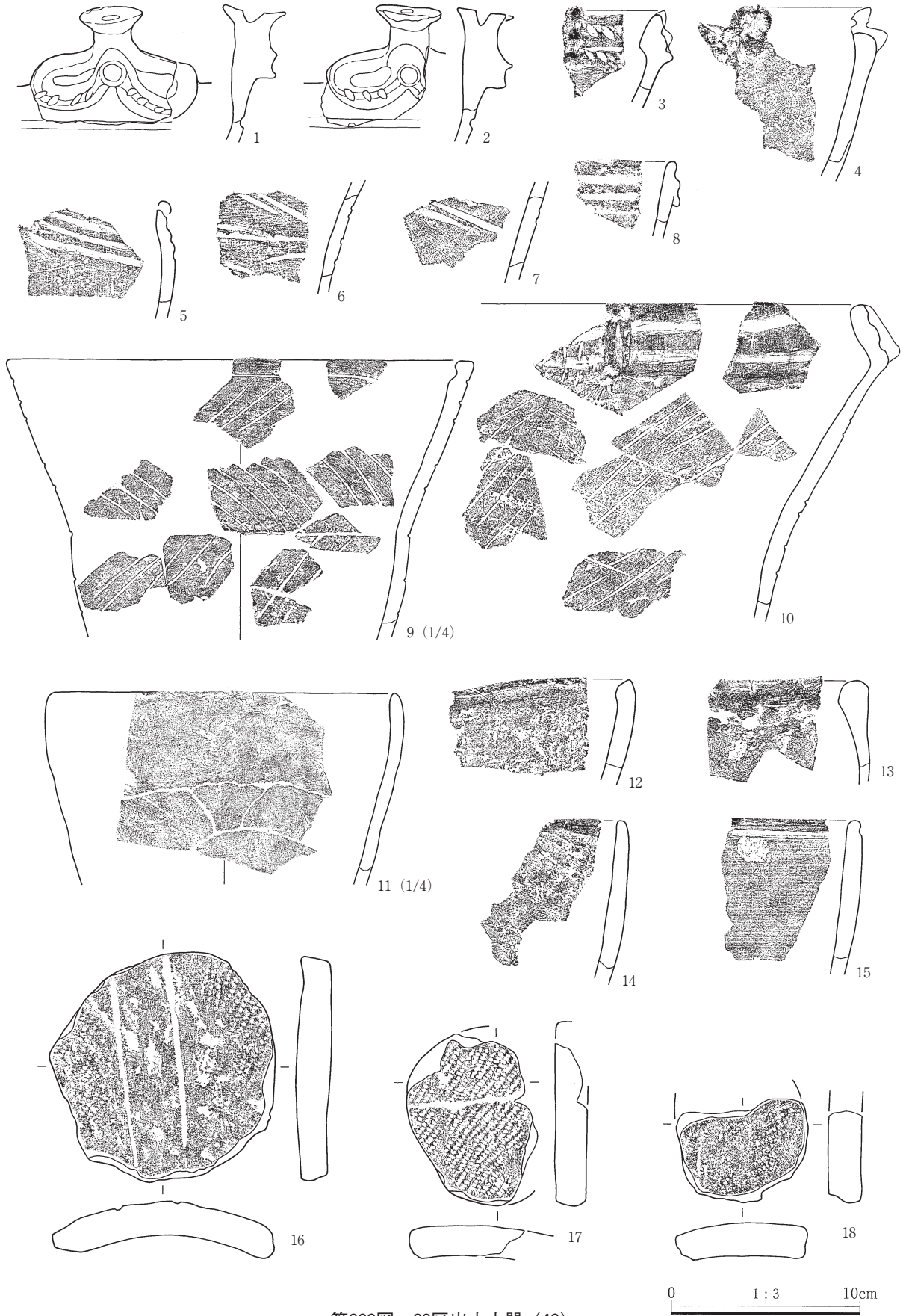
第221図 28区出土土器 (47)

0 1:3 10cm  
1・2・6~10・16・22・25 (1/4)



第222図 28区出土土器 (48)

0 1:3 10cm  
1・12・13・15・19・20 (1/4)

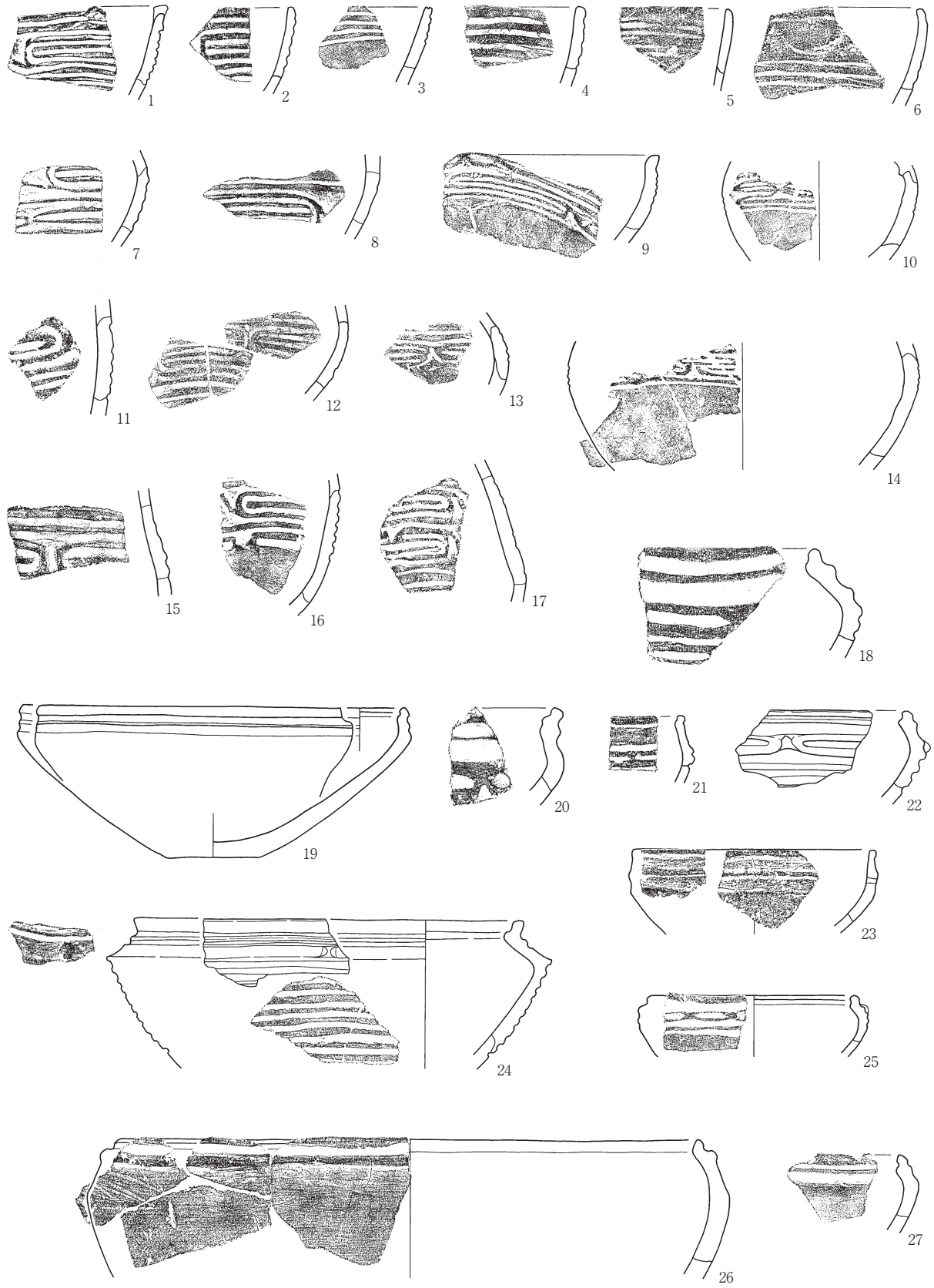


第223図 28区出土土器 (49)



第224図 28区出土土器 (50)

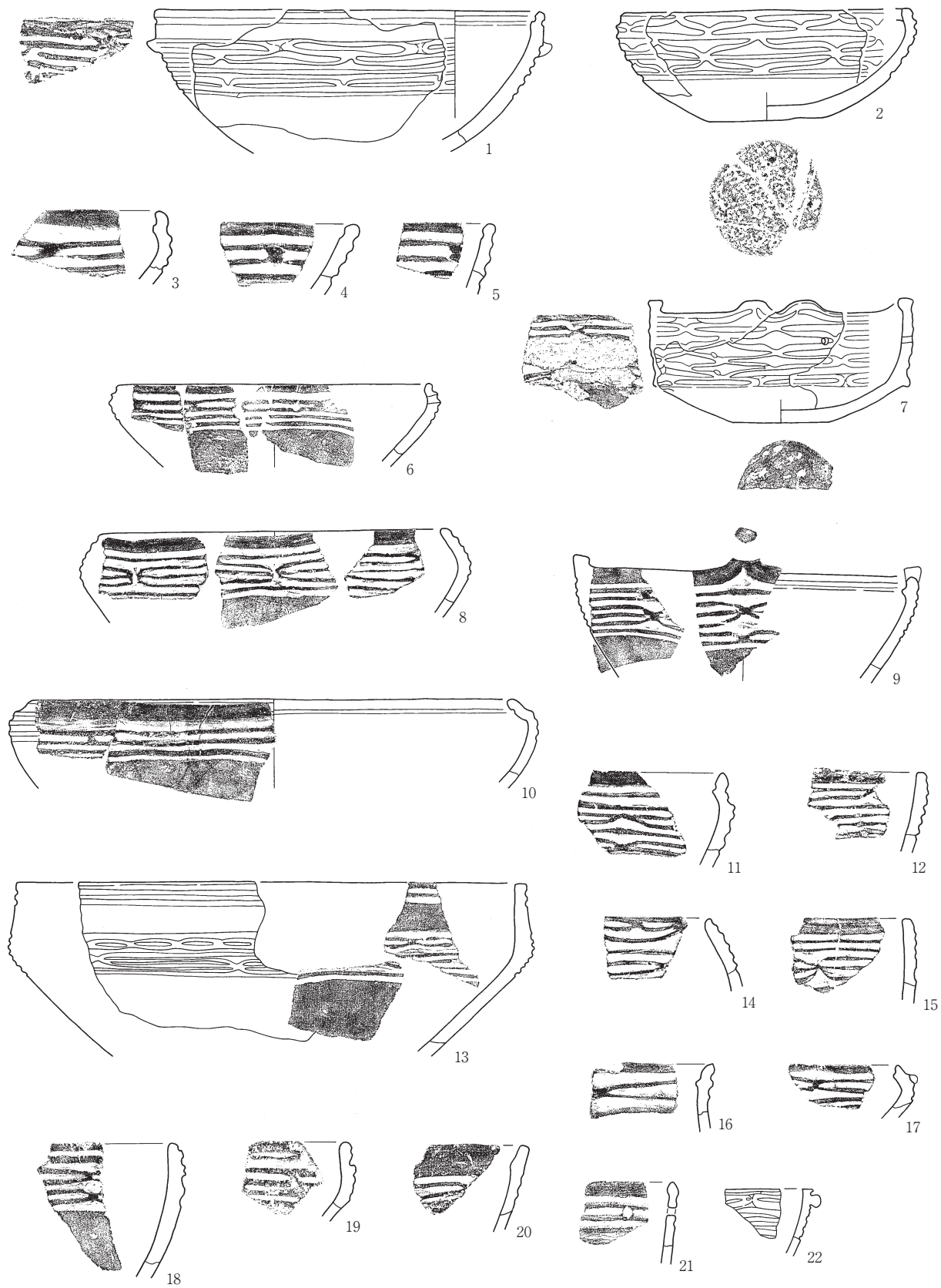
0 1:3 10cm  
1・7・19・23~30 (1/4)



0 1:3 10cm

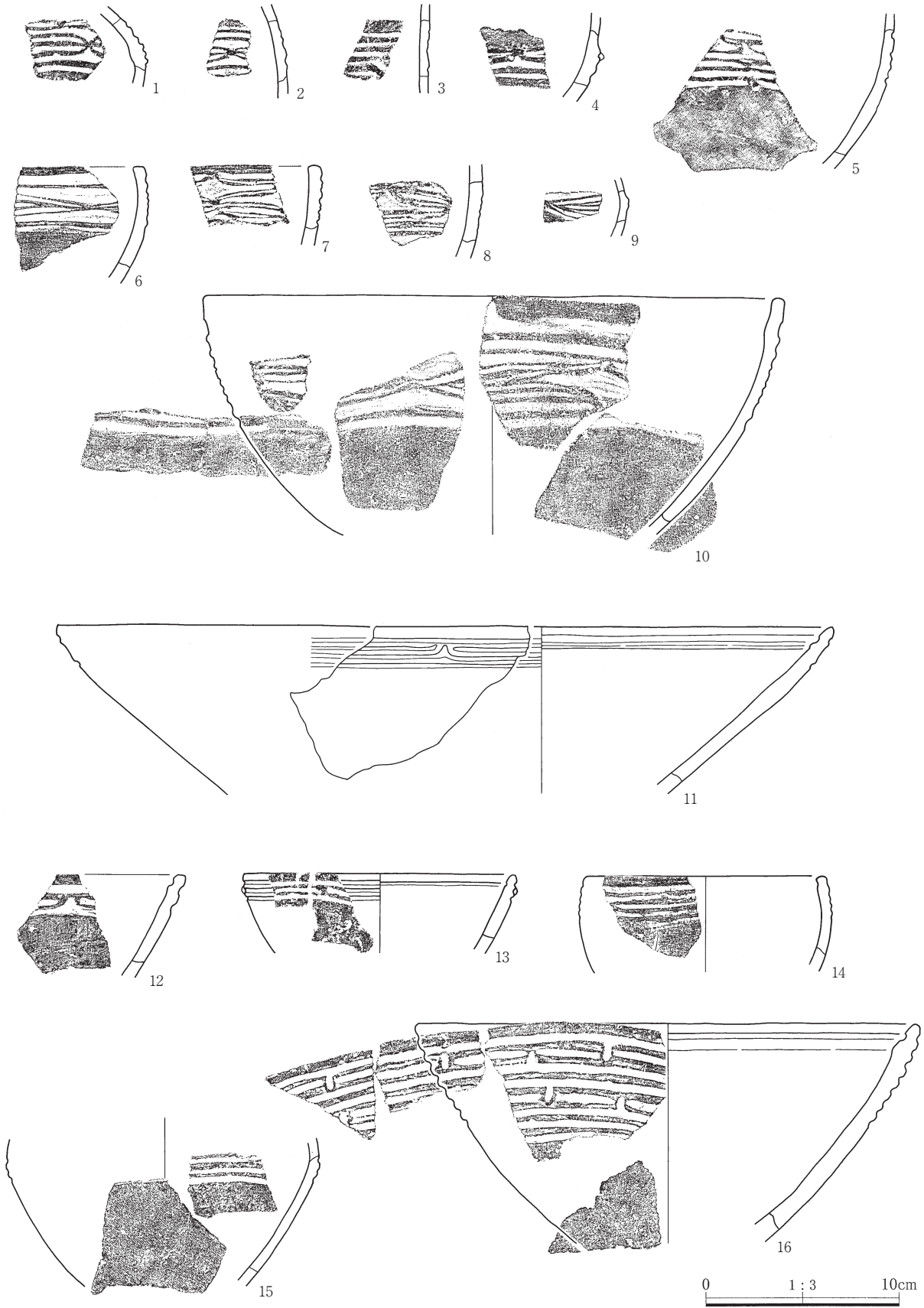
第225図 28区出土土器 (51)



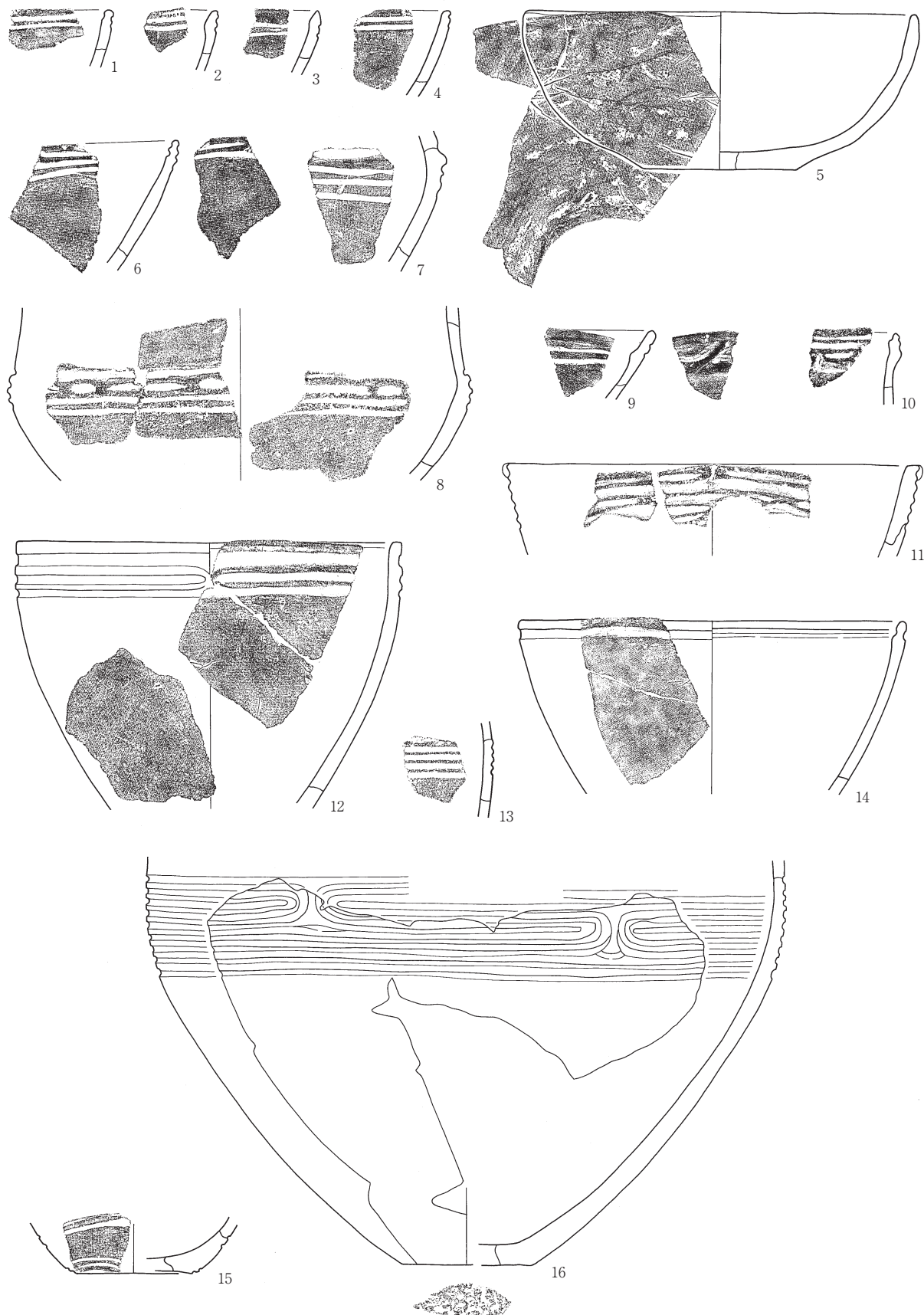


0 1:3 10cm

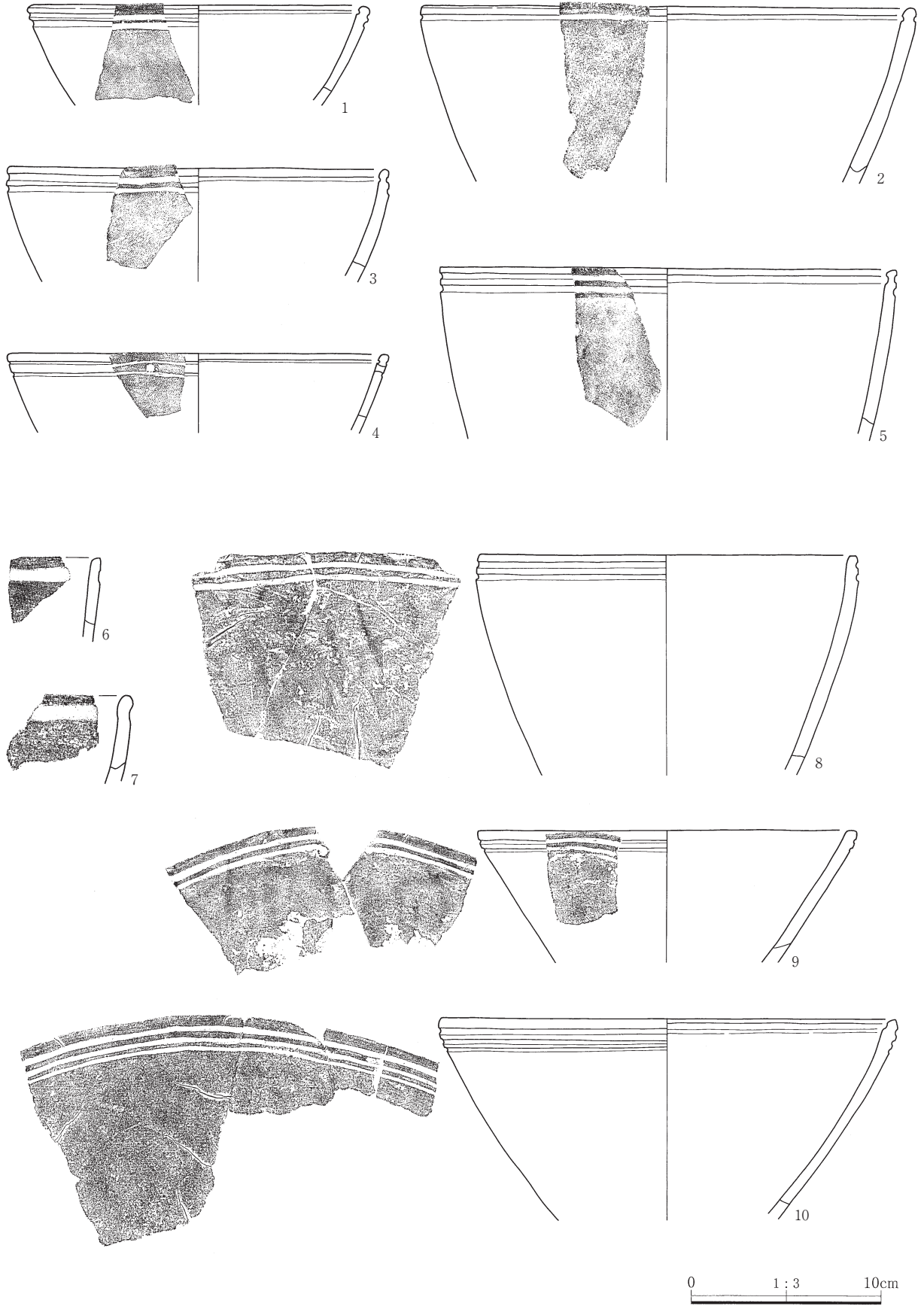
第226図 28区出土土器 (52)



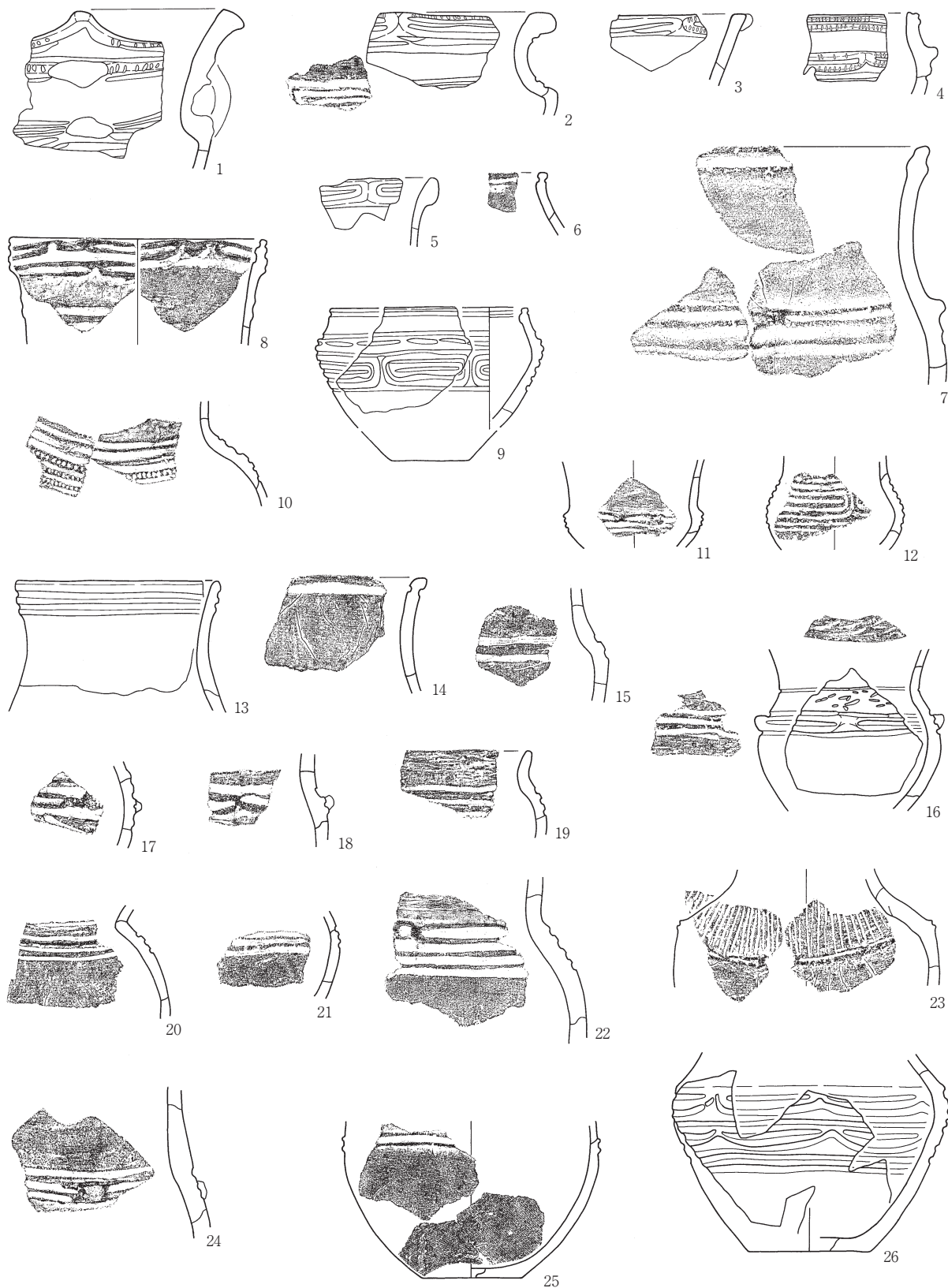
第227図 28区出土土器 (53)



第228図 28区出土土器 (54)

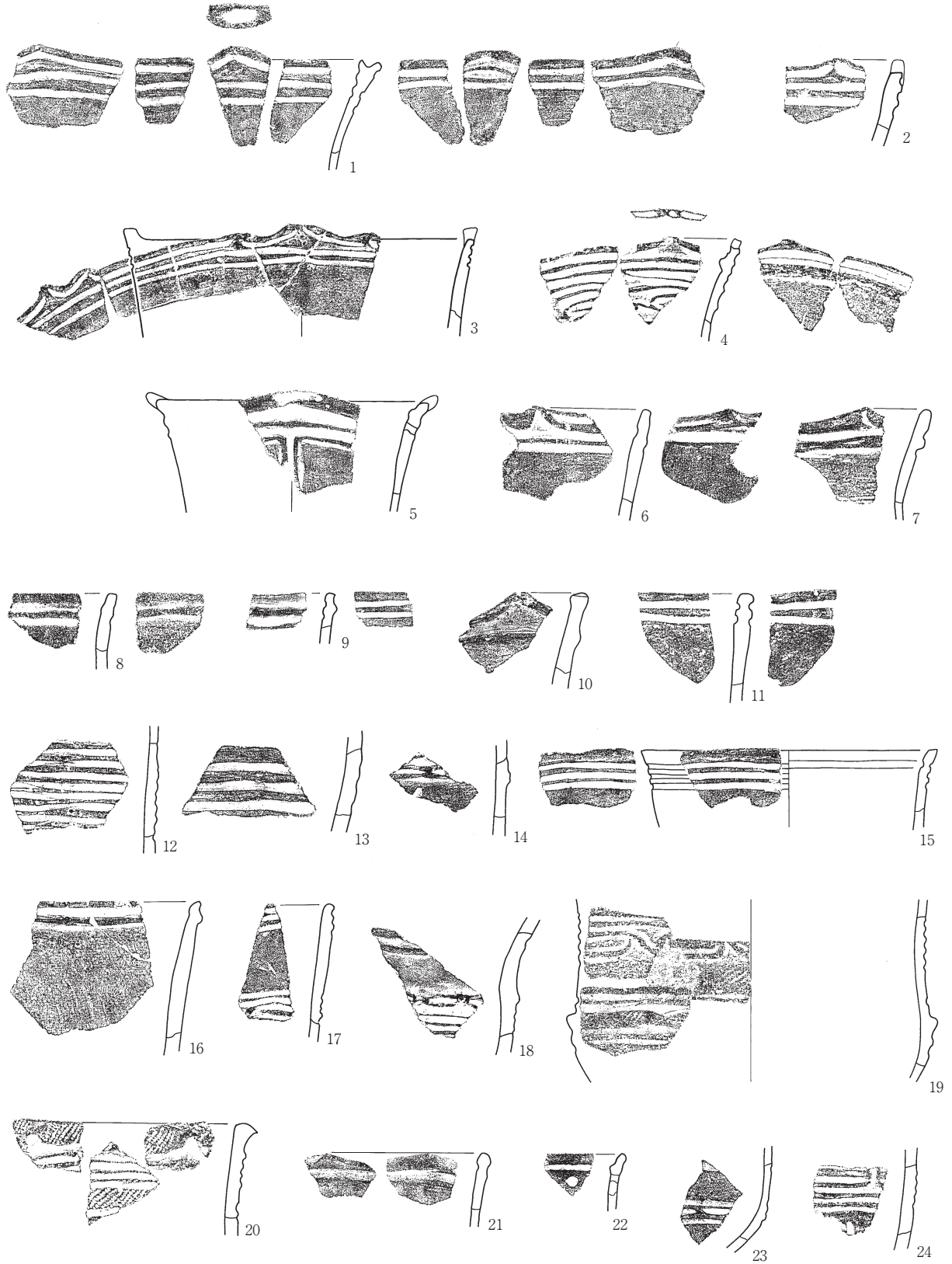


第229図 28区出土土器 (55)

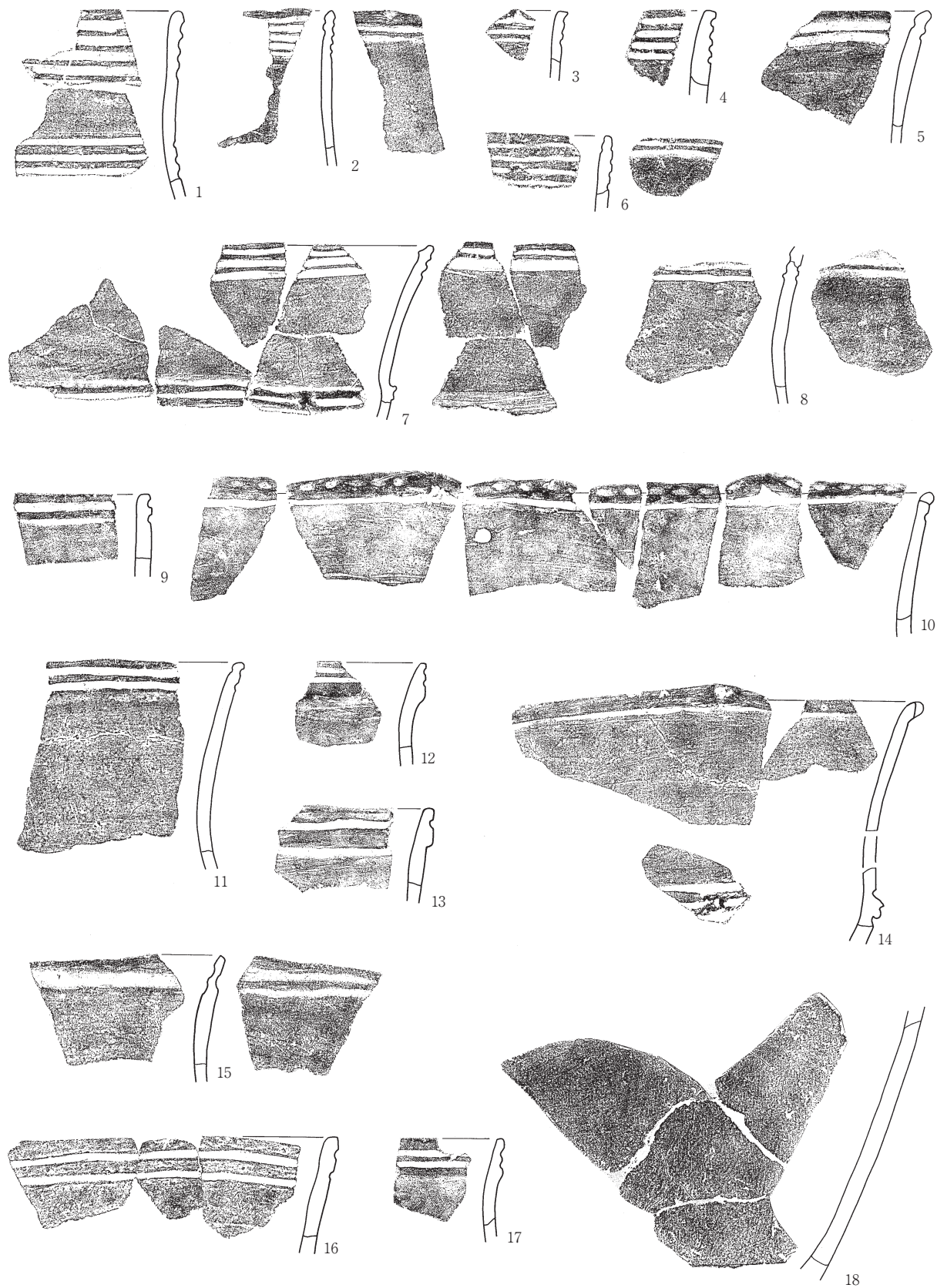


0 1:3 10cm

第230图 28区出土土器 (56)

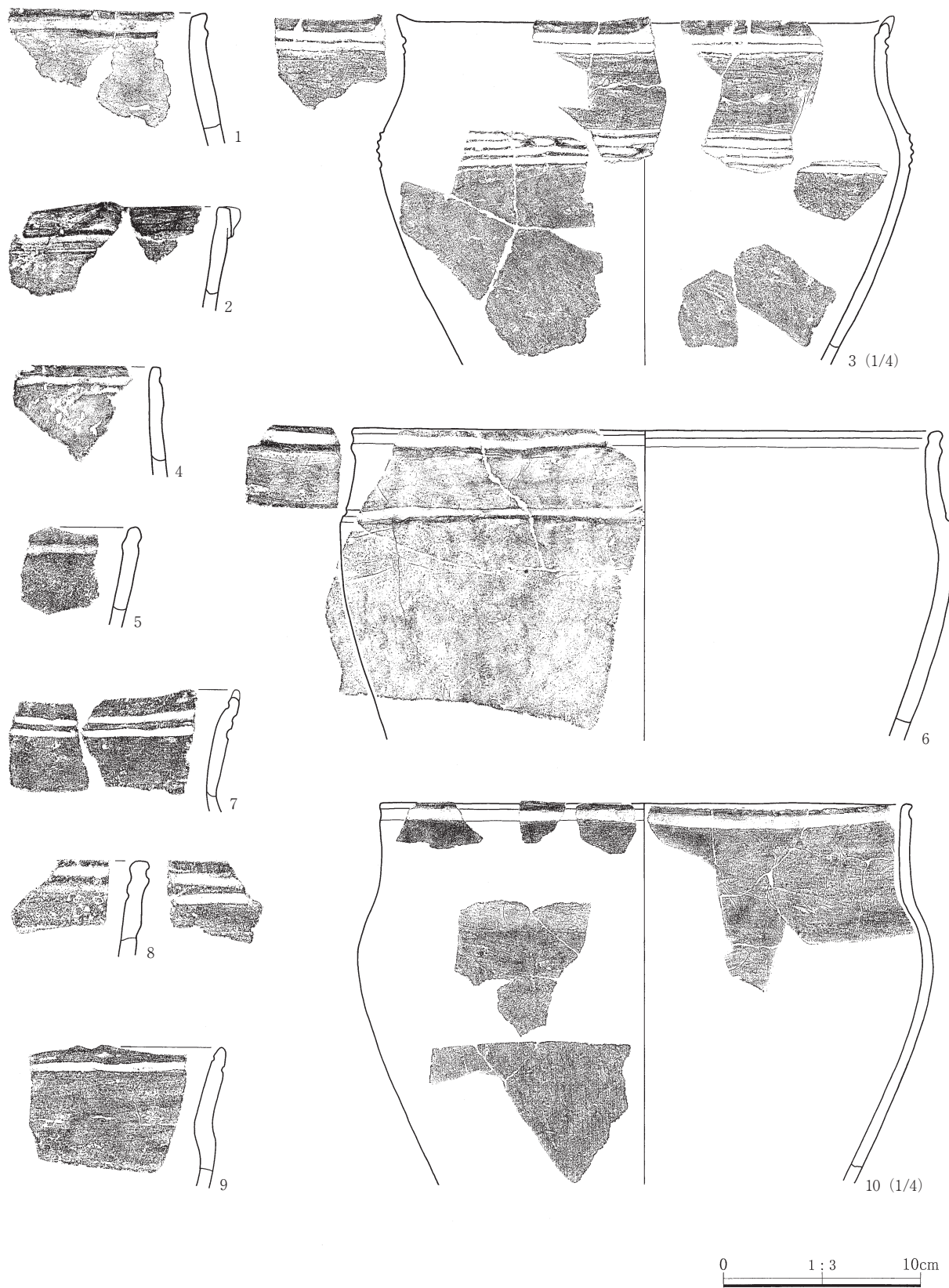


第231図 28区出土土器 (57)



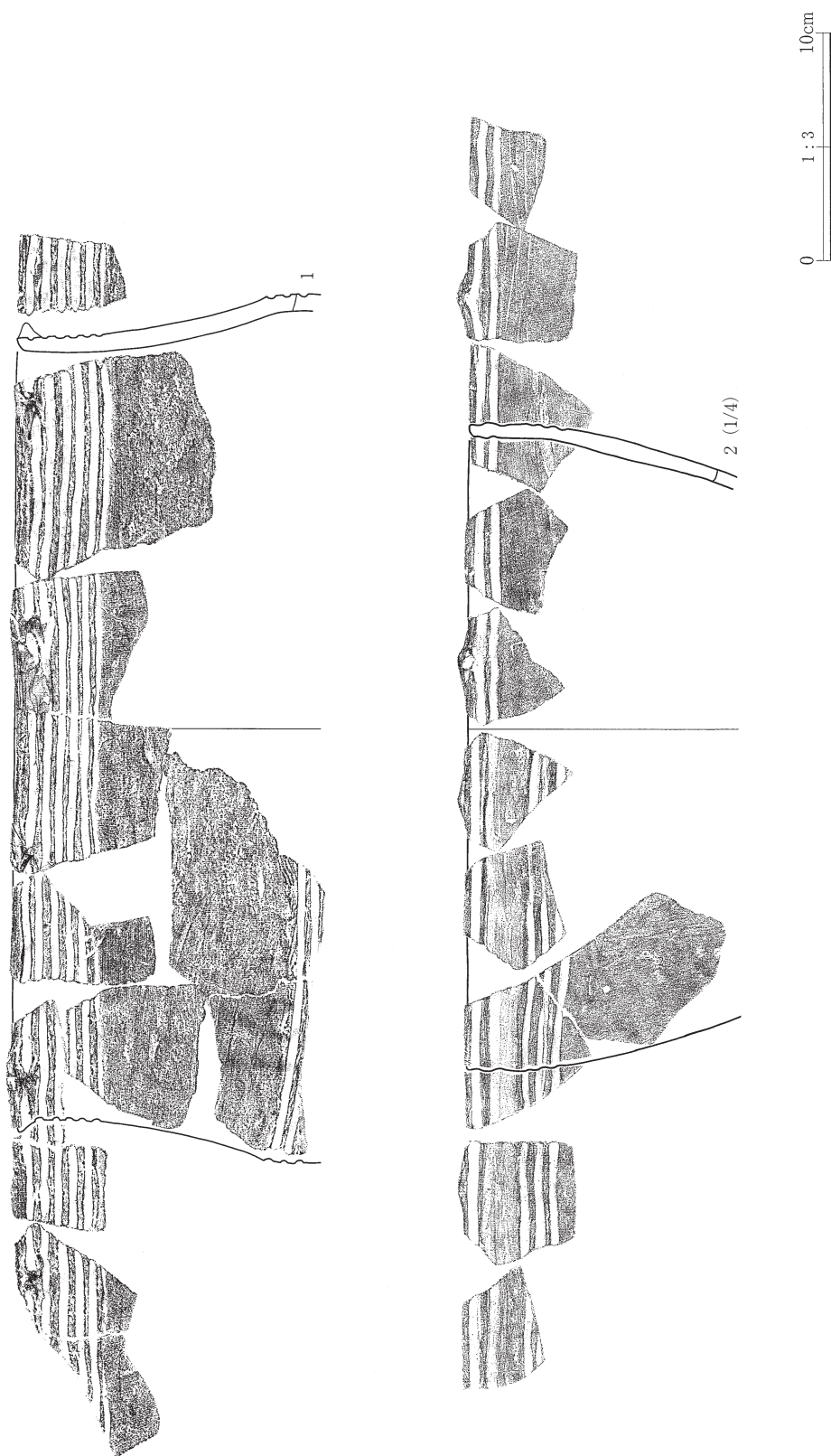
0 1:3 10cm

第232図 28区出土土器 (58)

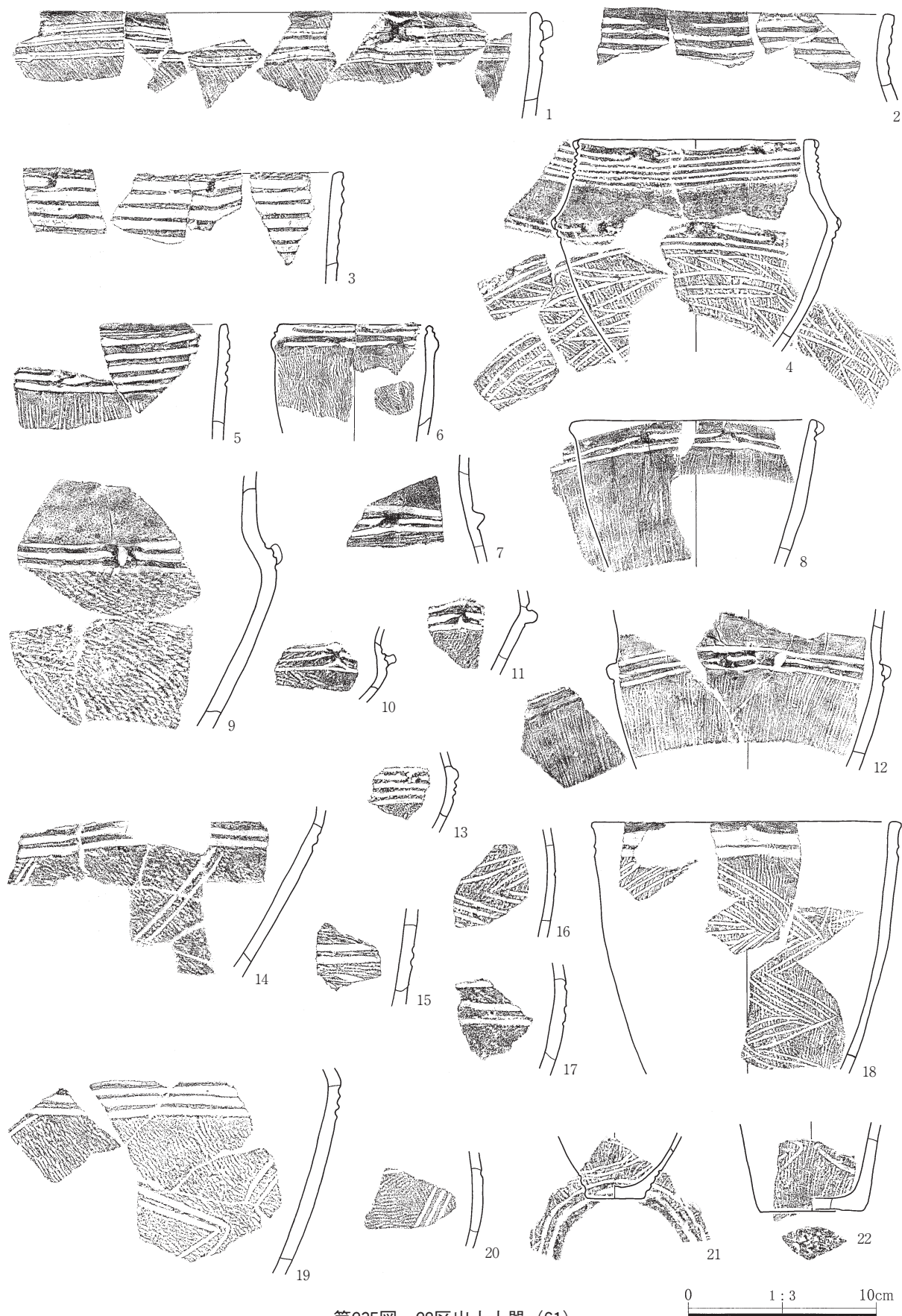


第233図 28区出土土器 (59)

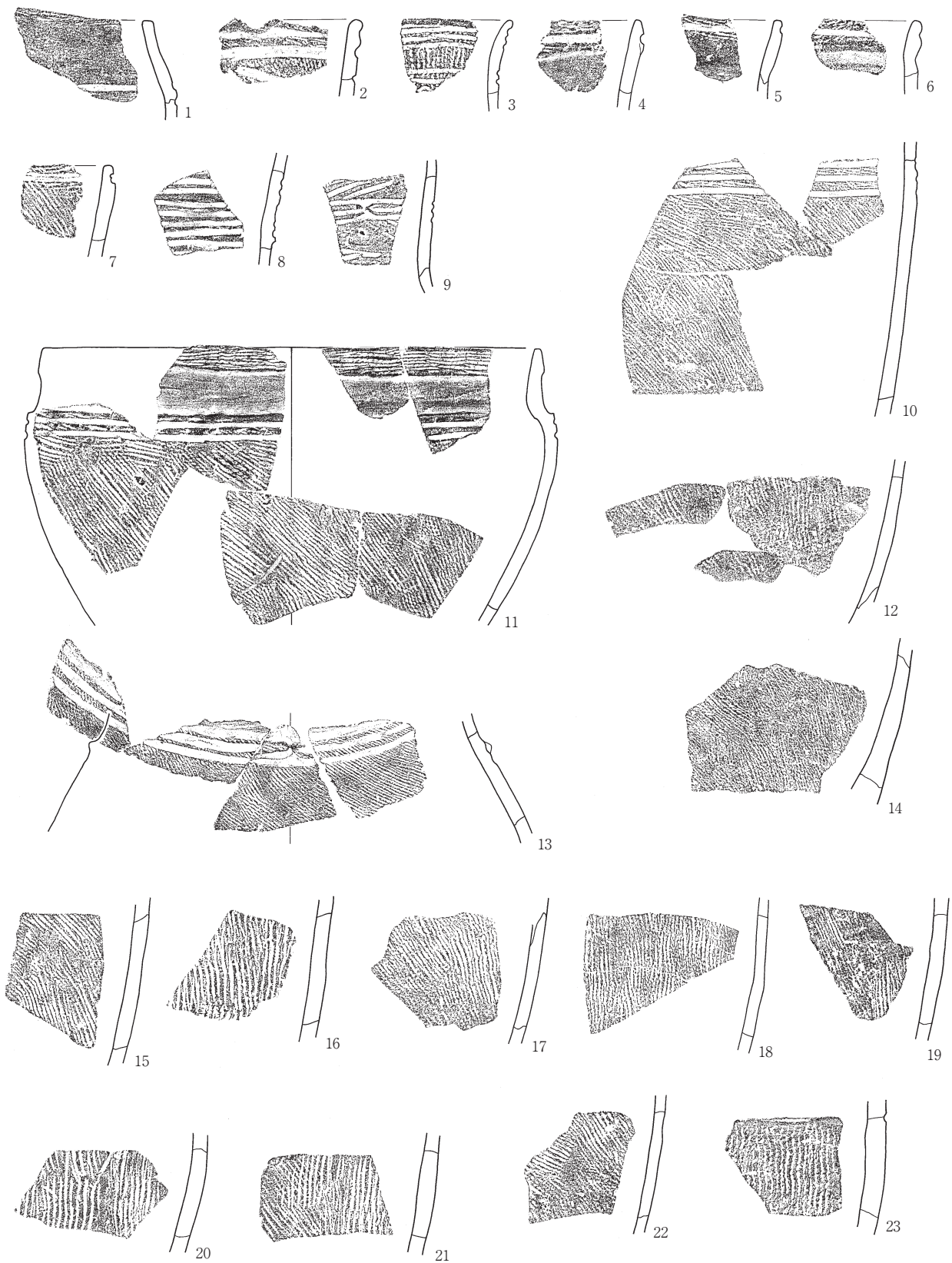




第234図 28区出土土器 (60)

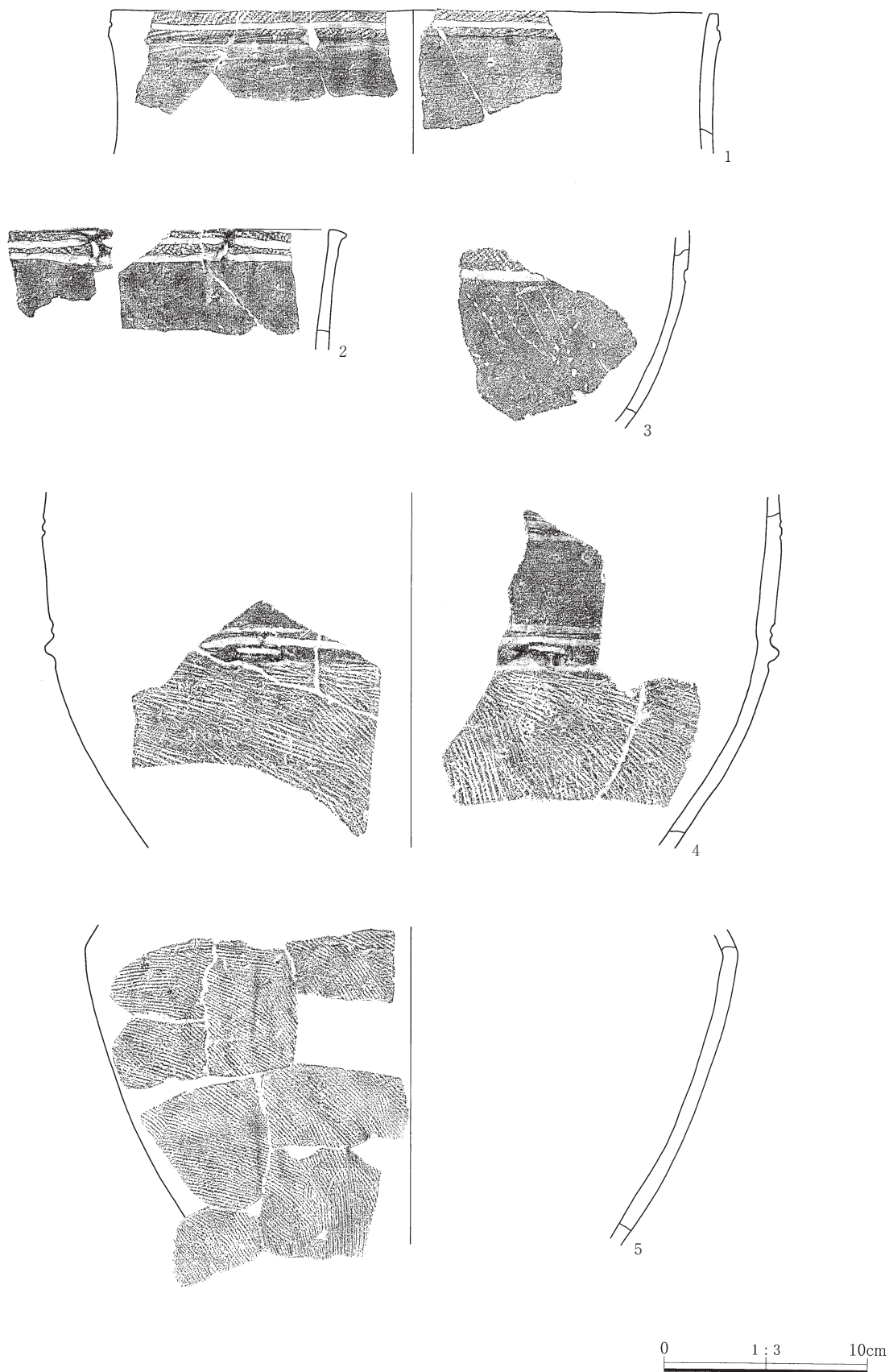


第235図 28区出土土器 (61)

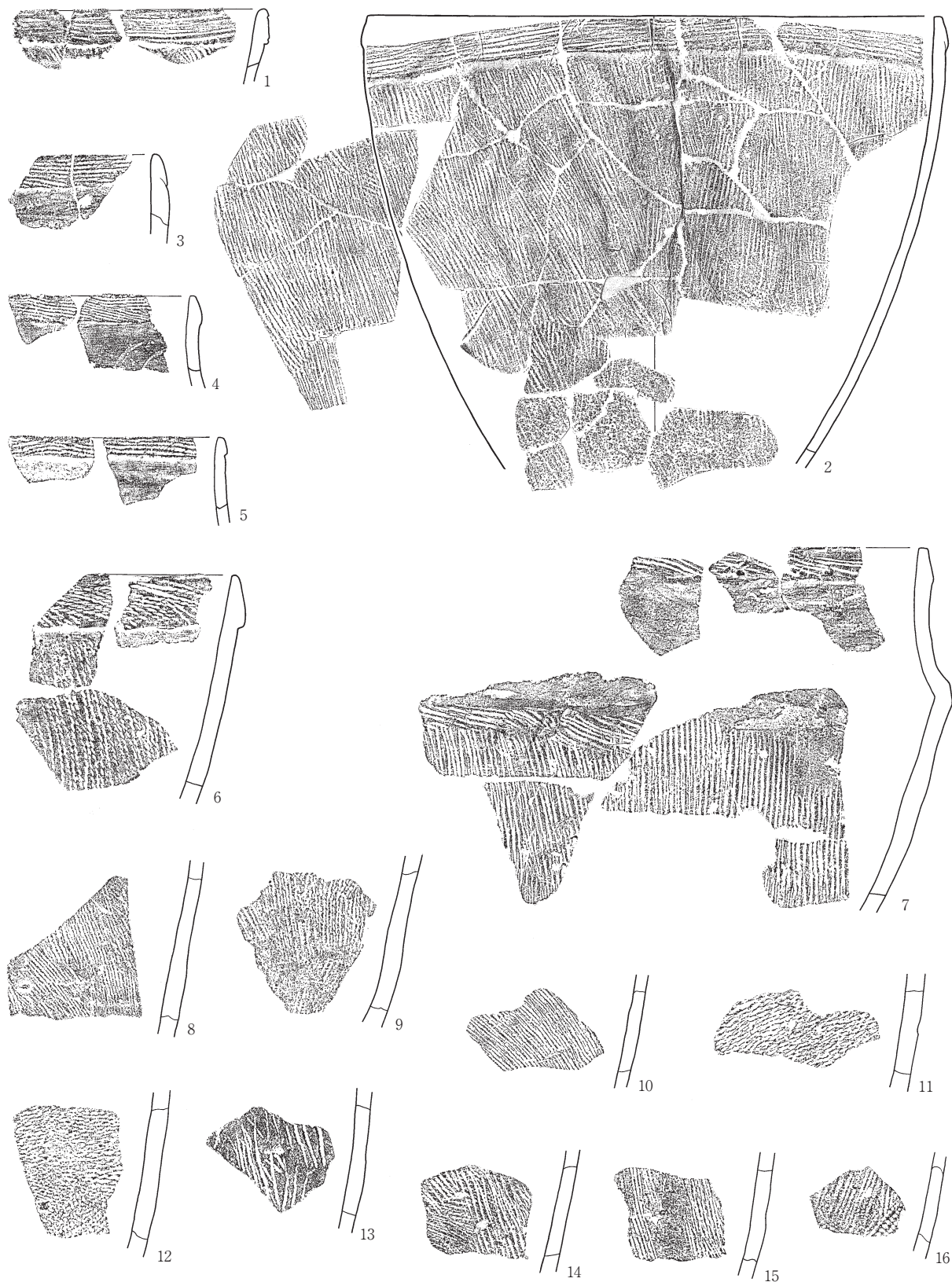


0 1:3 10cm

第236図 28区出土土器 (62)

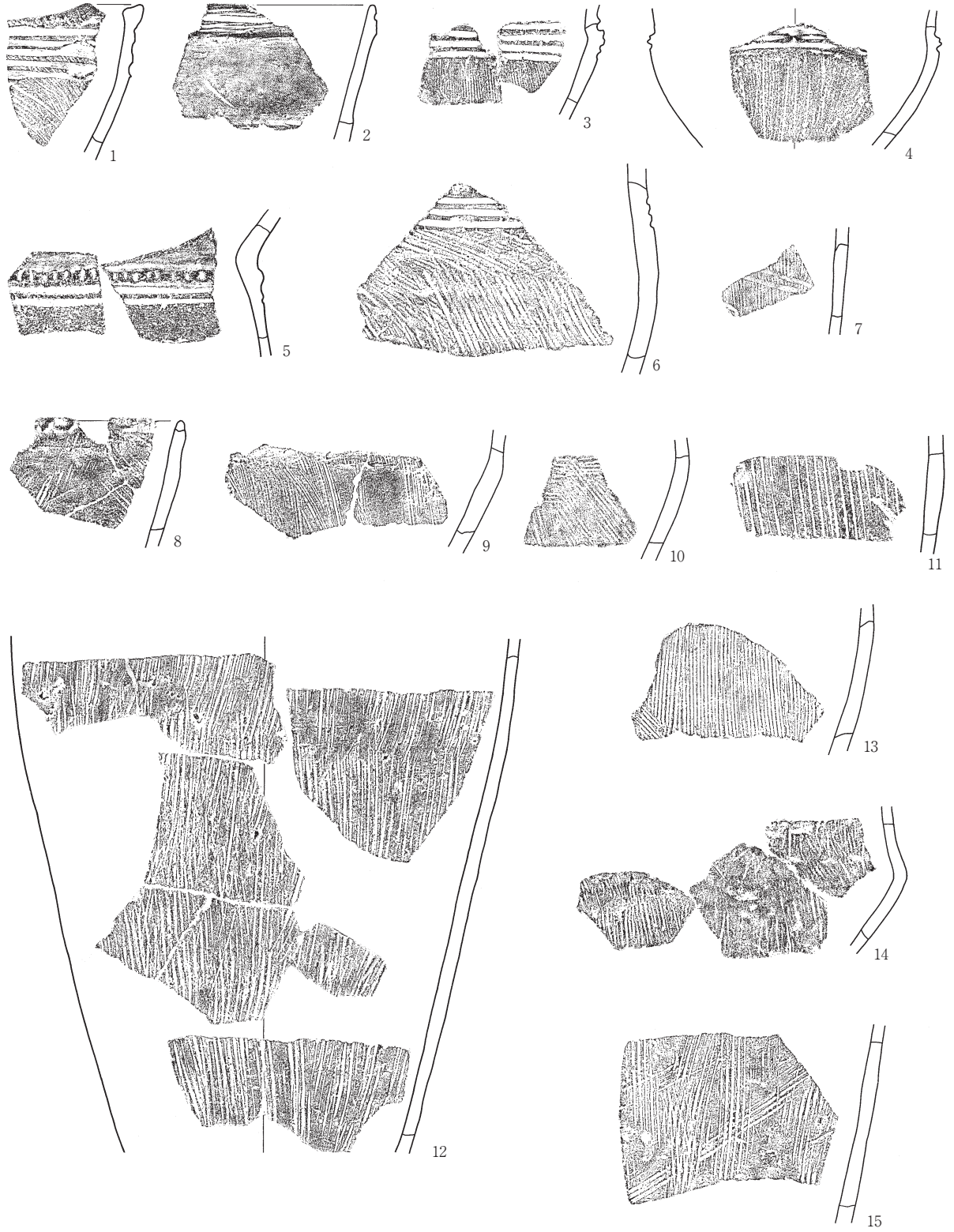


第237図 28区出土土器 (63)



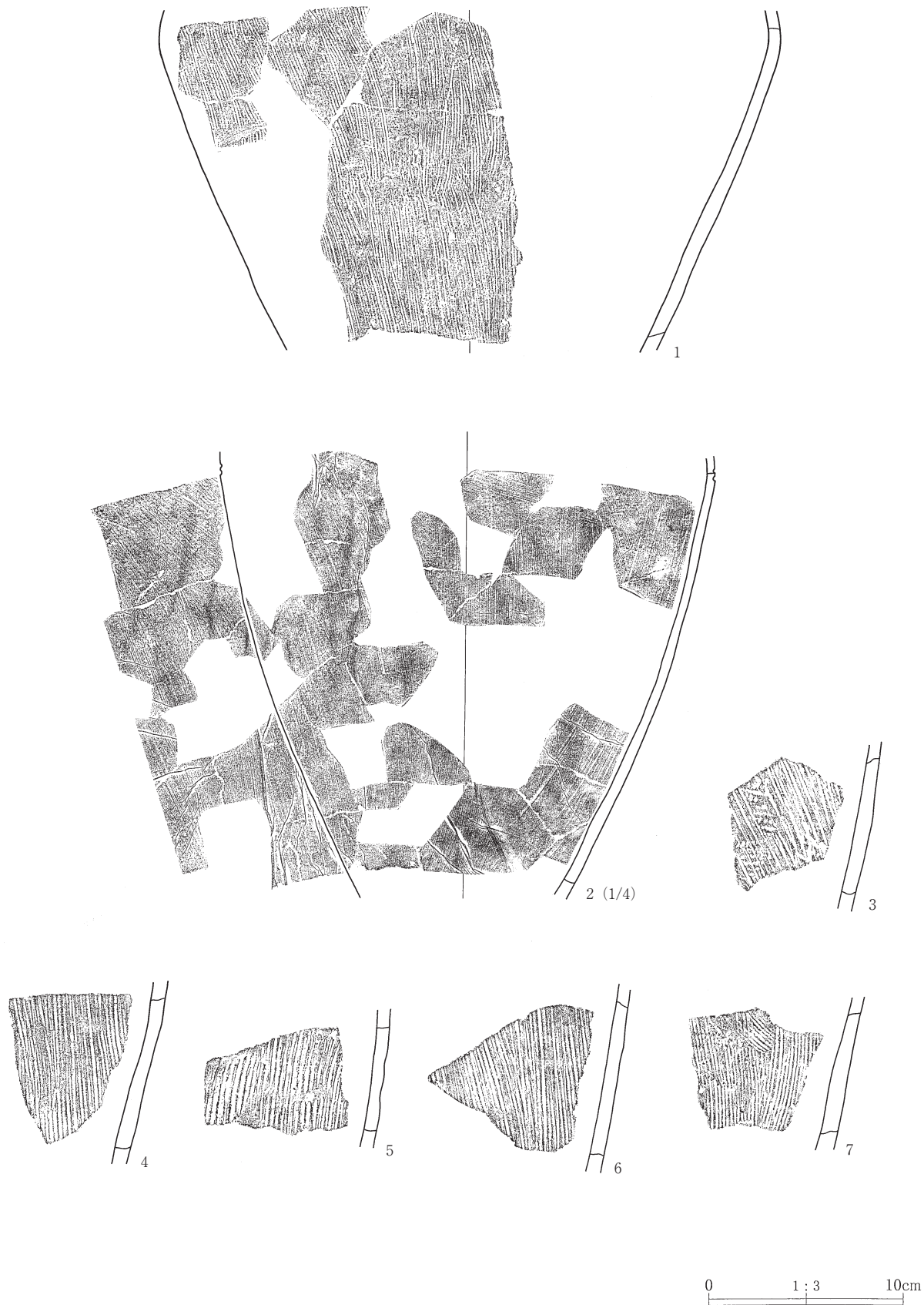
第238図 28区出土土器 (64)

0 1 : 3 10cm

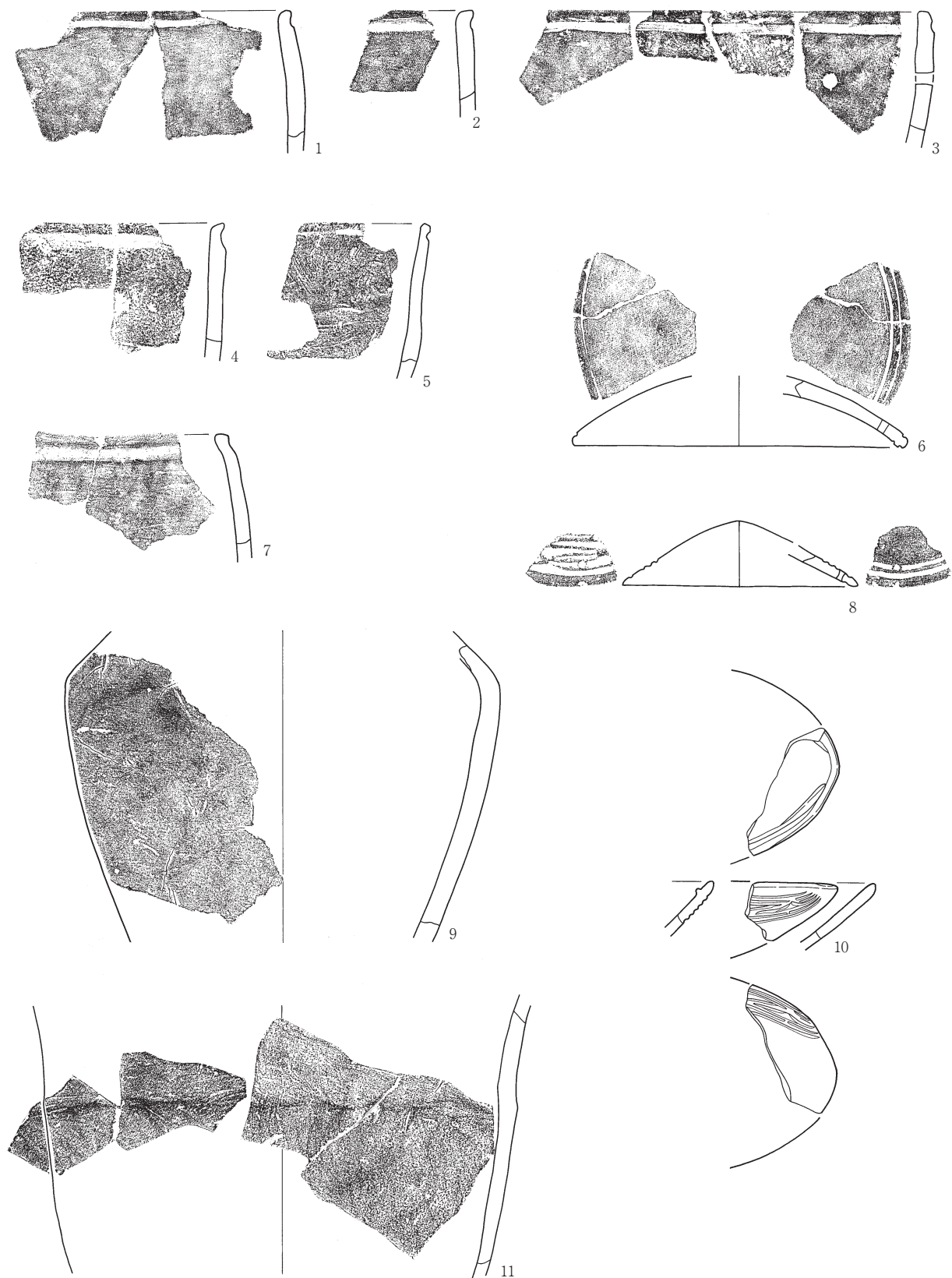


0 1:3 10cm

第239図 28区出土土器 (65)



第240図 28区出土土器 (66)



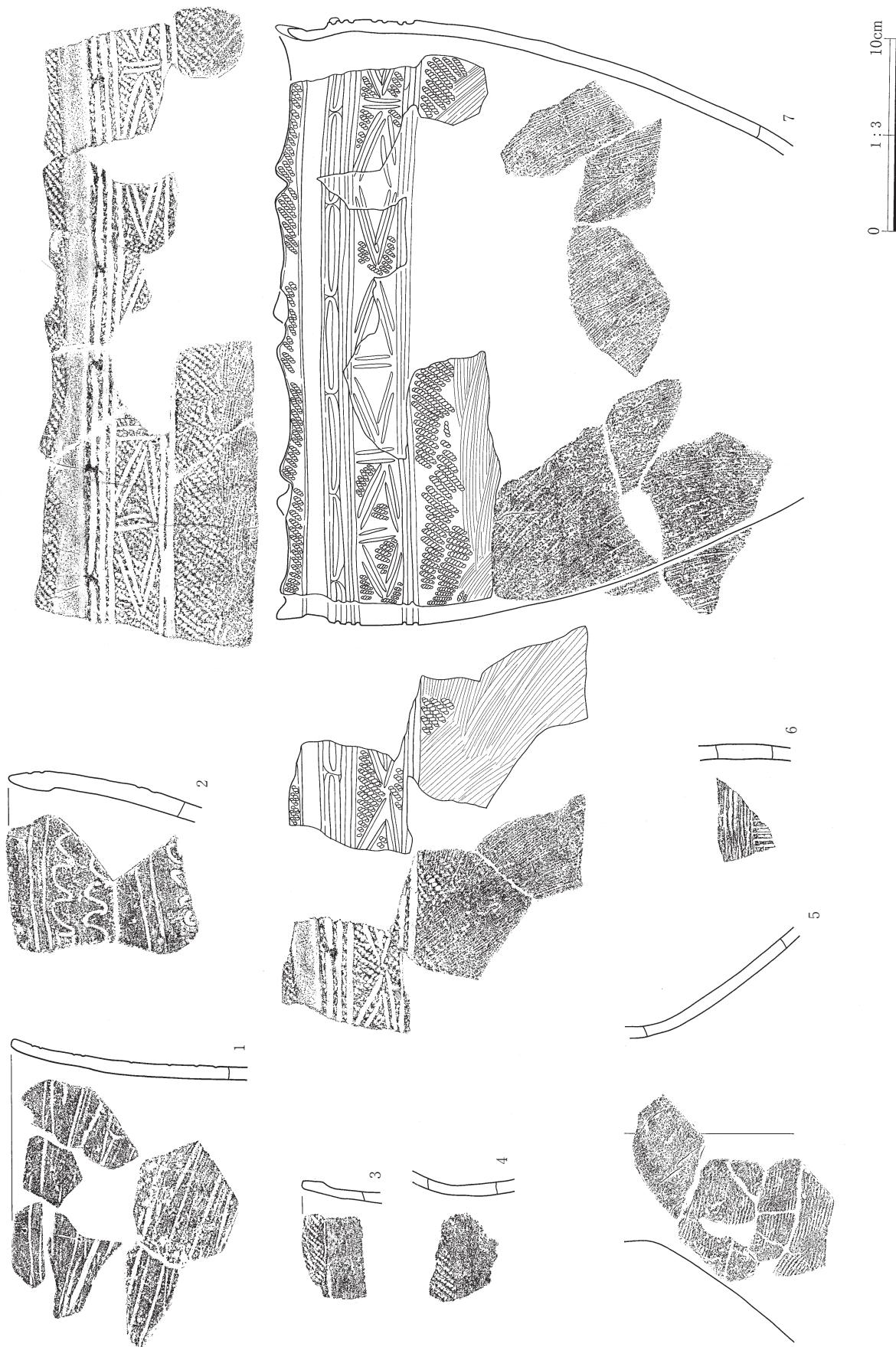
第241図 28区出土土器 (67)

0 1:3 10cm





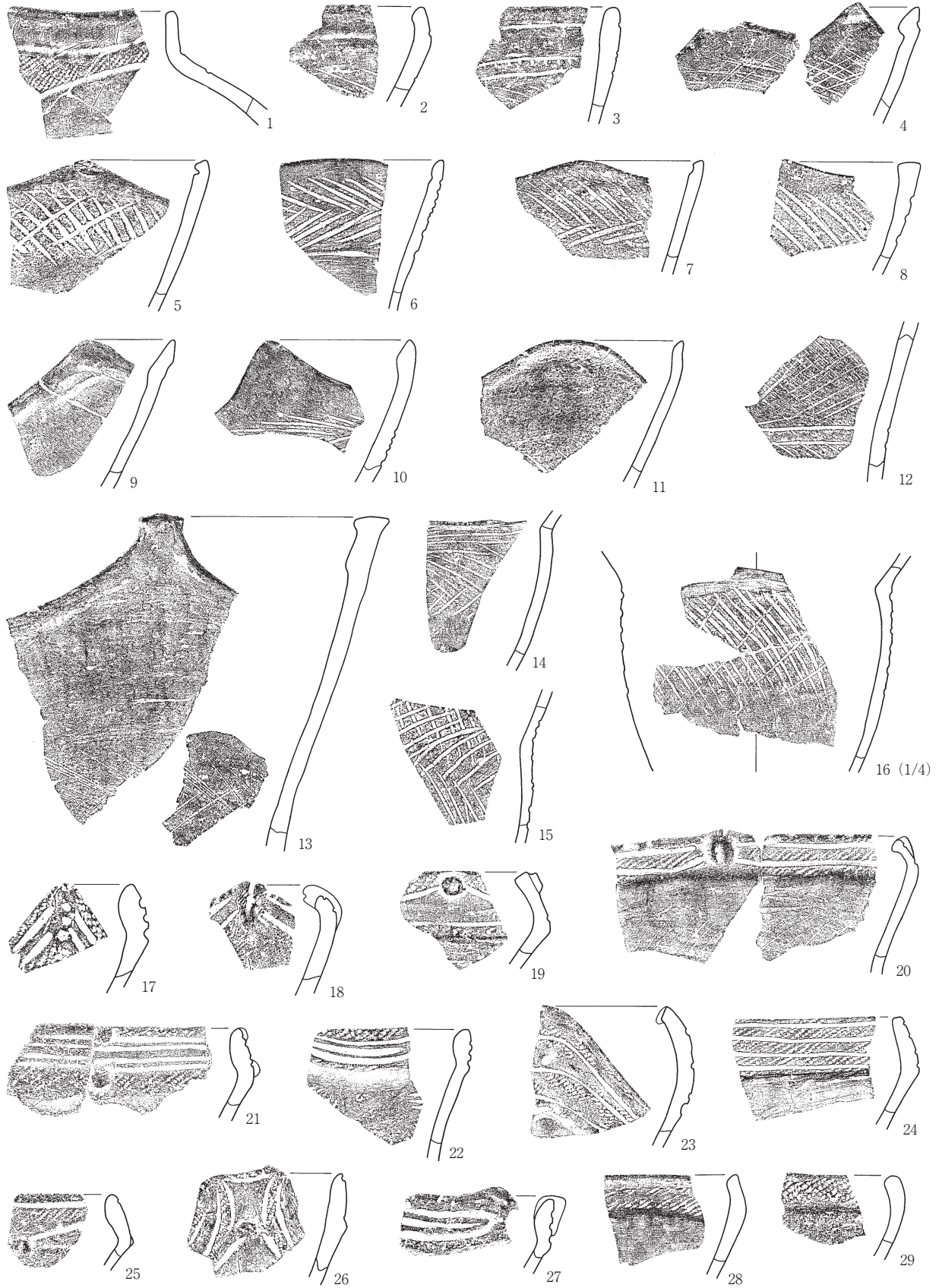
第242図 28区出土土器 (68)



第243図 28区出土土器 (69)

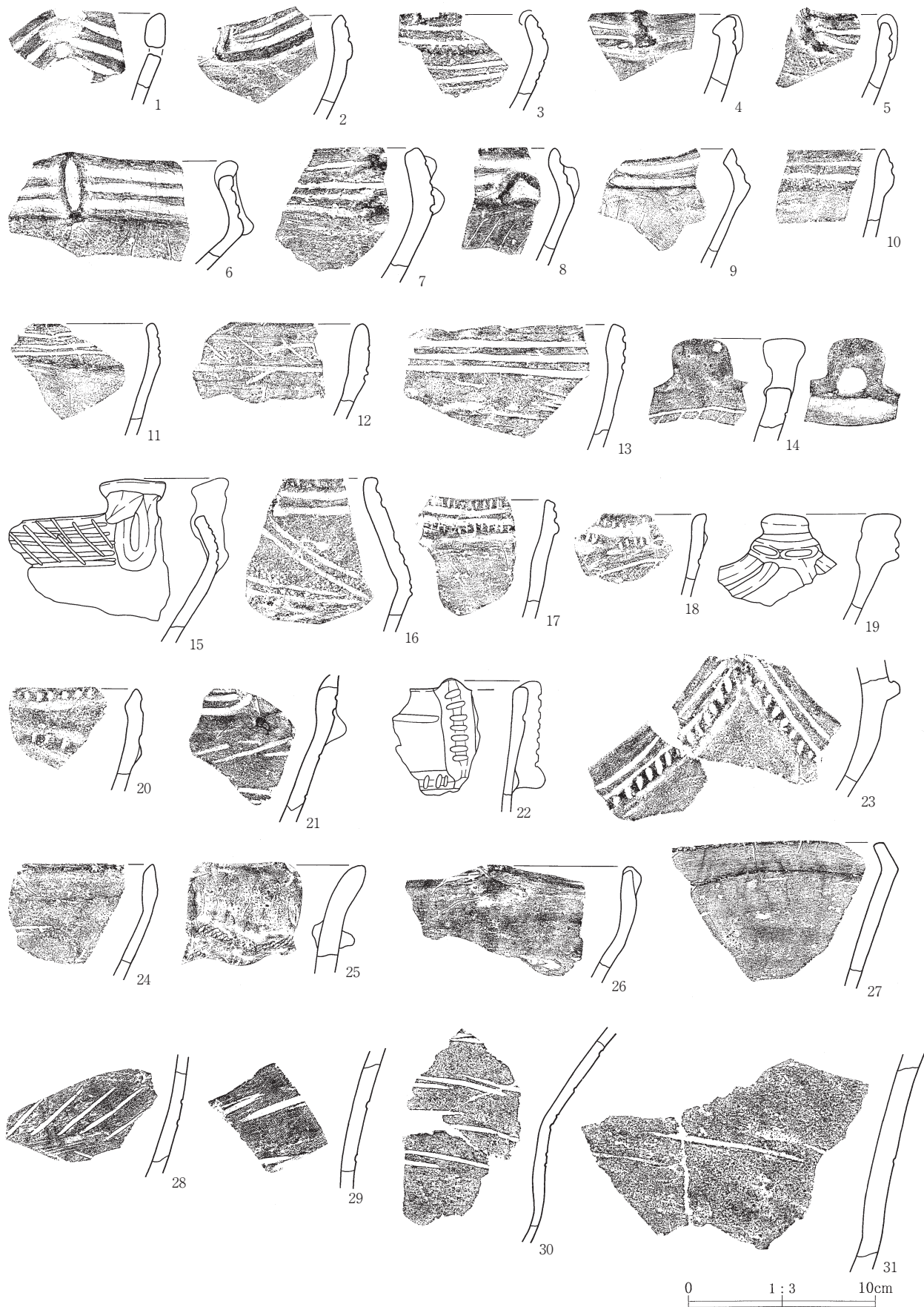


第244图 29区出土土器 (1)

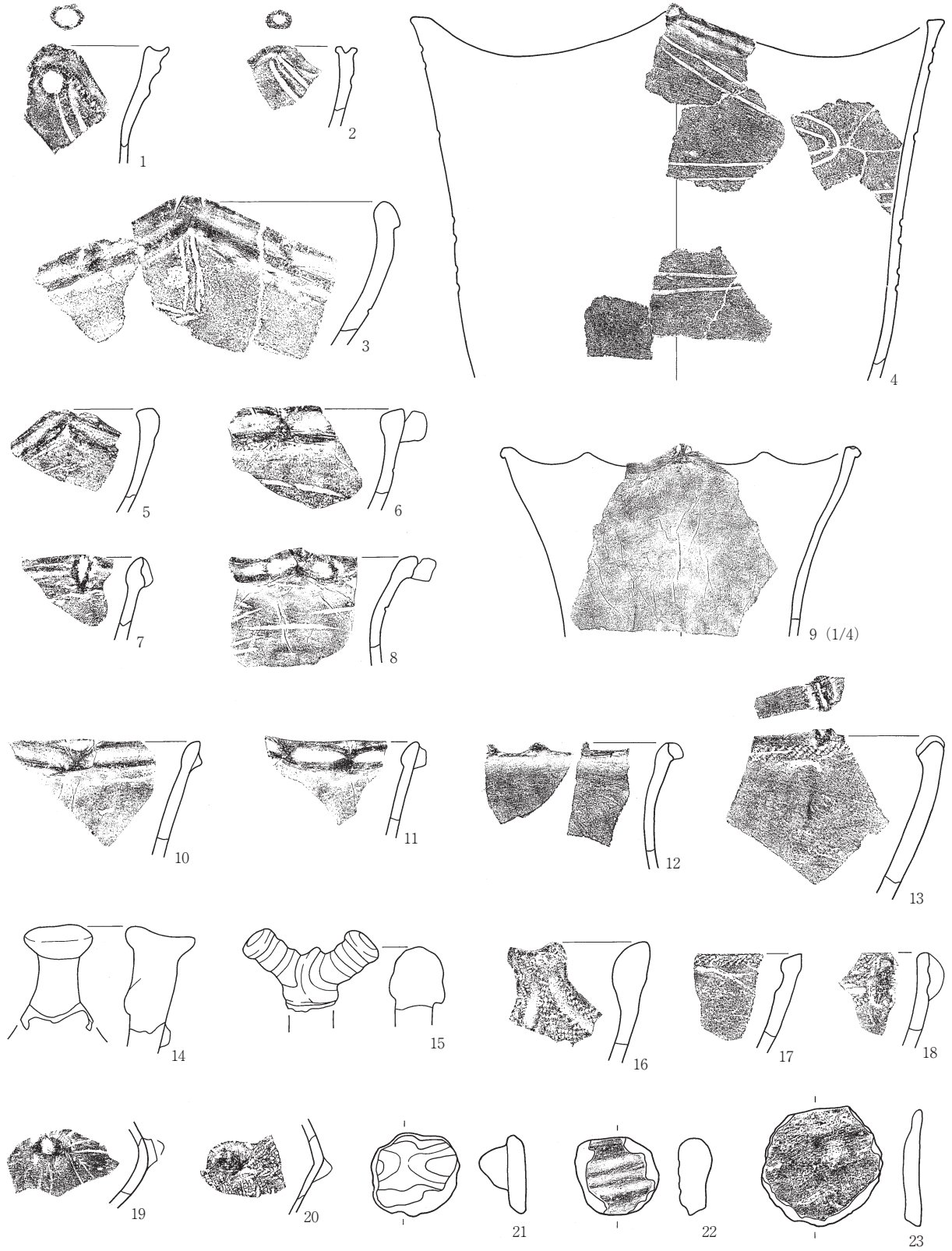


第245図 29区出土土器（2）

0 1:3 10cm

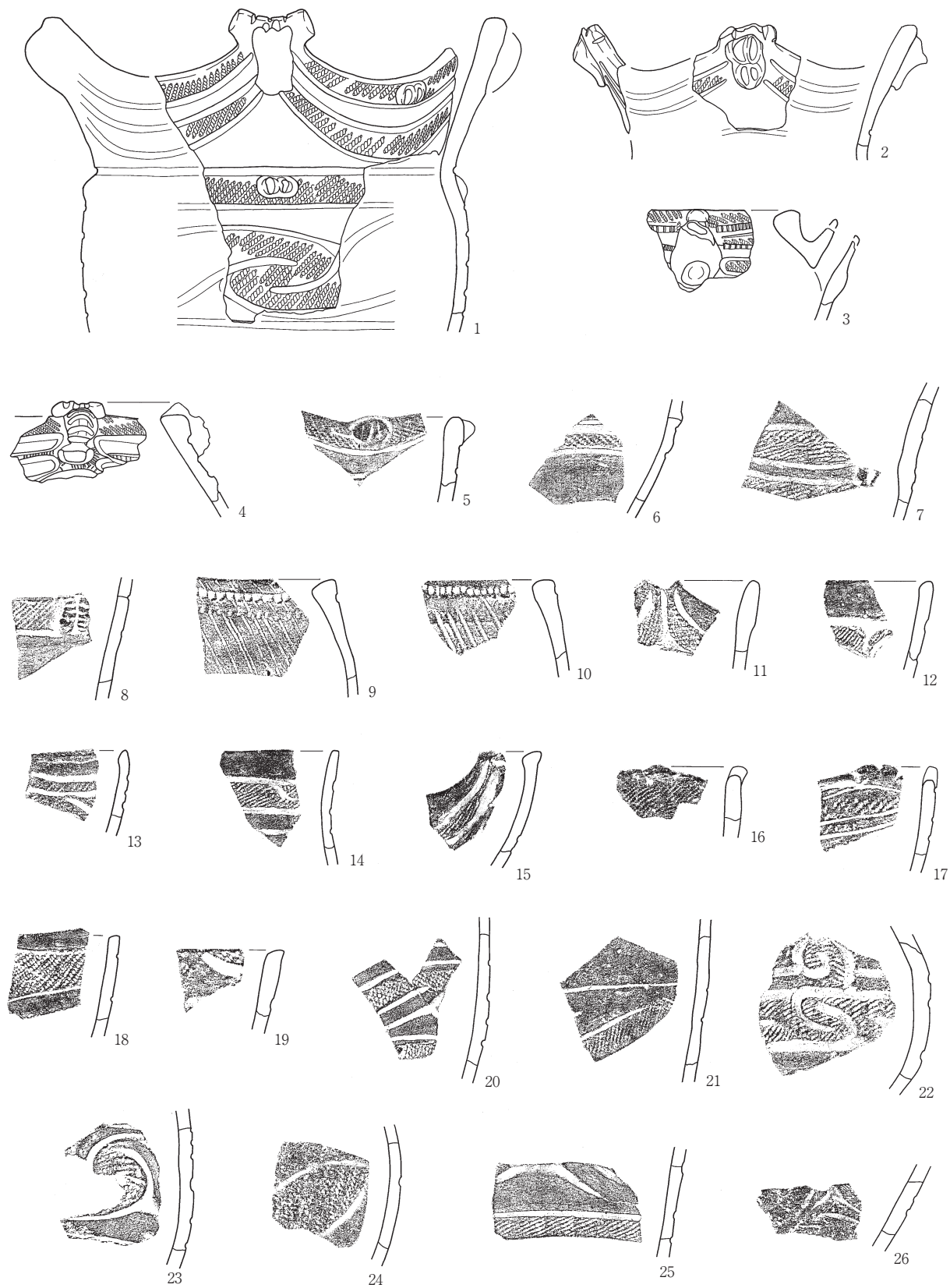


第246図 29区出土土器 (3)



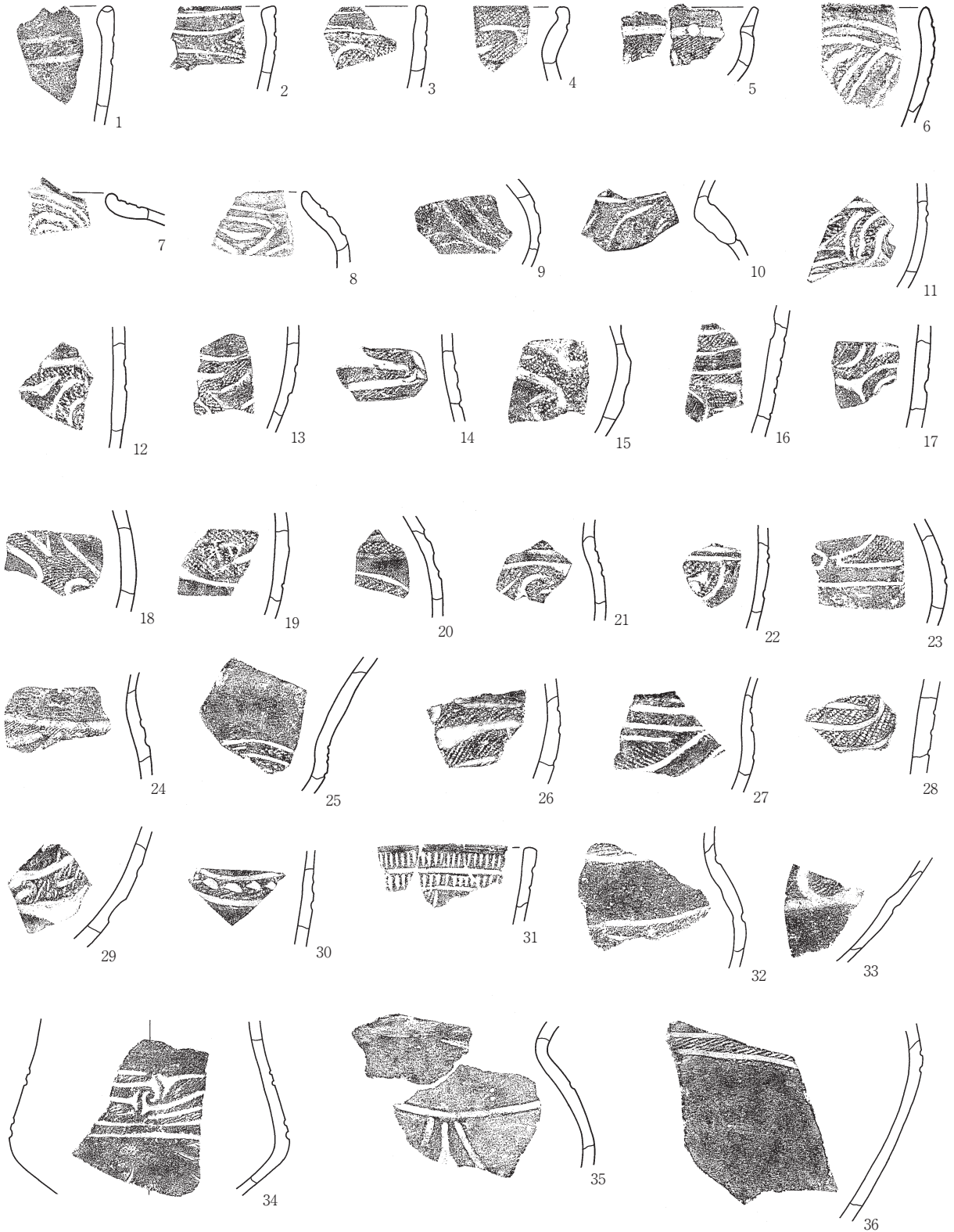
0 1:3 10cm

第247図 29区出土土器(4)



0 1 : 3 10cm

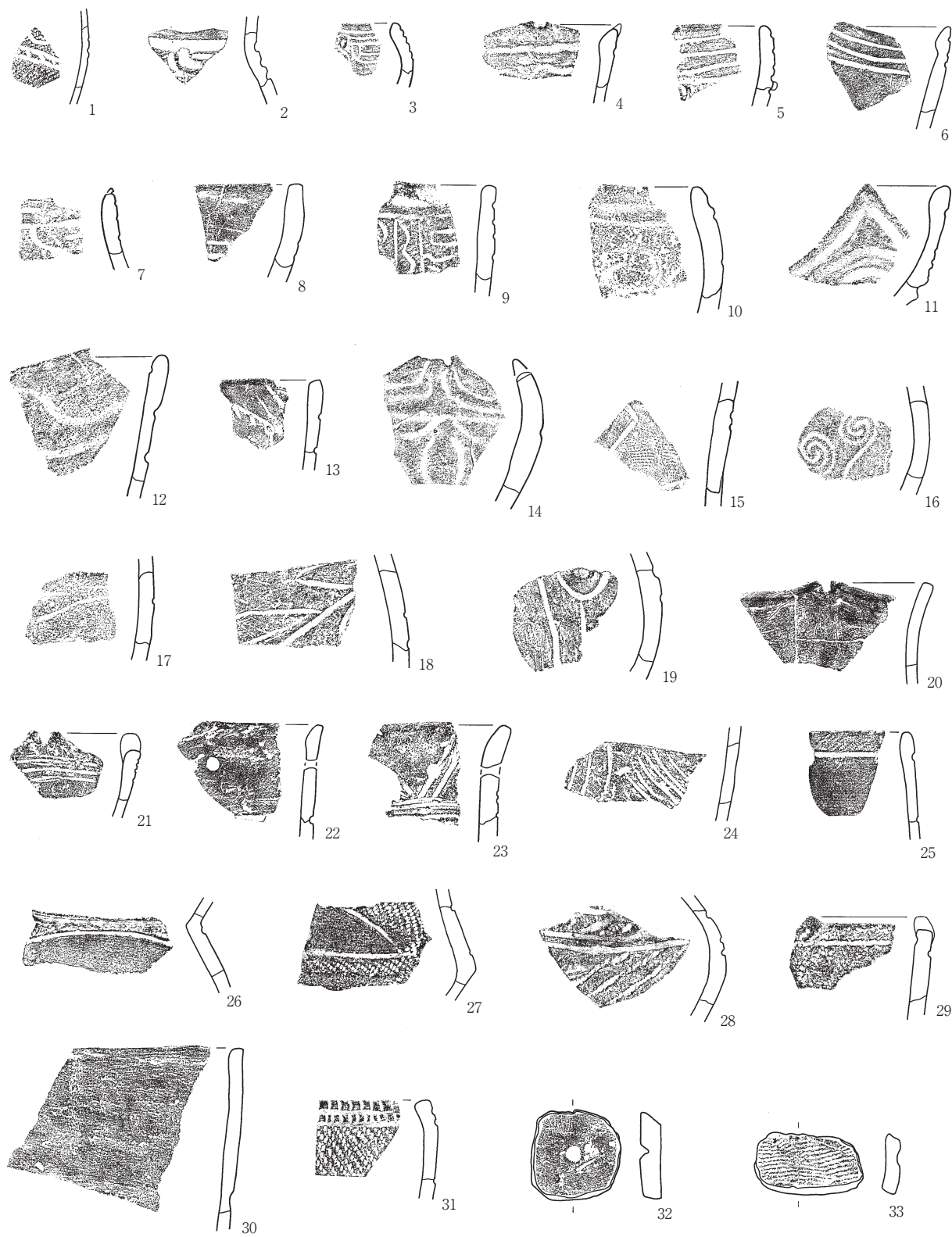
第248図 29区出土土器 (5)



第249図 29区出土土器 (6)

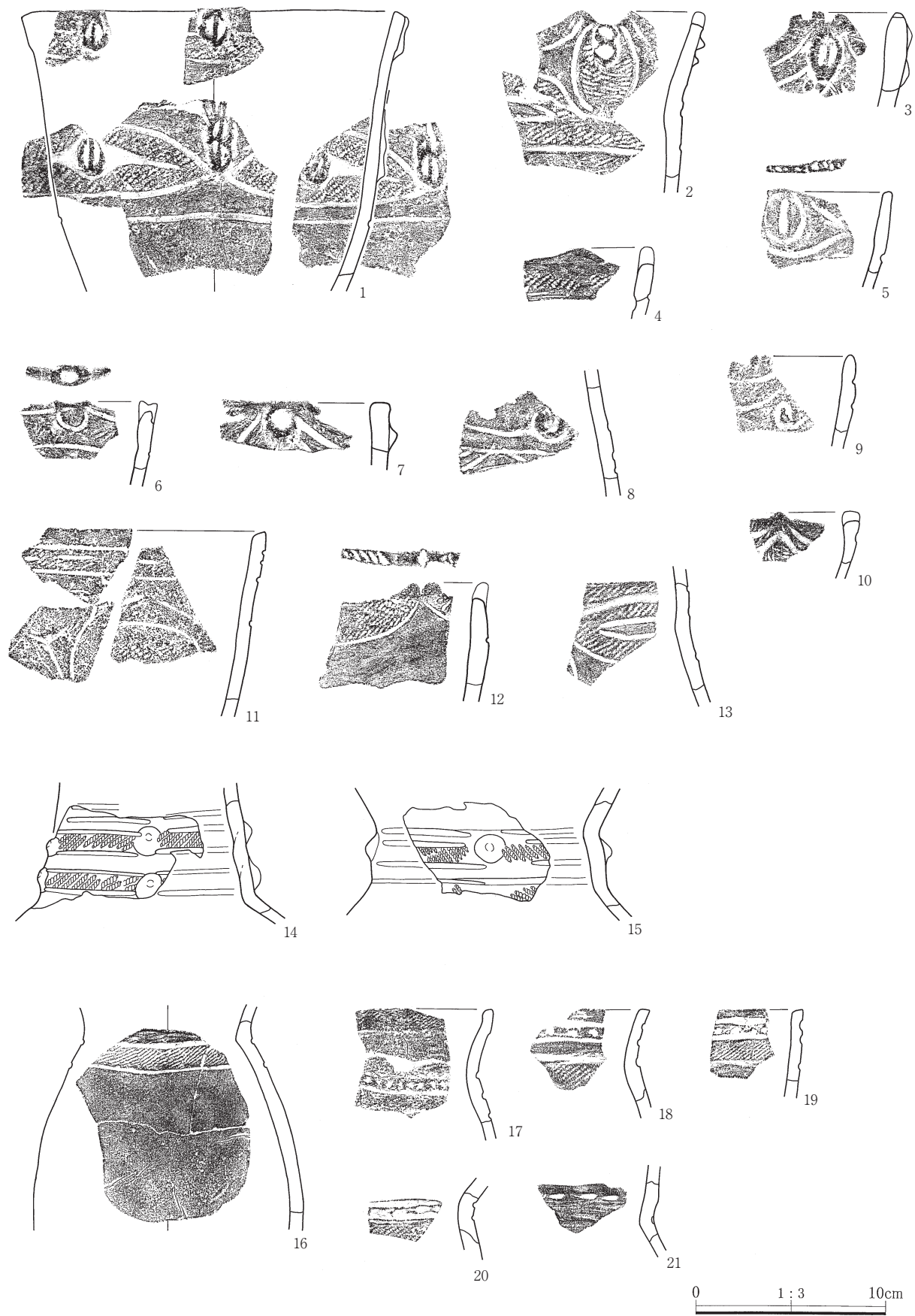
0 1:3 10cm



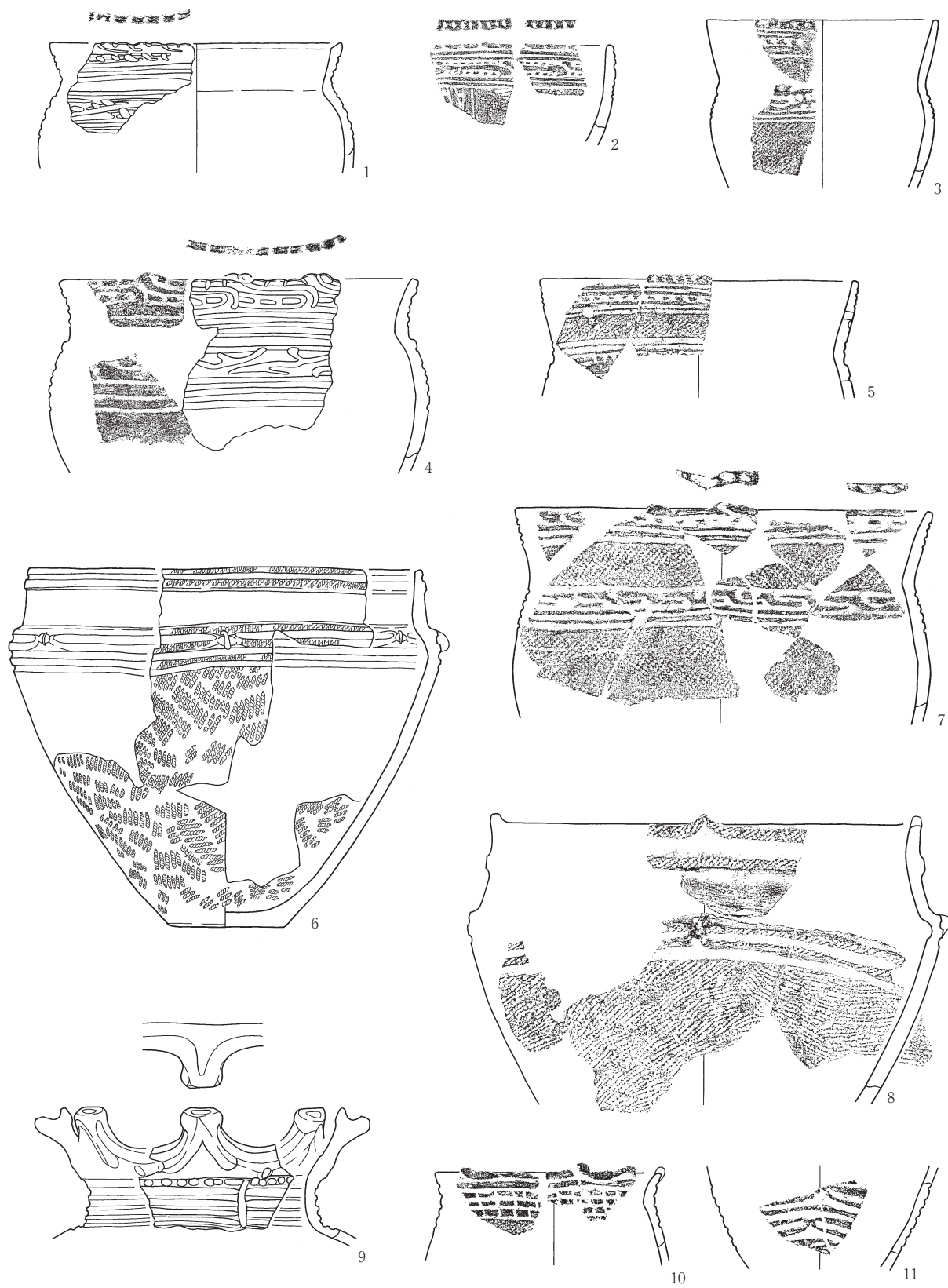


第250図 29区出土土器 (7)

0 1:3 10cm

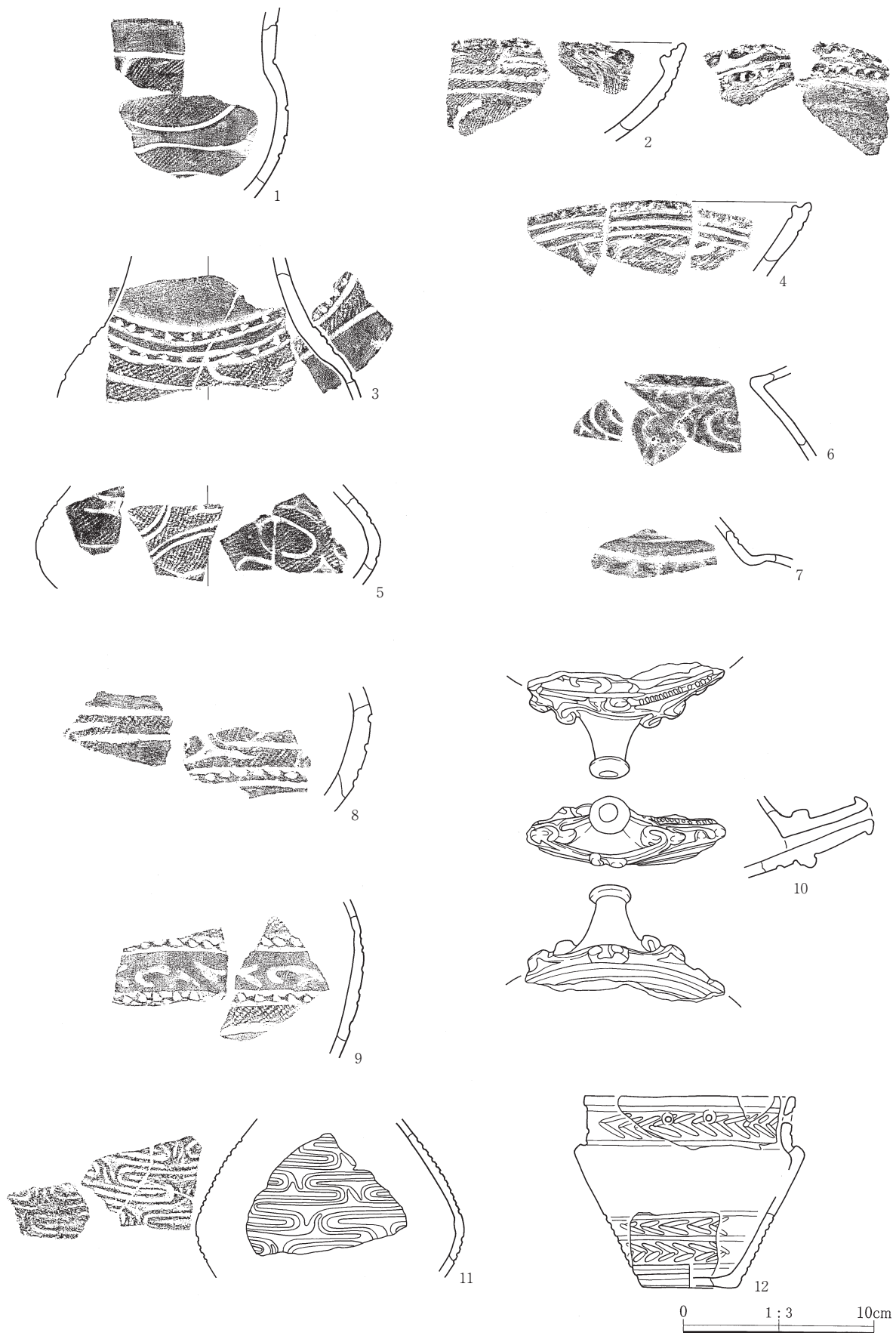


第251図 29区出土土器 (8)

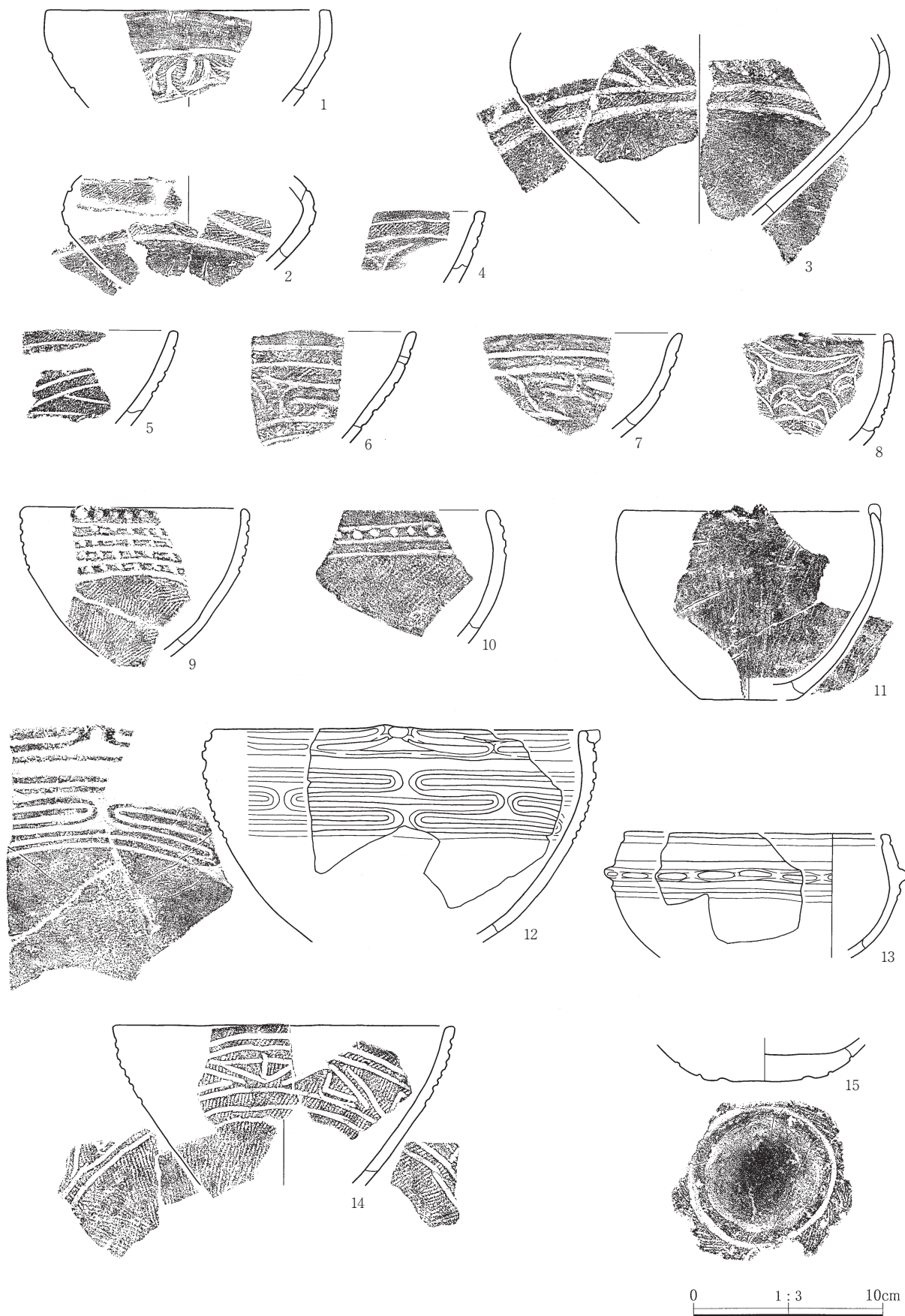


0 1:3 10cm

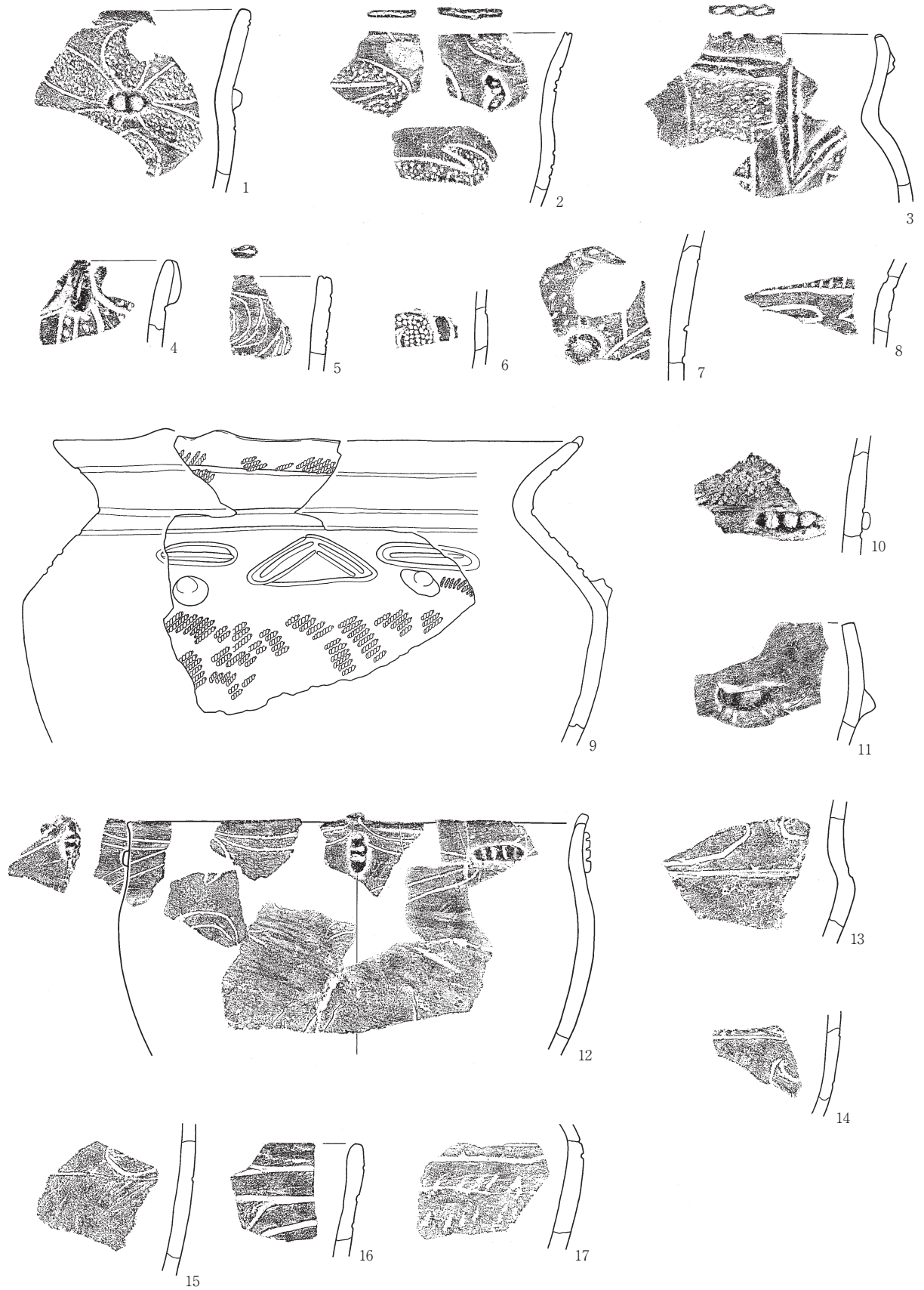
第252図 29区出土土器(9)



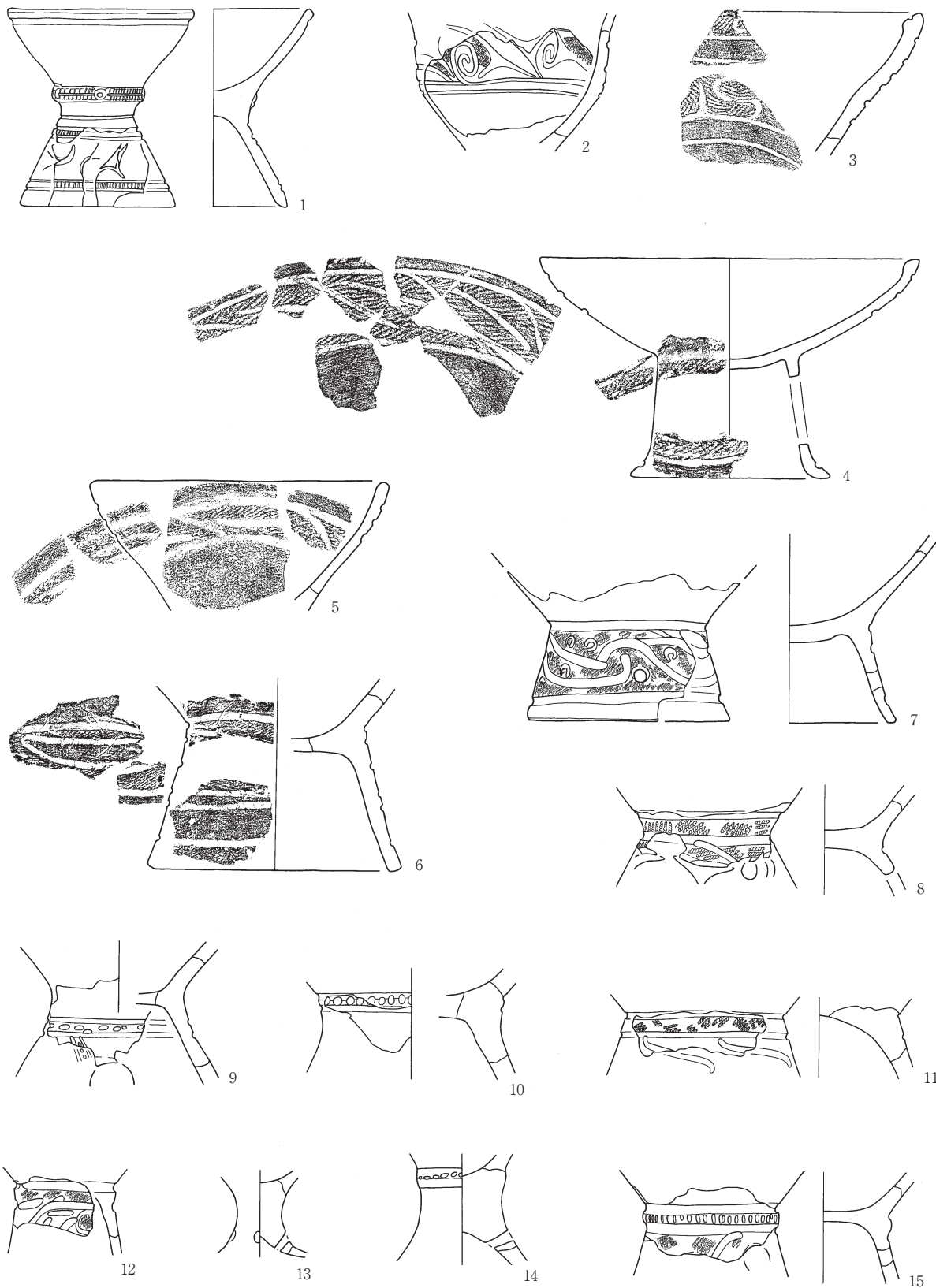
第253図 29区出土土器 (10)



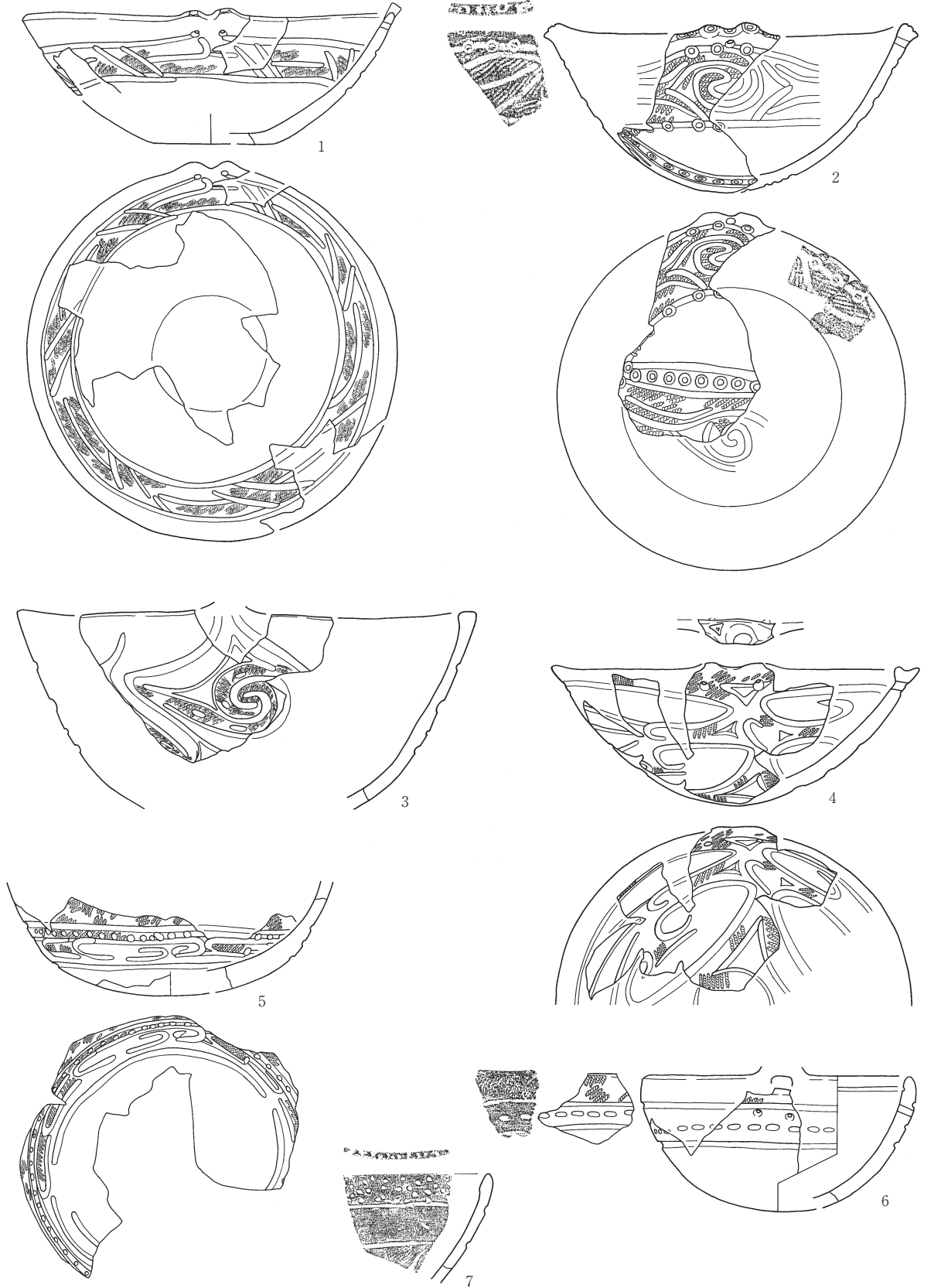
第254図 29区出土土器 (11)



第255図 29区出土土器 (12)



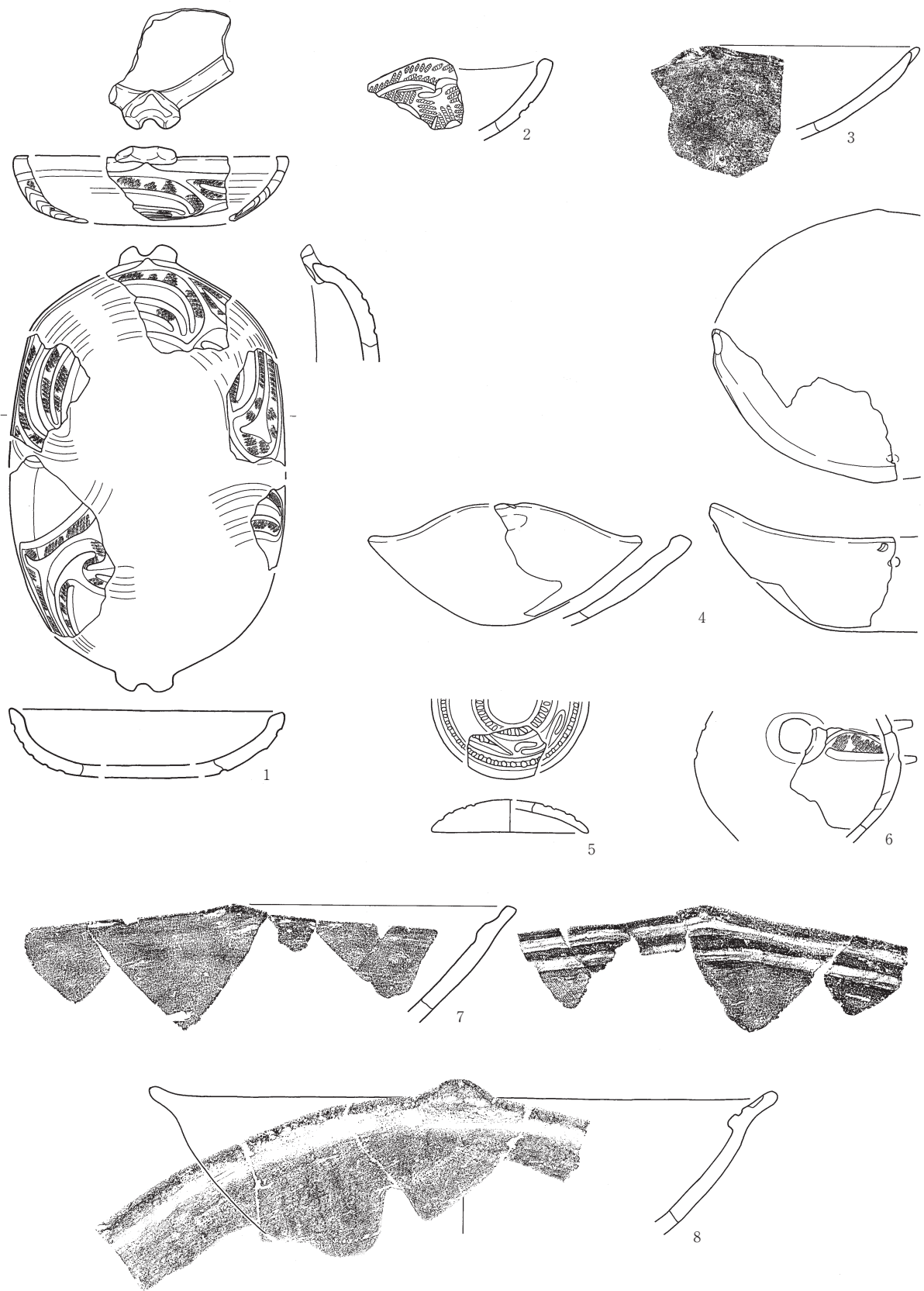
第256図 29区出土土器 (13)



0 1:3 10cm

第257図 29区出土土器 (14)



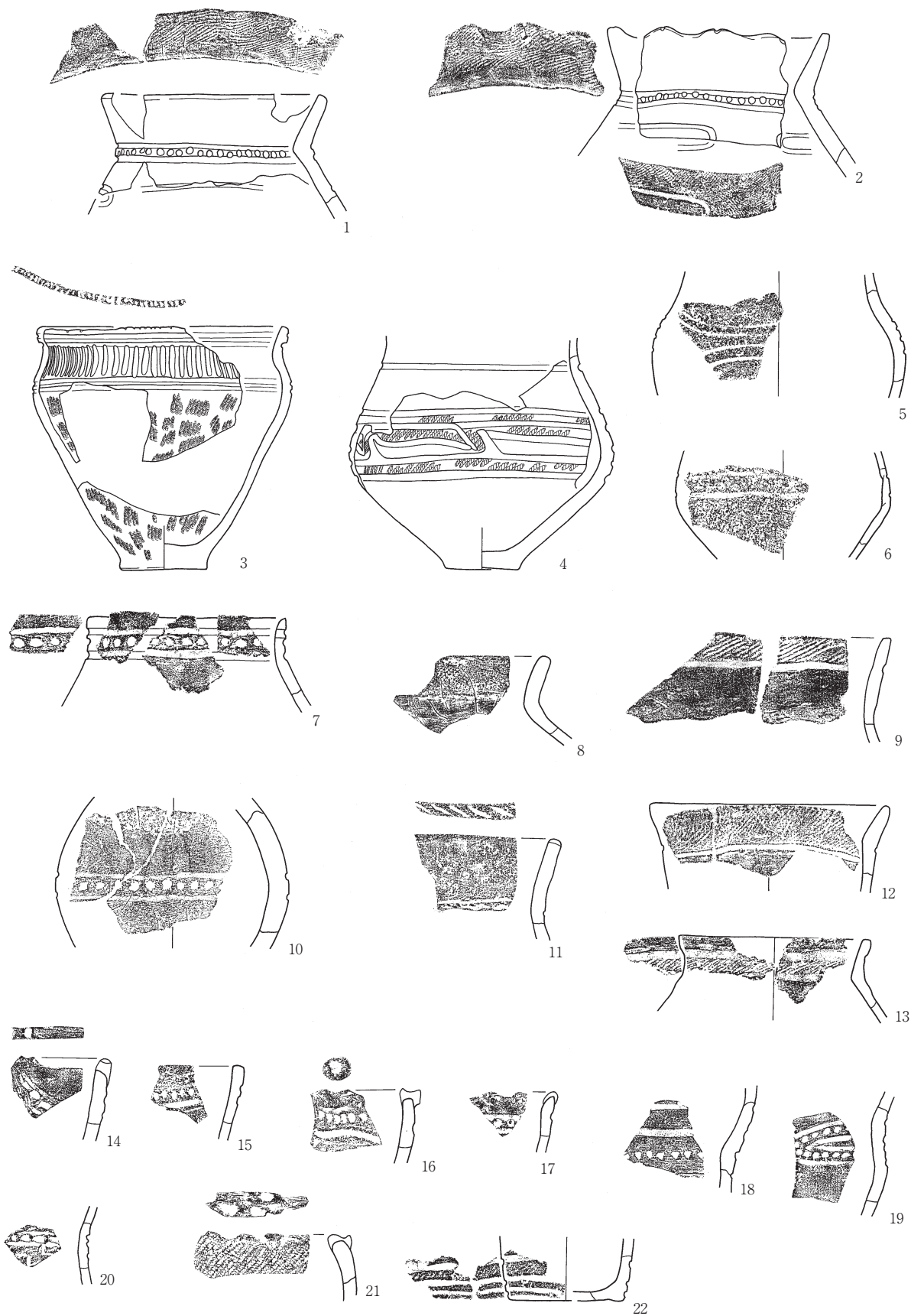


第258図 29区出土土器 (15)

0 1:3 10cm

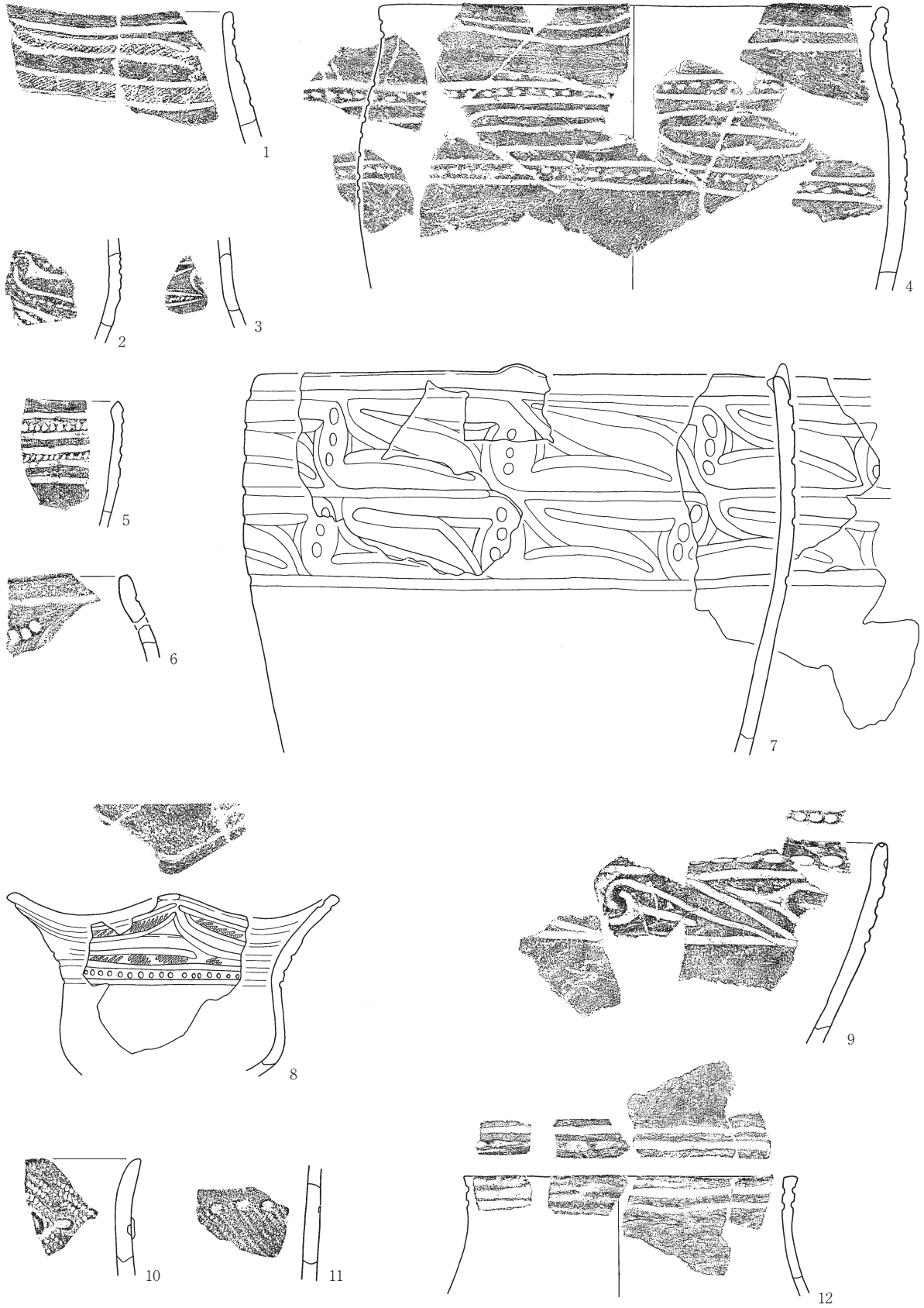


第259図 29区出土土器 (16)



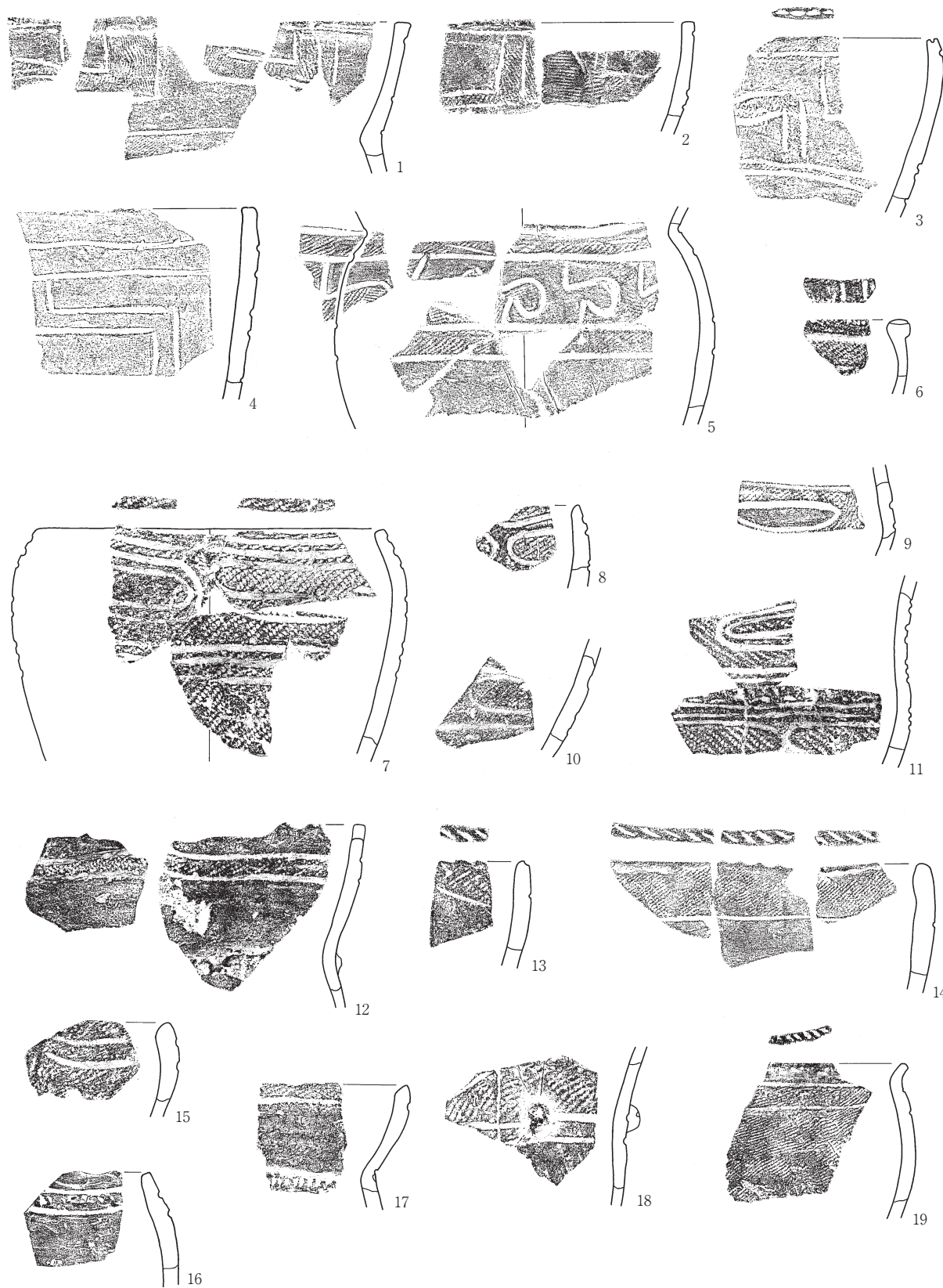
第260図 29区出土土器 (17)

0 1:3 10cm



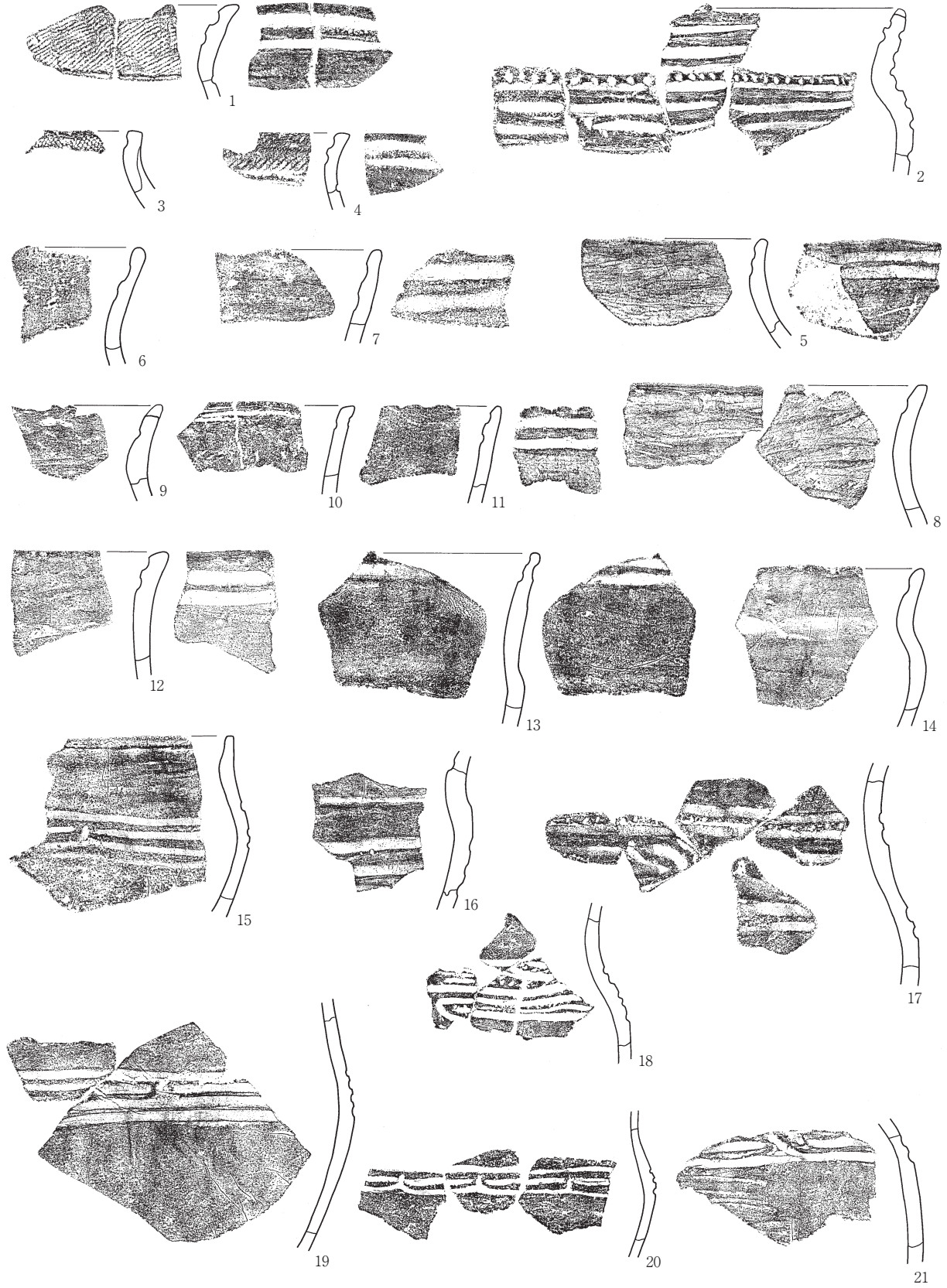
第261図 29区出土土器 (18)

0 1:3 10cm



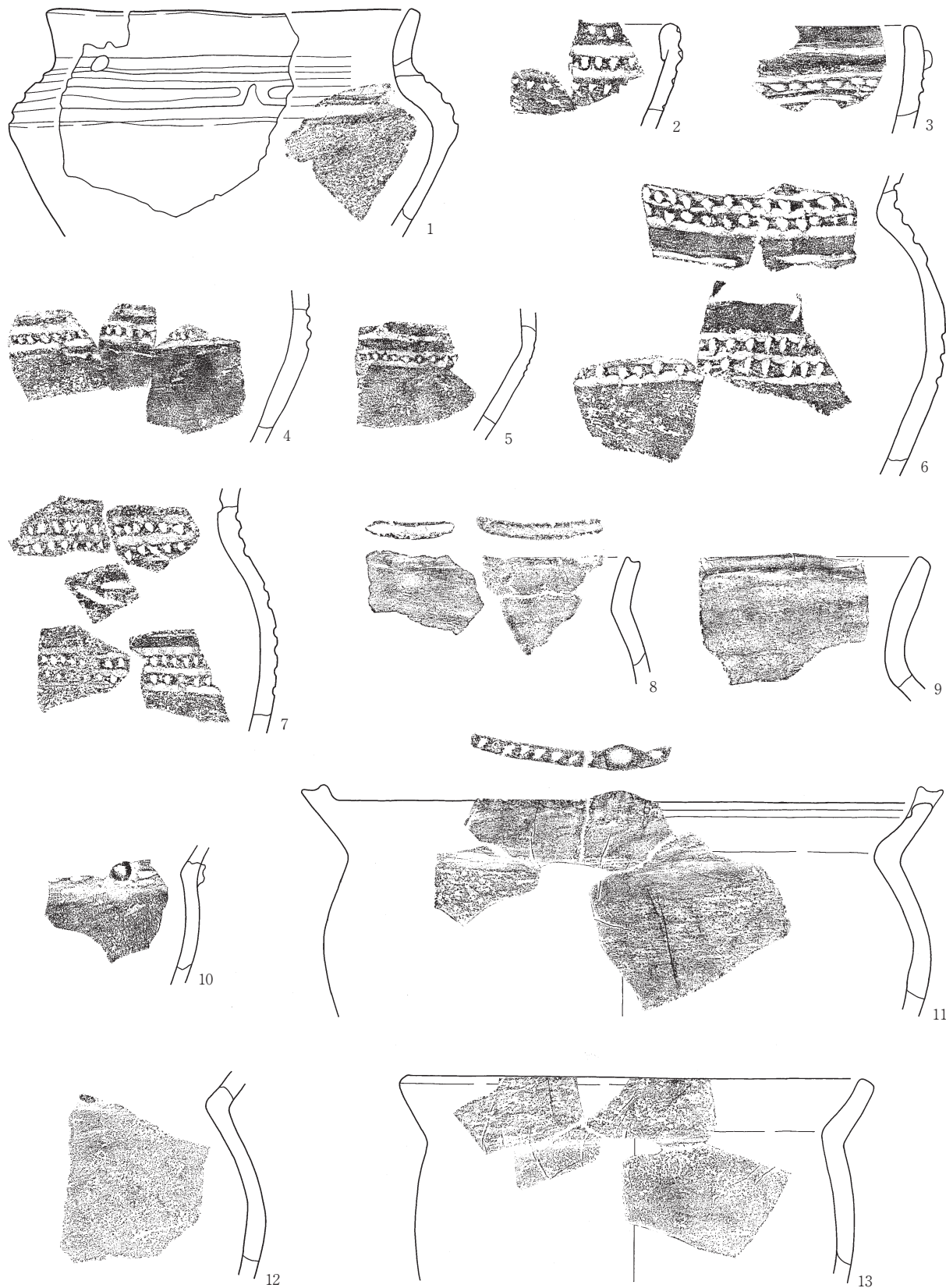
第262図 29区出土土器 (19)

0 1:3 10cm



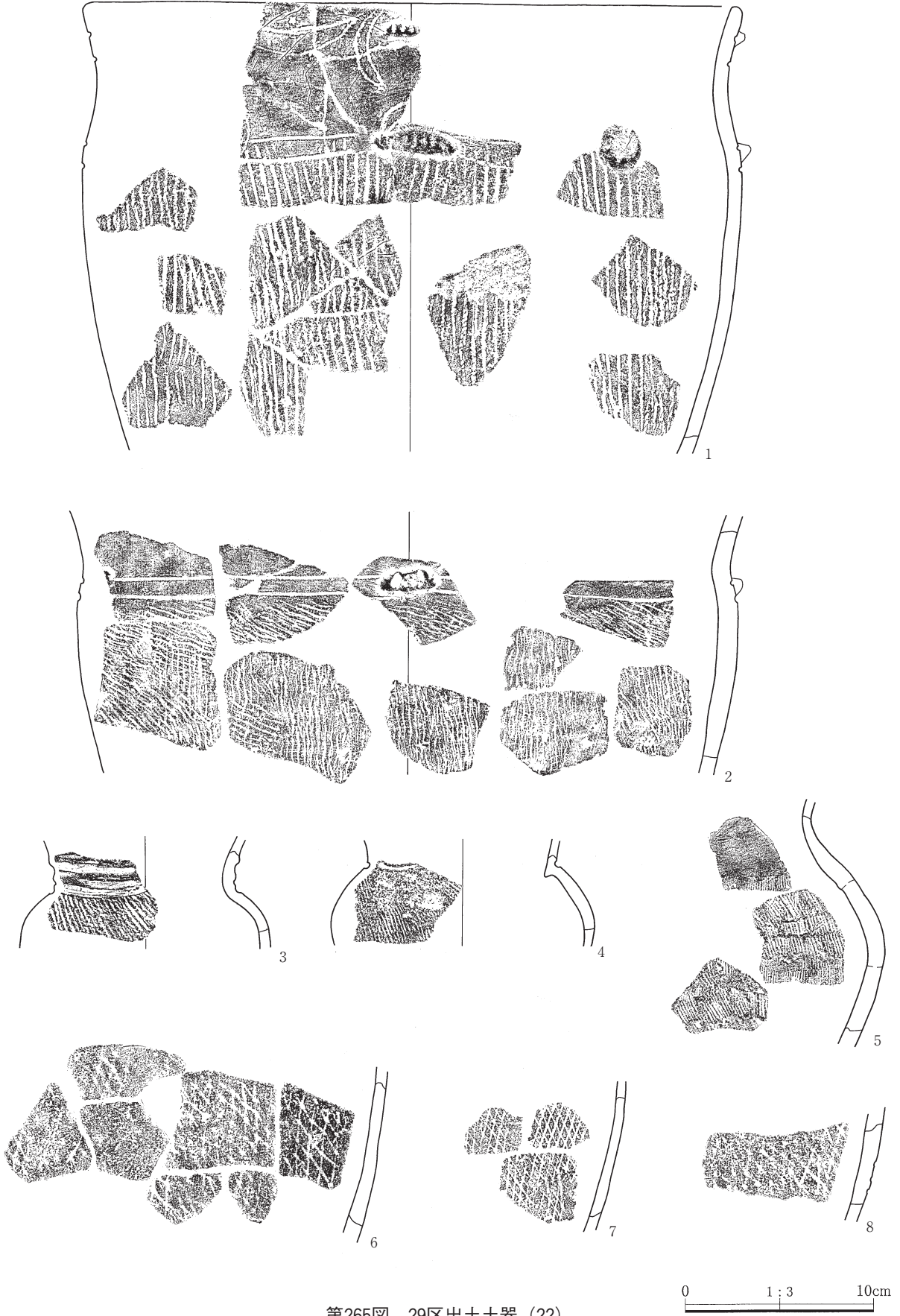
第263図 29区出土土器 (20)

0 1:3 10cm



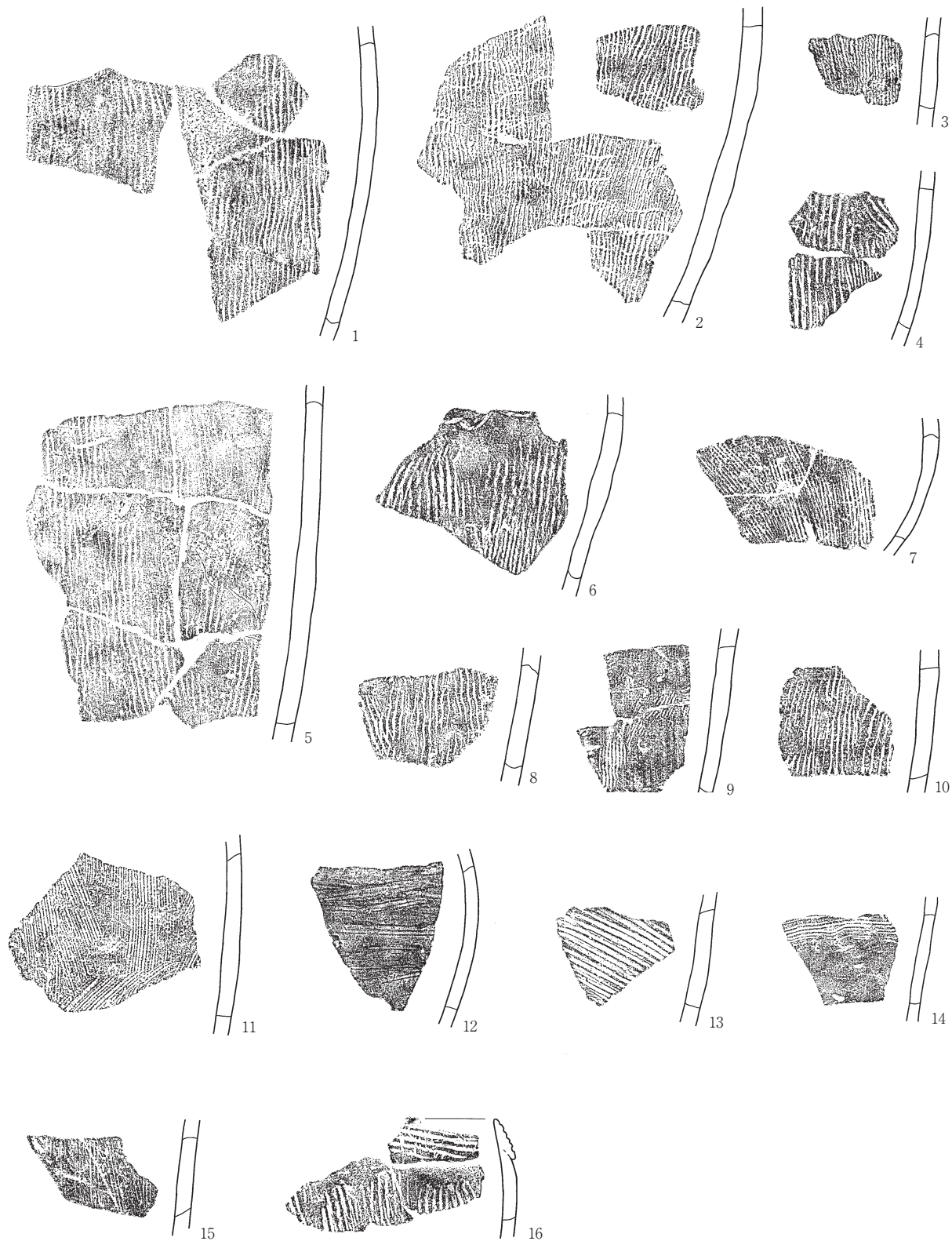
第264図 29区出土土器 (21)

0 1:3 10cm



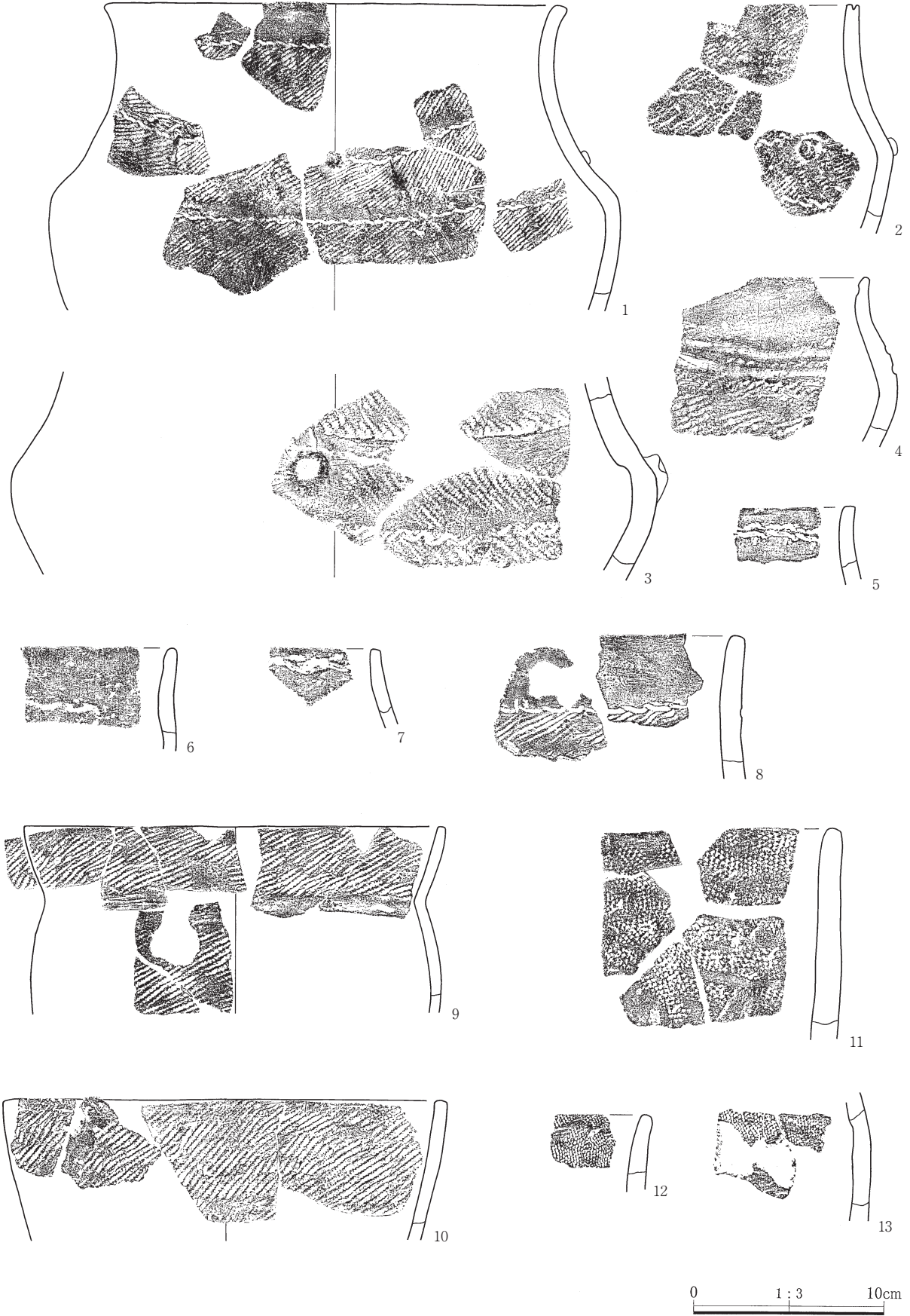
第265図 29区出土土器 (22)



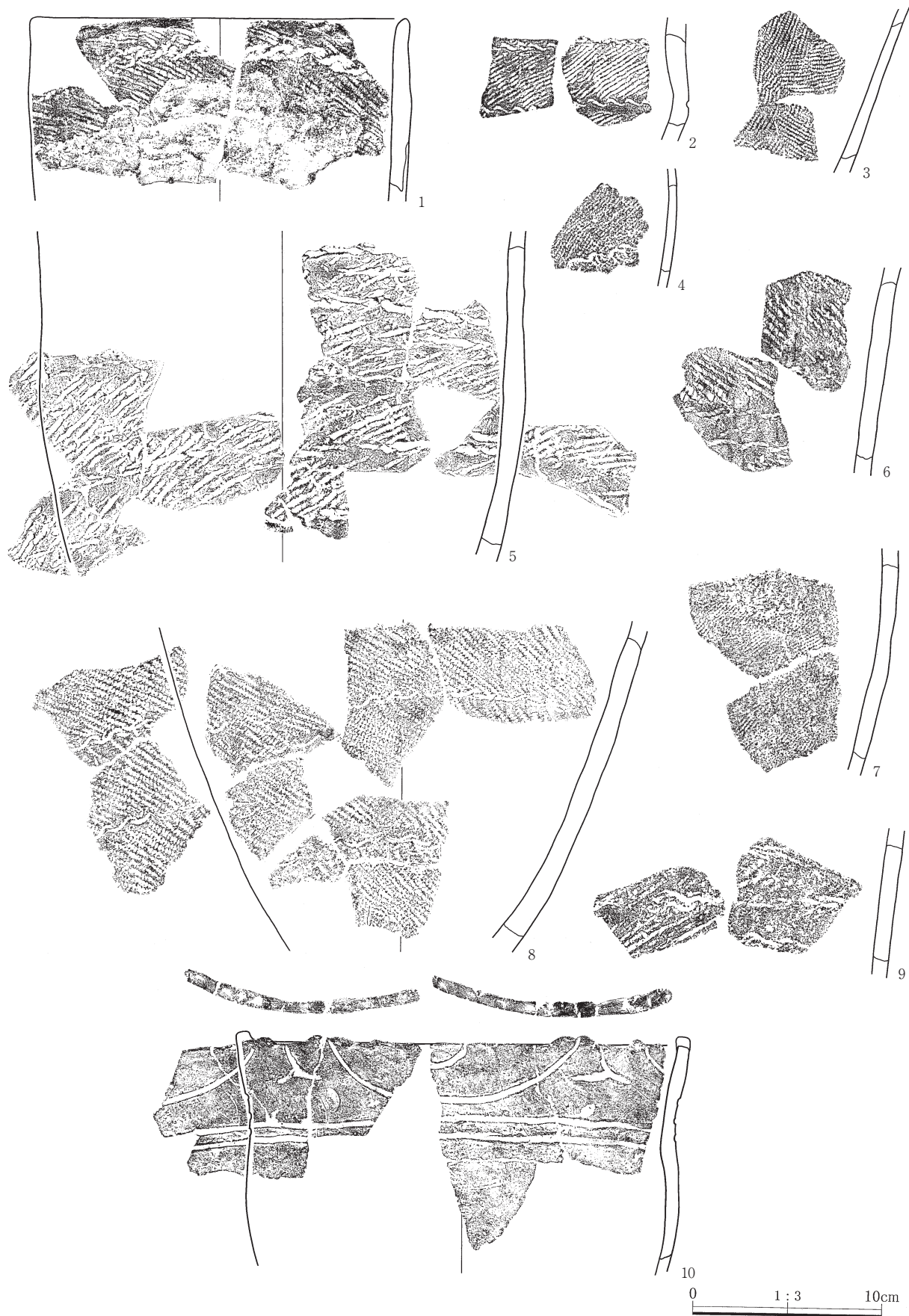


0 1 : 3 10cm

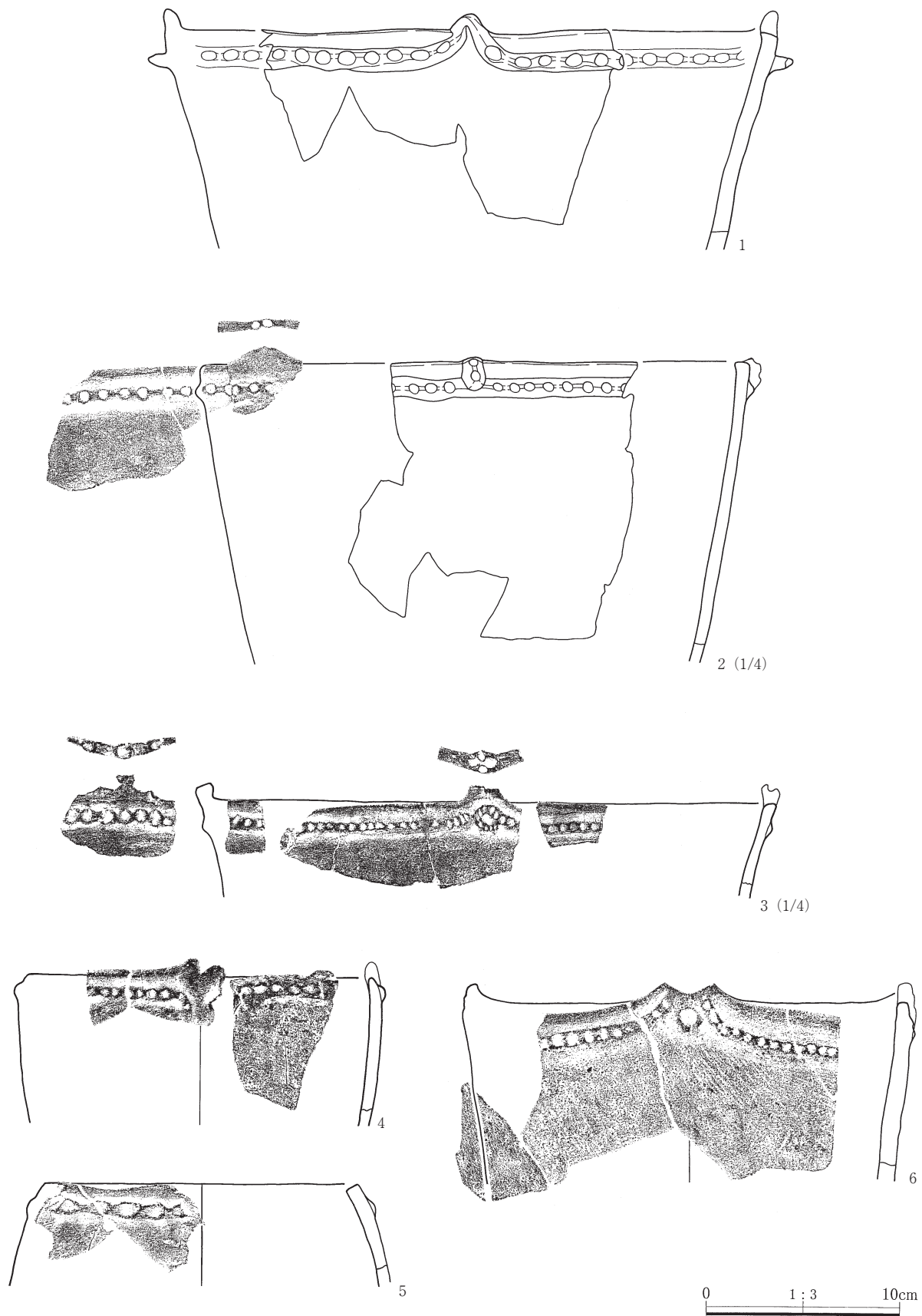
第266図 29区出土土器 (23)



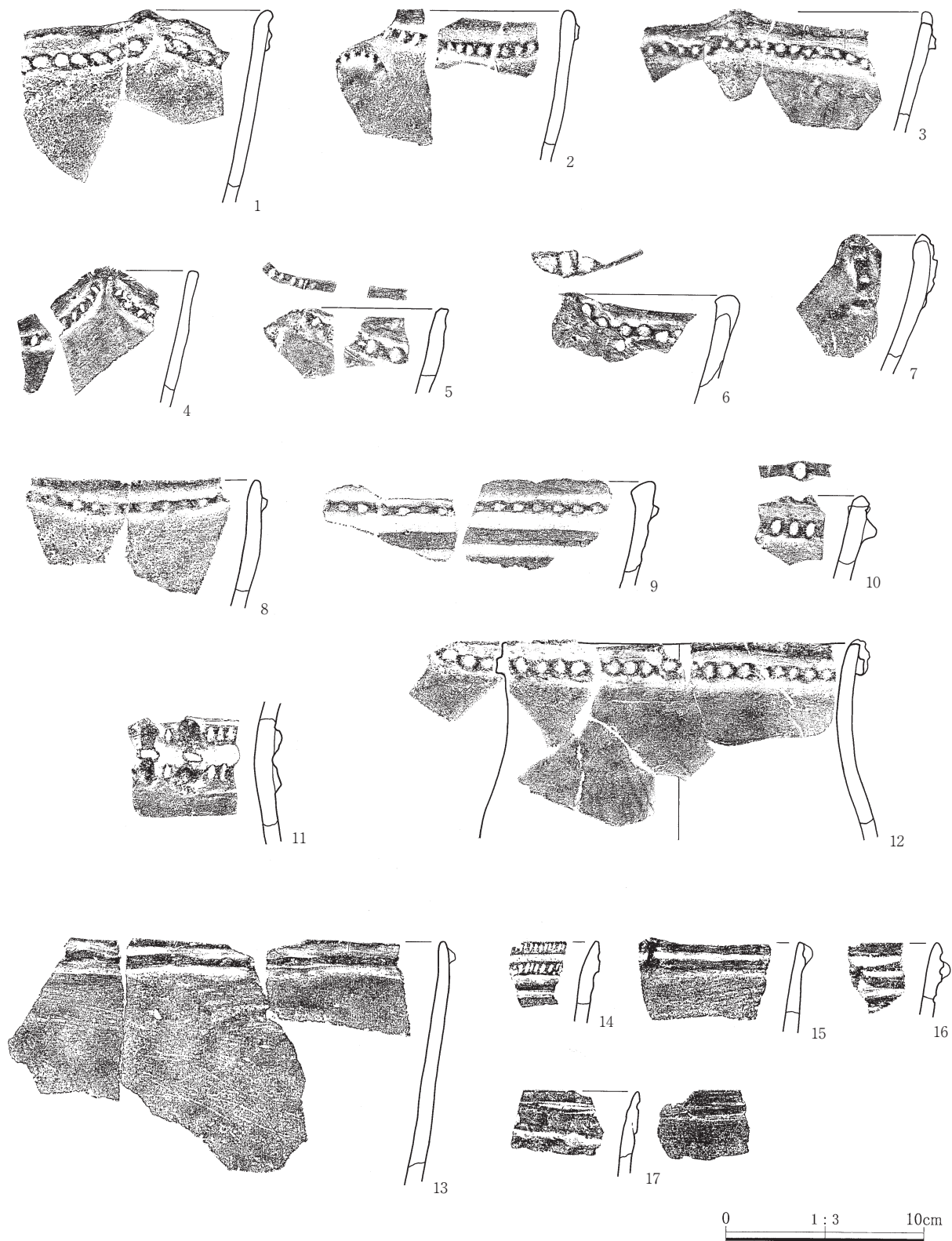
第267図 29区出土土器 (24)



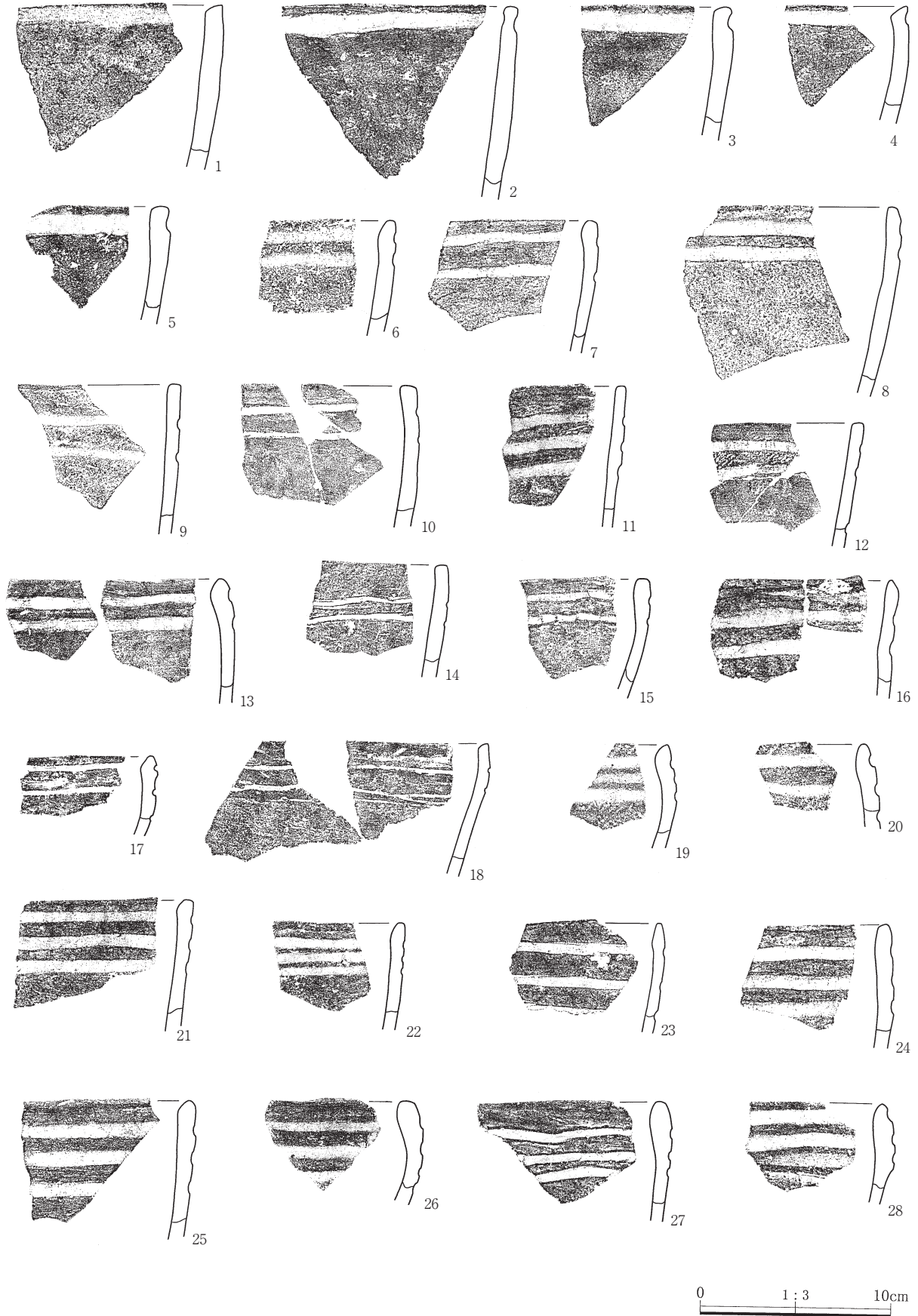
第268図 29区出土土器 (25)



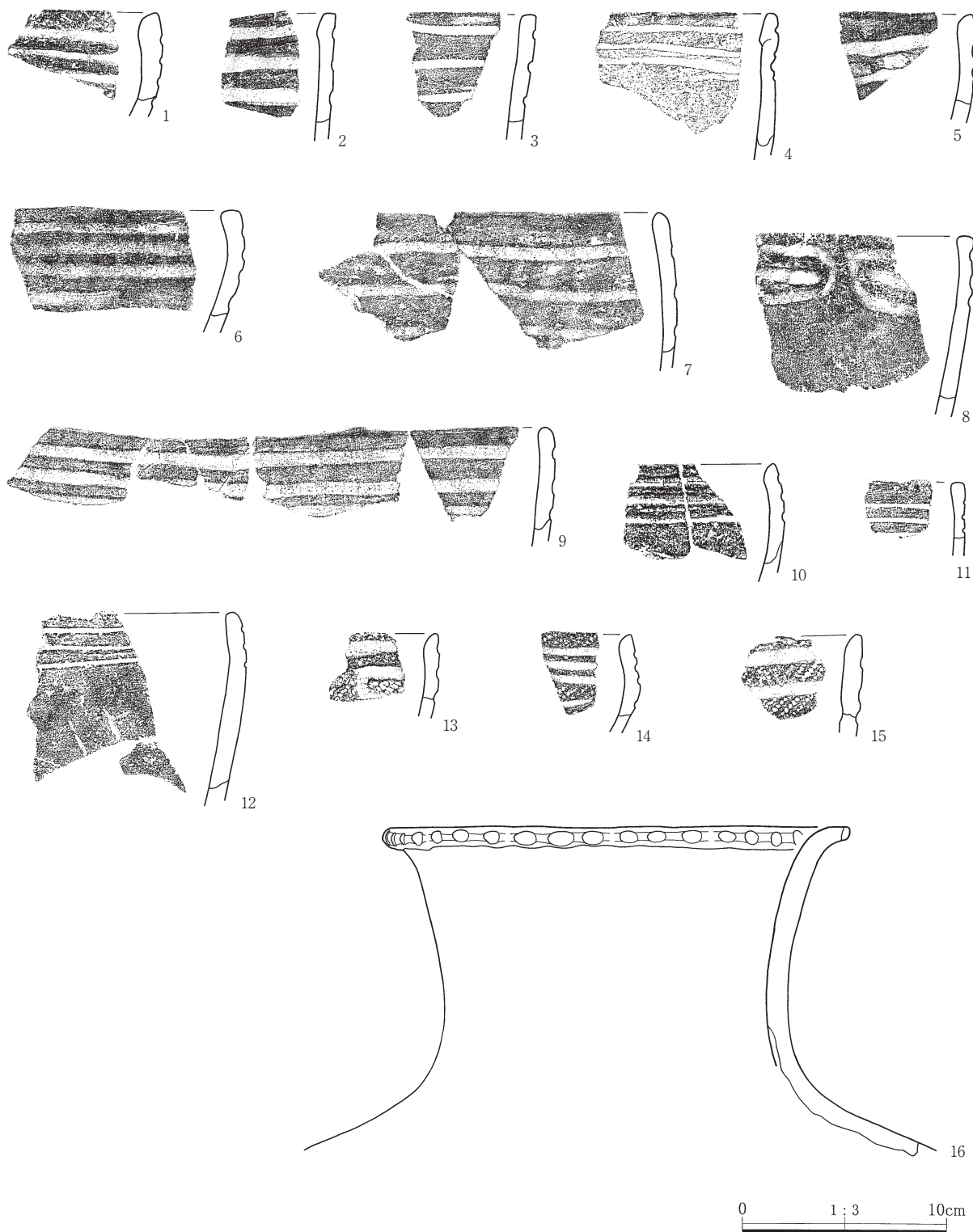
第269図 29区出土土器 (26)



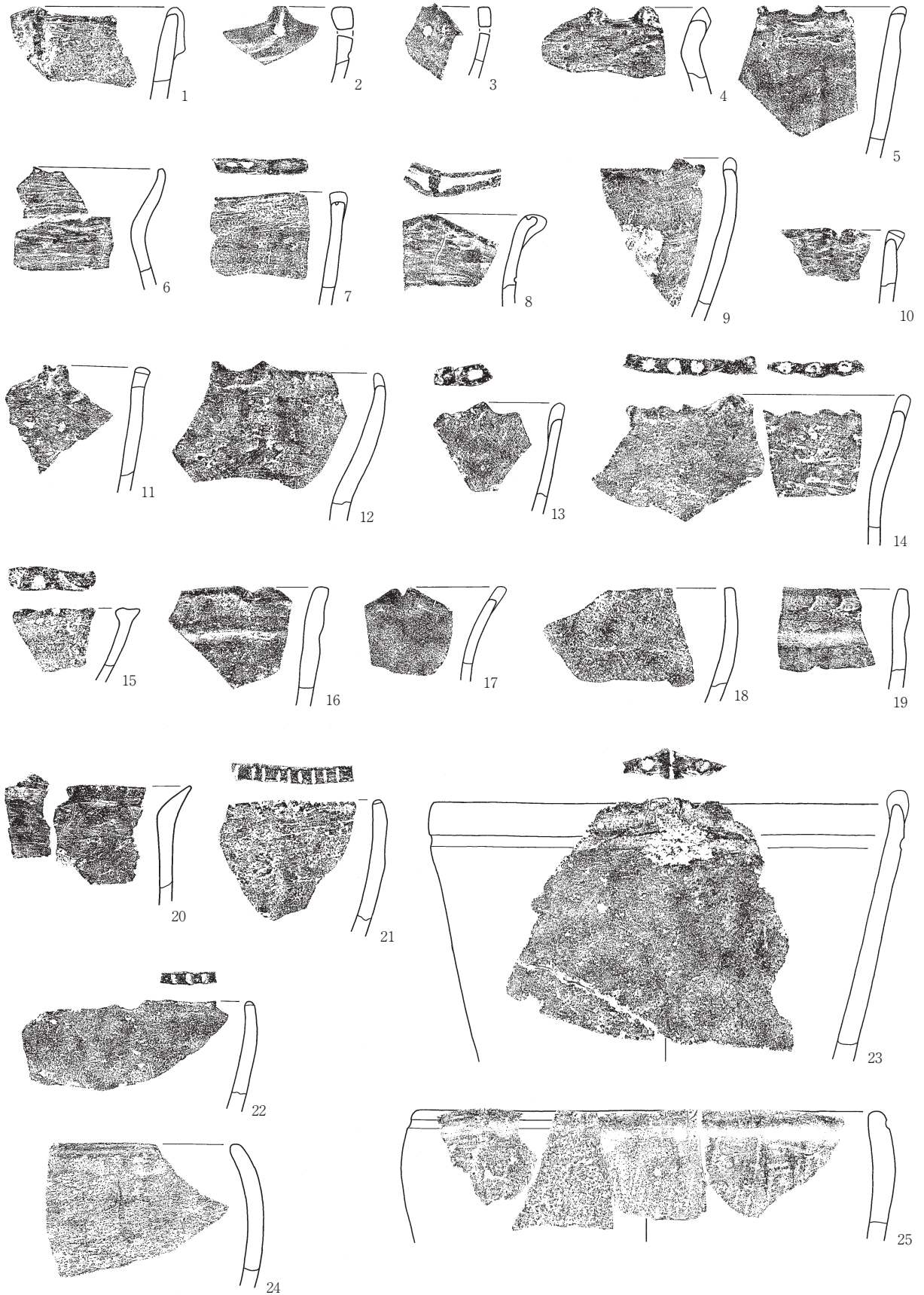
第270図 29区出土土器 (27)



第271図 29区出土土器 (28)

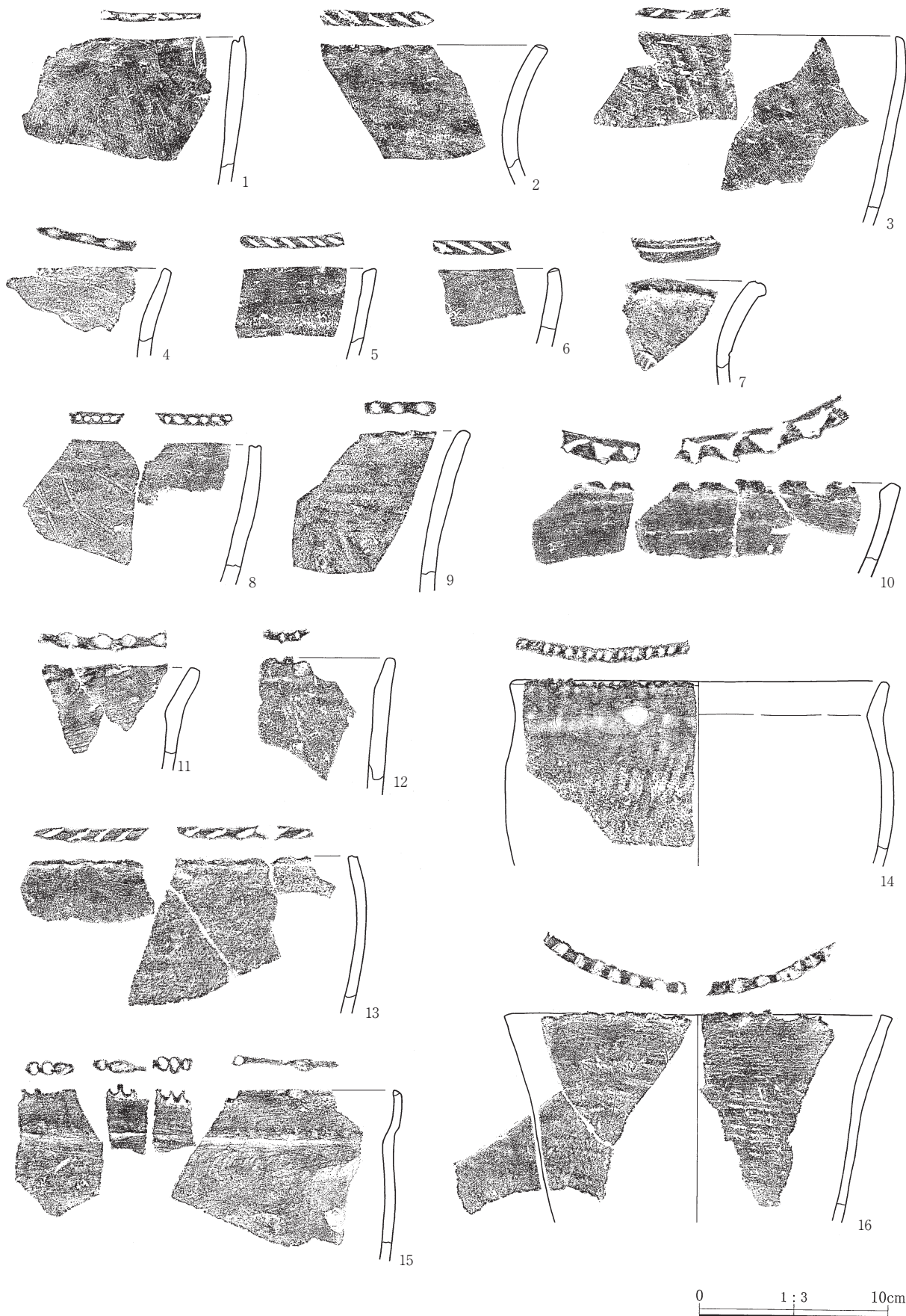


第272図 29区出土土器 (29)

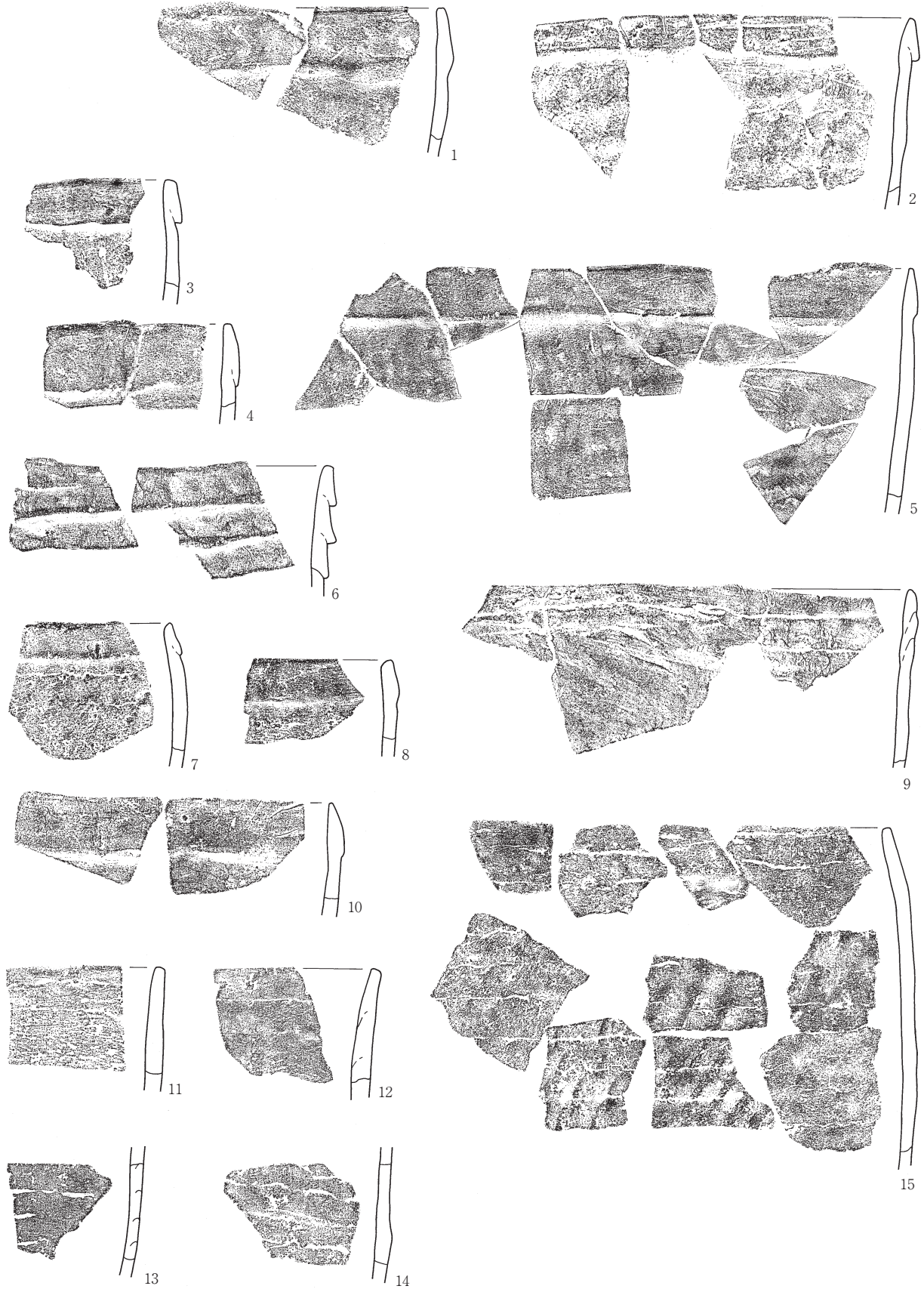


第273図 29区出土土器 (30)





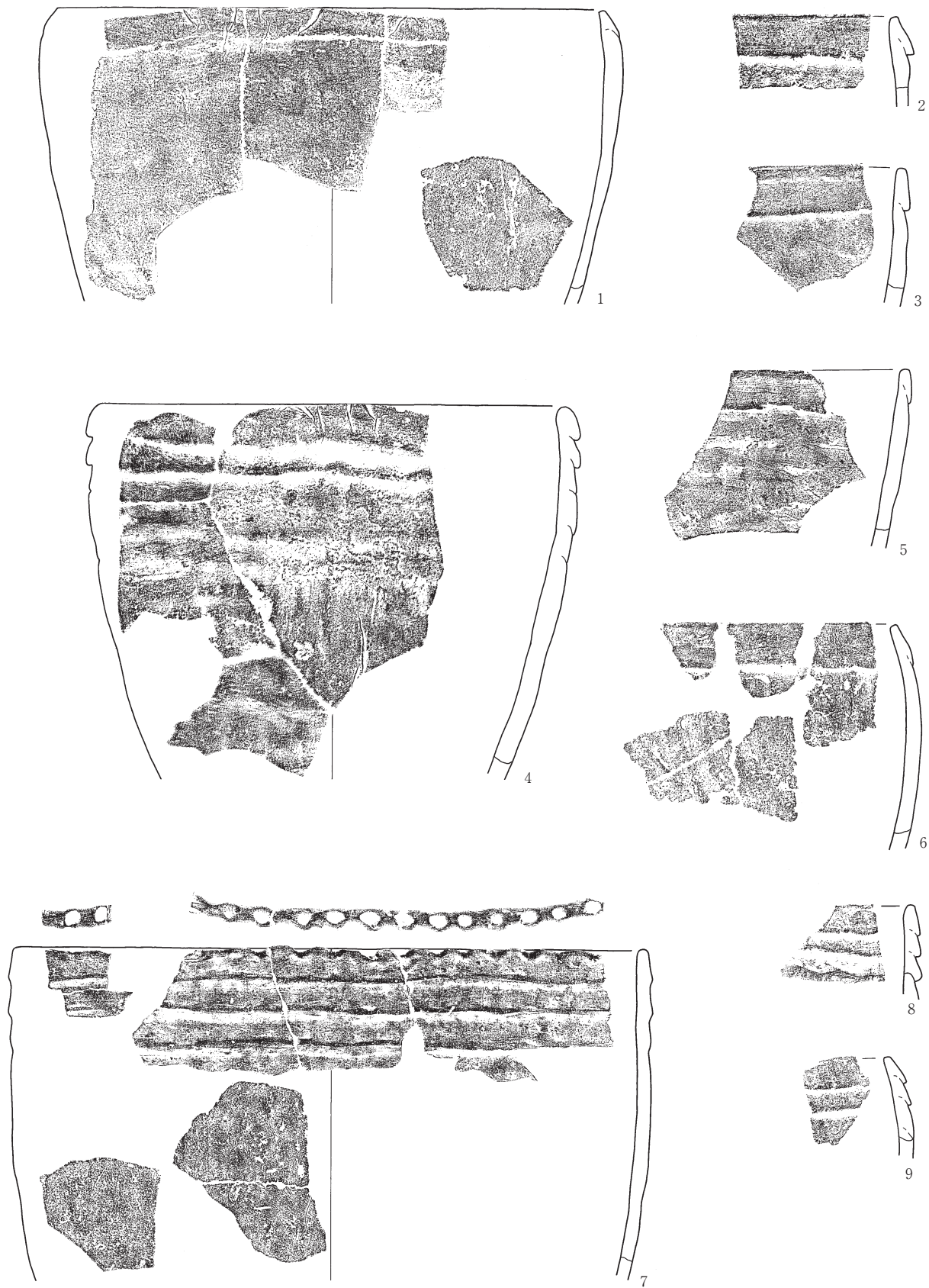
第274図 29区出土土器 (31)



0 1 : 3 10cm

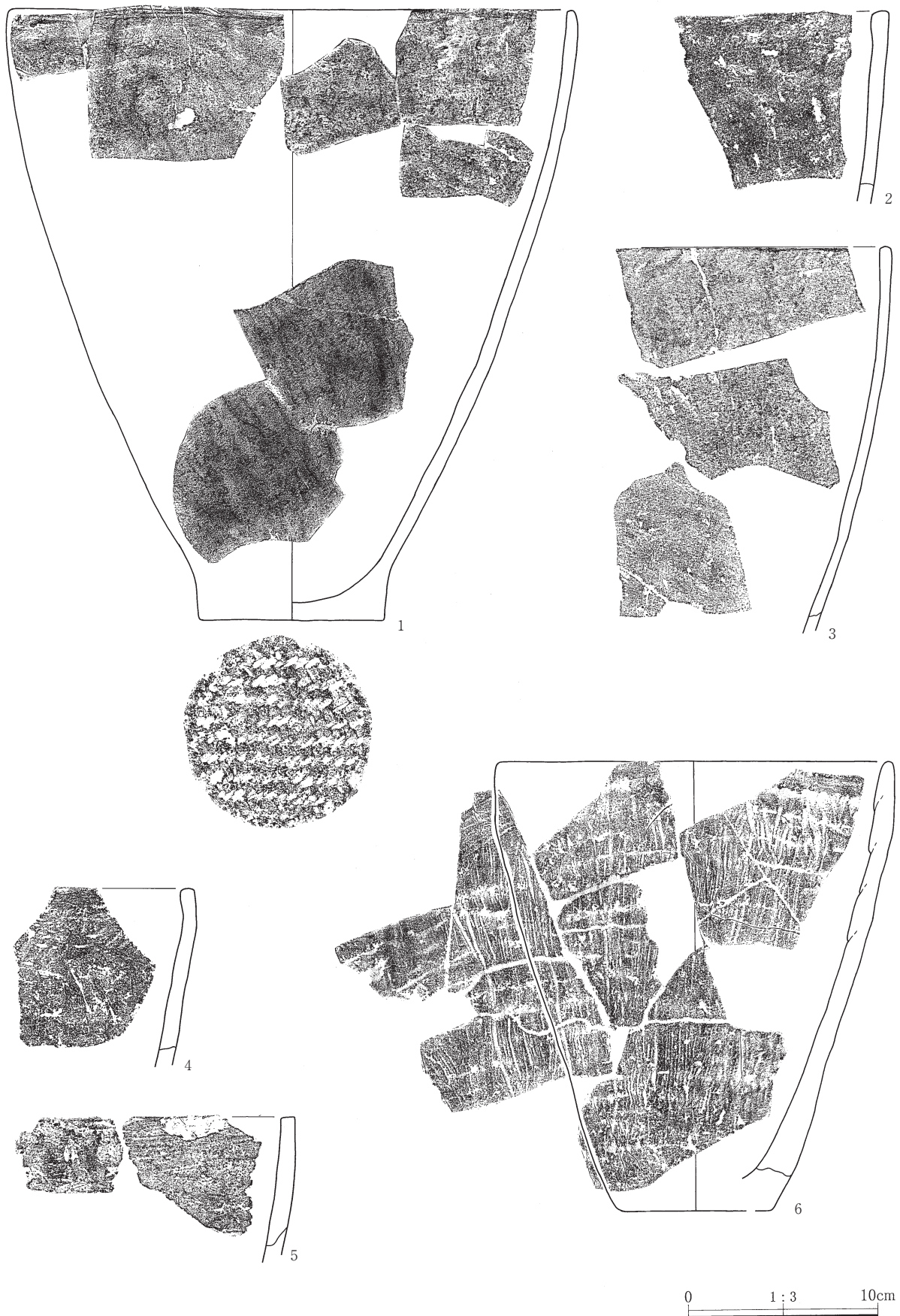
第275図 29区出土土器 (32)

第4節 遺構外出土遺物

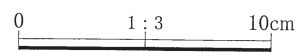
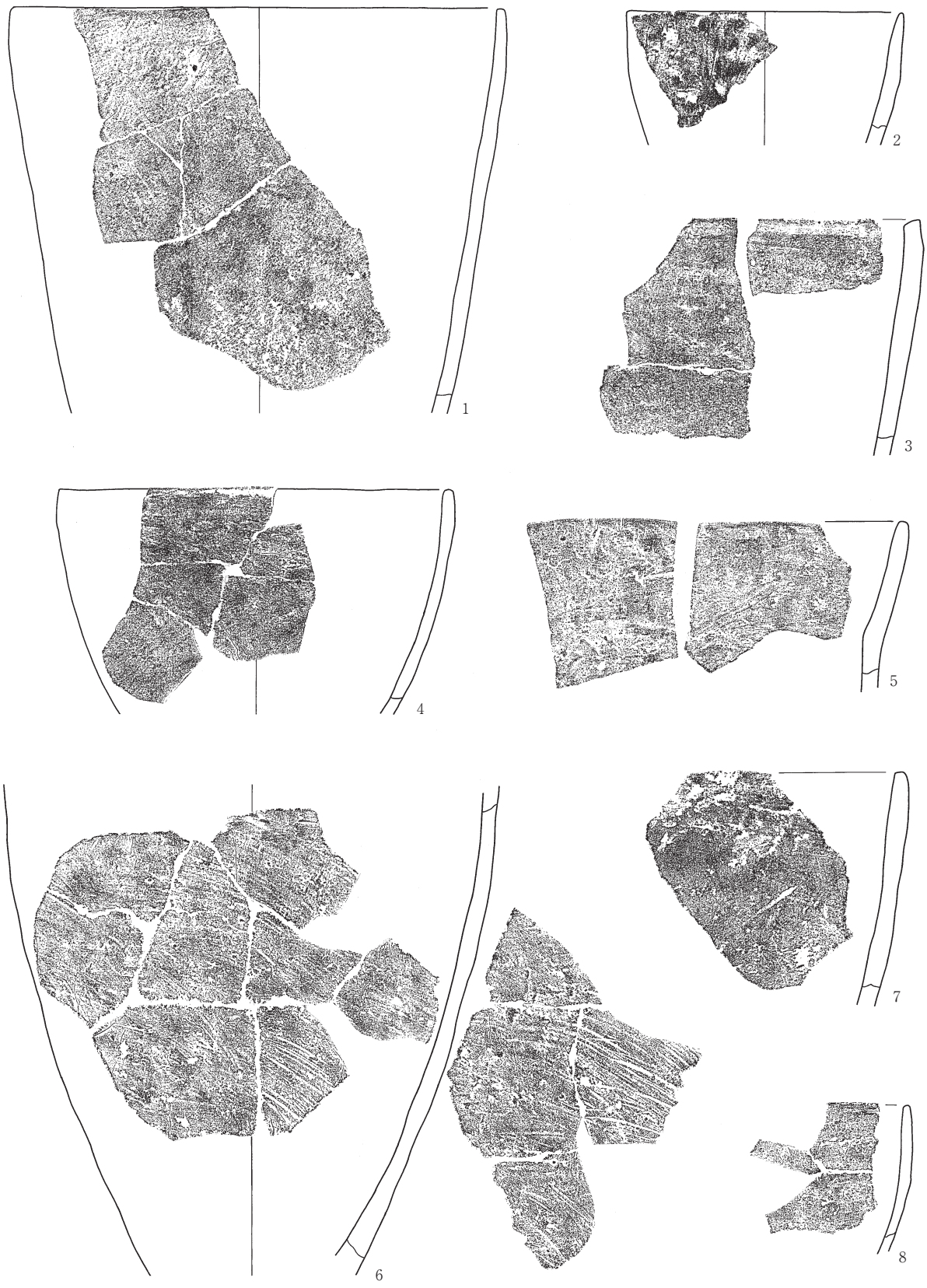


第276図 29区出土土器 (33)

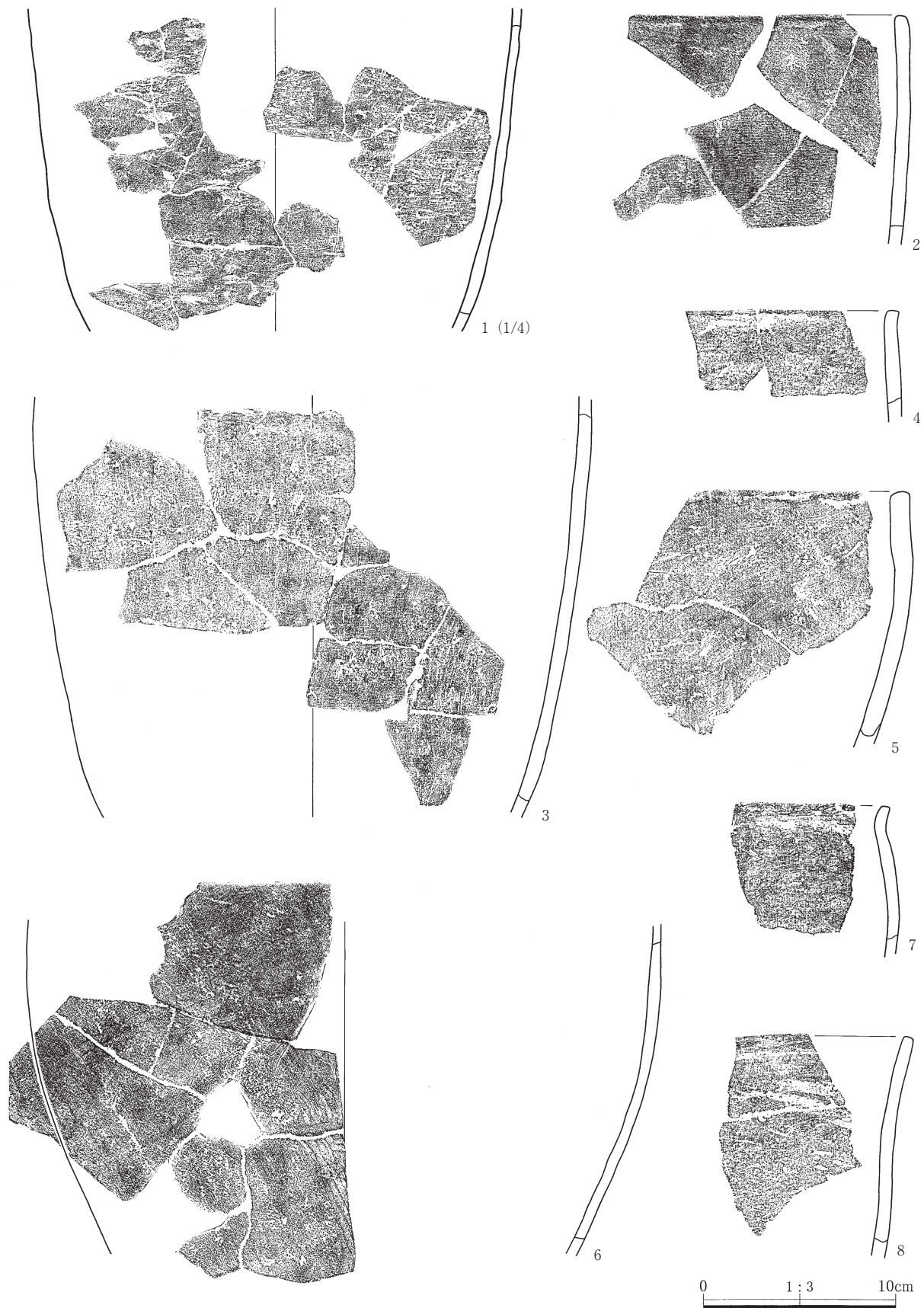
0 1:3 10cm



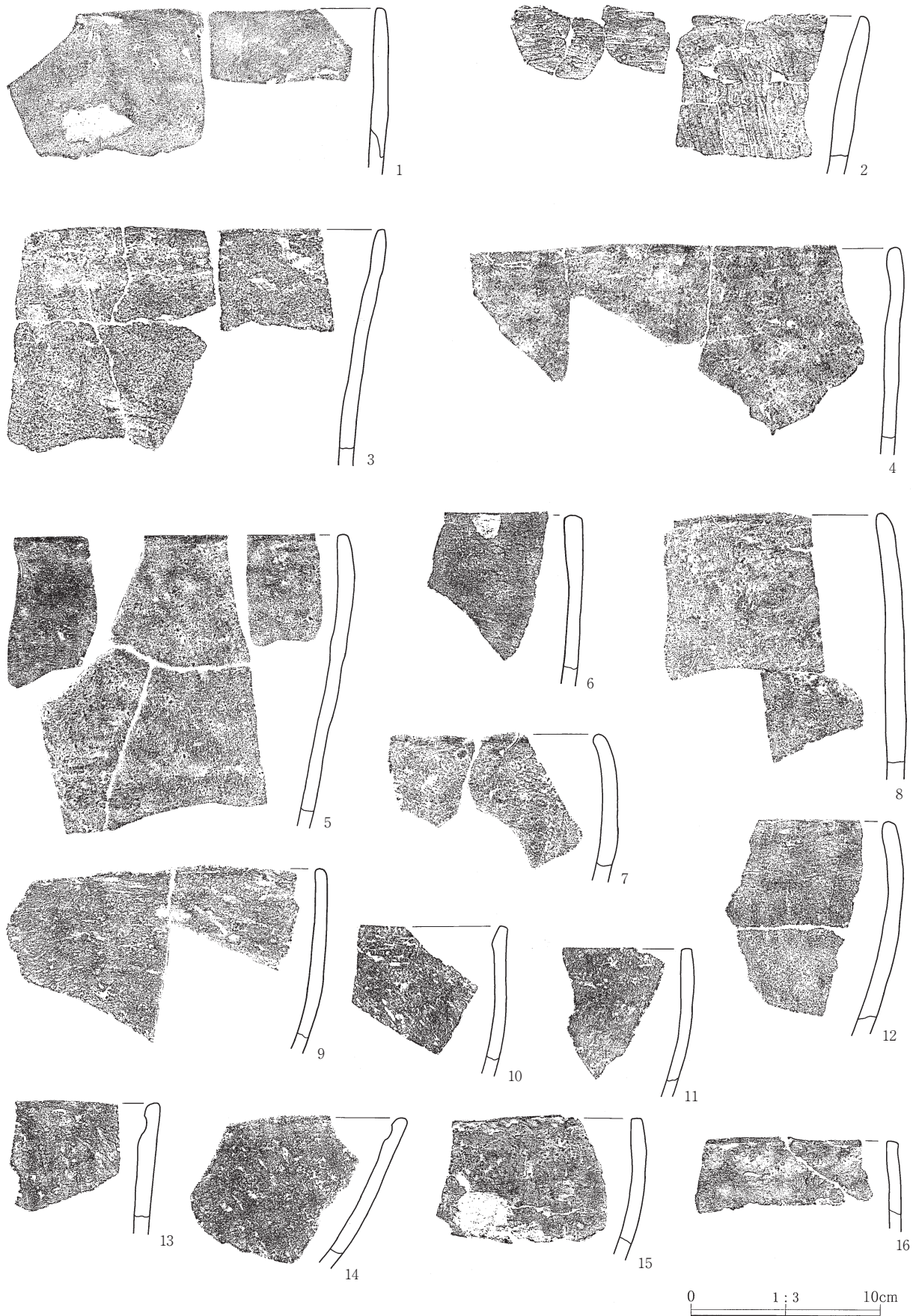
第277図 29区出土土器 (34)



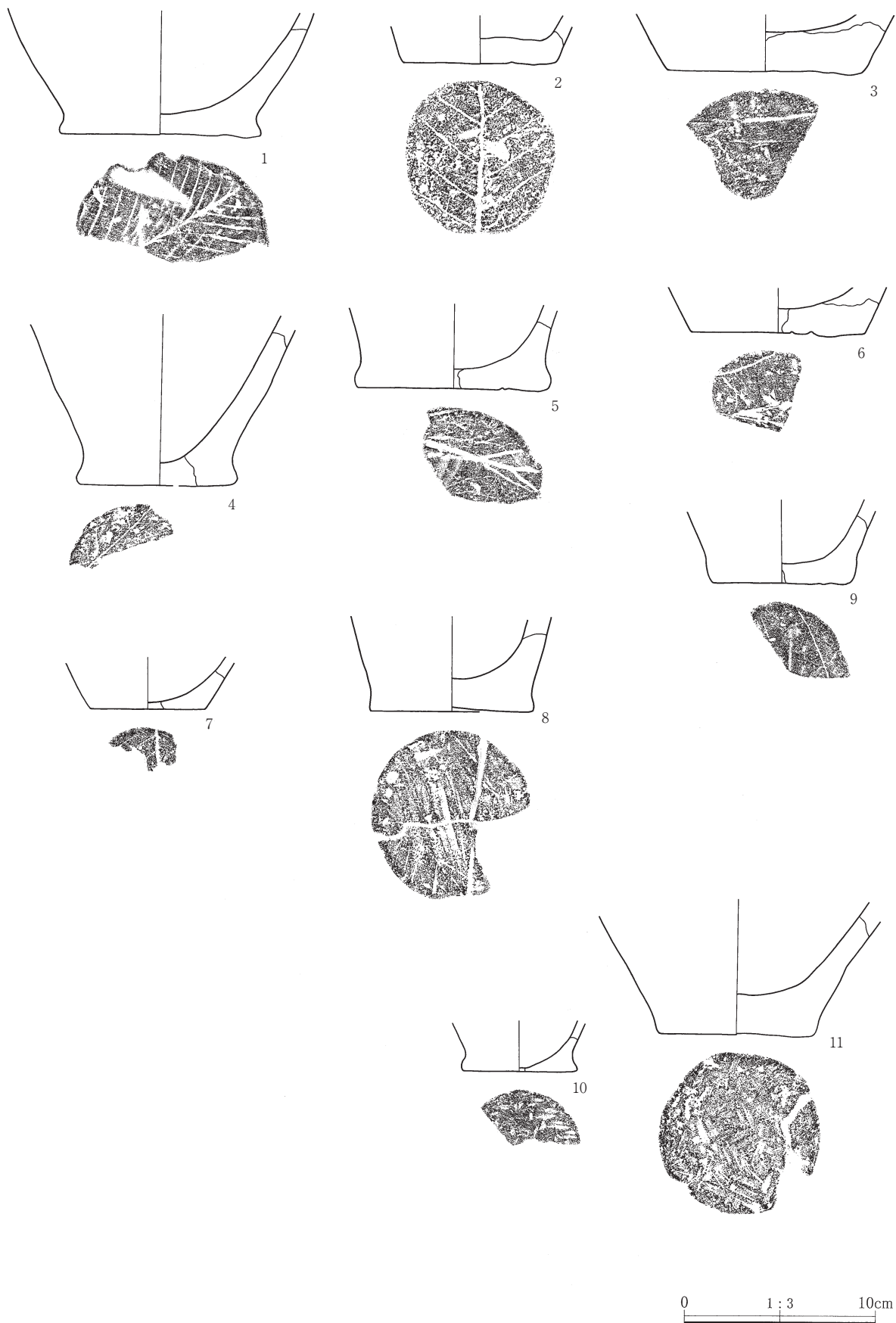
第278図 29区出土土器 (35)



第279図 29区出土土器 (36)

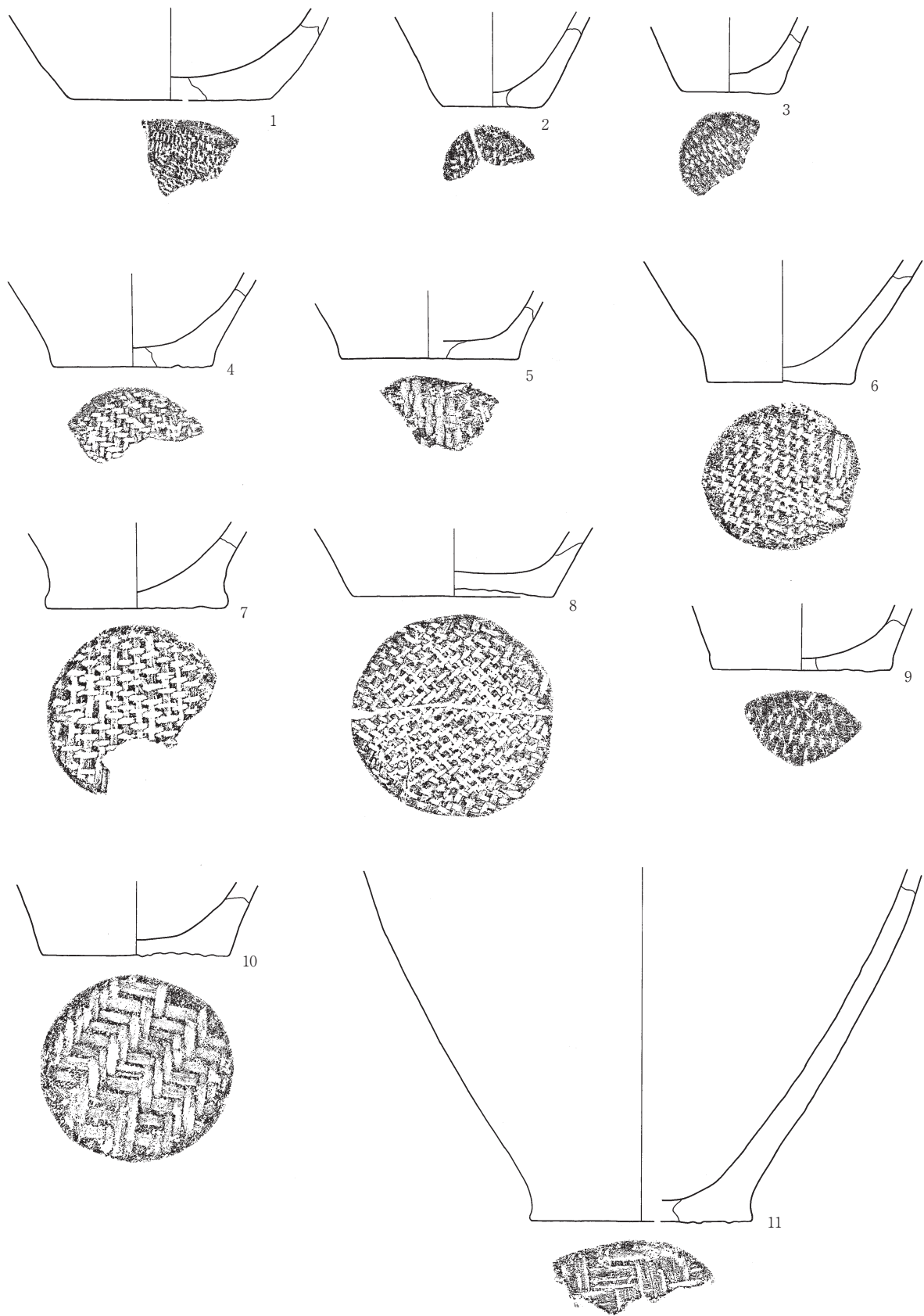


第280図 29区出土土器 (37)



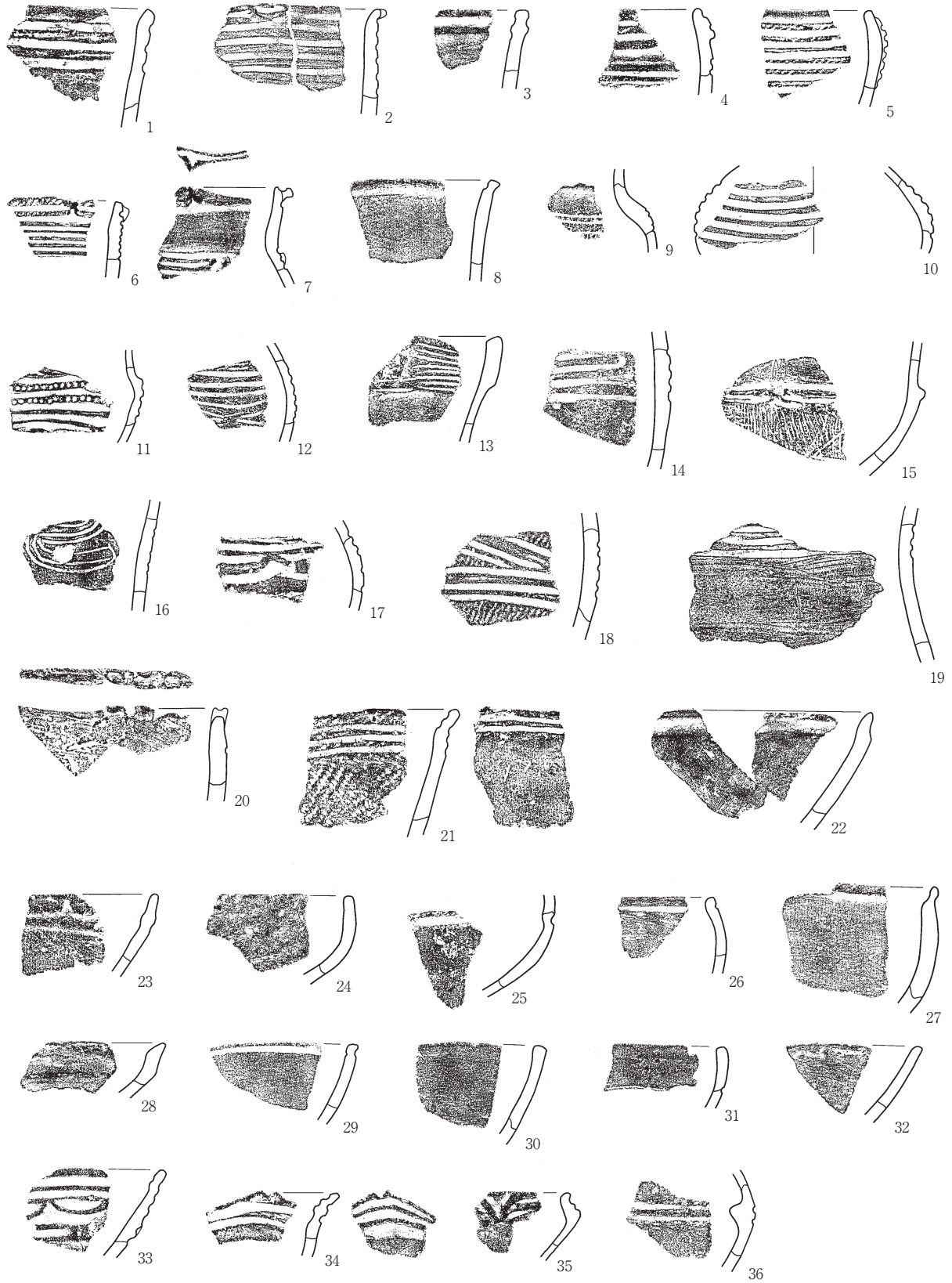
第281図 29区出土土器 (38)





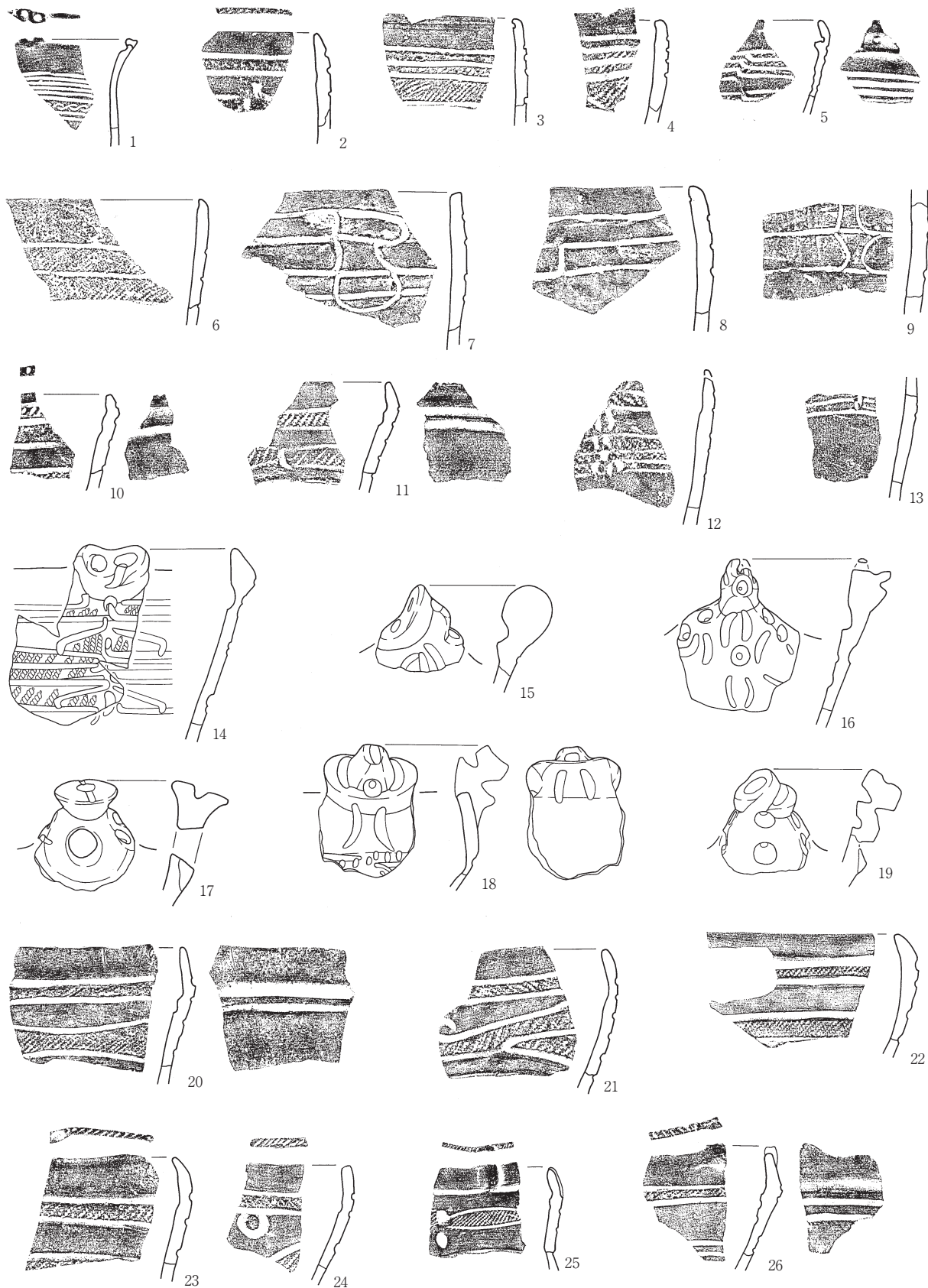
0 1 : 3 10cm

第282図 29区出土土器 (39)



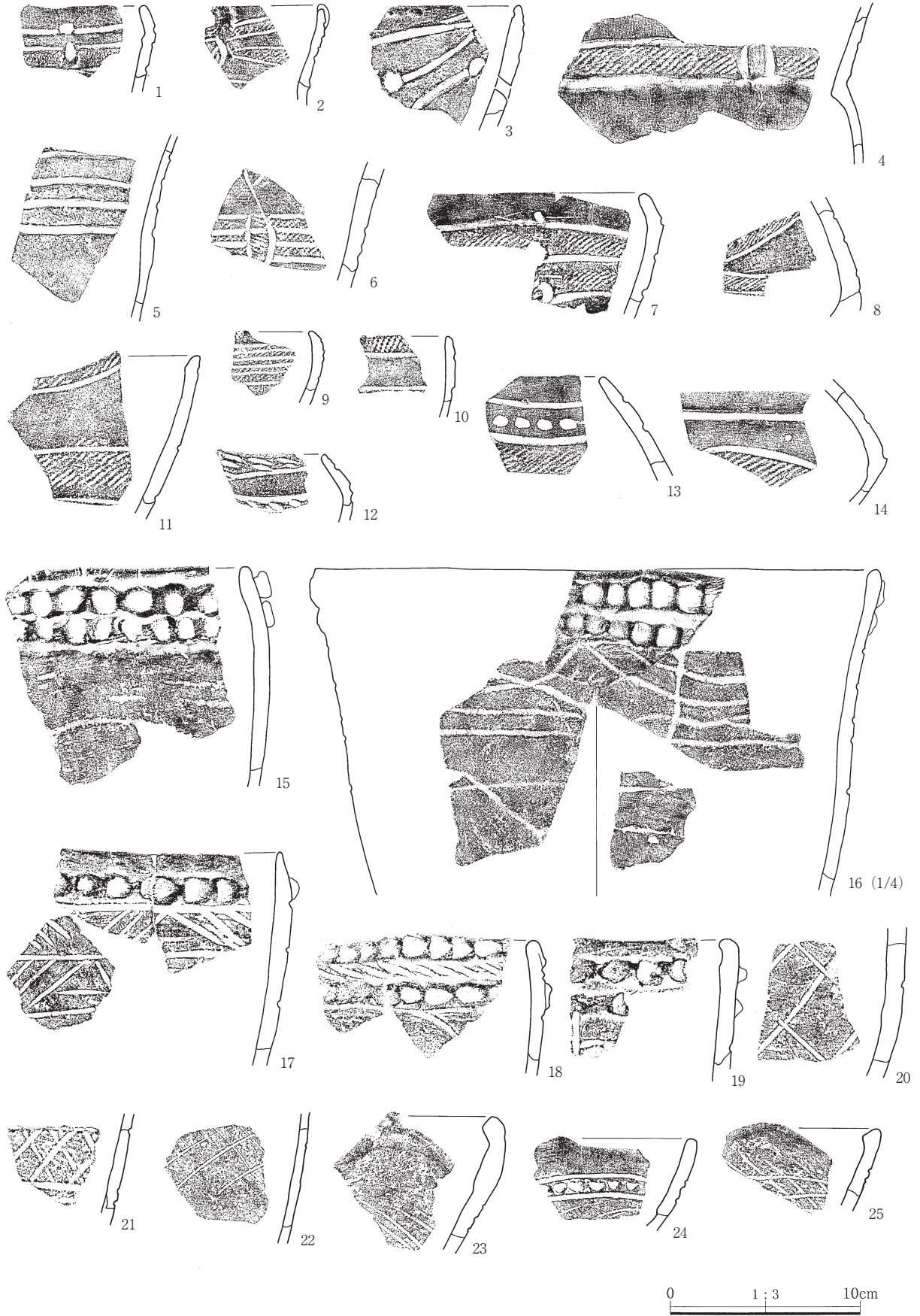
0 1:3 10cm

第283図 29区出土土器 (40)

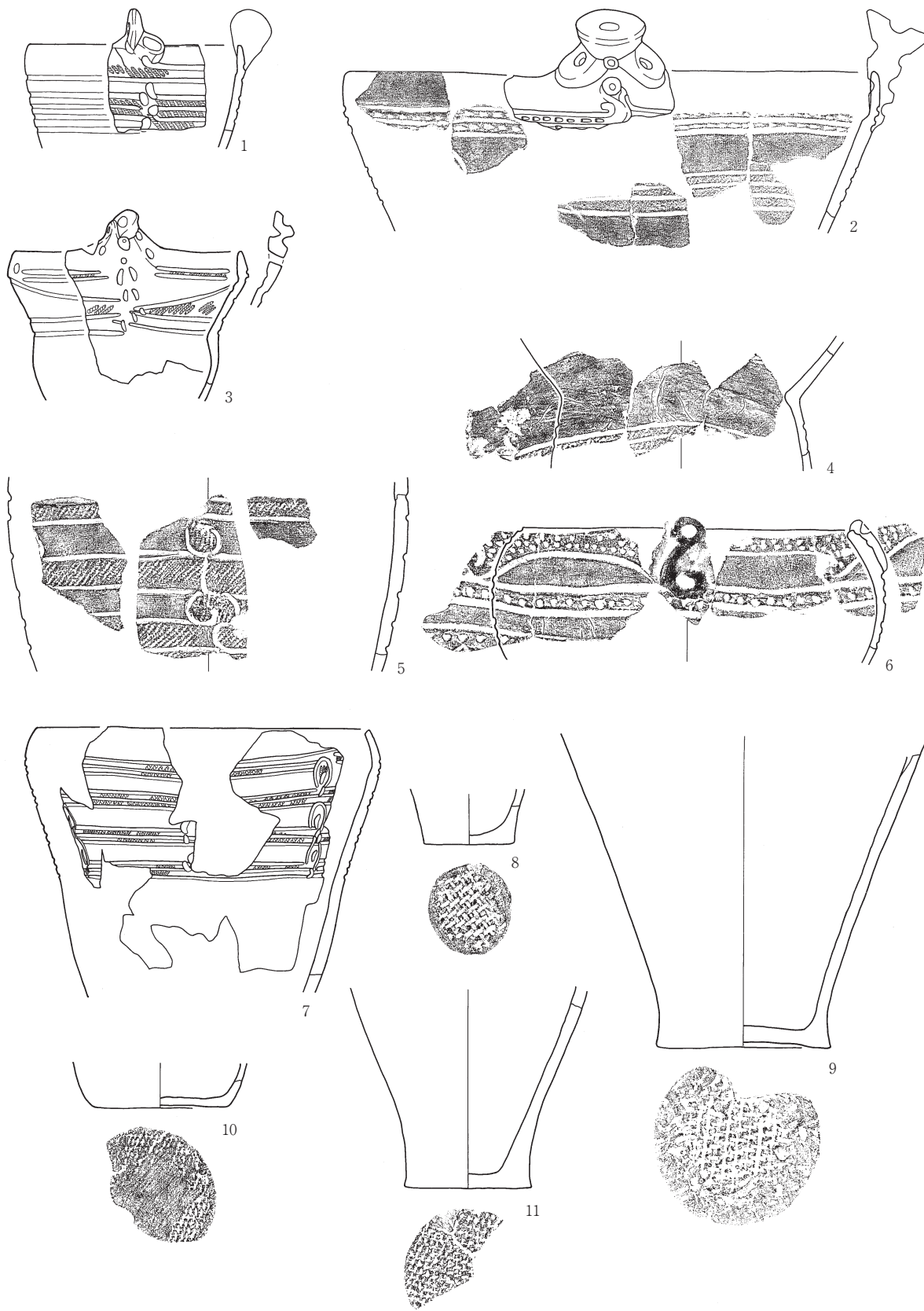


0 1:3 10cm

第284図 30区出土土器(1)

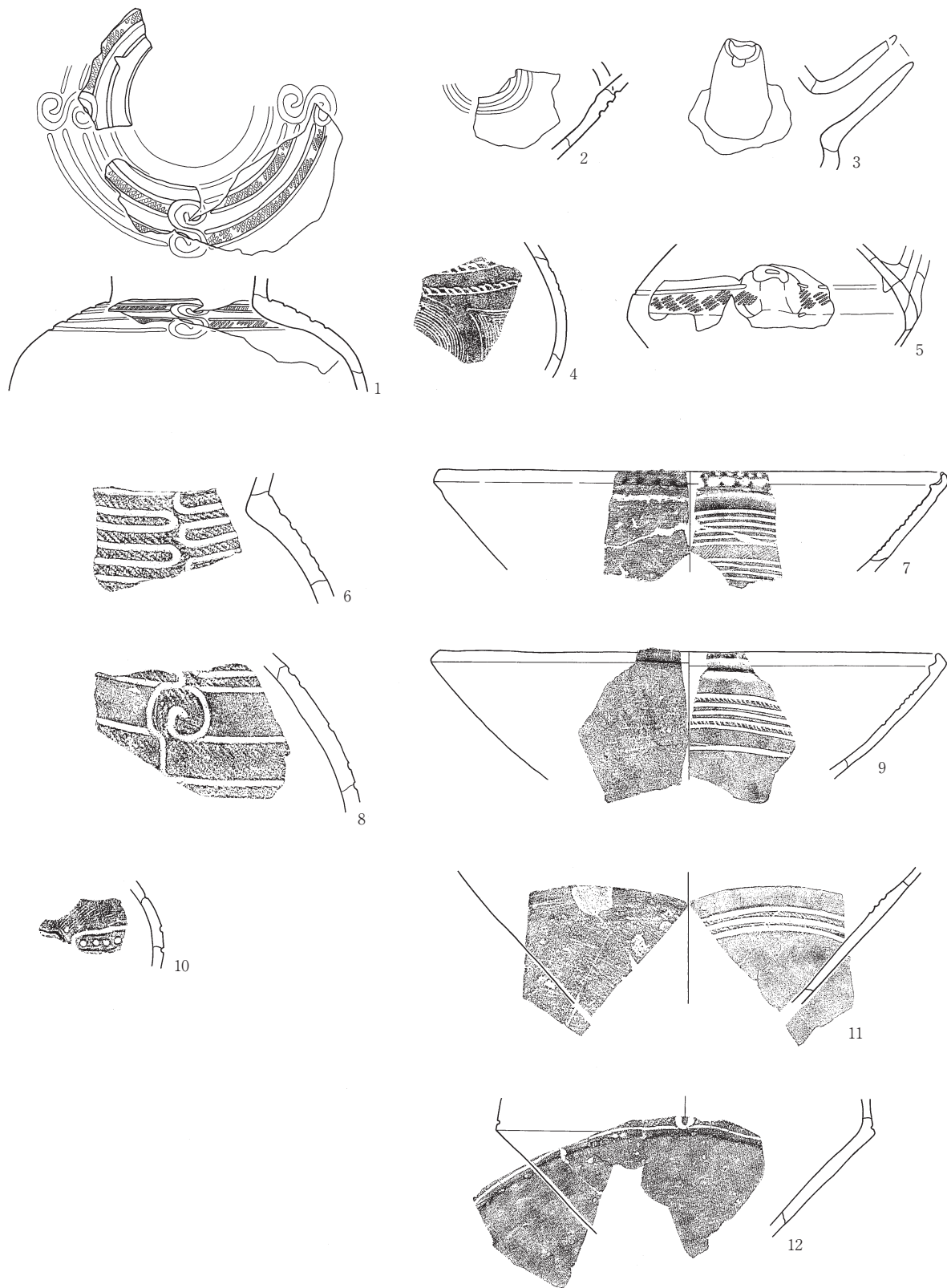


第285図 30区出土土器（2）



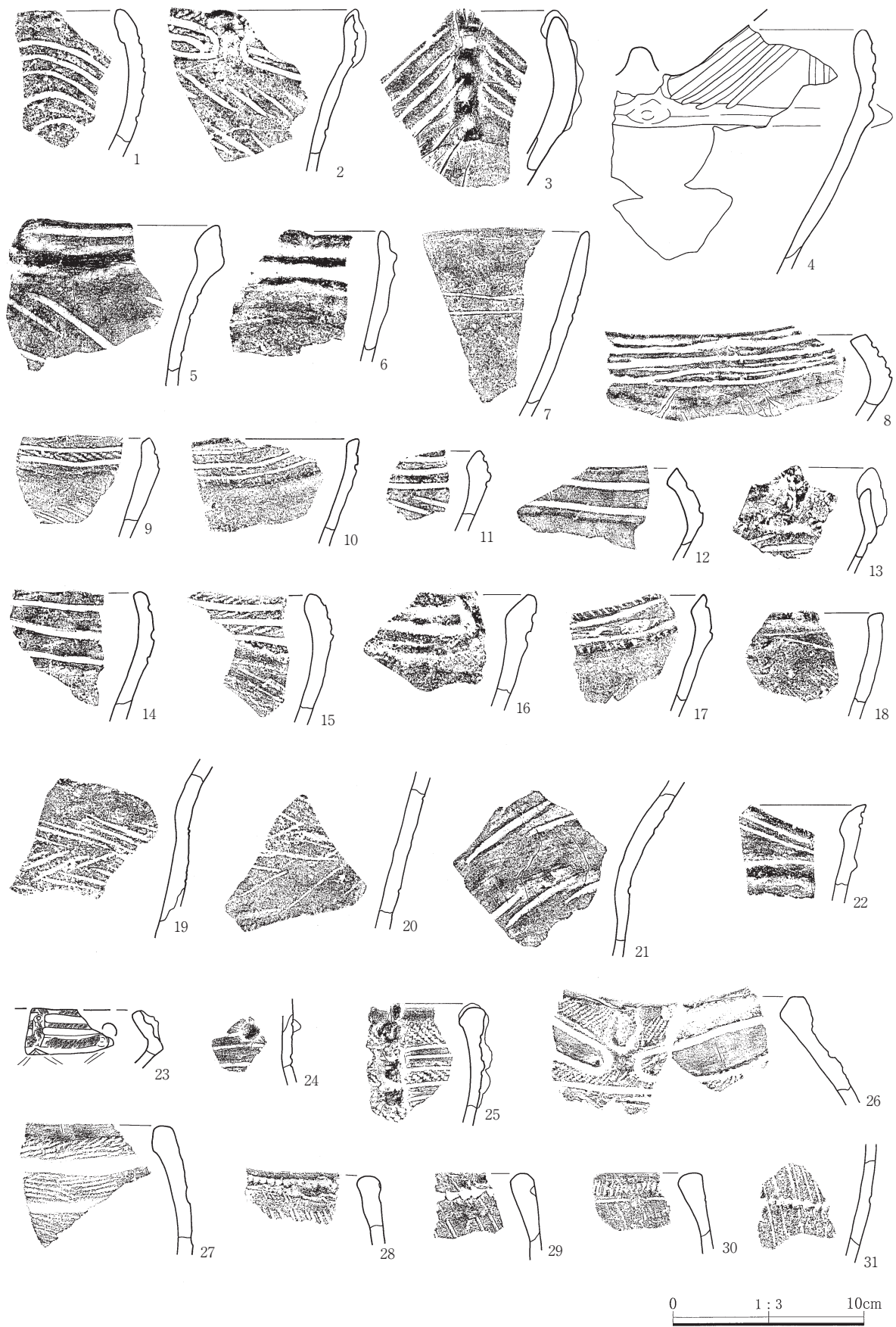
0 1:4 10cm

第286図 30区出土土器(3)

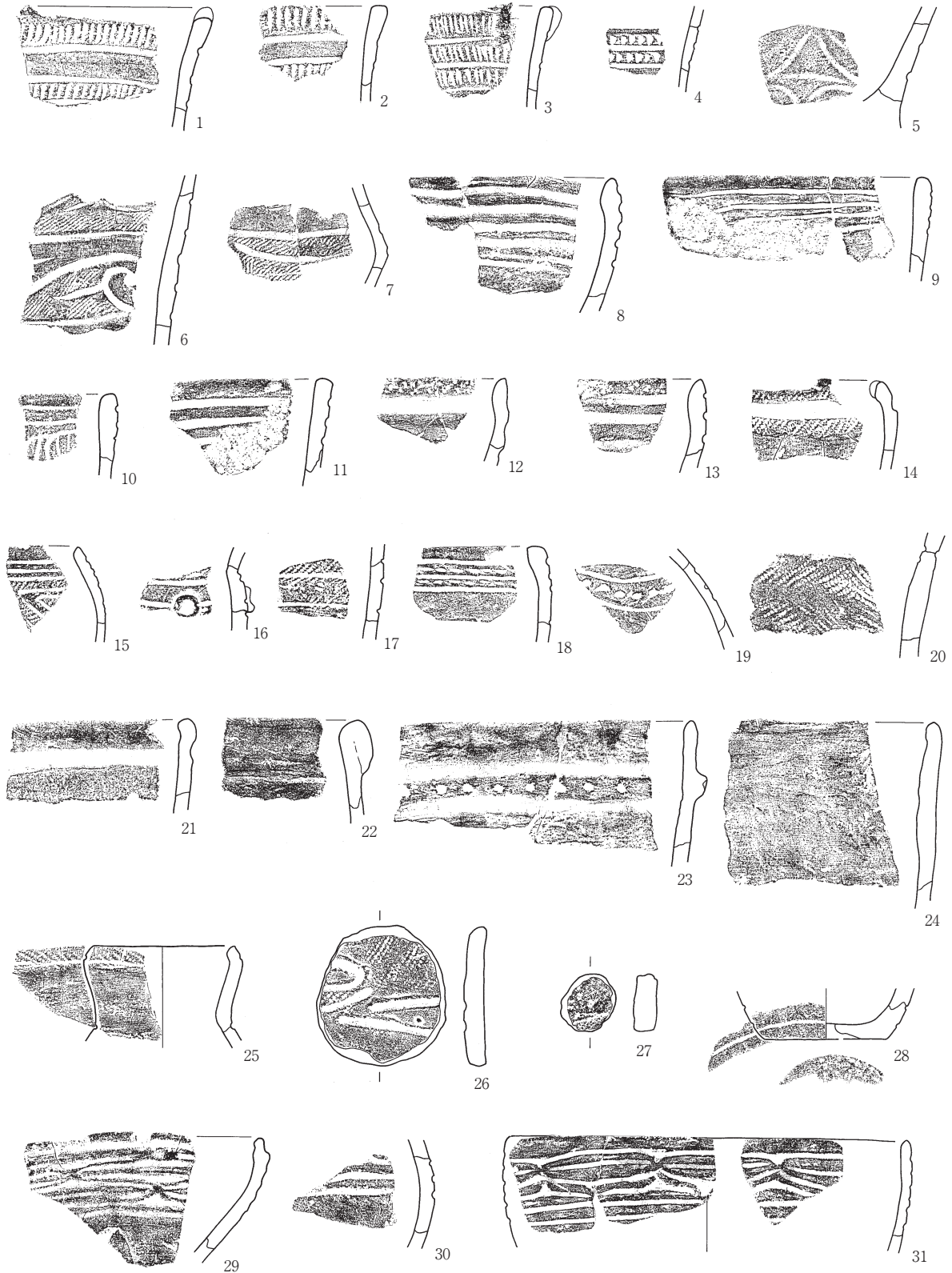


第287図 30区出土土器（4）

0 1:4 10cm  
2・3・4・6・8・10 (1/3)



第288図 30区出土土器 (5)



第289図 30区出土土器(6)